

# GANTZ 『焰』

マジカル☆さくやちゃんスター

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幾度にも渡る繰り返しを経てにワルプルギスの夜を越えた暁美ほむらは永い旅を終えて眠りについた。

だが迷路を抜けた先はまた別の迷路であり、次に彼女が目覚めた場所は黒い玉の部屋で……。

『てめえ達の命は無くなりました。』

新しい命をどう使おうと私の勝手です』

——新たな戦場で少女は戦い続ける。

## 目次

第1話	ここが私の戦場よ	1
第2話	てめえ達の命は、無くなりました	6
第3話	ネギアゲマス	16
第4話	それぢわ ちいてんをはじめる	25
幕間	だから、ここにはもう帰って来ない	35
第5話	地球の為に頑張って戦ってくれ	46
第6話	守るべきものなんて、私にはいらぬ	56
第7話	これから、よろしくね	68
第8話	これから始まるのはマジの殺し合いだ	78
第9話	俺達を信じてくれ	89
第10話	貴方に惹かれた者から先に、死んでいく事になる	100
第11話	100点めにゆくから選んで下さい	113
第12話	もう誰も死なせねえ	122
第13話	俺に譲ってくれ	136
第14話	やはりお前はここの住人だったんだな	147
第15話	お前達は何なのだ？	159
第16話	俺はお前を超えてやる	169
第17話	我々には敵がいる	178
第18話	私は情報が必要としている	188
第19話	一般人の死者が出る	196
第20話	黒玉の連中は俺達が根絶やしにする	204
第21話	ハンターをなめすぎてたのさ	216
第22話	俺は止まらない	225
第23話	見えてんのか、俺達	233

第24話	お疲れ様	246
第25話	マズイ事になってきた	256
第26話	ゴキブリは皆殺しにする	265
第27話	逃がさねーよ	276
第28話	何やねん、お前等	289
第29話	今回は100点の奴がいる	299
第30話	こいつが今回のボスか	309
第31話	興味深い	322
第32話	この一瞬が必要だった	331
第33話	人間は立ち向かうことができるはずだ	346
第34話	もう来なくていいのか？	356
第35話	運命なんてものを、恐れる必要はない	366
第36話	ここに、いて	375
第37話	貴方にやって欲しい事があるわ	384
第38話	また、いなくなったりしないよね	392
第39話	今すぐ殺してあげるわ	401
第40話	私達は戦い続ける	411
第41話	とにかく一人でも多く救うんだ	424
第42話	こツちもそーとーなバケモン揃いだよ	434
第43話	地球人の反撃が始まったようだね	447
第44話	勝者に従おう	457
第45話	感謝する必要はない	467
第46話	愛を教えてくださいました君へ	480
最終話	ただいま	491

## 第1話 ここが私の戦場よ

東京都の一角はその日、美しいまでの夕日に照らされていた。

逢魔が時には魔物が現れる、と誰かが言った。

太陽が沈み始め、昼から夕暮れへと移り変わる境目の時間。

それは昼に行動する人間と、夜に行動する魔物の活動時間が重なる故に魔物に出会うと言われるてきた。

科学が発達し、夜もまた人の活動時間となった現代社会においては古錆びた迷信でしかないが、それでも逢魔が時というものが確かにあるのだという事を少女は知っていた。

そして、少なくとも今日を最後に逢魔が時に魔物と出会う人がいなくなる事も。

「これで全てが終わる」

艶のある黒髪を風になびかせ、紫と白の衣装に身を包み、少女は儂げに微笑む。

美しい少女であった。

年齢は14歳か15歳といったところだろうか。幼さを残しつつも、将来の美貌を確信させる整った容姿は異性の目を惹いてやまないだろう。

胸元は控えめだが、それを補って余りあるだけの魅力は備えている。

しかしそんな容姿以上に他者の目を引くのは、その奇抜なファッションだ。

頭のカチューシャはいいとして、その服装は制服のようでもあり、しかし鋭角的でコスプレ染みている。

相応しい表現を探すならば……『魔法少女』といったところだろうか。

そして事実、彼女は魔法少女である。

外宇宙から飛来した、未確認生命体『インキュベーター』と契約を交わし、たった一つの願いと引き換えに全てを失い人知を超えた力を得た少女達。

彼女——暁美ほむらはそんな魔法少女のうちの一人であり、そしてこれより最後の一人となる。

「これが最後の魔女……これで、私の永い旅も終わりを告げる」

暁美ほむらは時間遡行者である。

誰よりも守りたかった友を破滅の運命から救うために何度も同じ時間をやり直し、何度も戦ってきた。

失敗した回数は両手の指では数え切れず、幾度となく心が折れかけた。

しかしそれでも戦ってこられたのは友との約束があったから。必ず救ってみせると、己に誓ったから。

だから戦ってきた。どれだけ傷付こうと、どれだけ嫌われて憎まれようと。

いつか辿り着くゴールだけが贖罪になると信じて。

この全身の痛みだけが罪を薄れさせてくれると願って。

「もう私が時間を戻す事はない……その必要もない」

この戦いを最後に、地球から魔女と魔法少女はいなくなる」

数え切れないほどの挫折と失敗を繰り返し、彼女は諦めずに正解への道を探し続けた。

その工程でいくつかの時間軸を『捨て』、トライ&エラーを言い訳に仲間を見殺しにしたのも一度や二度ではない。

それだけの罪を背負い、やがて彼女はこの時間軸で成し遂げたのだ。

宿敵である『ワルプルギスの夜』を討伐し、街を救った。

バمامィ、佐倉杏子、美樹さやか、そして鹿目まどか……その全員の生存を達成した。

そして反則技にも等しい方法で……前の時間軸のまどかの願いを利用する形で、後の禍根を断つ術も手に入れた。

ワルプルギスの夜を撃破した後、ほむらが行ったのは世界中を巡り各地の魔法少女と協力して魔女と使い魔を完全に世界から消す事であった。

勿論そのままでは協力などしてくれない魔法少女もいただろう。

魔女は敵ではあるが、魔法少女にとっての生命線でもあるのだ。ただしそれは、「これからも魔法少女を続けるならば」の話。

一つ前の時間軸でまどかは願った。願ってくれた、願わせてしまった。

『暁美ほむらの死をトリガーに、その時間軸の全ての魔法少女を人に戻す』

それが一つ前の時間軸のまどかの願い。

『暁美ほむらの死をトリガーに、その時間軸の全ての人間はインキュベーターと契約する事が出来なくなる』

それがもう一つ前の時間軸のまどかの願い。

無論、人の死をトリガーに発動する願いなど、あの優しすぎる少女が願ってくれるはずもないので騙した形になったのは言うまでもない。

この願いを正確に言うならば『暁美ほむらのソウルジエムが砕けた時』というのが正しい表現で、願いを叶えたまどかはソウルジエムが砕けても魔法が使えなくなるだけだと誤認していた。誤認させた。

この願いによって齎されるものは即ち、暁美ほむらが死んだとき、その時間軸からは魔法少女が消え、二度と生まれなくなるという至上の結末だ。

少なくともほむらにはこれ以上のハッピーエンドを思い付く事は出来ない。

ならば後は魔女を全て消し去るのみ。

その為にほむらは世界中の魔法少女を説得して回り、連携し、そして遂に最後の一体になるまで追い詰めたのだ。

もう他に魔女も使い魔もない。それはインキュベーターにしっかりと確実に確認し、曖昧な返答を認めずに、言い方を変えて選択肢をYESとNOの二択に強制し、あらゆる角度から質問して証言させた。

ならばハッピーエンドは目の前だ。

この魔女を消し、そしてほむらが死ねば全てが終わる。

「やられたよ、暁美ほむら。こんな方法で僕らの邪魔をするとはね」

「邪魔をしたわけではないわ。私は私の方法で最善の道を探し、貴方は貴方の方法で最善を探した。」

私と貴方の目指す最善が異なったというだけの話よ。貴方の言葉を借りるならば認識の違いね」

「君が死ねばまどかは悲しむだろうね」

「でしょうね。あの子は優しいから……。」

けれどその心の傷もやがては癒える。あの子には優しい家族がいて、美樹さやかがいて、バمامィがいて、佐倉杏子もいるのだから」

「そうかい……僕ははこの星から引き上げる事にしたよ。」

君のおかげで、もうこの星でのノルマ達成は不可能になってしまったからね」

「なら、何故ここにいるのかしら」

ほむらは魔女結界の中に踏み込みながら己の手の甲を見る。

そこには彼女の本体であるソウルジェムがあった。

紫色に輝くそれは、幾度もの戦いを超えた今となっては限界を越え、細かい亀裂が無数に走ってしまっている。

仮にこの戦いを生き延びたとしても、これではほむらが明日の日の出を見る事はもうないだろう。

「見届けようと思ってるね。この星最後の魔法少女の戦いを」

「そう」

ほむらはあえて追い払う事もせず、盾の中から銃を出した。

インキュベーターはそんな彼女の肩に乗り、共に結界の奥へと進んでいく。

「この結界は特に瘴気が濃いね」

「そうね……行くわよ」

歩きながらほむらは考える。

それはこれまでに過ごしてきた時間であり、死んでいった多くのまどかであり、そしてこれから先にあるだろう、まどか達の幸せな明日であった。

(悲しみと憎しみばかりを繰り返す、救いようのない世界だけれど……だとしてもここが、私の守りたかった場所。



それを誰も覚えていなくてもいい。あの子が笑っていてさえくれれば……それだけで私は戦える)

何度も逃げてきた。

ここは私の戦場ではないと、世界を見捨ててきた。

滅んでいく世界に背を向け、その度に新たな罪を背負い、後悔と懺悔の中で戦い続けた。

だがもうその言葉を吐く必要はない。

何故ならここが、探し続けた己の死に場所なのだから。

「ここが——私の戦場よ！」

その後しばらくして、魔法の結界が紫色の輝きに満たされた。

それは蝋燭が燃え尽きる最後の一瞬のような儚くも眩い輝きであり、暁光の訪れを予感させる焰の如き鮮烈さを伴って最後の魔法を結界諸共抹消してみせた。

この日、有史以来続いてきた魔法少女と魔法の戦いは終わりを告げた。

一人の魔法少女が終わらせた。

かつて彼女だった魂の宝石は無数の破片となって地面に散らばり

——しかし不思議と、それは満足しているように夕日を反射して煌めいていた。

## 第2話 てめえ達の命は、無くなりました

ほむらは困惑していた。

困惑しているという事態そのものに困惑していた。

終わったはずだった。

最後の魔女に挑み、ありつたけの魔力を解放して自らの命と引き換えに魔女を屠ったはずだった。

だというのに何故自分は生きて思考をしているのだろうか。

仮に死後の世界などというものがあつたとしても、ソウルジエムは魔法少女の魂だ。魂そのものを失ったのだから死後の世界すらあるとは思えない。

ソウルジエムが砕けて死んだ自分の末路は消滅でなければならぬ。

だというのに、何故かほむらは見知らぬマンシヨンの一室で座っていたのだ。全くもって意味が分からなかった。

肩に何か重みを感じるから見てみれば、そちらにはインキュベーター……キュウベえがいる。

周囲を見回せば、意味の分からない黒い球体と数人の男が座っているのが見えた。

窓の外には東京タワーがあるので、そう遠くに来てしまったわけでもないらしい。

「今度は女の子か……君もやっぱり、死にかけたのかい？」

眼鏡をかけた、冴えない風貌の男がほむらに話しかけてきた。

ほむらは混乱の極みにあつたが、それでも長い戦歴で培った経験則で不測の事態に直面した時ほど冷静でなければならぬという事を知っている。

だからほむらはまず深呼吸をし、事態の把握に努める事に思考を切り替えた。

(キュウベえ……これはどういう事?)

「……………」

(……キュウベえ?)

キュウベえにテレパシーを送るも、何故かキュウベえが反応しない。  
無視している、というわけではなさそうだ。本当に聞こえていないように思える。

いや、そもそもこれは本当にテレパシーを送れているのだろうか。魔力の波動が何故か全く感じられないのだ。

「……ええ、そうです。階段から足を踏み外してしまって」

「そうか。ところで、その恰好は……」

「これは……その、被写体のアルバイトをやって……雑誌の、アニメのキャラの恰好とか……」

「なるほど、コスプレってやつだね。確かに君は写真映えしそうだ」

話しながらほむらは窓枠に手をかけた。

しかし開ける事が出来ない……というより、触れる事が出来ない。

魔女の結界かと一瞬思うも、ここまでハッキリと現実の景色に似た結界を創る魔女はそういない。

魔女の結界というのは本人の願望などがストレートに出てしまうから、大抵は夢の中のようなファンシーな空間になるものだ。

(彼等が部屋に留まっている時点で予想は出来たけど……この分だと玄関も無理でしょうね)

開かない事にショックはなかった。

そもそも開ける事が可能ならば彼等がここに留まっている理由がない。

勝手に開けて帰ればいいだけの話だ。

しかしそれをせずに大人しくしている時点で開ける事が出来ないか、それを出来ない理由がある事は容易に想像がつく。

それよりも気になるのは、先程の眼鏡の男の言葉だ。

「無理だよ。僕達も色々やったんだけど開かないっていうか……壁自体に触れないんだ。」

携帯も電源が入らないし」

「……皆さんも、死にかけてここに？」

「まあね。僕はちよつと事故をね……ハハ」

意味の分からない状況だ。

だが、意味が分からないなりに自らの置かれた状況をほむらは理解出来た。

要するにこの部屋は、死んだ人間を集めて閉じ込めているのだろう。

何が目的で、どんな技術でそれを可能としているかは分からないが、まあ何せ魔法なんてものが実在するのだ。何があっても不思議ではあるまい。

「少し、他の場所を調べてきます」

「無駄だと思うけどねえ」

ほむらが部屋を出ようとすると、同じぐらいの年頃の少年が馬鹿にしたように口を挟んできた。

顔立ちはそれなりに整っているが、何となく暗い雰囲気をする少年だ。

ほむらはあえて言葉を返す事はせず、マンション内の脱衣所へと向かってドアを閉めた。

とりあえず少しくらいは防音の効果も見込めるだろうと期待しての事だ。

「これで周りに人はいないわ。小声なら話しても不審に思われないでしょう」

「そうだね。テレパシーが出来なくなっている事に君が気付いてくれてよかったよ、暁美ほむら」

ほむらが話しかけると、今度はしっかりとキュウベえも返答をしてくれた。

やはり先程のはテレパシーそのものが不可能になっていたらしい。

「キュウベえ。私は確かに死んだはずだと記憶しているのだけど……これはどういう状況なのかしら。貴方は確かに魔女はあれが最後だと言ったわね？」

「その通りだよ、ほむら。これは魔女の結界なんかじゃない。

なかなか高度な、人類の科学力を超えたテクノロジーによって引き起こされたものだ」

「どういう事かしら」

「まだ推測の域を出ないが……僕の考えを聞かないか？」

「言いなさい」

「僕の考えが正しければ……君は暁美ほむらではないし、僕はインキュベーターではない」

キュウベエの言葉を聞き、ほむらは僅かに息を呑んだ。

これは流石に少しショックであった。人によってはアイデンティティの喪失に悩むかもしれない。

しかしほむらの驚きがこの程度で済んでいるのは、手の甲にあったはずのソウルジェムがどこにも見当たらないからだ。

ソウルジェムが碎ければ魔法少女は生きていけない。

その自分がこうして生きているのだから、今の自分は魔法少女ではなく……暁美ほむらですらないという事は、何となく予想出来ていた事だ。

「今ここにいる君は恐らく、死の間際の暁美ほむらを何者かがコピーした複製体だろう。」

そしてオリジナルの戦いを見届けて死んだ僕もね」

ほむらはそれを聞き、おもむろに盾の中を調べた。

本来ならばいくつもの兵器が収納されているはずだが、案の定何もない。

というより、収納する為の空間そのものがない。

この盾は今や、見た目だけの玩具に成り下がっていた。

「魔力で身体の強化をしていないのに視力は下がっていないわね……この分だと身体能力も魔法少女の時のままかしら」

「雑な復元だね。今の君は恐らく、魔力強化した時の身体能力が素の状態になってしまっている。」

その恰好も今となってはただのコスプレだよ」

「どうやら、ほむらをここに連れて来た何者かは随分と雑にコピーしてくれたらしい。」

魔法の存在すら認識せず、魔法少女のほむらをそのままコピーしてしまったのだ。

結果出来たのは、魔法少女ではないのに魔法少女の身体能力を持つ超人少女だ。

喜ぶべきか、それとも呆れるべきか。

「とにかく、一度あそこに戻った方がいい。あの黒い玉が怪しいと僕は思う」

「……そうね」

話を終え、ほむらはとりあえずキュウベエのアドバイスに従って戻る事にした。

今はとにかく情報が欲しい。

そして怪しいのはあの黒い玉だ。ならばまずはあそこを調べた方がいい。

キュウベエに従うのは癪だが、彼の言葉には残念ながらほむらも同意見である。

風呂場のドアを開け、外へ出る。

するとそこでは、先程部屋にいたガタイのいい男が全裸の女性を組み敷いている所であった。

女性の方は先程はいなかったが、恐らくほむらが離れた間に連れてこられたのだろう。

裸なのは……何だろう？ サウナにでも入っていて死んだのだろうか？

近くには阻止しようとしたのか、これまた先程はいなかった長身の男が鼻血を出して倒れている。

どちらにせよ、同じ女性として強姦現場を見るのは好ましい事ではない。

なのでほむらは、とりあえず女性を助ける事にした。

「その人を離しなさい。嫌がっているわ」

「あ？ なんだ、ガキ。邪魔だから引っ込んでろ」

「その粗末で醜い物を仕舞えと言っているのよ」

「ああ!? ぶっ殺されてえのかー!」

強姦などしようとしている事から、マトモではないだろうと思っていたがやはり随分と気性の荒い男のようだ。

犯罪者か、それともヤクザか……どちらにせよ、今の自分の身体能力を試すモルモットには丁度いい。

掴みかかろうとしてきた男の腕を掴み、素早く背後に回って関節を極めた。

「ぐあつ!? こ、このガキ、なんて力してやがる!」

「盛りっぱなしの犬にはお仕置きが必要ね。とりあえず腕の一本でもいっておく?」

「ま、待て! 悪かった! やめろ!」

「……次はないわよ」

早くもギブアップした男を解放し、それからほむらは裸の女を見る。

赤みがかつた茶髪のショートカット。整った顔立ち。

そしてバママミの忌まわしい胸部装甲を思わせるほどに大きく実った胸。

そんな美少女が全裸で出てくれば、それは襲ってくれと言っているに等しい。

とはいえ、この場合は不可抗力と思うべきだろう。

「貴方も災難ね。そんな恰好で来てしまうなんて」

「え、ええ……その、あの……助けてくれて、ありがとう……ごさいます」

「敬語はいらないわ。どう見ても自分より年下のこんな小娘に敬語で話すのも抵抗があるでしょう」

ほむらは大人びてはいるが、それでも中学二年生の子供だ。

年上の女性に畏まって話されるのはあまり気持ちのいいものではない。

だから敬語を止めさせ、それから遠巻きにこちらを見ている男達を睨んだ。

「そこの貴方達。誰か彼女に服を貸してあげて」

「あつ……そ、それなら俺が」

ほむらの言葉に真っ先に動いたのは、倒れていた男であった。

オールバックが特徴的な、背の高い男だ。

彼は制服の上着を脱ぐと、女性へと投げ渡す。

見た目はヤンキーのようだが、強姦を阻止しようとして殴られていたり、案外正義漢なのかもしれない。

そう評価をしていると、唐突に歌が聞こえてきた。

この場にはそぐわないラジオ体操の明るい歌だ。それがかえって不気味である。

歌に誘われるように部屋に戻れば、黒い玉には先程までと違って文章が浮かんでいた。

『てめえ達の命は、

無くなりました。

新しい命を

どう使おうと

私の勝手です。

という理屈なわけだす』

ウケを狙っているのか、それともわざと滑っているのかいまいち判断出来ない文章だ。

金髪のチャライ若者は馬鹿馬鹿しいといった具合に笑い、他も大差ない反応を見せている。

その中で一人、異質だったのはあの根暗な少年だ。

「この文章つてさ、なんか超バカバカしいけどさ。真面目に受け取るとすんげー怖い文章じゃねー？」

(こいつ……)

少年の言葉を聞いてほむらは確信した。

こいつは知っている。

知らない振りをしているが、恐らくこの中で現状を誰よりも正確に把握出来ている。

その上で、あえて無知を装って周囲の反応を見ているのだ。

知らぬ者達が右往左往して迷走する様を楽しんでいる。

ほむらがそう思ったのは、少年の視線が一人一人を観察していたからだ。

あえて何も知らぬように振る舞い、疑問を投げかける事で相手の反



応を引き出す……それはほむら自身も何度か使った手だ。

本当に知らないのと、知っていて知らない振りをするのは違う。

よほど巧妙に隠さない限り、そういうものは観察眼に長けた者には見破られてしまうものだ。

黒い玉は続けて画像を表示し、そこには頭部の形状がおかしい不気味な少年が映し出された。

名前は……ねぎ星人というらしい。

『てめえ達は今からこの方をヤツつけに行って下ちい。

特徴 つよい。くちい。

好きなもの ねぎ 友情。

口ぐせ ねぎだけで十分ですよ!!』

まるでゲームだ、とほむらは嫌悪感を感じた。

要するに自分達は、このねぎ星人とやらを倒すために無理矢理連れてこられたわけだ。

いや、連れてこられたというよりは生み出されたのか。

どちらにせよ面白いものではない。

気になるのは『星人』という単語だが……これは本当に宇宙人なのか、それとも比喩表現なのか判断に困る。

キュウベえのような存在がいる以上、今更宇宙人の実在を疑いはしない。

過去にほむらは、『忘却の魔女』という銀河の外から飛来してきた魔女とも戦った事があるのだ。

だが、この『星人』とやらが本当に宇宙人なのかどうかは、今の情報だけでは判断出来なかった。

少し観察していると更に変化は続き、黒い玉が突然開いて中から銃のような武器やスーツの入ったケースが出て来た。

ケースにはご丁寧にそれぞれの名前が記されている。

そして玉の中には、裸の男が眠っていたが……正体が分からないので、とりあえず今は触るべきではないだろう。

また、玉が開いた時に奥の方から何か鍵が開くような音がしたので、キュウベえがそちらへと向かって行った。

(小型の銃が二種類に大型が一種類……スーツは……彼が着ているよ  
うだから、何らかの効果があるとみて間違いないけど、流石にここで  
着替える気にはならないわね……)

とりあえずスーツは人数分あるようなので確保し、銃は大型のもの  
を取っておく。

魔法少女のスペックをそのまま持っている今の自分ならば大型の  
銃火器だろうと容易に取り扱えると踏んでの事だ。

しかし手にしてみると、やけに軽い事が分かる。

これならば片手で扱うのも不可能ではないだろう。

スーツの方はあの何か知っていそうな少年が服の下に着ているの  
が見えたので何らかの意味はあるのだと思うが、何せどう見ても肌  
にフィットするタイプだ。

つまりこれを着るには今着ているものを一度全部脱がなければな  
らないわけで、流石に人前でそんな事をする気にはならない。

とりあえず折りたたんで盾の裏側にでも押し込んでおけばいいだ  
ろう。

収納空間はないが、それでも盾の裏には僅かな隙間があるので畳ん  
だスーツくらいならば押し込んでおける。

(それから……あっちの二人、やっぱりヤクザよね。

という事は銃も持っているはずだし、出来れば奪っておきたいわ)  
ほむらの視線は続けて、先程の強姦魔と、それと親しそうなスー  
ツの男へと向けられた。

どちらも強面で、一般人ではないような雰囲気纏っている。

勿論ただの野蛮で強面な一般人の可能性も捨てきれないが、裏の人  
間特有の匂いのようなものをほむらは彼等から感じ取っていた。

武器の調達の際にヤクザには何度もお世話になっているので、何と  
なく一般人とヤクザの違いが分かるようになってしまったのだ。

そしてヤクザ者ならば銃を携帯している可能性が高い。

ならば彼等に任せない為と、自分で使いたいという二つの意味で  
奪いたいのが本音だ。

今のほむらは全ての銃火器を紛失してしまった状態にある。流石

に魔法で出来た不思議な盾までは完全にコピー出来なかったようなので仕方がないのだが、丸腰は心もとないし、玩具のようなこの銃だけでは不安が残る。

そのような事を考えていると、男達が突然どこかへと転送され始めた。

### 第3話 ネギアゲマス

部屋から転送されたほむら達の前に広がっていた景色は、どこにもあるような住宅街の一角であった。

少し離れてはいるが電車が走っているのも見える。

駅は見えないが、線路沿いに歩いて行けばいつかは駅に辿り着けるだろう。

出られない部屋から一転しての外の景色は安心感すら覚えてしまいうそになる。

実際、既に場には緩んだ空気が立ち込めているのをほむらは感じていた。

「アレ何線でしたっけ？」

「とりあえず最寄りの駅探すか」

まるでこの非日常が終わったかのような会話だ。

一般の世界で生きてきたならばそんなものなのかもしれないが、周囲の男達の余りの呑気さにはむらは溜息を吐きたくなった。

その肩にキュウベえが飛び乗るが、口に何かをくわえている。

あの黒い玉が開いた時に奥の部屋の鍵が開いた音はほむらも聞き取っていたが、そこから拾ってきたらしい。

「二千万？」

「やっぱりテレビだった」

「なんでお前知ってたんだ」

「プロデューサー……うちのお父さん。」

一千万はゲームの賞金。アメリカとケーブル局と共同制作で、元々エール大学の学生が考えた企画だった。

ブレア・ウィッチ・プロジェクトと……メン・イン・ブラックとオ……炎チャレとオ、フランツ・ハラーレイ足してみたいな」

件の少年が何か、それらしい事を言っているがほむらはそれを冷めた眼で見ている。

あんなバレバレの嘘などよく吐けるものだと思うし、信じる方は尚更どうかしている。

相手の許可も得ずに人を勝手に攫って閉じ込めるようなテレビ企画など、ただの犯罪でしかない。

催眠術？ 実は既に街角でスカウトされて本人の了承は得ている？

馬鹿を言え。では何か、魔女も実はテレビ局が用意したもので自分はそれに特攻をかけて死んだとでも言うのか。

仮にそんな魔法のような万能催眠術があるならば、それこそ自分達は最初から宇宙人と戦う戦士だったと思わせればいいではないか。

「この地球には人間にばれないように犯罪者宇宙人が入り込んで生活してるんだ。」

僕は日本政府の秘密機関にスカウトされた。だから僕達はその宇宙人をやつつけに行くんだ」

「なんだそりゃ？」

「くっだんね〜」

「まあいいや。その宇宙人やってる役者捕まえれば一千万か」

「うん。これに出てるから」

少年は出鱈目を口にしながら皆を参加させるように誘導しているが、ほむらの興味を引くには至らなかつた。

彼女は髪をかきあげ、そのままどうでもよさそうに背を向けて歩き出す。

「おい？ どこに行くんだ？」

「帰るのよ。馬鹿馬鹿しい」

少年の制止を無視してその場を去る。

曲がり角を右折し、それから見えなくなったところで跳躍。

魔法少女の身体能力ならばビルからビルの間を脚力のみで飛び交う事も難しくない。

ほむらは建物から建物へと飛び移り、付近で最も高い建築物の上へ跳ぶとその屋上の縁に座り、高所から男達を……いや、あの少年を監視した。

あの少年は何かを知っている。少なくとも自分よりはこの状況を正しく把握している。

現状ではあの少年だけが確かな手がかりだ。彼の行動を追えばもう少し判断材料も揃うだろう。

「まずは観察だね。何が正しい行動なのか、見極める必要がある」

「ええ。ところでキュウベえ、それは何？」

「これかい？ 鍵の開いた部屋から持ってきたんだ。」

他にもバイクのようなものがあつただけど、僕ではこれくらいしか持つてこれなくてね」

キュウベえがくわえてきた物は、柄と鍔の部分しか無い刀であつた。

柄の部分にはスイッチがあり、押してみると刃が出現した。

レーザーソードといったところだろうか。見た目は古風な日本刀なのに随分SFチックな武器だ。

軽く床に刃を触れさせてみれば、コンクリートの床がまるで豆腐のように手応えなく切れる。

「……とんでもない刀ね。美樹さやか劍が玩具に思える切れ味だわ」

「僕達を転送させた事といい、かなりの技術力を持つ者が背後にいるのは間違いないだろうね。」

「……おや。見てごらん、ほむら。駅に向かっていた男性の頭が弾け飛んだよ」

キュウベえに言われて見てみれば、少年の言葉に興味を示さず帰路についていた男性が首から上をなくして死んでいるのを見付けた。

遠目ではあるが、あまり気分のいい光景ではない。

そして、そんな凄惨な死体が転がっているというのに、どういうわけか付近を通る車やタクシーは全く気付いていないように素通りしているのもまた不気味であつた。

「ねぎ星人とやらを倒すまで帰るのは認められないようね」

「一定範囲以上外に出るとああなるんだろう。それと、さっきあの少年が一時間と言っていたから、制限時間を過ぎる事でも何かあるのかもしれない」

「時間切れで部屋に戻されるとか？」

「あるいは彼のように頭が爆発するのかもしれないね」

「……」

今まで時間を繰り返し、知っている未来に備えて動いていたほむらにとつて、これは随分久しぶりの事となる未知であった。

自分の立っている場所が分からず、進むべき道が全く見えないというのはこんなにも不快だったのかと思う。

こうすればああ動く。ああすればこうなる。そうした統計が全く無いゼロからのスタートなど、魔法少女になる前にまで遡らなければ記憶がない。

その後も事態は動き続けた。

眼鏡の男が目標であるねぎ星人を発見し、ヤクザ二人、金髪のチャラ男と共に逃げ惑うねぎ星人を追いかける。

見た感じねぎ星人とやりに戦意はなく、ただ怯えているだけの相手のようだが、それがかえって彼等を調子付かせてしまったらしい。

最初は捕獲目的で追っていたのがエスカレートし、暴力に発展し、挙句最後には支給された銃を撃ち——ねぎ星人をバラバラにして死なせてしまった。

なるほど、あの銃はああ使うのかとほむらは思う。

発射してからタイムラグがあり、その後、内部から破裂するかのように対象を破壊する。

……恐ろしい武器だと思った。

これほどの兵器がワルプルギスと戦うときにあれば、もっと楽に勝てただろうと思わずにはいられない。

しかしゲームはこれで終わりではなかった。

死んだねぎ星人の親と思われる巨漢のねぎ星人が現れ、あつという間に男達を血の海に沈めてしまったのだ。

ヤクザ二人に金髪、眼鏡は成す術なく惨殺され、後にはオールバツクの青年だけが残される。

彼はあの場にあつて唯一、ねぎ星人を庇おうとしていた男だ。

他の男達は自業自得であり、相手の怒りを買うのももつともだから同情はしない。

しかしあのオールバックの青年がこのまま殺されるのは流石に哀れだとほむらは考えた。

故に銃身の長い銃——Xショットガンを構え、発射する。

今のほむらは魔力による強化時と同じ視力を持ち、その視力は10.0を超える。

スコープに頼らずとも、この程度の距離ならば当てるのはわけもない。

しかし角度と位置関係的にねぎ星人を狙っても、その手前にいる青年に当たってしまうだろう。

故にほむらが狙ったのは、二人の足元だ。

引き金を引くと同時に足に力を込め、跳躍。夜の空を飛ぶようにして跳んだ。

髪がなびき、キュウベえが落ちないようにしがみつき、景色が高速で後ろへと流れていく。

ねぎ星人の足元が砕け、その動きが止まると同時にほむら自身もそこに到達。落下の加速をそのままにねぎ星人の胸板を蹴った。

蹴りの威力でねぎ星人の身体が吹き飛んで地面を転がり、ほむらもまた反動で空へと舞い上がる。

そのまま空中で後方宙返りをして着地。何事もなかったかのように悠々と青年の前まで歩いていく。

「な……あ、あんた、どこから……!?!」

「そんなのはどうでもいいわ。そこの貴方、もう復讐は済んだでしょう?」

見逃してあげるから、さっさと消えなさい」

氷のように冷たいほむらの宣告を前に、ねぎ星人がゆっくりと立ち上がる。

ふらついてはいるが、両手の爪を伸ばしている辺りまだやる気のないうだ。

「グオッ! ボオッ!」

叫びながら突進してくるねぎ星人を前に、ほむらは眉一つ動かす事はない。



振るわれた爪を避けて顔に肘を叩き込み、よろめいたところで足払い。

ねぎ星人が転倒すると同時にハイキックを顔にめり込ませ、またも地面を転がらせた。

ねぎ星人はすぐに立ち上がろうとするが、既にほむらは目の前まで移動しており、彼の顎を蹴って無理矢理立ち上がらせる。

そして銃身で顔を強打し、殴り飛ばした。

「やはり言葉は通じないようね。

いいわ。そちらがやる気だというのなら……今すぐ殺してあげる」  
「ネ、ネギ……アゲマス……ネギ……アゲマス……」

何か日本語のようでいて、全く脈絡のない事を言っているねぎ星人へと銃口を向ける。

今度は威嚇ではない。

一度逃げるチャンスを与えたのに向かってきたのはあちらだ。

ならば望み通りに殺してやろう。

ほむらは無慈悲ではないが、しかし慈悲深くもない。

余計な情けが命取りとなり死んでいった魔法少女を何度も見てきた。

今回は未知の相手で、加えて状況的には彼は被害者と言えなくもなかったので一度だけ逃げる機会を与えた。

だがあくまで一度だけだ。二度も機会を与えるほどほむらは優しくないし、優しい世界を生きてきたわけでもない。

そして殺し殺される世界を戦い抜き、世界から魔女を一掃した最後の魔法少女である彼女に、今更他者を殺める事への躊躇などない。

「ま、待ってくれ！ やめろ！」

元々悪いのは俺たちの方なんだ！」

しかし引き金を引こうとしたほむらの前に、先程の青年が立ち塞がった。

お人よしは嫌いではないが、それもここまでくれば病気だ。

ほむらは小さく舌打ちをし、青年の襟首を掴んで後ろへ投げ捨てた。

こんな所に立っただけは、あのねぎ星人に背中から襲われて死ぬだけだ。

障害物をどかして今度こそ、と銃口を向けるも……ねぎ星人は既に逃走を開始していた。

意外なほどの足の速さで逃げ、そして階段から跳躍してほむらの視界から逃れる。

少し前までならば、あの程度は時間停止でいくらでも捕捉出来たのだが今のほむらにそれはない。

すぐに後を追うべく歩を進めるが、その前に再びお人よしの青年が割り込んだ。

「待てー！ 逃がしてやってくれー！」

もういいだろう!? 逃げたって事はもう戦意がないんだ！」

「……自分も殺されかけて、そこまで庇えるのはある意味立派なのかしらね」

ほむらは皮肉を口にし、青年の横を通り過ぎた。

辺り一面は目を覆うほどの惨状だ。肉片と臓物が飛び散り、足の踏み場もないほどに血の海と化している。

人間を血袋と最初に表現したのは誰だったか。

なるほど、これを見れば確かに、人間は血の詰まった皮袋だという表現はあながち間違いではないと思わされる。

常人ならば吐いてしまおうその惨状の中をほむらは顔色一つ変えずに進み、死んでいるヤクザを発見した。

「な、何をしてるんだ……?」

「……………」

青年の質問に答える義理も感じないので、無視して淡々と目的を済ませる。

まず拳銃。死ぬ前に使っていたのか、丁度良く手に持っていてくれたので探す手間が省けた。

死後硬直も始まっていないので簡単に取れたのも嬉しい誤算だ。

それからポケットを探り、財布を抜き取る。

中身を見ればヤクザだけあって、かなり貯め込んでいた。

ほむら自身の財布はどうせ死ぬからと捨ててしまい、中身は全て適当に寄付してしまったので現在は一文無しだ。なのでこれはありがたい。

それからコートを死体から脱がし、上に羽織る。

あの部屋から出れる保証はないが、もし出れるならばコスプレ染みた格好で外を歩くよりもコートの方がいい。

多少血で汚れてはいるが、魔法少女姿よりはマシだろう。

あのマンションには浴槽があったので、そこで洗えば着れない事もない。

続いてもう一人のヤクザ……の下半身を調べる。

こちらは銃で四散させられてしまったのか、胴体部分が砕け散ってしまったのでとても汚い。

しかし下半身は綺麗なまま残っており、尻ポケットの中に財布があったので頂いておいた。

銃は持ってなさそうだ。きつと素手での殴り合いに自信があったのだろう。

「し、死体から……奪っているのか？ な、なんでそんな事……」

「死体はお金を使わないし、銃もいらないうしでしょう？ それだけよ」

「あ、あんたは……あんたは何とも思わないのか!？ 人が、人が死んでるんだぞ！」

「……貴方は優しいのね。けれど、優しさなんて何の意味もない世界もあるのよ」

ほむらは青年の平和ボケぶりに多大な呆れと、そして少しの憧憬を感じていた。

争いのある世界では人の心は荒み、争いのない平和な世界では人の心は豊かになる。

彼の平和ボケぶりも、そんな平和な世界で生きて来たからこそ身に着いた、まっとうで真つすぐな感性と道徳と倫理感なのだろう。

それは、まどかを救う旅の中でほむらが切り捨ててしまったものだ。

しかし力のない正義はただの無力でしかなく、結果として被害を増

やす患者になりうる。

今回もそのケースだったようで、ねぎ星人が逃げた先から男の悲鳴が聞こえてきた。

「この声……計ちゃん!？」

「逃げた先に人がいたようね」

ほむらは素早く駆け出し、地面を強く蹴って跳躍した。

空から見下ろせば、階段の下でねぎ星人と高校生が組みあっているのが分かる。

不思議な事に高校生はねぎ星人を相手に力負けしておらず、むしろ勝っているようにすら見えた。

彼は何故かスーツを着ているので、恐らくあのスーツにそういう効果があるのだろう。

冴えない青年だが、洞察力はいいらしい。

彼は初見でスーツの重要性に勘付き、あれを着用していたのだ。

「……そー!」

ほむらは落下しながらも照準を合わせ、引き金を引いた。

ギョーン、という間抜けな音が響き、数秒の静寂が訪れる。

——爆破。

高校生と組みあっていたねぎ星人の胴体が弾け飛び、肩から上だけの哀れな姿となって転がった。

そのすぐ近くにほむらが着地し、刀を振り上げる。

「ネギ、アゲマ……」

何かを言い終える前に顔を二つに裂いた。

やはり凄まじい切れ味だ。生物を斬ったのに、全く抵抗がなかった。

役目を終えた刀を元の長さに戻し、風で乱れた髪をかき上げて整える。

こうして、黒い玉の部屋での最初の戦いは幕を閉じた。

## 第4話 それぢわ ちいてんをはじぬる

ねぎ星人を倒すと、ほむらは再びあの部屋へと戻されていた。

やはり、指定された敵を倒す事でゲームが終わる仕組みになっているらしい。

しかし黒い玉が指定してきたのは小さい方のねぎ星人なのに、その後に出て来るでかい方を倒すまでクリア扱いにならないのは意地悪というしかないだろう。

他に倒すべき敵がいるならば、その事も最初から教えておいてくれればいいのに。

ほむらの後に続けてキュウベえが転送されてきたが、転送の仕方が随分とえぐい。

黒い玉から光の線が出て、下半身から順にまるで再構成されるようにして転送されてくる。

自分もこうだったのかと思うと、あまり転送される姿を他人に見られたくはなかった。

それから少しして、今度は少年が転送されてきた。

彼は部屋を見回し、そしてほむらに気付くとニヤリと嫌らしい笑みを浮かべる。

「お前凄いな……俺以外で生き残るっただけでも久しぶりなのに、スーツなしで星人を倒しちゃうんだもんな。

ていうか……身体能力どうなってるの？」

「……さて、ね。貴方が秘密を隠しているように誰にでも秘密はあるわ」

死ぬ前は魔法少女で、その身体能力だけ引き継いでしまいました。

そんな間抜けな事を言ってもまず、『こいつおかしいんじゃないか？』と思われるだけだろう。

それに彼に話して何かメリットがあるとも思えない。

なのでほむらは黙秘しておく事にして、浴室へ向かった。

血の付いたコートをシャワーで洗って何とか血が目立たない程度に落とし、よく絞る。

濡れたコートは気持ち悪いが、新しい服を買うまでの辛抱と思えば問題ない。

部屋に戻った頃には犬、高校生、女性が転送されており、最後にヤンキーの青年が転送されて生き残りが全員この部屋に揃った。

「今回死んだのは、あの馬鹿なヤクザ二人と眼鏡、金髪、それと政治家のおっさんだけか。」

すつげえ生き残ったじゃん。こんなのいつ以来だろうな。

……つと、それよりそろそろガンツが採点始めるぜ」

「ガンツが採点？ この玉の事か？ お前が名前付けたの？」

「いや……前から。前の……誰かが名付けた」

少年が黒い玉を見ながら言う。

ガンツ、とはこれの名前らしい。

玄野への答えを見るに、少なくとも彼が名付けたわけではなく前からそう呼ばれていたようだ。

玉——ガンツには『それぢわ ちいてんをはじめぬる』と書かれているが、この誤字はわざとなのか、それとも素なのか……。

もしわざとならば、読みにくいだけなので直して欲しいものだとほむらは考えた。

まず最初に犬が前に歩み出し、ガンツの前に座る。

『犬。0てん。』

やるき、なちすぎ。ベロ出しすぎ。シツポふりすぎ』

酷い評価であった。

犬が尻尾を振って舌を出しているのは当たり前前の事なのに、これは何を言っているのだろう。

というか、何故犬をここに連れてきてしまったのだろう。

動物を連れて来るにしても、せめて熊とかライオンならば少しは違っただろうに。

いや、それはそれでこちらに襲い掛かってきて邪魔になるだけか。

『巨乳。0てん。』

ちちでかすぎ。ぱんツはかづにうろつきすぎ』

続いて表示された画像は、全裸のままの女性であった。

デフォルメされてはいるが、酷い扱いである。

しかし乳でかすぎ、という一点においてだけは同意せざるを得ない。

あんなものは戦闘においては邪魔なだけでしかない。バママといい、この女といい、何故あんな余計なものをぶらさげているのか理解に苦しむ。

別に悔しいわけではない。断じて嫉妬などしていない。

『かとうちゃ (笑)。0てん。』

かとうちゃ (笑) なんて。そいつころせない』

かとうちゃ (笑) というのはオールバックの青年の事らしい。

受けを狙ったのだろうか、あまりの外しっぷりに場の空気が少し冷えたものとなった……気がした。

『西くん。0てん。』

TOTAL87てん。あと13てんでおわり』

こちらは今までと違って、それほど酷評されてはいない。

この時点で既に87点……という事はつまり、やはり彼は以前からこのゲームに参加しているという事になる。

そして後13点で終わりという言葉は逆に言えば、100点を取らない限り続くという事でもあった。

『くろの。0てん。』

巨乳みてちんこたちすぎ』

ほむらは引いた。

とりあえず彼が巨乳好きで、自分とは分かり合えない事だけを理解したのだ。

彼は必死に、違うと皆に弁明しようとしている。

『ほむら。33てん。』

TOTAL3てん。あと97てんでおわり』

ほむらは一応点数を取ったからか、特に酷評はないようだ。

もしここで貧乳とか書いていたら壊してやるところだったが、ガンツは賢明な判断をしたと言える。

そして最後にガンツに表示されたのは、キュウベエの絵だ。

『へんなの。0てん。』

なにもしなちすぎ。ほむらのかたにのりすぎ』

どうやらキュウベえまで採点対象らしい。

よく考えればほむらと一緒にこの部屋に送られたのだから、彼だけ特例なんて事があるはずもなかった。

とはいえ、戦闘能力のないキュウベえでは今後もずっと0点を継続していく事だろう。

「えっ？ 肩のそれってぬいぐるみじゃないのか？」

「わ、私もてつきり……クールな子なのに不似合いなぬいぐるみを持ってるなーって……」

「何だそれ。猫なのか、それとも兎なのか。見た事ねえ生き物だぞ」

どうもキュウベえはぬいぐるみか何かと周囲に思われていたらしい。

つまりほむらはクールなのに肩にぬいぐるみに乗せている奇妙な少女に見えていたわけだ。

というか今更だが、やはりキュウベえは魔法少女以外にも見えてしまっているらしい。

やはりここにいるのは雑にコピーされた偽物でしかないという事か、とほむらは考えた。

「これは……人為的に生み出された、まだ世に出回っていない新種のペットよ。」

劣性遺伝同士をかけ合わせたり、異種交配させたり……まあ、そんなところ……」

本当の事を言うわけにもいかないの、今即興で思い付いた嘘を適当に話しておく。

真つ赤な嘘ではあるが、少なくとも『宇宙からやってきた生命体です』よりはまだ信じられるだろう。

「それよりも私なんかより、質問するべき相手がいるんじゃない？」  
とりあえずボロが出る前に矛先を変えてしまおうべきだ。

そう考えたほむらは、少年へと視線を向けた。

「そ、そうだ！ お前、聞きたいことが山ほどある！」



それから少年への質問責めであった。

これはどういう状況なのか、自分達は生きているのか。

そして、何故最初から知っている事を話さなかったのか。

それらはほむらにしてみれば既に予想出来ていた事で、答えもやはり予想通りでしかなかった。

今夜のような戦いはずっと前から繰り返されており、少年は前からいるだけで基本的には自分達と変わらない事。

今ここにいる自分達はコピーで、オリジナルは本当に死んでいる事。

ほむらにとつて収穫だったのは、外でこの事を話すと頭が破裂するという情報であった。

また、その中で彼等の名前も知る事が出来た。

経験者の少年の名は西丈一郎にしじょういちろう。

高校生二人は背の低い方が玄野計くろのけいで、背の高いオールバックが加藤勝かとうまさる。

巨乳少女は岸本恵きしもとけいというらしい。

質問は更に、何故最初から話さずに見殺しにしたかという方向へ移って行ったが、ほむらとしてはそこは疑問でも何でもなかった。

真実をいきなり話しても人がそれを信じるとは限らない。むしろ疑われて敵対してしまうかもしれない。

人は弱いから、自分に不利益な真実は否定したがるのだ。その事をほむらは、過去の経験から痛いほど思い知っていた。

加えて言えばあの四人は仮に生き延びさせたとして、それで今後役に立ったとは思えない。

ヤクザ二人は言うに及ばず。むしろこちらを攻撃してくる可能性すらある。

金髪も論外。あまりに浅慮すぎる。

眼鏡は悪い意味で一般人だ。どのみち生き残る事など出来なかっただろう。

仮に西が最初に真実を明かして、それで何かが変わったとはほむらには思えない。

とはいえ、わざわざ弁解してやる必要性もないので無言を貫いておく。

そうこうしているうちに西は姿を消し、部屋にはほむら達四人と二匹だけが残された。

「ど、どうする……?」

「どうするったって……」

未だ困惑から立ち直れていない三人を放置し、ほむらは先に玄関まで向かう。

その後を慌てて三人が追い、ついでに犬も走った。

そしてドアに触れてみれば……今度は触れる。

ドアノブを回し、出る事も出来る。

「どうやら出れるらしいわよ」

「か、帰れるのか……」

玄野の言葉に、ほむらは目を細めた。

帰れるのは恐らく一時的にだろう。

しばらくすればまた呼び出されるのは間違いないが、ここでそれを言って喜びに水を差すのも抵抗があった。

「なあ……えっと……ごめん、君、名前なんだっけ……」

玄野がほむらに何か言おうとしたが、ここで言葉に詰まってしまった。

彼はほむらの名前を知らなかったのだ。

無理もない事だ。何せほむらはここにきてから一度も名乗っていないのだから。

「……暁美ほむら」

「そ、そう、暁美ちゃん……さん?」

「呼び捨てで構わないわ。貴方達の方が年上でしようし」

「ええと……いくつなんだ? 随分落ち着いてるというか、場慣れしてる感じだが……」

「14歳よ。さっきの西という彼と同年齢ね」

「じゅ、14……最近の中学生は何というか、大人びてるんだなあ……」

ほむらは外見的には実年齢との差異はない。しかし踏んできた場数が違う。潜った修羅場の数が違う。故に噛み合わないのだ。その外見と纏う空気がまるで一致しない。まるで老練の兵士が少女の皮だけ被ったかのような異質さがほむらにはあった。

玄野も何となくそれを感じ、ほむらの年齢を掴み切れなかったのだろう。

14歳といえば西もそうなのだが、あちらは得体の知れなさはあるものの、年相応の幼稚さと幼さが見えた。

色々自分達の知らない事を知っているだけで、基本は斜に構えて気取っただけの子供だ。

だがほむらにはそうした子供らしさが極度に少ないのだ。

「その、君はこれからどうするんだ？ 俺達はとりあえずタクシーでも拾って帰るつもりだけど」

「とりあえず私は近くの店で新しい服を買うわ。帰るのはその後よ」

「そ、そうか」

ほむらは彼等と別れ、別の道へと歩き始める。

そして角を曲がった所で跳び、建物から建物へと跳び移りながら月夜の中に消えていった。

◇

どこかのマンションの屋上。

そこでほむらは夜の街を見下ろし、黄昏れていた。

着ている服はもう薄汚れたコートではないし、魔法少女の姿でもない。

紫色のVネックシャツの上から紺色のジャケットを羽織り、腰から下は灰色のプリーツスカート。

足には膝上まで届く黒いソックスを履き、相変わらず太ももをガツチリガードしてしまっている。

すぐ横にはあの部屋から持ち出したスーツと、ガンツソードが置いてあるが、これは持ち出せるかと試しに持ってきたら本当に持ち出せてしまっただけで割と扱いに困っている。

「これからどうするんだい？」

キユウベえの問いにほむらは鬱陶しそうに目を向ける。

あれからも何故かこいつは引つ付いて来るが、一体何のつもりだろう。

そんな考えを読んだわけではないだろうが、顔に出ていたらしい。キユウベえは質問もされていないのに勝手に話し始めた。

「そんな顔で見ないでくれ。言っただろう、僕はもうインキュベーターではないんだ。

他のインキュベーターと連絡を取れないか試しているんだけど、全く応答がない。

僕は君と同じ、ただのコピーさ。そんなに邪険にしなくてもいいだろう？」

「……なら、貴方を撃ち殺せば代わりは現れないのかしら」  
「やめてくれ」

ほむらがヤクザから拝借した銃をキユウベえへ向けると、キユウベえは相変わらず感情の変化は感じられないが明確な拒否を見せた。

やはり、今までと違って死んでも代わりが現れる事はないらしい。銃口をグリグリとキユウベえの顔に押し付けながらほむらは今後の事を考える。

見滝原のアパートはもう解約してしまっただし、今更両親の所に顔を出す気にもならない。

そもそも、全てが終わった後の事など考えていなかったのだ。

最後の魔女を倒して、自分が死ぬことで前の時間軸のまどかの願いを発動させ、それで終わるはずだった。

だというのに、ガンツという妙なもののせいで考えてもいなかった『その後』を迎えてしまったのが今のほむらだ。

今頃は満足し切り、安らかに永眠ねむっているだろうオリジナルが少し恨めしく思う。

「とりあえず、しばらくはホテルかネットカフェにでも泊まるとして、やっぱり簡素でもいいから住処は欲しいわね。

こんな事になるのだったら、お金をどこかに保管しておくべきだっ

たわ」

帰る気などなかった。生き延びる気などなかった。

だから後の事など考えず、金は全て寄付してしまったし部屋も新しい誰かが使えるようにワルプルギスの夜が来る前日に解約した。

そんなほむらにとって、今となつてはヤクザから奪った財布の中身が全財産であった。

入っている額は合計で25万円ほど。大金には違いないが、ずっと生きていける額ではない。

「君は元々東京出身なんだろう？ 両親に助けを求めればいいじゃないか」

「無理ね。ワルプルギスの夜が来た後に色々と情報操作をして、私はあのスーパーセルで死んだことにしたもの。表の世界では私はもう死人よ……葬式だつて行われたわ」

「……」  
「最後だと思っていたからね……身の回りの整理はもう済ませた後なのよ」

ただの行方不明では、両親はいつまでも自分に縛られて探し続けるかもしれない。

そう思ったほむらは、自分はスーパーセルで死んだという事にしてしまったのだ。

だからもう帰れない。表の世界でも裏の世界でも、暁美ほむらは死人なのだ。

何よりここにいる自分は暁美ほむらではなく、そのコピーでしかない。

合わせる顔がない、とはこの事だろう。

「巴マミに匿ってもらえば……」

「私の死後に遺書が届くように手配してあるわ。今出て行ったら性質の悪すぎる悪戯を仕掛けたとして本当に殺されかねない」

「……準備は万端だったんだね」

「ええ。完全に裏目に出たけど」

やった事が裏目に出るのは魔法少女の宿命のようなものだが、まさ

か死後にまでそうなるなんて誰が予想出来るのだろうか。

ほむらは溜息を吐き、コンビ二で購入したカロリーメイトを頬張った。

「とりあえず、急ぎで金策をしないとね。」

住む場所は……本当にどうしたものかしら」

ほむらは憂鬱そうに言い、しかし魔女との戦いや全員を生き残らせるあの無理ゲーに比べれば何とかなるだろうと妙に前向きに考えた。

今の彼女は全ての使命としがらみから解放されている。

死などずっと昔から覚悟していたから今更怖くはないし、あの部屋にまた送られるならばそこで戦うだけだ。

そこでまた死ぬというならば、それはそれで別にいい。

「……そういえばあそこ……誰も住んでないわよね」

案外、住処は何とかなるかもしれない。

そう思い、ほむらは今後の予定を考え始めた。

幕間 だから、ここにはもう帰って来ない

バママミがその奇妙な魔法少女と出会ったのは、高校受験を間近に控えた中学三年生の時の事であった。

当時、仲間であり弟子でもあった佐倉杏子と喧嘩別れをして日の浅かったママミは、孤独な日々を送っていた。

杏子の他に友達がいなかった。

だが真に心が通い合う友達はいない。

何故なら魔法少女の戦いを知っている友達はいないからだ。知らない者と真に心が通い合うはずがない。

皆が平和を謳歌している中で、町を守る為に孤独に戦う……それは自分で決めた事であったが、それでも辛くないはずがない。

命を賭けて、痛い思いをして、怖いのを我慢して……なのに、誰もそれを知らない。褒めてくれない。

決して見返りが欲しいわけではない……と何度も自分で自分を納得させた。

誰も知らなくても、皆の平和な日々を自分が守っているのだと思う事で必死に自分を保っていた。

誰も見ていないのに見栄えのいい魔法を使い、優雅に戦い、まるで自分がテレビの中の正義の魔法少女になったかのように演じる。

それは全て、弱気を隠すための仮面で……本当はいつも、独りで泣いていた。

そんなママミの前に彼女——暁美ほむらはある日、前触れもなく現れた。

魔法少女の間で、他人のテリトリーに入るのはご法度とされている。

誰がそう決めたわけでもなく、魔法少女同士の殺し合いを避ける為に自然と決まっていた暗黙の了解だ。

故に、当初ママミはほむらを警戒していた。

テリトリーを奪いに来る魔法少女というのは、決していないわけではないからだ。

しかもキュウベえが言うには、暁美ほむらと契約した覚えすらないという。

だからマミは、彼女の正体と目的を探るべく夜の公園にほむら呼び出した。

「暁美ほむらさん……だったわね。貴女は何の為にこの見滝原に来たのかしら」

「……今から二週間後、この町にワルプルギスの夜がやって来る。そいつを倒すのが私の目的……貴女のテリトリーを奪う気はないし、貴女と敵対するつもりもないわ」

ほむらの言葉にマミは息を呑んだ。

ワルプルギスの夜……それは魔法少女たちの間で伝説として語り継がれている最強の魔女だ。

普通の魔女は結界という自分の世界に籠り、隠れるようにして人々を襲う。

だがワルプルギスの夜は隠れない。

一般の人々からは災害としか認識されないこの魔女は結界などに隠れず、大規模な破壊を齎す。

遙かな昔から延々と、この魔女は世界の各地で破壊の限りを尽くしてきたという。

歴史に記されるような大災害のうちの半数以上はこのワルプルギスの夜が原因だとキュウベえは語っていた。

それが見滝原に近付きつつある……というのは、マミの方でも把握していた事だ。

しかし正確な時期まで把握していたわけではない。

だから確認の意を込めてキュウベえを見ると、彼は『大きな間違いはないね』とだけ答えた。

「二週間……ね。どうしてそんな事が分かるの？」

「簡単よ。私はずっと、奴を倒す事だけを考えて生きてきたのだから」  
ほむらはそう言い、マミを真つすぐに見た。

綺麗な瞳だと思った。

同時に、危ういとも思った。



それは、たった一つの目的と願いの為だけに生きているような……  
そんな鋭さと脆さが同居したような瞳だった。

「この町の魔法少女である貴女と共闘したい。」

私は貴女が知らないワルプルギスの夜の情報を提供する事が出来る。

……敗れはしたけれど、私はワルプルギスの夜との交戦経験がある」

「なっ……」

この言葉には、流石にマミも絶句した。

ワルプルギスの夜と戦って生きている魔法少女はいない。

だが、もしもほむらの言葉が本当ならばその定説は覆る。

何より、本当にワルプルギスの夜と戦った事があるならば、彼女と  
いう戦力は確かに魅力的に思えた。

「それは妙だね。君のような魔法少女がワルプルギスの夜と戦ったな  
んていう情報を、僕は知らない」

「でしょうね。それが私の願い……私達の戦いは、この世界の誰も覚  
えていない。」

キュウベえ、貴方は私と契約した記憶すらないでしょう？ それ  
が、誰も私の戦いを覚えていない証拠よ」

「……なるほどね。記憶操作……いや、因果への干渉かい？」

「その質問には答えられないわ。この願いは私だけのもの……誰に  
も、明かす気はない」

キュウベえの質問にも、ほむらはあらかじめ答えを用意していたよ  
うに話す。

彼女の戦いをキュウベえが知らないのは、それが願いによって齎さ  
れたものだから……そうほむらは語る。

確かに、願いの内容次第では不可能ではない。

例えば自分の顔を変える願いを叶えたとして、『最初から自分はこ  
ういう顔だった事にしてくれ』と願えば、キュウベえですら元の顔は  
分からないだろう。

事実——『契約したはずなのにキュウベえが覚えていない』という

揺るがない現実が、ここにある。

「貴女の……仲間は？」

「……皆、死んだわ。守ると誓った大事な友達も、戦い方を教えてくれた師も……ぶっきらぼうだけど優しくかった子も、最後まで私の事を嫌っていた子も……関係なく、死んでいった。」

「……そして……私だけが、今も生きている」

「辛く、ないの……？ 貴女は一人で平気なの……誰も貴女の戦いを覚えていないのに！」

「……………」

マミの叫ぶような問いに、ほむらは何か懐かしいものを見るような目を向けた。

そして夜空を見上げ、黒髪が広がる。

「誰も覚えていなくてもいい。それでも、私には果たすべき約束がある」

「……約束？」

「ええ……大事な友達との約束よ。あんな悲劇を繰り返させない……その約束だけが、私に残ったたった一つの道標」

ほむらはそこまで言い、視線をマミへ戻した。

紫の瞳は、まるで奥に焰でも灯しているかのように熱く輝き、危ういながらも激しい光を秘めている。

マミはそこに、燃え尽きる寸前の蠟燭を幻視した。

「だから……私は戦い続ける。」

たとえ出口のない永遠の迷路に閉じ込められる事になろうと、あの日の約束を果たすために」

ほむらの決意の重さに、マミは思わず圧倒された。

あ、そのフレーズ恰好いいな。今度私も使ってみよう……違う、そうじゃない。

ほむらの今の言葉はマミの中にある厨二病魂を揺さぶったが、それ以上に心を揺さぶった。

この少女はきつと、強い。そしてそれ以上に儂い。

暁に燃える焰は美しく……しかしそれは、夜が明ければきつと消

えてしまうのだろう。

ワルプルギスの夜を焼き尽くし、朝を迎える為だけに燃え盛る暁の焰。それが彼女だ。

だからママは、気付けば口を開いていた。

「……ねえ、ところで貴女、ワルプルギスの夜を追って来たって事は一人暮らし？」

「ええ。家族とは離れて暮らしているわ」

「だったら、私とルームシェアしてみない？」

「——は？」

何故そんな事を言ったのかは、ママ自身にも分からない。

ただ、自分以上に孤独なこの少女を独りにしてはいけないと、そんな風に思ったのかもしれない。

どちらにせよ……この時のほむらの、鳩が豆鉄砲を食らったような顔は忘れられないだろう。

◇

それからママとほむらの共同生活が始まった。

ほむらの事は当初こそクールで感情の希薄な少女と思っていたが、共に生活してみると案外感情の起伏が激しく、怒りっぽい性格である事が分かった。

ママが寝坊をすると、最初の頃は優しく起こしてくれたが慣れるにつれて手荒になり、最後の方はシートごとママを床に落としていた。

他にもママは、まだ使えそうな物（雑誌の付録やノベルティ、一度行った切りの店のクーポン券、ペットボトルのオマケ、ちよつといいお菓子の空き容器等）を捨てるのが苦手な、所謂『捨てられない女』という駄目な一面があったのだが、ほむらは容赦なくそれらを片付けてしまった。

更に、ママが杏子と初めて出会った頃の日記も一度だけ見るとすぐに捨ててしまった。

曰く、『後で絶対死にたくなるから今捨てるべき』らしい。解せぬ。怒りっぽいだけでなく、案外あれでユニークな面もほむらにはあった。

何者かによってママの私生活の写真がバラ撒かれていると知った時には杏子を犯人と疑ってかかったり(いつの間にかほむらと杏子は打倒ワルプルギスの為に手を組んでいた)、ソウルジェムを入れ替えてママとほむらで中身を交換してみた時には、自信満々にママを演じるなどの意外な一面を見せてくれた。

戦いの面でも、ほむらは頼りになった。

当時、見滝原はママのテリトリーだったが、一人で担当するには見滝原は広すぎる上に魔女が多すぎた。

だから以前までは他の魔法少女と担当エリアを分けていたのだが、その魔法少女——名前は確か伊津見尹縫といったか……彼女が消息を絶ってしまった。

キウウベえが言うには、他の魔法少女との戦いで死んでしまったらしい。

なのでママは今まで以上に負担を強いられていたが、ほむらの登場でその負担が激減したのだ。

ほむらとママは使用武器が銃という共通点があり、不思議と戦い方にも共通点が多かった。

まるで自分が二人になったかのような抜群のコンビネーションで、今までより遥かに安定して魔女を狩る事が出来るようになったし、何より背中を誰かに任せられるというのはママにとって本当に嬉しい事だった。

更にほむらは、魔女に襲われていたという百江なぎさという少女を連れて帰って来たり、また別の日には呉キリカという少女に懐かれて帰って来たりした。

何でも、コンビニで彼女が落としてしまった小銭を拾ってあげたのが切っ掛けらしい。

気付けばキリカも、ほむらの力になりたいという理由で魔法少女となっていた上に佐倉杏子もほむらとの共同戦線を張っていたので、いつの間にか見滝原の戦力は大分増していてママも戸惑ったものだ。

しかし……何だかんだでほむらのおかげで杏子とは和解出来た上に仲間も増えた。

それは、ずっと一人だったママにとっては、ずっと欲していた家族の温もりだったのかも知れない。

……ずっと、気を張り詰めて生きていた。

家族を失ったあの日からずっと、自分が助かる事だけをキュウベエに願った事を悔いていた。

だから、罪悪感から逃れるように人を救い続けていた。

命を繋ぎ止める事が出来なかった両親の分まで人を救えば、それが自分だけが生き残ってしまった事の意味になると信じた。

それでも本当は誰かと一緒にいたくて、幻滅されるのが嫌で……ずっと完璧な振り続けていた。

だが、そんなママの仮面をほむらが取り去ってくれた。

彼女の前でだけは演じなくてもいい。素顔のままの巴ママでいる事が出来る。

本当は弱くて、だらしなくて、寂しがり屋で……そんな自分でも、ほむらは受け入れてくれた。

だからずっと、こんな日が続けばいいと思った。

自分がいて、なぎさがいて、キリカがいて……まどかがいて、さやかがいて、杏子がいて……そして、振り返ればいつだってほむらがいて、面倒くさそうにしながらも最後には微笑んでくれる。

ワルプルギスの夜を倒してもずっと、そんな日が続く……そう、信じていたのだ。

だが、ワルプルギスの夜を倒した翌日——ほむらは、何も言わずに姿を消した。

残されたのは一枚の置手紙だけ。

自分にはまだ使命があるから、それを果たしに行く……そんな勝手な事だけを言い、暁美ほむらはママの前からいなくなってしまうた。

彼女の使命とは、全ての魔法少女をこの戦いの運命から解放する事だった。

その為の方法も手段も既に確立しており、後は魔女を狩り尽くすだけだと……そう手紙に記されていた。

ならば自分も連れて行って欲しかった、とママは嘆いた。  
しかしそれでも、ママは希望を持ってほむらを待ち続けた。  
きつと彼女は帰って来る。

いつも通りの、あの涼し気な顔を崩さずに使命とやらを果たして  
帰ってきてくれる。

だからその時に沢山文句を言おう。沢山怒って……そして、『おか  
えりなさい』と言おう。

その気持ちはママだけでなく、他の皆も抱いていたものだった。  
そしてある日、ママは魔法が使えなくなった。

ママだけでなく、杏子やキリカも魔法少女の力を失い……ソウル  
ジェムから離れても、意識を失う事はなかった。

これに関し、キュウベえは言った。

「やられたよ……どんな手段を使ったかは分からないけど、君達は  
……いや、世界中の魔法少女が普通の人間に戻ってしまっている。

君達の魂は肉体に戻り、ソウルジェムは今やただの飾りだ。

しかもどういうわけか、新たに契約する事すら出来ない……なんて  
ことをしてくれたんだ、彼女は」

この報せにママ達は喜んだ。

ほむらは遂に、やり遂げたのだ。

今まで誰にも出来なかった事を……魔法少女からの解放を。

もう戦わなくていい。

これからは普通の女の子として生きていける。

だから後は、ほむらが帰って来ればハッピーエンドだ。

「あいつやりやがったな！ おいママ、今からパーティーの準備だ！

あいつが帰ってきたら驚かせてやろうぜ！」

杏子が笑いながら、ほむらの帰還を疑いもせずと言う。

ほむらの帰って来る場所はここだ。

だから自分達は、疲れて戻って来た彼女を派手に出迎えて、そして  
怒ってやろう。

その提案にママも賛同し、早速ほむらを出迎える準備に取り掛かろ  
うとした。

だが、その動きは次のキュウベエの言葉で止まる事となった。

「暁美ほむらは死んだよ。だから、ここにはもう帰って来ない。  
近いうちに遺書も君たちの所に届くだろう」

冷水を浴びせられたような、そんな気分だった。

キュウベエが何を言っているのか分からない。いや、分かりたくない。

脳はキュウベエの言葉を理解しているのに、心がそれを拒絶する。

「……ふ、ふざけるんじゃないねえ！ あの殺しても死にそうにねえほむらが、死ぬわけねえだろ！」

「そうよ！ キュウベエ……あんた、適当言うんじゃないわよ！」  
「……殺すよっ！」

「僕は本当の事を言っているだけなのに、どうして怒られるんだい？  
わけがわからないよ」

杏子とさやかと、キリカがキュウベエに詰め寄っているがママはそんな気分にもなれなかった。

心臓の鼓動が五月蠅くて、視界が滲む。

嘘だ、信じない。だってあの暁美ほむらだ。

何があっても冷静で、どんな魔女を前にしても余裕を崩さないで……けど、本当は感情的で怒りっぽくて世話焼きな、あの暁美ほむらがそんな簡単に死ぬものか。

だがママ達に追い打ちをかけるように、キュウベエが何かの破片をテーブルの上に置いた。

——それは、砕けた……ほむらのソウルジェムの破片だった。

それを見た瞬間、理解してしまった。

本当に、ほむらは死んだのだと。

いつだって……そう、本当はいつだって怖かった。不安だった。

いつかこの日が来ると、心の何処かで分かっていたのかもしれない。

ママから見てもほむらは何処か、死に場所を求めているように見え

た。

ほむらの過去は本人があまり語りたがらない為、謎が多い。

しかし過去に彼女がワルプルギスの夜と戦い、そして多くの仲間を失った事だけは聞かされていた。

失った大切な友達との間に交わした約束が最後の道標で、支えなのだ……そう語る彼女は、まるで約束を果たしたら何処かに消えてしまいうさそうで……。

もしかしたら約束を果たしたその時こそ、先に逝ってしまった友達の所に行けると思っていたのかもしれない。

そう——暁美ほむらはきつと………最初から、自分が生き残るつもりなど、なかったのだ。

「……う、あ、ああ……」

涙が零れ、声にならない嗚咽が漏れる。

杏子ときやかが何かをキュウベえに叫んでいる。

キリカは今にも死にそうな顔で呆けている。

まどかは大声で泣き……マミは、自分も子供のように泣きじやくつていると気付いた。

酷い、勝手だ。

突然現れて皆の中心になって、心に居座って。

この町や魔法少女達を救って、それで大団円を迎えた気になって自分だけ幸せにならずに死んでしまうなんて。

2週間だけの共闘でなくてもよかったのに。

これからもずっと、ここにいてくれてよかったのに。

生きていて欲しかったのに……。

だが暁美ほむらは行ってしまった。

もう戻って来ない。

寝坊をしてもシーツを引き剥がして怒ってくれない。

作った料理を褒めてくれない。

糖分の取りすぎだと心配してくれない。

紅茶を飲んで、美味しいと微笑んでくれない。

それを理解し、マミはただ泣く事しか出来なかった。



それから一月近くが経った。

もうじき中学を卒業して高校生になるが、今もママの時間は停まっていたままだ。

部屋の中はほむらがいた時から変わらず……意図的に変えず、いつ彼女が帰ってきてもいいように整理されている。

もう帰って来ない事など分かっているのに……。

今日も、ほむらがかつて使っていたベッドの上で僅かな温もりを求めるように布団を抱きしめている。

彼女によって剥がされてしまった仮面はもう付け直す事も出来ず、虚ろな瞳で失ってしまったものを今も探し続けていた……。

## 第5話 地球の為に頑張つて戦つてくれ

「そこは……うん、それで合ってるよ」  
「そう」

あの奇妙な夜から一夜が明けた。

ほむらとキュウベえはとりあえずネットカフェで一晩を過ごし、ついでとばかりにパソコンを使用して金策に走った。

株、FX、バイナリーオプション……今の時代はネット環境さえあれば誰でも稼げてしまう。

勿論それらは失敗すれば破滅に繋がりがねないので、初心者が安易に手を出す事は決して推奨されない。

迂闊に手を出せばFXで有り金全部溶かした人の顔を晒す羽目になるだろう。

健全に生きるならば避けて通るべき道である事は言うまでもない。

そんな蛇の道とでもいうべき邪道だが、しかし今の頼る者がないほむらは通らざるを得なかった。

「凄いわね。こんなに簡単に稼げるものなの」

「僕等インキュベーターは人類を長く見て研究してきたからね。この程度ならばいくらでも予測出来るさ。」

感情という不確かなものに振り回されるわけでもないデータならば、僕等の領分だよ。

言っておくけど簡単に見えても、自分でやろうと思わない方がいいよ。簡単に財産を失うからね」

「覚えておくわ」

ほむらは画面の中の額がどんどん上昇しているのを見て、こいつに頼る日が来るとはと軽い自己嫌悪に陥っていた。

だが仕方ないのだ。14歳の、しかも既に死んだ事になっている小娘などアルバイトすら出来ない。

どうせ有り金を全部溶かしても、元々ヤクザの金だし痛くはない。そんな気持ちで臨んだのだが、思いのほかキュウベえが役に立ってしまった。それがほむらには癪なのだ。

「とりあえずこのくらいでいいだろう。当面の生活費は確保出来たんじゃないかな」

「十分すぎるわよ」

今の時代はネット環境さえあれば通帳だって作れてしまう。

今回ほむらが作ったのは海外の、こうした取引専用の通帳だが金を引き出すのは普通に出来るだろう。

問題は、流石にこれを作る上では個人情報が必要だったので仕方なく入力した事だが……まあ、海外の通帳だ。ここから自分の生存が割れる事はない……と思いたい。

「とりあえず万一凍結される可能性を考慮して、早めに引き出す事だね」

「そうするわ」

パソコン上の履歴を念入りに消し、キュウベエのチェックも経てからシャットダウンした。

海外の銀行なので日本まで送金されるには時間がかかるし手数料も発生するが、それは仕方のない事だ。

それまでは、ヤクザから奪った金で凌げるだろう。

ほむらは本棚から適当に数冊の漫画本を取り出し、パラパラとペーヂを捲る。

思えば、魔法少女になってからはずっとまどかを救うために奔走していたので、こういう娯楽などに手を出したことがない。

昔は本を読むのが好きだったのだが、最後に漫画など読んだのは一体いつだっただろう。

使命から解放され、自分の為だけに無意味に時間を潰す……その事に妙な心地よさを感じながらほむらは、怠惰に流れていく時間を享受していた。

(やはり、あのガンツという玉は人間が造り出したものようだね)

キュウベエはほむらの肩の上で、彼女の読む漫画のページを意味もなく目で追いながら考えていた。

パソコンに疎いほむらは気付かなかったが、キュウベエはパソコン

の操作をする振りをしてとある場所へとハッキングを仕掛けていた。その場所の名はマイエルバツハ。近年に急成長したドイツの企業だ。

ガンツというのは、その企業が造り出した物で正式名称をブラックボールという。

それを日本の財閥チームが買い取り、各都道府県に一つずつ配置したもののうちの一つ……それがガンツの正体であった。

中に入っていた人間は、ランダムに選ばれた人間のクローンであり、あれ自体はただの翻訳者だ。

(驚いたね。宇宙には僕等も知らないような未知のテクノロジーを操る宇宙人がいたようだ)

ガンツに使われている技術自体は無論、地球人のもではない。

どこか別の惑星より送信された軍事技術を、原理も解明出来ぬままに地球人が再現しただけのものだ。

ガンツの技術は造り出した者達ですら完全に解明出来ているわけではない。

宇宙から送信された数式を元に、言われるがままに組み立てただけのものだ。

しかしやはり地球人だ。ガンツを造る技術自体は高度でも、それを保護するセキュリティがキュウベえから見れば原始人レベルである。

おかげで情報は閲覧し放題で、必要な情報は大体見る事が出来た。地球にはインキュベーター以外にも宇宙人が飛来しており、今行わ

れているゲームはそれを排除する為であり、来るべきカタストロフィに備えて戦士を育てる為だ。

だがそれ以上に、あのゲームは見世物としての役割が強いのだ。あの戦いは全て、世界中の権力者にリアルタイムで配信されて賭け

の対象になっている。

特に人気が高いのは大阪の岡八郎という男だが、ほむらも初参戦にして見せつけた圧倒的な能力から期待のルーキーとして注目を集めている。

宇宙人に関しては、無論インキュベーターはそれら宇宙人の大半を

既に把握していたし、逆にインキュベーターの存在はそれらの宇宙人や地球人に把握されていない。

何せインキュベーターは原始時代からずっと地球にいたのだ。年季が違う。

しかし少女ばかりに目を向け、感情エネルギーの搾取のみに専念していたせいで地球人がこのような技術を手にしていた事には気付かなかった。

ともかく情報は揃った。

この先にほむらが戦う事になるだろう異星人の能力。

ガンツ武器の扱い方。

全てのミッションが終わった後に待っているカタストロフィの内容。

(まあ、これはほむらに言わなくていいだろう。聞かれていないしね) 今のキュウベえはその気になれば世界中のブラックボールを掌握してほむらに強い武器を与える事も解放する事も出来る。

何なら賭けの対象にしている権力者やマイエルバツハの会長、及び財閥チーム全員をガンツのシステムに捕らえて『自分でやれ』と宇宙人との殺し合いに放り込む事だって難しくない。

しかしキュウベえは今の所、それらを実行する気はなかった。

強い武器など与えなくても、あのワルプルギスの夜すら倒してみせた暁美ほむらの実力ならば生き延びるだろうし、何よりカタストロフィで地球が滅ぼされるのはキュウベえにとってもいい事ではない。

確かにインキュベーターは地球から撤退したが、依然として地球が魅力的な資源を持つ星である事は間違いないのだ。

契約は出来なくなつたが、他の方法で感情エネルギーを集める方法も後で見付かるかもしれない。

だがそうなつた時に地球そのものが死の星になつては意味がないのだ。

なのでカタストロフィで地球を襲撃する者達を退ける為にも、むしろ暁美ほむらにはこのまま残ってもらわねば困る。

ワルプルギスを始めとする魔女が残っていれば、そんな宇宙人など

勝手に魔女達が蹂躪してくれただろう。

世界各地の魔法少女さえいれば、カラストロフィでやって来る宇宙人など殲滅出来ただろう。

だが、そのどちらもほむらが終わらせてしまったのだ。

そして世界中のガンツの戦士を見たが、現状でほむら以上の実力者は存在していない。

ならば彼女には責任を取る義務がある。

とりあえず今は、ほむらが権力者の気紛れで殺されてしまわないように頭の中の爆弾を取り除くくらいでいいだろう。

(期待しているよ、暁美ほむら。

精々、地球の為に頑張って戦ってくれ)

◇

あれから大体一月ほどが経ち、ほむらは再びあの部屋へと転送された。

だが何もかもが分からなかった前回と違い、今回は転送される事が分かっていたので準備は万端だ。

転送されてきたのはほむらだけではなく、買い揃えていた最低限の家具や日用品、食料、水もセットである。

前回、服や持っている物が一緒に送られた事から触れてさえいけば荷物も持ち込めると思っていたが、案の定であった。

まだ他に誰も来ていないのも運がいい。どうやら今回は最初を送られたようだ。

この部屋は一度出てしまえば次に呼ばれるまで入れないが、出さえないければ居座りは不可能ではない。

ほむらは色々と考えた末、ここを自分の活動拠点にしてしまう事に決めたのだ。

何せ今の彼女は世間では故人だ。行く場所がないし、いつまでもホテル暮らしをしているわけにもいかない。

その点このマンションの一室は普段は絶対開かないし、管理費や維持費もガンツを用意した何者かが払っているのだろう。

もしかしたらこのマンションそのものがグルかもしれない。

つまり、ほむらのような存在しない人間が住むには、うってつけなのだ。

あるいは初めからそれを想定してマンションなどにした可能性もある。

とりあえず家具を配置するのはミッションが終わった後だ。

ほむらは急いで家具と日用品を押し入れに押し込み、何事もなかったように壁際に座って次の転送者を待った。

まず最初に来たのは西だ。

彼はほむらに気付くと、薄ら笑いを浮かべて反対側の壁に寄り掛かった。

互いに他者に干渉される事を嫌う者同士、妙な無言の秩序がそこにあった。

次に来たのは前回参加者の玄野、加藤、岸本、そして犬だ。

玄野は何故かいきなり顔を青ざめさせているが、何かあったのだろうか。

その次は新顔となるガラの悪い男が四人。前回のヤクザを彷彿とさせるが、あれよりは裏の人間特有の気配がしないので、単なる暴走族か何かだろう。

更に美形の男と、その男の腰に抱き着いている髪の長い女。

男の方はヘルメットを被っており、何かに跨るような姿勢のまま送られて来たのでバイクに乗っていて事故死でもしてしまったのだろう。

最後にお婆さんと、その孫と思わしき少年が来たところで転送は終わった。

(暴走族は一般人よりは戦闘向きでしょうけど、協調性は恐らくなし。

お婆さんとあの小さい子は明らかに論外。何故ガンツはあんな二人を……。

あっちの顔のいい人と髪の長い女性はよく分からないわね)

ほむらは新顔となる八人を軽く観察し、いずれも足手まといの評価を下した。

しかし暴走族がどうなろうと知った事ではないが、流石にお婆さん

と少年は哀れと思うしかない。

あれでは、100点を取って解放など絶対に不可能だろう。

見たところ良心的かつ大人しい人格者のようだが、気性も年齢も戦闘に向いてなさすぎる。

「皆、聞いてくれ！」

加藤が経験者としての責任感からスーツの着用を皆に勧めるが、案の定暴走族四人からは嘲笑の的にされただけであった。

それでも根気強く説得し、何とかお婆さん、少年、美形の男にだけは着せる事に成功している。

もつともあの三人では、生き延びる事が出来るのは美形の男くらいか。

その後一人一人玄関で着替える事になったが、岸本の番になったところで暴走族のうち三人がその後を追うように部屋を出て行った。

(全く……世話の焼ける)

ほむらは溜息を一つ吐き、部屋を出た。

玄関まで行くと予想通りに男達が裸の岸本を襲おうとしていたので、声をかける。

「貴方達、やめておきなさい」

「あん？ 何だ、このガキ」

「混ぜて欲しいのかあ？」

「ヒヤハハッ、もう少し胸を成長させてから出直して来いよ！」

ほむらは無言で、最後に余計な事を言った男の顔にガンツソードの柄をめり込ませた。

前歯が全て折れ、血が床を濡らす。

そのまま男は壁に叩きつけられ、気を失ってしまった。

「こ、このガキ！」

「よくもー」

他の男二人が激昂して飛び掛かってくるが、単に喧嘩慣れしただけの素人などほむらの敵ではない。

一人目の男の腹に膝をめり込ませて沈め、二人目の男が殴りかかってきたので避けて背後に回り込む。



「あて身」

ドスツと手刀を首筋に叩き込んで失神させ、ここに転がっていても邪魔なので男達の足を束ねて掴んだ。

ミッシヨン前にいきなり三人を気絶させてしまったが、丁度いいのでこのまま寝ていてもらおう。

どうせ起きていてもロクな事はすまい。

「あ、ありがと、暁美さん。また助けられちゃったね……」

「次からは加藤さんか誰かを見張りに立たせる事ね。警戒心がなさすぎよ」

ほむらは冷たく岸本を睨み、気絶した男を引きずって部屋へと戻った。

やはり彼女はこの場に向かないのかもしれない。

前回に一度襲われかけたというのに、何故何の警戒もなくここで着替えて襲われないと思うのか。

脳に行くべき栄養が全て胸に行っているとしたか思えない。

これは彼女の無思慮さに対する呆れである。断じて嫉妬ではない。垂れる。

部屋に戻ると全員が驚愕の顔でほむらを出迎え、特に暴走族のリーダーと思われる男は激しい動揺を見せた。

「こ、康介！ 信介、春哉！ このガキ、そいつらに何しやがった!?!」

「この馬鹿共が岸本さんを襲おうとしていたから黙らせただけよ。」

それとも、貴方もこいつらのご同類かしら?」

「……それは……いや、そこまでは俺も……」

ほむらが事実をありのまま述べると、彼はバツの悪そうな顔でそっぽを向いた。

どうやらリーダーだけあって、少しは他人の事を考える事が出来るらしい。

ろくでもない人間である事は間違いないが、他の三人よりは大分マシな人物のようだ。

「何だ。あの胸がでかいだけの女をわざわざ助けるなんて、お前も偽善者かよ」

「別に……単に気に入らなかつただけよ。これからも出入りする事になる玄関で薄汚い真似をされるのは不愉快だわ」

「なるほど、そりゃそうだ」

西は余程偽善者というか、善人ぶっている人間が嫌いなのだろう。前回も随分加藤を侮辱していたのを覚えている。

しかし世の中を動かす、秩序を形成しているのは大多数の偽善者だ。

人間というものが誰でも悪しき性を抱えて生きている事などほむらにとつては今更語られるまでもない事実である。

しかしだからといって偽善ぶる事さえ止めてしまえば、人はただの獣となり、ここで気絶しているような馬鹿へと成り下がる。

全員がそうなつてしまえば秩序も何もあつたものではない。

その辺りの割り切りが西にはまだ出来ていないのだろう。

「その、曉美……ちゃん。そろそろスーツに着替えた方が……」

「その必要はないわ」

「し、しかし……スーツを着ていた方が生存率が上がるのは君も知っているだろう？」

加藤はほむらにもスーツを着用して欲しいようだが、ほむらは今の所必要性を感じてはいなかった。

前回のねぎ星人が弱すぎただけなのかは分からないが、あの程度ならばスーツなど着なくてもやっていける。

今のほむらは魔法少女のスペックを持つ超人なのだ。その腕力、脚力、スタミナ、耐久力はスーツを着た人間すら遙かに凌いでいた。

というか、こんな見知らぬ人間だらけの場所で着替える気はない。

「じゃ、じゃあ……計ちゃん」

「それだけど、加藤……どうしよう」

「え？」

「……スーツ……忘れちゃった……」

どうやら玄野は前回到スーツを着たまま帰り、そして忘れてきてしまったらしい。

これは彼、死んだかもしれないわね……などと思いつながらほむらは

目を閉じて転送されるまでの時間を待った。

## 第6話 守るべきものなんて、私にはいらない

てめえ達は今からこの方をヤツつけに行つて下ちい。

田中星人。

特徴 強い。ちわやか。とり。

好きな物 とり。カラス。

口ぐせ ハアーハアーハアー。

ほむらが転送されたのは、前回とはまた異なる住宅街であった。少し離れた位置には河が見え、近くには誰もいない。

ほむらよりも先に西が転送されたはずだが、ステルス装置を使って姿を消したのだろう。

前回といい、彼はどうも隠れているのが好きなようだ。

実に効率的で、伊達に長く生き延びてないと思わされるが……ああいう戦いに慣れ過ぎてしまうと不意の事態に弱くなってしまう事もまたほむらは経験則で知っていた。

かくいうほむらも、時間停止に頼りすぎて不覚を取った経験が何度かあるのだ。

「ほむら。レーダーで探索してみたんだけど、ここから北に200mの地点に四体ほど集まっているようだよ」

「……よく使い方を知っているわね」

遅れて転送されて来たキュウベえが、何やらレーダーのようなものを持つてほむらに話しかけてきた。

見ると、確かにほむら達から少し離れた位置に四つ程反応が集まっているのが分かる。

それにしてもキュウベえは一体何故これの使い方を知っているのだろう。

調べる姿など見た覚えがないが。

「人間の造り出した物なんて解析するのは簡単だよ」

「……そう」

腑に落ちないものを感じながらも、どうせ聞いてもはぐらかされる

だろうと思つたほむらはあえて何も言う事はなかった。

少なくとも今の所は便利な事は間違いないし、何かおかしな素振りを見せればその時は撃ち殺してしまえばいい。

ほむらにとつてキュウベえとはその程度の存在であり、逆にキュウベえもまたほむらを利用していただけだという事は分かつていた。

「それじゃ……行くわよ」

「他の皆とは合流しないのかい？」

「……必要ないわ。私一人の方が身軽よ」

「そうかい？ 弾除けくらいにはなると思うんだけどなあ」

現在、他のメンバーとほむらの間には埋めがたい差が存在している。

だからこそほむらは、玄野達と連携しようとは考えていなかった。下手に一緒に行動しても、ただ邪魔になるだけだからだ。

一緒に行動して……それで、情が湧くのが嫌だった。

自分の手はいつだって小さくて、大事なものを拾いあげようとしては取り零して……。

世界は優しくない。守りたい者を全て守れるなんて御伽噺の中だけの出来事で、現実はいつだって命の選択を迫られる。二兎を追つてその果てに何もかもを失う事だつてある。

……大切なものを喪う痛みは、もう十分だ。もう嫌すぎるほどに味わつてきた。

ミツシヨンはまだ二度目だが、それでもここがいつ死んでもおかしくない場所である事は分かつた。

そんな場所で大切なものなんて作つても、取り零すに決まつていゝ。いつか喪うのが目に見えている。

だつたら最初からそんなものはない方がいい。

心を氷で固めて、誰とも深く触れ合う事なく自分一人で戦えばいい。

そうすれば、たとえいつかこの地獄の中で自分が死ぬとしても……少なくとも、あの痛みは受けずに済む。

強がっているのに本当は寂しがりやな先輩を。悪ぶっているのに

本当は優しい戦友を。真つすぎすぎて自ら破滅してしまう不器用な友を。そして何より大切な友達を……その全てを見殺しにして、自分だけが生き恥を晒して次の世界へと逃げる。

そんなのはもう……嫌だ。もう耐えられない。

だったら最初から一人でいい。大切なものなんて、ここでは作らない方がいい。

「もうこれ以上……守るべきものなんて、私にはいらない」

「だったら利用して捨て駒にすればいいじゃないか。匣にだって使えない事はない。

役に立たなくても敵の情報や動きを見る事は出来るだろう？

その方が効率的だと僕は思うんだけどなあ……人の考えは分からないよ」

「黙りなさい」

Xガンの銃口をキュウベえの顔に押し付けてグリグリと振じる。

すると流星にキュウベえも本当に殺されかねないと悟ったのか、渋々口を閉ざした。

それから右手にXガン。左手にYガンを持ち、ほむらは夜の住宅街を駆けた。

ちなみに銃の名前は、銃口の形から加藤が名付けたものだ。

民家の屋根から屋根を跳躍して跳び移り、月をバックに黒髪の少女が舞う。

恐怖や緊張はない。感情のブレが文字通り命に関わる魔法少女にとって心の制御は必須技能だ。

それが出来なければ数多の時間軸の美樹さやかと同じ末路を辿る事になる。

狩りに徹したほむらは放たれた銃弾であり、心を鉄にして敵を撃ち抜くだけだ。

(……いた！)

移動を開始してすぐ、ほむらはまるでロボットののような姿の異星人を発見した。

テカテカとした光沢のある物質で造られた人形のように、一昔前の

デパートの屋上などに置かれてそうな外見だ。

赤と白の縞模様の服を着て、駆動音を響かせながら道を歩いている。

それが四体、規則正しく並んで歩いているのは不気味さを感じさせた。

しかしほむらは勢いを落とさずに、それどころか更に勢いを付けて跳躍。

最後尾にいた田中星人の背を踏みつけ、そのまま倒れた彼の背を足場に着地し、他三体の田中星人の真ん中に位置取った。

「!」

「!?!」

突然の事に反応が間に合わない左右の田中星人にそれぞれ、XガンとYガンを直撃させる。

更に正面の田中星人に蹴りを放つも、こちらは避けられてしまった。

ほむらに踏まれていた田中星人が起き上がる事でほむらは空に跳ね飛ばされるが、すぐに空中で回転して田中星人に発砲。Xガンを直撃させた。

するとXガンを当てた二体は頭部を弾けさせて死亡し、Yガンを当てた田中星人は光のワイヤーで縛られて動けなくなった。

再度Yガンを当てると、空へと向けて転送が開始される。

(なるほど。Xガンは時間差はあるけど殺傷力に優れ、Yガンは即効性はあっても殺傷力はない……しかも一度目で捕獲し、もう一度撃つ必要がある。

……使えるわね。Yガンで止めてからXガンで止めを刺すという組み合わせも出来そうだわ)

「ほむら、来るよー」

一体だけ逃れた田中星人は空を飛び、ほむらの近くで口を開いた。

それに対してほむらは地面を蹴って横に跳び、数秒遅れてから彼女がいた場所を不可視の何かが抉った。

恐らく口から超音波か何かを発して攻撃してきたのだろうが、どう

も速射性には難があるようだ。

すぐにほむらは田中星人に銃口を合わせるが、それを察知して田中星人が空を飛ぶ。

だがそれを更に先読みして跳躍したほむらが、田中星人に銃口を押し付けた。

発射——爆破。

瞬く間に田中星人四体を始末してみせたほむらは地面に降り立ち、優雅に髪をかきあげた。

「流石だね、ほむら。ここから東300mの地点に更に八匹集まっているけど、行けるかい？」

「問題ないわ」

あの程度ならば魔女の使い魔と大差ない。

それがほむらの下した評価であり、要するに魔法などなくともまず負ける事がないほどに田中星人とほむらの実力が開いている事を示していた。

戦いの後である事を感じさせない程にほむらは普段通りに歩き、反応がする方向へと歩を進めて行く。

その道すがら、河の方で何か騒ぎ声が聞こえるがどうやら向こうでも戦闘が始まったらしい。

リーダーを見れば……反応は一体だけだ。

大して強い星人ではなかったし、向こうにはベテランの西もいるから大丈夫だろう。

そう考え、ほむらはそのまま多くの反応があるアパートへと向かう。

正面からドアを開け……るような事はしない。

跳躍して窓を蹴破り、いきなり2階へと突入。胡坐をかいていた巨大な鳥にYガンを発射して拘束し、蹴りの一閃で首を砕いた。

更にドアを蹴破ってアパートの廊下へ飛び出し、左右のドアへ向けてXガンを連射。

一発目でドアを破壊し、二発目を中にいた田中星人へと炸裂させる。



「1、2」

田中星人が破裂する音を後ろに聞きながら疾走。慌てたように飛び出してきた五人の田中星人を蹴り、銃底で殴り、足で払い、Xガンを撃つて一体屠る。

「3」

田中星人も口を開いて反撃しようとするが、発射までが遅すぎる。ほむらは壁を走るようにして田中星人の横を抜け、振り返る事なく後ろにXガンを発射。更に一体葬り去る。

「4！」

残された三体の田中星人がほむらを取り囲んだ。

機動力を殺し、抑え込むつもりだろう。それなりに智能は働かせているようだ。

だが甘い。ほむらの真価は長距離のみにあるわけではない。

むしろこの距離こそがほむらの間合いだ。

伸ばされる田中星人の手を避け、いなし、逸らし、そのまま回避の動作を攻撃へ繋げてXガンを発射。

成す術なく田中星人が血肉へと変えられる。

「5！」

相手の動きを完全に予測出来れば至近距離であつてもそこは安全地帯となり、最小限の動きで回避する事が可能となる。

回避動作をそのまま攻撃動作に出来るならばそれは、自らにとっては安全であり敵にとっては必殺の死地となる。

格闘と銃撃を両立させた動きはバマミの得意とするもので、かつてほむらは彼女に師事していた時間軸があつた。

その上でほむらは自己流に研磨し、長い戦歴の中でこの戦闘術を完成させたのだ。

今ならば時間停止抜きでもバマミと至近距離で撃ち合う事だつて出来るだろう。

田中星人の腕を避け、そのまま腕を交差させるように顔へ銃口を突きつける。

反対側の田中星人が口を開くが、その口の中に銃口を突っ込んで黙

らせた。

そして左右同時に発砲。

片方は捕獲され、もう片方は頭が弾け飛ぶ。

「6、7ー」

そのまま捕獲されて動けない田中星人にXガンを当てて射殺し、最後に首が折れたままワイヤーを引き千切ろうとしていたでかい鳥にXガンを連続で当てた。

そして背を向けて、少し乱れてしまった髪を手で軽く流す。

それと同時に背後で巨大鳥が爆散して絶命した。

「8……これで終りね」

アパートにいた八体全てを沈黙させ、ほむらは軽く息を吐いて残心した。

まだ警戒は解いていない。

隠れている敵がいるかもしれないし、もしかしたら死んでいない敵がいるかもしれない。

再生するという可能性も考慮しなければならぬだろう。

だからほむらは駄目押しにもう一度死んでいる田中星人にYガンを撃ち込んで死体を転送し、その場から完全に消し去った。

「……終わらないわね」

「まだ残ってるんじゃないかな。調べてみるよ」

まさか、まだ河の方の敵が残っているのだろうか。

そう思って調べるが、河の方の反応は消えている。

誰かは知らないが、すっかり倒したようだ。

しかし圏外ギリギリの位置に反応があり、しかも他の参加者の反応まで近くにある。

田中星人の反応は一つ、参加者の反応は五つ………いや、四つだ。今一つ減った。

恐らく新規参加者のうちの誰かが圏外に出て死んでしまったらしい。

「行くのかい？」

「ええ」

ほむらはアパートの窓から飛び出し、屋根から屋根へと跳んで夜の街を駆けた。

あの反応が玄野や加藤、西ならばいい。きっと勝つだろう。

しかし老婆や暴走族なら駄目だ。暴走族はスーツを着ていないし、老婆と少年はスーツを着ていても元々戦えるように見えない。

こんな状況である以上、いずれあの老婆と少年は死ぬだろう。

だがそれでも、罪のない善良な祖母と孫が死ぬのを黙って見過ごせるほど、ほむらは人の心を捨て切れてはいなかった。

無駄である事は分かっているのだ。仮にここを生き延びさせたとしても、あの老婆と少年ではこの先を生き残る事など絶対に出来ない。

むしろ後に苦しんで死ぬ可能性がある以上、ここで死なせてやった方がまだ幸せという可能性だつてあるのだ。

だからこれは単なる自己満足……自分が後味の悪い思いをしたくないからやっているだけの偽善だ。

◇

杉本カヨはごく一般的な、どこにでもいる善良な老女である。

一般家庭に生まれ、一般的な男性と結婚して幸せな家庭を築き、そして子宝にも恵まれて孫の顔を見る事も出来た。

そんな絵に描いたような普通の、お人よしのお婆さんだ。

余生の少ない彼女にとって、生き甲斐と呼べるものは可愛い孫の成長を見る事である。

その孫が通信簿を見せに来た日の夕方、彼を家に送るために車を出したのだがそこでトラックに衝突されてガンツの部屋に転送されてしまった。

そこからの出来事は完全に彼女の理解を超えており、今でも何が起きているのか現状の半分も理解出来ない。

それでもロボットののような異星人と西が殺し合い、そして西が死んでしまった事でどれだけ自分達が危険な場所に立たされたのかは何となく分かってしまった。

それでも何とか孫の亮太を家に帰してあげようと、目を覚ました暴

走族三人の後に続くように帰路についた。

だが、歩くにつれて妙な音がどんどん大きくなり、そして先を歩いていた暴走族の頭が弾け飛んだ事で帰る事すら出来ない悟ってしまった。

そして今、彼女は地獄の中にいた。

あの恐ろしいロボットが彼女達の前に姿を現し、暴走族に襲い掛かったのだ。

「こ、この野郎！」

「ふぎッけんな！ 死んでたまるか！ 死んでたまるかよ！」

暴走族の二人が必死にXガンで応戦するも、田中星人には当たらない。

空を飛び、照準から身をかわして暴走族を翻弄していた。

田中星人はこう見えて俊敏だ。射撃の腕に秀でた西の射撃すら全て避け、殺害してみせたこの異星人に暴走族のいい加減な射撃が当たるはずもない。

ほむらやマミといった魔法少女のような超次元の射撃能力を有するならば田中星人など敵ではないだろうが、この二人にはあまりに荷が重すぎる相手だ。

と、いうより高層建築物から落下し、落ちながら超至近距離で銃撃戦を出来る魔法少女など参考にしてはいけない。

田中星人が避けながら超音波を発し、それに直撃してしまった暴走族二人が身体の内という穴から血を流して倒れた。

その死体を踏み潰し、田中星人がカヨと亮太の前に立ち塞がる。

「お婆ちゃん！ こわいよおお！」

「りよ、亮太……逃げるんだよ……先に行つてて」

「お婆ちゃんは……？」

「あんな奴、おばあちゃん、やつつけちゃうから」

カヨは亮太を安心させるように笑顔を浮かべ、震える足で田中星人へと向かう。

分かつて……勝てるわけがないと。

自分よりも若くて体力もあり、武器を持っていた男が三人も死んで

いるのだ。

だというのに、こんなお婆ちゃんが勝てるわけがないという事はカヨ自身が痛いほど分かっていた。

それでも時間を稼げば、亮太だけは助かるかもしれない。

あのスーツを着た人の中にも優しそうな人はいた。

亮太が逃げて彼等と合流さえ出来れば……その為にカヨはここで捨て石になる事を決意したのだ。

だが悪い事というのは重なるものだ。

何と、亮太が逃げた先からも更に田中星人が三体ほど飛んできたのだ。

「おばあぢやああああんー！」

亮太はすっかり怯えてカヨにしがみつき、カヨも悟ったかのように亮太を抱き締めた。

この世界は弱者に優しくない。

弱い者は何も出来ずに死んでいくだけだ。

だが——奇跡と魔法も、確かに世界にはあるのだ。

月明りの夜空を舞い、黒髪の少女が降り立った。

スーツなど着ていない彼女は、しかしスーツを着用した人間以上の脚力で田中星人を蹴り飛ばしてカヨから引き剥がす。

更にXガンで威嚇射撃。田中星人三体に回避させ、空に飛ぶように誘導した。

それを追って跳び、田中星人を足場にして残る二体へYガンで牽制しながら自らが足場になっている田中星人の頭部にXガンを直撃させた。

ほむらが跳び立った後に田中星人が弾け、残る二体と空中戦をする。

そこに先程蹴り飛ばされた一体が参戦するがほむらの優位は揺らがない。

たとえば空を舞う翼がなかりうが、それでも少女は舞う。

田中星人の拳を避け、蹴り、撃ち、地上に着地してからは囲まれての三対一だというのに全ての攻撃を避けながらYガンを宙に放り、

キュウベえに持たせていたガンツソードを手を取った。

そして剣の一閃で田中星人の首を切り飛ばして剣の長さを戻し、キュウベえに返した。

それと同時に先程放ったYガンが落ちてきたのでキャッチして再びXガンとYガンの二丁拳銃装備になる。

「お婆ちゃん！ あのお姉ちゃんすっげエ！ かつこいいい！」

亮太が呑気にはしゃぐ声にほむらは少し呆れたが、まあ子供なんてあんなものだろうと割り切った。

田中星人が離れて超音波を発しようとするが、そこに別の田中星人を蹴り飛ばして盾にする。

見事に同士討ちしてしまった田中星人へ向けて跳び、二体を飛び越えて空で宙返りをし——すれ違いざま、上下逆さまの姿勢のままXガンとYガンを発射した。

着地と同時に田中星人が弾け、もう一体が拘束される。

そこに振り返りながらもう一度Yガンを発射。空へ向けて転送し、この場の田中星人を一掃した。

「すげえ！ 全部やつつけちゃった！」

亮太がほむらに向ける視線は、まるでヒーローを見る子供のものだ。

それに居心地の悪さを感じ、ほむらは西の『偽善者』という言葉を思い出す。

なるほど、確かに偽善だ……あの子供は、救われたのではなく苦しみが長引いただけだと気付いていない。

あんな目を向けられる資格など自分にはないというのに……。

ほむらは軽く自己嫌悪し、そしてカヨが少しずつ消えていくのを見て今回のミッションが終わった事を実感した。

「ね、ねえ！ お姉ちゃん、お婆ちゃんが消えちゃうよ！ 助けてよお！」

「心配ないわ。あの部屋に戻されるだけよ」

雑に返答しながらほむらは、銃を入れるホルスターを買う必要があるなど考えていた。

今は使わない武器をキュウベえに持たせているが、正直やりにくい。

というより、キュウベえの状態が結構面白い事になってしまっている。

右の耳毛にステルス用のリモコン（今回は結局使わなかった）。

左の耳毛に星人探索用のレーダー。

そして口にはガンツソードをくわえ、プルプルと震えていた。

「わけがわからないよ」

キュウベえはただ一言、そう言って自身の扱いへの不満を漏らした。

## 第7話 これから、よろしくね

ほむらとキュウベえが部屋に戻ると、そこにはまだカヨと亮太しかいなかった。

カヨはほむらの姿を見ると、近付いてきて頭を下げる。

「先程はどうもありがとうございました……何とお礼を言っていたか……」

「……その必要はありません」

本当に感謝しているような老婆の笑顔に胸が痛んだ。

彼女は知らないのだ。地獄から解放されたのではなく、留まらされたという事に。

この地獄から解放される方法は100点を取るか、それとも死ぬかの二択しかない。

100点が不可能である以上、この老婆と少年に許された道はどれだけ苦しまずに死ぬかの一点に限られている。

正確には生き続けて地獄を継続するか、早く死んで楽になるかといったところか。どちらもロクなものではない。

ほむらはこの二人の苦しむ時間をいたずらに延ばしてしまったのだ。

(私と違って、地獄に堕ちるような人間ではないわね……)

ほむらは自身の現状をある種の自業自得であると思っている。

地獄に堕ちるだけの事はやってきたつもりだ。全ての時間軸を合わせれば盗みの被害総額は軽く億に届くし、魔女も元は人間なのだから殺人だって三桁は超えている。

少なくとも天国に行ける人間でない事はほむら自身が自覚しており、死後に煉獄の焔で焼かれても構わないと思って戦い続けてきた。

しかし、カヨのような人間まで巻き込むガンツのやり方には反発を覚えずにはいられない。

「それで、あのう……私達は帰れるんでしょうか」

「一時的に、ならば帰る事が出来ます」

「ほ、本当ですか？ 亮太、よかったねえ……帰れるよ」



「お婆ちゃん、僕お腹すいだああああ！」

随分と甘やかされ、大切に育てられてきた子供らしい。

亮太はこんな時だというのに、お腹が空いたと喚いて祖母を困らせている。

戦闘に向かない上に、喚く足手まとい連れ……これでは隠れる事すらままならないだろう。

やはりこの二人は近いうちに死ぬという嫌な確信をほむらは抱いてしまった。

やがて次々と生き残りが転送され、玄野、岸本、加藤の三馬鹿トリオと暴走族のリーダーが戻ってきた。

犬も健在だ。どこで何をしていたかは分からないが、とりあえず生きていられるだけ上出来だろう。

それから美形の男と、それに付きまとう髪の長い女（ストーカー？）も戻ってきた。

ほむらにとって予想外だったのは、西の姿がない事か。

「あ、暁美さん。よかった、無事だったんだ。姿が全然見えないから心配してたんだよ」

「別に、心配されるほど長い付き合いではないでしょう？」  
「もーっ、そういう事言うー！」

ほむらの姿を見て岸本が嬉しそうに駆けよって来るが、ほむらにとって彼女は他人なのでぞんざいに返しておいた。

何というか、親しくなると少し面倒になる気がするのだ。

具体的に言えば、この岸本という女性は美樹さやかと少し似ている。

お人よしだが、戦いには向かず視野が狭い。そういう人種だ。

「西丈一郎の姿が見えないわね」

「え、ええと……彼は……」

ほむらが西の話題を振ると、途端に岸本が言い難そうに口を噤んだ。

それだけでほむらは西の末路を察してしまう。

ああ、死んだのか……と。

西は本人の言葉を信じるならば一年もの間ミッションを生き延びてきたはずの男だ。

だからある程度放っておいても平気だと考えたのだが、どうもそうではなかったらしい。

彼は情報を多く抱えているだろう貴重な人間だったのだが……まあ、死んだのならば仕方がない。

「そう、死んだのね」

それだけを素っ気なく言い、ほむらはガンツへと視線を向けた。

西が死んだならばこれで全員のはずだ。

そろそろ採点も始まるだろう。

その考えに答えるように『それぢわ ちいてんをはじめるとガンツに表示された。』

結論を言えば、ほむら以外で点数を獲得したのは玄野だけで他は全員0点であった。

河の方に向かった田中星人一体を相手に西が戦い、それを全員が観戦していたからだ。

加藤は西を助けようとしたが、それでも動くのが遅すぎて手遅れになり、最後は加藤が動きを止めて玄野がYガンで転送したというのが河での戦いの顛末であった。

そしてその時間は実に20分にも及び、その間にほむらが他の田中星人を一掃してしまったというのが今回のミッションである。

それにしてもガンツのあだ名の付け方が酷い。

カヨは『ババア』、亮太は『ガキ』、美形は『ホモ』、そしてストーカーは『サダコ』。

どうも、0点だった者にはかなり厳しいシステムのようだ。

「最後は暁美さんだね。何点だろう」

「0点だろう？ 今回どこにもいかなかったじゃん」

岸本の言葉に、玄野が何やらズレた事を言う。

確かに彼から見ればほむらは今回、何もしていなかったように見えるだろうがほむらに言わせれば何もしていなかったのは自分以外の全員である。

『ほむら。83てん。』

TOTAL86てん。あと14てんでおわり』

「ハアア!? 何でこいつだけこんなに!？」

「83てん……す……」

「ど、どういう事だ……?」

明らかにほむらだけ飛び抜けた点数に玄野が納得出来ないように叫び、岸本と加藤は困惑していた。

そんな彼らの疑問に答えたのは亮太だ。

「そのお姉ちゃんすごかったんだよ! あの消えるお兄ちゃんが勝てなかった怖いロボットを沢山、一人でやつつけちゃったんだ!」

亮太は相変わらず、キラキラとしたヒーローを見るような目をほむらに向けている。やめてほしい。

「沢山で……なあ曉美、お前どれだけ倒したんだよ?」

「……15体……いえ、ボスのようなかいい鳥も含めたら、16体かしら」

玄野の問いに、ほむらは少し考えてから答えた。

最初に八体いるという情報を得た上で突入したアパートでは討ち漏らしがないようにカウントもしていたが、それ以外の倒した敵の合計などいちいち覚えていないので、記憶を辿って何とか正確な数を出したのだ。

その一人だけ突き抜けた数字に全員が驚き、ほむらに視線を向けた。

経験者であるはずの西が対一で敗れる姿を見ているので、その数字に驚くしかないのだ。

「俺達が河で戦っている間に……他の星人を一人で片付けていたのか……」

「な、なあ加藤。もしかして西って口だけで大したことなかったんじゃない……」

「いや、それはない……はずだ。一年以上生き延びてきたやつだぞ。計ちゃんも知ってるだろう」

「でも曉美は16体だってよ。それもスーツなしで」

「……………」

もしかしてスーツっていららないのでは？ そんな考えが玄野達の間にも広がりそうになるが、スーツを着ていないが為に死んでしまった前回の参加者を知っているのもそれはないとすぐに思い返す。

西だって最終的にはスーツが壊れたから死んだのだ。やはりスーツは重要である。

……ならば、そのスーツを着ないで無双しているあの女子中学生は本当に何なのだ。

「本当に……帰れるのか……」

「ええ。けれど、今日ここで起こった事は誰にも話さない方がいいわ。

死んだ西丈一郎が言うには、この事を漏らすと頭が弾けるらしいから」

「ま、マジか……」

帰れる事に安堵していた暴走族だったが、ほむらの忠告で顔を青褪めさせた。

今の一言で察したのだ。まだ解放されていないという事に。

それから加藤がカヨと亮太にも今日の事を誰にも話さないように言い聞かせ、100点を取れば解放される事と、近いうちにまたここに呼び出されるだろう事を告げた。

老婆にとつて解放の条件はあまりに遠く、死刑宣告を突きつけられた気持ちだろう。

改めて、この二人を呼んだガッツの真意が分からない。死んでいれば誰でもよかったのだろうか。

しかし一時的とはいえ自由は自由だ。

カヨも亮太も、その顔は安堵に満ちており皆が私服に着替えて帰る準備を始めた。

その中でほむらだけが帰ろうとしないので岸本が不思議そうな顔をする。

「曉美、さん？ 帰らないの？」

「生憎と、帰る場所がなくてね。だから私はしばらくここに住む事にしたわ」

「え……帰る場所が……？」

「もう私の葬式も行われてしまったからね……今更帰るわけにもいかないのよ。」

今戻っても、ゾンビ扱いされるだけだわ」

帰る場所がない、というよりは自ら塞いでしまったという方が正しいがあえてそれを言う事はしない。

かつての時間軸で美樹さやかは自分の事をゾンビと呼び、こんな身体では想いを伝える事も出来ないと嘆き悲しんでいた。

しかしゾンビというならば、今の自分こそまさにそれだろうとほむらは思う。

身体は魔法少女時代と違って生きている。ソウルジェムが本体なわけではない。

しかし、死んだはずの人間という点ではソウルジェムが本体の魔法少女よりもゾンビと呼ぶに相応しい。

「最低限の家具と日用品はもう揃えてあるし、足りない物はこれから増やしていけばいいわ。」

そういうわけだから、私の事は気にしないでいいわよ」  
「……………」

ほむらはそう言うと、押し入れから家具を引っ張り出した。

そんなもののいつの間に関び込んだんだと玄野と加藤が驚くが、岸本は何かを考えるように沈黙している。

やがて意を決したのか、顔をあげた。

「ねえ暁美さん！ 私も、ここに住んでいいかな？」

「はい……………」

背を向けたまま顎を上げ、絶妙<sup>シヤ</sup>な角度<sup>度</sup>で見下ろすように岸本を見る。

これはほむらが相手に不満を持っている時によく見せる仕草だが、本人に自覚はない。

その顔には『ええ……………この巨乳と同棲するの？』という不満が僅かに滲み出てしまっていた。

物理的にも精神的にも重い巨乳女とホームシェアをする面倒臭さ

をほむらは知っている。

紅茶とケーキばかり毎日口に使っているから、中学生のくせにあんなに脂肪が胸に集中するのである。

その上変身するとコルセットで更に強調するとか、嫌味か貴様ツツ！

おっと、これは別の黄色の話であった。

何を隠そう、この時間軸ではちよつとした手違いで巴マミと同居する羽目になってしまい、彼女には随分振り回されたものだ。

すっかりしているように見えたが、実際同居してみればズボラで面倒で、朝は自分が起こしてやらないと寝たままで……その上お節介焼きで、実は子供っぽくて、ゲームに負けただけで不機嫌になって……だが、楽しかった……とは思う。

「私も……私も、帰る場所がないの……だから……」

「……………まあ、別に私が家主ってわけじゃないし、断る権利はないけれど」

「やったあー」

遠まわしに嫌だと言っているのだが、どうやら通じなかつたらしい。

岸本が喜びながら小走りで近付いてきて、何故か玄野が残念そうな顔をした。

「玄野君、そういうわけだから。今までありがとうね」

「え、あの……」

そのやりとりを聞き、ほむらは察した。

なるほど、事情は分からぬが岸本には帰る場所がなく、それで玄野の家に居候していたのだろう。

そして岸本はその事に申し訳なきと心苦しさを感じていたが、DTの玄野にとってはむしろ嬉しい事であり、これからもいて欲しいと思っていたのだ。

そう悟ったほむらは視線で玄野に、岸本を連れて帰れと訴える。

ほら、このままでいいのか。男を見せろ。

同じ屋根の下で暮らしていればチャンスが来るかもしれないぞ。

男になるのは今だ玄野計。強引でも連れていけ。言葉に出さず、そんな想いを乗せて玄野を睨む。

「あ、ああ……そう、そうだな。うん、居場所があつてよかつたよ」  
しかし残念ながら玄野はへたれてしまった。

そんなんだからDTなのだ。

ほむらは自らも経験などない事を棚に上げて、内心で玄野を罵つた。

◇

一晩が明け、ほむらと岸本は手分けして部屋を整理していた。

予期せぬ同居人を迎えての新生活となつてしまつたが、ほむらは手際よく家具を配置していく。

ただしガンツのあるリビングには手を付けない。

あそこには頻繁にガラの悪い馬鹿が転送されて来るだろうし、下手に何かを置いても荒らされるのが目に見えているからだ。

なので家具などを配置するのはもっぱら、自分の私室と決めた部屋だけである。

更に鍵も複数取り付け、扉も頑丈なものに替えておく。

まさかの勝手にリフォームである。これはガンツも予想しなかつただろう。

監視カメラの類がないかはキウウベえにチェックさせ、ネット通販で（仕方がないので）岸本の分の服や日用品も取り寄せる事にした。

「なんか、暁美さんって慣れてるね、こういうの」

「元々一人暮らしだからね」

「……中学生、だよね？」

「ええ」

世間一般の常識で考えるならば、女子中学生……それも（岸本は知らないが）心臓に病を患っている娘に一人暮らしをさせるなどあり得ない。

その事から岸本は、この件に深く立ち入ってはならないと感じて口を閉ざした。

整理が一通り終わり、夕食の準備に取り掛かる。

今日は色々と立て込んでいたので簡単にカレーだ。  
カレーはいい。素人でも簡単に作れて栄養も豊富であり、腹持ちもよくて長持ちする一人暮らしの強い味方である。

ジャガイモを取り除いてから冷凍保存すれば一月は保つというのも魅力だ。

岸本と自分の分を皿に盛り、ダイニングのテーブルへと置いた。それから小皿に盛り付けたサラダと各種トッピングも置き、椅子に座る。

ほむらの好みは、肉を一切入れない野菜カレーだが、なかなか他人には理解してもらえない。

「トッピングの半熟卵は好みで乗せて。福神漬はそっちにあるから」

「あ、うん、ありがと……何か、暁美さんの分少くない？」

「小食なのよ」

ほむらは元々食の細かい方であり、一食はカロリーメイト一つだけで事足りてしまう。

バマミに誘われてケーキなど食べた日には、その日は一食抜きにするくらいだ。

ほむらに言わせてもらえば、あんなにパクパク食べるママや杏子がおかしいのである。

「ん……美味しい。コンビニ弁当以外は久しぶり」

「……」

岸本の言葉にあえて何も返さずにほむらはカレーを咀嚼した。

どうやら玄野も岸本も自炊などはあまり出来ないらしい。

いや、もしかしたら岸本は出来るのかもしれないが他人の家という事で遠慮した可能性もある。

どちらにせよ、あまりいい食生活とは思えなかった。

もつとも、ほむら自身忙しきにかまけて三食カロリーメイトで済ませていた時間軸もあるので他人をどうこうは言えない。

「ねえ、暁美さん……」

「ん？」



「これから、よろしくね」

「……ええ。よろしく」

岸本が笑顔で言い、ほむらは目を合わせずにぞんざいに答えた。  
これからの生活を思うと、少しだけ憂鬱だ。

## 第8話 これから始まるのはマジの殺し合いだ

岸本との奇妙な同居生活が始まってから一月ほどが経過したある日の夕暮れ。

ほむらは誰も立ち寄らない廃工場の中で静かに佇んでいた。

あの部屋は一度外に出てしまおうと閉まってしまい、外から開ける事が出来なくなってしまう。

だが中からドアを開ける事は可能で、誰かが中に残っていれば出入りは不可能ではなかった。

今は岸本がいるので、外に出てしまってもあの部屋に再び戻る事は出来るわけだ。

「……………」

ほむらは無言で銃をイメージし、空想の銃を持つように構えた。

現在の彼女の服装は私服の下にガンツのスーツを着込んだ状態だ。

更に続けてイメージするのは黄色のツインロールがよく似合うマスケット銃の名手、バمامィであった。

勿論実際そこにバمامィがいるわけではない。ただイメージしただけだ。

そのイメージのマミと向き合い——ほむらが仕掛けた。

それと同時に仮想マミも跳躍し、二人は空中で銃を向け合う。

ほむらの銃弾を紙一重で、しかし一切の無駄なくマミが避けてマスケット銃を撃つ。

それを今度はほむらが避けるも、紙一重で避けるつもりが無駄に大きく避けてしまった。

「くっ……………」

大きく避けたと言っても、傍目ではほとんど区別の付かない僅かな差だ。

一ミリで避けるべきところを1センチで避けたという程度の違いではない。

だが達人同士の戦いではそんな些細な差ですら明確な差となり、積み重ねれば格の違いとなる。

ほむらが撃ち、マミが避けながら撃つ。

マミの銃撃を避けつつ蹴りを放つもまたも無駄に勢いがついてしまい、己の中の認識と肉体のスペック差に振り回されてしまった。決して普段より弱いわけではないのだ。

むしろスーツを着ているのだから弱くなるはずがなく、普段よりも強く速くなっている。

だがそのスペックの上昇がほむらにとっては邪魔であった。

予測している自分の動きと、実際の自分の動きが噛み合わない。

故に、空想のマミにいいように翻弄されてしまう。

ほむらが超至近距離でマミと撃ち合えるのは身体能力の高さもあ  
るが、それ以上の読みの鋭さと精密さこそがそれを可能としていた。

相手の次の手を読み、更にその次の手を読み、更にその十手先を  
読む。

その上で機械以上に正確に動く事で紙一重の安全圏に身を置ける  
のだ。

敵の身体的位置、角度、自分との位置関係……それを把握した上で  
至近距離でありながら絶対に攻撃が当たらない位置を作る事が出来  
る。

だがそれを実現するにはほんの僅かな誤差もあってはならない。

1cmでも身体を置く位置を間違えれば安全圏ではなくなる。一  
度でも角度を間違えれば思わぬ痛手を被る。

そんな、針の穴のみを通し続けるような戦いにおいて上がりすぎた  
身体能力は……むしろ計算を狂わせる毒にしかならなかった。

ガンツのスーツのせいで思っているよりも身体が大きく動いてし  
まう。予想していたよりも速く動いてしまう。

これでは駄目だ。スペックは上がっているだろうが、これでは逆に  
弱くなってしまう。

例えるならば今のほむらは、今まで時速300kmの世界で正確無比  
なテクニクで走っていたドライバーが、少しアクセルを踏んだだけで  
マッハ1でかつとんでいくモンスターマシンに乗せられたような  
もの……高性能なマシンに乗ったが故に自らの持ち味と強みを失っ

てしまっている。

「……………っ!!」

やがて空想のママがほむらの額に銃口を突き付けて引き金を引き——イメージトレイニングは終了した。

完敗であった。

全く手も足も出ずに、撃ち殺された。

これは所詮イメージトレイニングなので実際にはほむらは傷一つ負っていないが、それでもスーツを着た自分の弱さを把握するにはこれで十分すぎる。

「苦戦しているようだね。やはりスーツにはまだ慣れないのかい？」

「……………まあね」

ほむらのイメトレを黙って見ていたキュウベえが分かり切っている事を聞いて来るのが何とも腹が立つ。

ともかく、残念ながらスーツを着る事による己の予想と現実の動きの認識差を埋めるにはまだ時間がかかりそうだ。

それまでは前回のミッションと同じようにスーツ抜きで行った方がいいだろう。

スーツを着れば防御力は確かに上がる。

だがそれで弱くなってしまいうくらいならば、まだ着ない方がいい。

もつとも、今までに戦った敵……ねぎ星人と田中星人の弱さから考えれば別にスーツなどなくても十分に勝てる自信があった。

しかしそれでもこうしてスーツに慣らす練習をしているのは、何か嫌な予感がするからだ。

田中星人はほむらの敵ではなかったが、それでもねぎ星人と比べれば明らかに難易度が上がっていた。

ならばこの先……もしかしたら魔女以上の敵が出て来る可能性だってゼロではない。

考えたくはないが、あのワルプルギスの夜に比肩か、あるいは匹敵する敵が出る可能性もある。

そんな嫌な予感を振り払えずにいるからこそ、ほむらはスーツに慣れる為にこうしてトレイニングを積んでいるのだ。

(私の考えすぎ……なら、いいのだけど)

工場から出て空を見上げ、目を細めた。

夕暮れから夜に変わろうとしている空が、今だけは妙に不吉に見える。

どうも今日は心がざわめく。

何か、嫌な事が起こるような……そんな気がしてならない。

「……不思議と、嫌な予感っていうのはよく当たるのよね」

そう呟き、そして帰路についた。

こうした予感の原理など分からないし、そもそも原理などないのかもしれない。

ただの気のせいだと言われればそれまでだ。否定する要素はどこにもない。

だが何故か、嫌なほどにこれが当たるのだ。

過去にもこの手の嫌な予感を感じた事は何度かある。

そんな日は決まって、いつも最悪の出来事が起こっていた。

美樹さやかが魔法少女になっていた時がある。まどかが契約してしまっていた時もある。

巴マミが魔女になっていた時間軸もあるし、佐倉杏子が死んでいた時間軸もある。

こんな心がざわめく日は、善い事があつた試しがない。

「……っ」

前から歩いてきた人間の顔を見て、思わず息を呑んだ。

向こうの道から歩いて来るのは……岸本恵だ。

今はあのマンションの一室にいるはずの彼女が何故？ そう思う

も、よく見たら服装が違う。

岸本の着ている服は家を飛び出す時に着たという服が一着のみで、後はほむらが仕方なく用意してやったものしかない。

だが今、あの岸本が着ている服は買った覚えが全くなかった。

(オリジナル、か……)

あれは岸本恵だが自分の知る岸本恵ではない。

そうほむらは確信し、何も言わずに岸本とすれ違った。

向こうもほむらに対して何のリアクションもせずに通り過ぎ、ほむらは岸本から聞いた彼女の事情を思い出していた。

岸本恵は——二人いる。

どうやらガンツというのは本当に適当な奴らしい。

何とあの黒い玉は、まだ生きている岸本恵を複製してしまったのだ。

そのせいで岸本恵は二人が増えてしまい、コピーの岸本は行き場を失って玄野の家に居候して、今はほむらと一緒にあのマンションに住んでいる。

ほむらは何の意味もなく、去っていくオリジナルの岸本の背中を見詰めた。

「どうしたんだい？」

「……いえ……何でもないわ」

特に意味のない行動だ。こんな所で立ち止まっても何にもならない。

そう思つて前を向くと、ふと和菓子店が視界に入った。

のぼりには『にゃんころもち新発売!』と書かれていて、そういえば岸本が欲しがってたなと思ひ出す。

にゃんころもちは餅を可愛らしい猫の頭にただけのもので、同じサイズの餅と比べて値段が高い。

これを買うくらいなら普通の餅を買った方が断然得なのだが……まあ、たまには無駄遣いもいいだろう。

そう思い、二人分を購入してマンションへと帰って行った。

ちなみに、岸本の感想は『可愛いけど味は普通だね』だった。

もう二度と買わない。

◇

再び悪夢の夜が始まり、人々が次々と転送されてきたのをほむらは冷めた眼で観察していた。

ほむらの服装は前回と同じだが、その上から灰色のトレンチコートを羽織っていた。

このコートの裏側は改造済みであり、様々な箇所ホルスターや内

ポケットを隠している。

今回の新顔は九人。

まず、坊主の姿をしているのはテレビのバラエティ番組などにもよく出ている徳川夢想。

彼はここが試しの場所だと言い、何やら参加者を変な方向へと誘導してしまっている。

自衛隊員の東郷十三は初参加にしては落ち着きがあり、壁に寄り掛かって座っていた。

スタイルのいい巨乳の美女は桜丘聖といい、こちらも落ち着いて壁に寄り掛かっている。

また巨乳か、とほむらは内心舌打ちをした。

桜丘は実写版トゥームレイダーの主人公であるララ・クロフトに妙に似ていたが、特に関係のない他人の空似である。

宮藤清は眼鏡をかけた暗い男性で、初回にいた眼鏡を思い出させる。

しかし彼と違って、こちらも随分と冷静さを保っていた。

近藤裕太はサングラスの似合うクラブのDJであり、それに憧れる中学生の苦篠次郎は年齢にしてはガタイに恵まれている。

JJは白人であり、ほむらが来てからは初の外国人参加者である。空手の魅力に取りつかれ、胴着を着こなしているが実は空手歴は一月だ。

迷彩服を着たおかつぱ頭の肥満は岡崎明俊といい、休日は友人とサバイバルゲームに興じるサラリーマンである。

最後にこれまたサラリーマンの池俊一。

彼については特に語る事はない。

以上九名。これがガンツの選んだ新規参加者である。

「ここは試しの場所ぞ！ 死を受け入れぬ者は極楽浄土には行けぬ！ 救われたければ南無阿弥陀仏と唱えよ！」

徳川夢想は何やら素っ頓狂な事を言っつて場を混乱させているが、経験者からすれば失笑の的ではない。

もしも西が生きていれば内心で爆笑しながらも初心者装って彼

の迷走を見物した事だろう。

ほむらもまた、積極的に勘違いを正す気などないので徳川の好きにさせている。

「ねえ、教えなくていいの？」

「そういうのは加藤さんに任せるわ。私、説明とかあまり得意じゃないの」

過去には口数の足りなさや説明の不得手が原因で、真実を話しているのに信じてもらえなかった事もあった。

それどころか美樹さやかのような思い込みの強い人間には敵対視される事すら珍しくない。

思い込みの強い人間というのは最初にこれが正しいと思ったもの以外は全て嘘と決めつけてしまう。

説明の上手い人間であればそこから軌道修正も出来るだろうが、残念ながらほむらにその手の能力はなかった。

それでも無理に無理を重ね、何度もやり直して頑張つて、何とか全員の生存ルートを開いたのがこの時間軸なのだ。

説得なんて苦手な事はもうしたくないというのがほむらの本音だ。それから遅れて経験者組が転送されて来た。

いまいち転送される規則性が掴めないが、まあ西もガンツはいい加減と言っていたしランダムなのかもしれない。

玄野、加藤が現れ、それに続くように北条政信と鈴村貞代が姿を現した。

更に根本鉄男、杉本カヨ、杉本亮太が部屋に転送された事で全員が出揃う。

岸本は加藤を見付けると玄野を無視して駆け寄り、加藤との再会に声を弾ませていた。

誰がどう見ても加藤にぞっこんという態度だが、そんなのを見せつけられる玄野は面白くないだろう。

彼は目に見えて気落ちしており、流石にこれはほむらも少し同情してしまった。

玄野は明らかに岸本に惚れているが、その岸本は加藤にぞっこんで



玄野は眼中にすらない。

それだけならまだしも、岸本は玄野の家に上がり込んで世話になり、その上でこれなのだから玄野の肩透かし感半端ではないだろう。

岸本にそんなつもりはなく、悪意もなかったのだろうが……結局のところ玄野は、たいたいように岸本に利用されただけであった。

恋心に振り回されて一人で空振りをし、挙句報われないその姿はいつかの美樹さやかを思い出させる。

(哀れね……)

そんな落ち込んでいる親友の姿に気付かず加藤は一步踏み出し、声を張り上げた。

一方玄野はトボトボと、玄関の方へ歩いて行ってしまおう。

「皆、よく聞いてくれ！ これから行く所は死後の世界なんかじゃない。

俺達はこれから戦いに行く事になる。勝たなければ生き残る事は出来ない！」

加藤は前回同様に必死にスーツを着る事の重要性を説く。

今回は彼にとって二つの幸運があった。

一つは、説得に協力してくれる既存参加者の数が前回よりも多い事だ。

「こいつの言っている事はマジだ！」

俺は前回ここに連れてこられたが、こいつの言葉を信じなかった俺のダチが三人死んだ！

冗談でこんな事は言わねえ！ ダセエとか思わず着るんだ……マジで死ぬぞ！」

かつては非協力的であった根本も加藤と共に説得に加わる。

彼は暴走族ではあるが、馬鹿なだけであつた他の三人とは少し違つた。

元々は死んだ三人と似たようなものだったが、彼には妻と子がおり、命の尊さというものを息子を通じて感じ取つたのだ。

だからこそ、一人でも多く生きる為に必死になつて加藤に協力する

事を決めていた。

「あの……本当です。私も前は疑っていたんですけど……この人達の言う事を聞いた方がいいですよ」

カヨも控えめながら、加藤の言葉の正しさを訴える。

実際問題、戦闘力皆無な彼女から見れば大勢が生き延びて戦ってくればその分自分と亮太の生存率が上がるので死活問題だ。

もつとも、本人はそんな事を考えているわけではない。単純に善意で言っているだけだ。

「本当よ！ 加藤君の言葉を信じて！」

「俺も前回参加組だ。こいつの言葉を信じろ……これから始まるのはマジの殺し合いだ」

岸本と北条ホモも後押しし、スーツの着用を訴える。

こうなればこちらの方が数で勝り、一種の集団心理が働く。

恥ずかしいスーツでも、皆がそれを着ていけば来ていない方が浮いてしまうものだ。

現状、経験者で説得に加わっていないのはスーツ不要のほむらと、どこかに行ってしまった玄野だけだ。

ついでに玄野を追って実写版ララ・クロフトのような美女も消えていた。

二人で一体ナニをしているのか……。

玄関の方から喘ぎ声のようなものが聞こえるのは気のせいだと思いたい。

「さつき、その黒い玉がレーザーで人間を描き出す所を見た。

そんな事、今の人間の技術では出来ない。

僕が思うに、この玉はSFに出て来る転送機みたいなもののような気がする」

二つ目の幸運は、前回、前々回と比べて参加者の質がいい事だ。

宮藤清メガネは状況を冷静に見極めて徳川よりも加藤の言葉に信憑性があると判断したらしい。

というかこれが普通である。レーザーで人間が出る瞬間を目撃しておきながら遊び気分で臨んだ初回のヤクザ+αや、前回の暴走族三

人が常識外れに馬鹿すぎたのだ。

同じく初参加の東郷十三は銃に興味を持ち、真剣に調べている。

近藤と苦篠のチャラ男二人も、ヤクザや暴走族よりは賢いようでありあえずスーツと銃を確保して持っていた。

（今回は参加者の質がいいわね。あのサラリーマンとお坊さんは真つ先に死ぬとしても、結構生き残るんじゃないかしら）

今回は随分と戦闘力に長けた者や、状況判断に優れる人材を連れて来たらしい。

初回がこの面子だったならば、ねぎ星人は犠牲なくクリアできた可能性すらある。

まあ、どちらにせよ、今夜もただ狩るだけだ。

ほむらがそう思っていると、最初に着替えに行つた筈の岸本が慌てて戻ってきた。

何故か顔を赤らめ、見てはいけないものを見てしまったような表情をしていた。

「あつのつ、玄野君がいたつ、からつ」

「計ちゃん？ 何してんだ？」

彼女が引き返してきたのは玄関に玄野がいたからというが、それだけでこんな反応はしないだろう。

着替えている最中にでも遭遇して局部でも直視してしまったのだろうか。

その後しばらくすると玄野と美女が戻ってきた。

玄野は岸本と目を合わせず、岸本もまた逃げるように玄関に走って行く。

それから順にほむら以外の経験者全員が着替えを終え、初参加組もスーツを着ないまでもとりあえず手に持っていてくれる。

やがて倒すべき標的が示されて転送が始まり、今夜も地獄の一時間が幕を開けた。

——てめえ達は今からこの方をヤツつけに行つて下ちい。  
あばれんぼう星人。

特徴 強い。おおきい。

好きな物 せまいところ。おこりんぼう。

口ぐせ ぬん。

おこりんぼう星人。

特徴 強い。おおきい。

好きな物 せまいところ。あばれんぼう。

口ぐせ はつ。

## 第9話 俺達を信じてくれ

今回転送された先は羅鼎院という寺院だった。

仁王門が聳え立ち院内には五重塔を構えるという豪華さに加え、国宝クラスの仏像を多数所有している国内でも有数の規模を誇る寺院である。

ほむらは早速リーダーで星人の反応を調べるが、やはり寺院の中に反応が集中していた。

しかしそれより気になるのは門の両脇に佇む仁王像だ。

どう見ても、ガンツに示されたおこりんぼう星人&あばれんぼう星人にしか見えない。

勿論、ただの仏像の可能性もあるが、Xガンで呑気にレントゲンなどしては狙っている事に気付かれて動かれてしまうだろう。

もしあれが星人ならば、動かないのは間違いなく不意打ち狙いだ。ただの仏像と思わせて奇襲を仕掛けるのが目的だろう。

(本物の仏像だったら……その時はその時ね)

先手必勝。

ほむらは他のメンバーの呑気さに合わせる気はない。

彼女が腕を上げると袖口から二丁のXガンが顔を出し、ほむらの手に握られた。

そのまま仏像が何かのリアクションをする前に発砲。Xガンを頭に直撃させる。

「な……暁美!」

まだ星人と決まったわけではないのに発砲したほむらに加藤が驚くが、ほむらに言わせてもらえば加藤は温すぎるし甘すぎるし遅すぎる。

ガンツに表示されたものと全く同じ外見のものがそこにあるのだ。なのに一々レントゲンで星人かどうかを調べるなどありえない。平和ボケが全然抜けていない。

結果を言えばほむらの判断が正解であり、二体の仏像は何も出来ぬままに頭を四散させて脳漿と肉片を撒き散らした。

「うおおっ!? 何じやコリヤあ!?!」

「いつ、生き物?! これ本当に生き物だったのか?!」

近藤<sup>DJ</sup>と苦篠<sup>中学生</sup>が現実離れした光景に驚き、わたわたと後退した。

カヨは孫の目を塞ぎ、他の面子も迅速すぎるほむらの行動に硬直から抜ける事が出来ない。

彼らの中ではまだ始まっていなかったのだ。

既に二度も経験しているはずの加藤ですら、まだ戦いが始まっているという感覚がなかった。

ほむらから見ればそれがもう駄目。敵が出てきてくれてからヨードン、などと、そんなお行儀のいい事があるものか。

ここは戦場なのだ。早すぎるという事はなく、敵の出方を待つて後手に回るなど悪手でしかない。

「き、気付いていたのか……? あれが星人だと」

「ガンツに表示されていたでしょう。何故撃たないの」

「いや、それは……本物の仏像かもしれないし……」

「本物だったら、その時は器物破損になるだけよ。死ぬよりはマシだわ」

ほむらは門へ向けて歩き、加藤の前まで来たところで停止した。

そして無表情で加藤を見上げる。

きつとこの男は、敵だと分かってても撃つのを躊躇ったのだろう。

そう思うと、何か言わずにはいられなかった。

「私はこのまま中に入って敵を殲滅するわ。貴方はどうするか、よく考えてから動きなさい」

「待ってくれ! 暁美も俺達に力を貸してくれ。君が手を貸してくれれば、全員を守る事だって……」

「一つ教えておいてあげる。誰も死なせないといつも言っているけど……犠牲を出さずに勝つってね、そんなに簡単な事じゃないわよ。

誰かを守るというのは他の誰かを守らないという事……それが殺し合いならば、他の誰かを撃つという事。

ここに居る全員を守るというエゴを押し通すならば、貴方はその脅威となる者全てを葬らねばならない」

守る事は簡単な事ではない。

それをほむらは数多の繰り返しの中で嫌というほど思い知らされてきた。

ほむらは、たったの四人を守り通す為だけに数十もの敗北を積み重ねてきたのだ。

守ると言う言葉は——軽くない。

「いい？ 加藤勝……守るって言葉はね、重いだよ。」

本当に守りたいと思うなら、感情に縛られるのではなく冷静に最善と最悪を考えて動きなさい。

貴方は今、なりゆきではあるけどリーダーのような立場になってしまっている。

貴方が間違えれば、その過ちが味方を死なせることになるわ。

それを履き違えたまま戦場に踏み込んだなら……貴方を信じ、貴方に惹かれた者から先に、死んでいく事になる」

ほむらはそれだけ言い、門をXガンで破壊して境内へと突入した。

その彼女を出迎えるように現れたのは複数の仏像だ。

先程の仁王像よりは小さいが、それでも2mを超える巨体はほむらから見れば大きい。

しかし、それに囲まれてもほむらの表情に変化はなかった。

「珍しいねほむら。君にしては感情的だったんじゃないかい？」

「……そうかもね」

ほむらは素直にキュウベエの指摘を認めて銃を構えた。

加藤勝という人間に妙な苛立ちを感じている事は自覚している。

彼は愚者だ。正義感に突き動かされて先走り、結果的には周りまで巻き込んで死なせるタイプの男である。

しかし彼が持つ真つすぐさは、きつとほむらがどこかで失ってしまつたものなのだ。

彼は……どこか、鹿目まどかに似ている。

幼稚で純粹で、真つすぐな願いを抱き続ける優しすぎる愚者……だからきつと、見ていて苛々するのだろう。

「行くわよ」

ほむらは心を平静に戻し、氷の瞳で戦場を睥睨した。

見えている敵の数、感じる気配、敵の目線、武器、手の角度……それらを統合して脳内で素早く計算し、次に打つべき一手を導き出す。地を蹴って仏像達が密集している場所へ飛び込み、Xガンを連続で発射。ほむらがその場を離れると同時に五体の仏像がほぼ同時に爆散した。

そのまま走り、仏像を盾にして他の仏像の視線を遮りながら駆け回る。

相手の数が多いならば、離れるよりも近付いてしまった方が安全だ。同士討ちを誘えるし、それを恐れて敵は手を出せなくなる。

仏像の背に回り込んで他の仏像の視線から隠れ、しかしすぐにそこから離れる。数秒遅れて隠れ蓑に使われていた仏像が砕け散った。

仏像達は完全にはむらを見失っていた。仲間であるはずの他の仏像が邪魔ではむらを追えないのだ。

仏像の背に回り込むと同時に撃ち、また別の仏像の背後へ移動する。

ほむらの動きに仏像達は完全に翻弄され、満足に攻撃すら行えていない。

やがて残り三体になり……二体になり……一体になったところで、最後となった仏像の後頭部にXガンの銃口が押し当てられた。

「ひじやむぬる……」

仏像が意味の分からない言語を発し、それを最後の言葉として脳漿が弾け飛んだ。

ほむらは警戒を一切解かず、周囲を見る。

近くにはいないが……感じる。刺すような殺意が消えていない。

「キュウベえ。残りはどこ？」

「その物陰に一体。後ろの壁の影に一体。右斜め前に二体、左に一体だね」

キュウベえから残りの仏像の位置を聞き、ほむらは僅かに屈むと垂直に跳んだ。

ムーンサルトをしつつ空から見下ろし、隠れていた仏像達を素早く



狙撃し、始末していく。

そして彼女が着地した時、周囲から一斉に仏像が破裂する音が響いた。

「す、すツげ……すツげーぜ！ アイツ！ あいつすツげー！」

「やれるー！ やれるぞー！」

遅れて門を開けて入ってきた新規参加者の苦篠中学生と近藤Dがほむらの戦いを見て興奮気味に叫んだ。

肥満気味の岡崎迷彩服は「あいつは猛者だぜ……」と尊敬の目を向けている。

「つ、つええ……」

「こ、こまで強いのか……アイツ……」

ほむらの戦闘を初めて目の当たりにした玄野と北条ホモが冷や汗を流して声を震わせた。

加藤は一度、彼女の常識離れた身体能力を見ているので二人に比べれば驚きは少ないが、それでもやはり驚愕する他ない。

そんな中で岸本は、呟くように言う。

「何かさ……もう、暁美さん一人でいいんじゃないかな？」

私達はもういらないうか………あッ！ 加藤君がいらないうって言うてるわけじゃないよ!？」

加藤君は皆を守ろうと必要だけど、私とか玄野君は見るだけだしさ……いなくてもいいんじゃないかなって……」

岸本の言葉は、この場の誰もが思っている事だった。

暁美ほむらと他とでは明らかに戦闘のレベルが違いすぎる。

これではまるで脇役だ。

暁美ほむら一人だけが活躍する背景で、その引き立て役にもならずバタバタと死んでいくその他大勢……岸本達は、自分がそんな存在に過ぎないような錯覚を感じていた。

だが玄野だけは、その言葉に反発を覚えた。

（ハア!? 何だそりゃ!?! 加藤はいるのに俺はいらないうってか!?!）

勿論岸本は、そんなつもりで言ったわけではないだろう。

要するに暁美ほむら一人だけがレベルが違うから、彼女以外

はいてもいなくても変わらないのではないか、と言っているだけだ。その中で加藤だけ慌てて訂正したのは、単純に彼女が加藤に惚れているからだ。

別に玄野だけを不要と言ったわけではない。

だが玄野にはそう聞こえてしまった。

お前は要らないと……そう言われたように思えた。

(俺は……俺は、脇役なのか？ つまらない凡人なのか？)

ここでも俺の居場所はないのか……?)

玄野は、普段の自分の生活を思い返す。

家では居場所がなく、常に出来のいい弟と比較されてきた。

学校でも馬鹿にされる側で、誰にも認められない。必要とされない。

い。

岸本だつて加藤ばかり見ていて、自分の存在などまるで眼中になしだ。

昔は……昔はこんなじゃなかった。

昔の自分は怖いものなんかなかった。

むしろ苦境であればあるほど、それを乗り切った自分の姿を思い出

して興奮していた。そして、その通りになっていた。

(俺は……俺は……！ 俺は脇役なんかじゃねえッ！)

玄野の目にキラキラとした輝きが宿る。

冴えない日常の中で溜め込んで来た不満……岸本に認められない

鬱憤。抑圧された凶暴性。

そうしたものが、曉美ほむらという非日常の住人を見る事で次第に膨れ上がる。

俺だつて出来るはずだ。俺だつてああやって戦えるはずだ。

凡人には無理でも、俺なら出来る！ 次第に彼はそう考え始めた。

そんな玄野の危険な空気に気付きつつもほむらはリーダーを見て、そして目を細めた。

「……面倒ね」

リーダーに表示された敵の反応が、こちらに近付くどころか遠ざかっている。

どうやら残る仏像はほむらに勝てないと見て逃げに切り替えたらしい。ある意味賢い選択だ。

そして面倒な事になってしまった。

向かってくる敵ならばいくらいようと物の数ではないが、逃げに徹されてしまうと追いかける必要がなければならぬので難易度が上がる。

無双しすぎた弊害がここにきて現れたのだ。

しかもまだここでの戦いも終わりではない。

建物を破壊し、巨大な大仏が姿を現したのだ。

「でかいのが出て来たわね」

そう言いつつもほむらの声に緊張や恐れはなかった。

何故ならあの巨体では、ほむらにとってはただの巨大な的にしかない。

Xガンを連射し、大仏の顔のあちこちが破裂した。

だが巨大な分、一発で受けるダメージが少ない。

あの巨体の前ではXガンで受けるダメージなど軽傷でしかないのだ。

ならばソードで股から頭にかけて斬ってしまえばいいか……そう考えたところで、ほむらを追い抜いて走る男がいた。

「どけええエエ、暁美イイ！ あいつは俺の獲物だ！ 俺がやる！」  
抑圧され続けた鬱憤が爆発し、玄野は半分ほど捨て鉢になって走った。

玄野計は走りながら考えていた。

自分の居場所は普段の世界にはない。

家庭では疎んじられ、いつも優秀な弟と比較されてきた。

学校でも疎んじられ、岸本もその目に自分を写していない。

だがここならば……この戦場ならば自分は輝ける。ここであれば生きていける。

最初に馬鹿な連中が無様に死んでいったねぎ星人との戦いで、暁美以外にただ一人スーツを着て敵を返り討ちにしたのは誰だ？ 俺だ！

田中星人との戦いの時、暁美以外で唯一敵を倒したのは誰だ？ そ

れも俺だ！

俺は要らない奴なんかじゃない。脇役なんかじゃない。そう玄野は考えた。

（殺す！ 殺す！ 俺はヒーローだ！ 何にも負けねえ！ 俺の生きる場所はここにしかねえ！）

それは屈折した考えであり、危険な思想だ。だが彼にはセンスがあった。

十分に助走をつけた玄野はスーツの力をフル稼働して高く跳躍し、ほむらによつて開けられた穴から大仏の頭の中へと潜り込んだ。

「ふう……ん」

その姿を、ほむらは意外そうに見ているが決してマイナス感情ではない。

むしろ玄野計を見直した、という眼差しだ。

玄野は大仏の頭の中でXガンを乱射し、内部から破壊された仏像は力なく崩れ落ちた。

その中から肉片を掻き分けて玄野が這い出し、得意そうな顔をほむらへ向ける。

（驚いたわね……ただのヘタレと思っていたけど、意外なセンスだわ。

日常の中で抑圧されていた才能が、戦場という異常な環境に置かれた事で急速に発芽し始めている）

どうやら玄野計という男への評価を改める必要があるらしい。

ほむらはそう認め、今回は玄野に点数を譲る事にした。

「やるじゃない。驚いたわ」

「ハアツ、ハアツ……へへ、いつもいつも、お前にはかりいい恰好はさせねーよ。」

これからは、俺も殺る。俺が殺る」

ようやく戦力になる味方が一人か。

そう思っていたほむらだが、ふと屋根を見れば東郷がXショットガンで狙撃している姿を発見した。

彼は屋根の上から狙撃し、残った仏像を次々と射殺している。

見事な腕であった。間違いなくプロだろう。

今回はスーツを着ていないが、もしここを生き延びれば必ず戦力として活躍してくれる。そんな確信を抱かせてくれる男であった。

「本殿の中にもまだ反応があるな。ここからは二手に分かれよう。」

俺かこいつ、どっちかに付いてくれ」

「おい、俺もリーダーかよ」

加藤はどうやら二手に戦力を分けて残りの仏像を狩るつもりらしい。

ここで玄野ではなく北条ホモを選んでしまうのが何と言うか、彼の駄目な所だろう。

日常ならばともかく、こういう異常な場ならば玄野の方が遥かに適任だと思うのだが。

しかし、ほむらはあえてそれを指摘するような事をせずに、自分の判断で歩き始めた。

とりあえず本殿の敵を始末しよう、と考える。

理由は説明出来ないが、何となく嫌な感じがするのだ。

「待ってくれ、暁美。本殿は北条達が行く。」

君は外の敵を減らしてくれ。こっちの方が数が多い。

中にはスーツを着た北条達だけで行くが、外にはスーツを着てない奴や婆さんや子供もいる。まずは外の敵を確実に全滅させて安全を確保すべきだ」

「……」

「俺みたいな弱い奴の言葉に従いたくない気持ちはわかる。

だが今は皆が足並みを揃えなきゃいけないんだ……頼む、協力してくれ！」

ほむらは考える。

彼女の勘は、依然として本殿の敵を優先して潰したいと訴えている。

あの大仏がボスならば残りは全て雑魚のはずだが、それでも何となく警戒を解く気にならないのだ。

無論根拠のない勘である。何が何でもそうしなければならぬという明確な理由はない。

「必要ないわ。全て私が始末すればそれで片が付く。貴方達は隠れていなさい」

「暁美！ 俺達は……仲間だろう！？ 俺達だって力になれる！」

「お願いだ、俺達を信じてくれ！」

ほむらは背を向けたまま加藤へ視線を向ける。

信じるという言葉は綺麗だが、それは同時に思考の放棄でもある。

疑うという言葉は綺麗ではないが、それは思考の継続である。

相手を信じるならばそれ相応の時間と、信じるに足るものが必要だ。

現状では加藤は信じるには足りないというのがほむらの評価だが……しかし、彼等も自由になるにはいつか自分で100点を稼がなくてはならない。

ならばここはとりあえず、リーダーの手腕を拝見するのもいいだろう。

……まあ、本殿に気持ち悪さを感じているのも所詮は勘だ。普通に考えれば雑魚しか残っていないだろうし、案外本当にあっさり終わるかもしれない。

だからほむらは、今回は加藤に譲って折れておく事にした。

「……わかったわ。私は外の敵を始末する」

加藤の言葉に渋々従い、外の敵を掃討するべくほむらは歩き始めた。

その後ろ姿を見て、不意に岸本は不吉な予感を感じる。

何故そんなものを感じたかは分からない。

そもそも、ほむらのあの實力を見てからそう思うなど、馬鹿馬鹿しいとしか言えない。

だがそれでも何故か……何故か、声をかけずにはいられなかった。

「暁美さん！」

「……何？」

岸本の声でほむらが足を止め、背を向けたまま顎を上げて後ろへ視線を向ける。

あの角度で振り返るのが好きなのだろうか？

そんなどうでもいい事を考えつつ、岸本は言葉を詰まらせた。

「あ、いや……そのね……き、気を付けてね！」

「……言われるまでもないわ」

ほむらは『何を当然の事を言っているのだろう』という顔をして、そのまま歩いて行った。

岸本はそんな彼女の背をじつと見送り、不安そうにぎゅつと手を握る。

「どうしたんだ？ 岸本さん」

「分からない……分からないけど、どうしてか……もう二度と暁美さんには会えないような……そんな気がして……」

様子のおかしい岸本に加藤が心配そうに尋ねる。

だが岸本も、何故こんな予感を感じたのか分からないのだ。

そんな彼女を、玄野が鼻で笑う。

「あいつがそんな簡単に死ぬタマかよ。心配するだけ無駄だっつーの」

「だっ、だよー！」

楽観的な玄野の言葉に岸本もほっとしたような顔になり、それから彼等もまた仏像を殲滅するべく行動を開始した。

——後に加藤勝は悔いる事となる。

何故あの時、暁美ほむらの進行方向を変えてしまったのかと、死ぬほど後悔する事になる。

だが先に分からないからこそ、後悔と呼ぶ。

暁美ほむらが時間遡行の力を失っている今、先に待ち受ける悲劇を知る方法は、誰も持っていないのだ。

## 第10話 貴方に惹かれた者から先に、死んでいく事になる

「あつちでッ、あつちでッ、いっぱいッ、いるぞッ！」

それはほむらが外の敵を掃討しにどこかへ跳んで行つた後の事だつた。

北条ホモと一緒に行動していたはずの苦篠中学生と近藤DJが慌てたように走つてきた。

それは雑魚仏像と遭遇したような呑気なものではなく、もつと危険なものとの出会つてしまったような慌て方であつた。

「一体じゃないのか？」

「五体はいたぜ」

「気持ち悪い女と男前の兄ちゃん、それからガラの悪いおっさんが三人で相手してる」

ヤンキー達が言うには、現在本殿で戦っているのは北条ホモ、鈴木サダコ、根本珍走団の三人だ。

いずれもスーツを着用しており、戦闘力は高い。

根本などは暴走族だけあつて喧嘩慣れしており、スーツを着た今その戦力は加藤とも並ぶ。

それでもこうして助けを呼びに来たという事は、それだけ本殿にいる仏像が危険だという事だ。

加藤は無意識にほむらを目で探したが、見える範囲内にはいない。ほむらは加藤の指示で外の敵を追いかけてしまつている。

代わりに視界に映つたのは、外に残っている仏像と格闘をしている白人のJJだが、スーツのない彼を連れて行つても死人が増えるだけだろう。

危険なのは外ではなかつた……むしろ本殿の中こそが危険であり、ほむらは何となくそれを感じ取つていたのだ。

だがそのほむらの進行方向を変え、本殿に北条達ホモを行かせてしまつたのは加藤である。



悔いる気持ちと、きつと大丈夫だという自分への慰めが内心を駆け巡り、加藤は突き動かされるように走った。

——中に入った加藤達が見たのは、上半身だけになった北条<sup>ホモ</sup>と鈴村<sup>サダコ</sup>の死体であった。

二人は折り重なるようにして、唇を合わせて目を閉じていた。

最後の最後に気持ちが通じ合ったのかもしれないが、死んでしまつては意味がない。

ついさつきまで生きていたのに。動いていたのに。

なのに死んでしまった。自分がここに行かせたせいで。

その二人を千手観音像が見下ろし、口元には微笑を浮かべている。それが二人を嘲笑しているように見えて、加藤の怒りを煽った。

少し離れた位置には根本が倒れており、こちらはまるで焼き切られたようにバラバラとなっている。

後悔と怒り。それが加藤を突き動かし、気付けば口からは慟哭の叫びが漏れていた。

「うおおおおおおお!!」

激情にかられ、加藤はYガンを構えて走った。

状況確認も警戒もあったものではない。完全に衝動に突き動かされただけの行動である。

だが迂闊な行動にはそれ相応のツケが支払われるのだ。

入口の影に隠れていた仏像がYガンを蹴り飛ばし、加藤の動きを止める。

それでもホルスターからXガンを抜き……発射。

ここに来て遂に、加藤は相手を殺す武器の引き金を引いた。

しかしその対象となった仏像は一瞬顔が歪むも、無数にある手の中の一つが持つ時計が逆回りを開始すると何事もなかったかのように元に戻ってしまった。

「!？」

驚く加藤に、瓶の中の液体を放つ。

きつとこれも、何か危険な武器なのだろう。少なくともただの水という事はあるまい。

それを他人事のように見ながら、攻撃直後の隙を突かれた加藤は動けない。

だが加藤の危機に、岸本が動いた。

加藤を庇うように前に飛び出し、加藤に抱き着く。

その光景はまるでスローモーションのように加藤の目に移り、心臓が鼓動を鳴らす。

『貴方が間違えれば、その過ちが味方を死なせることになる』

脳内でほむらの言葉が蘇る。

しつかりと、聞いていたつもりだった。

年下だなどと思わず、自分以上の強者の言葉として肝に銘じたつもりだった。

だが……つもりはつもりだ。本当に身に染みたわけではない。

『それを履き違えたまま戦場に踏み込んだなら』

液体が、岸本の胴に当たった。

岸本はスーツを着ている。今までどんな攻撃を受けても守ってきえてくれたスーツだ。

西も死んだのはスーツが壊れてからで、スーツが無事なうちに死んだ者は今までにいない。

岸本のスーツはまだ壊れていない。大丈夫だ。大丈夫であつてくれ。

そんな淡い希望を崩すように肉の焼ける嫌な臭いと音が響き、岸本の顔が驚愕と苦痛に染まる。

そして――。

『貴方を信じ、貴方に惹かれた者から先に、死んでいく事になる』

――岸本の下半身が、落ちた。

「うわああアア！ おおおおオオ!!」

岸本が致命傷を受けた事に加藤が茫然としている中、玄野が激昂した。

加藤を跳び越えて怒りのままに千手観音の顔に膝を叩き込み、倒れ

た所を踏みつける。

周囲の仏像がすぐに動くが、これを阻止するように桜丘が戦闘に加わった。

加藤は何も出来ず、ただ岸本を抱き締めているだけだ。

「好き……加藤君……す……き……」

遅すぎた告白。それが岸本恵の最期の言葉となった。

加藤はもう何も考えられない。

自己嫌悪と絶望に支配され、その場で止まっているだけだ。

その間にも桜丘は洗練された蹴りで仏像を蹴散らし、Xガンの連射で敵を減らしていく。

そして玄野は激情が命じるままに千手観音にありつただけの銃撃を浴びせた。

四散し飛び散る肉片。

終わったと誰もが思った。

だが次の瞬間、またも時計が逆回りして千手観音を再生させる。

そればかりか、千手観音の手に触れられた玄野の左足はジリジリと消滅を始めていた。

恐らく、時計を回して対象に触れる事で相手を消してしまえるのだろう。

それでも諦めずに玄野は銃を向けるが、その腕を千手観音の剣が切り落とした。

スーツの防御力など無視した恐ろしい切れ味だ。玄野は初の敗北と絶望に唾然とし、力なく地面に崩れ落ちた。

悲劇の連鎖は止まらない。加藤の迂闊な行動が岸本を死なせ、岸本の死が玄野から冷静さを奪った。

「どッ、どうすればいいのッ？ リーダーッ！

玄野君がッ、やられちゃったよッ！」

この中で今、一番冷静なのは桜丘であった。

彼女はこれまでの戦いを見て、自分では千手観音に勝つのは無理だと理解し、加藤に指示を求める。

だが加藤は茫然としており、声が耳に入っていない。

「こいつあたしじゃ勝てそうもないッ！

どーすればッ!?

リーダーッ！ まだ死んでないんでしょッ!？」

桜丘の必死の呼びかけに、ようやく加藤の意識が現実へと戻った。もしも彼女がいなければ、無防備のまま千手観音に殺されていたところだ。

加藤は岸本の死体を抱き締めたまま叫ぶ。

「死んだのかッ!？ 死んだのか計ちゃんがッ!」

「死んでない！ けど、もうすぐ死んでしまいそう！

片手と片足がないの!」

加藤が少し自失している間にも絶望は進行していた。

加藤は今、自分の背に桜丘と玄野の命を背負っている事を理解して頭を回転させる。

「まだ何とかなる！ 一旦外に出てどこかに隠れよう！ 連れ出せるか、計ちゃんを!」

「わかった、やってみる!」

優秀な女性であった。

彼女は千手観音の動きに気を配りつつ、玄野を抱えてその場から跳んだ。

加藤は何も言わなくなった岸本に口づけをし、彼女の遺体をそつと降ろす。

そして、その場から逃げ出した。

迂闊な行動の代償はあまりにも重く、そして大きい。

加藤は逃げながらも、流れ出る涙を止める事が出来なかった。

◇

絶望は終わらない。

加藤達が逃げたならば、当然その後を千手観音も追う。

その千手観音の背後から迫るのは、危険性をまるで理解出来ない中学生中学生と近藤だ。

二人は今更ながらスーツの重要性を理解して着用しており、手には銃も持っている。

この装備を得た今ならば勝てると思っってしまった。

二人は知らないのだ。今自分達が挑もうとしている相手がいかに危険かを。

スーツの防御力など容易く突破する怪物である事を知らないまま近付いてしまったのだ。

戦いはあつという間に終わつた。

戦いにすらならなかった。

敵の接近に気が付いた千手観音が二人の腕を斬り落とし、一瞬で無力化する。

遠くから東郷が狙撃するも、やはり時計が逆回りして致命傷にならない。

そればかりか、東郷の存在に気付いた千手観音は手にした灯籠からレーザーを発射し、東郷を狙つた。

かろうじて東郷はこれを避けて退避するも、近くにいた二人はそうはいかない。

鞭のようにしなるレーザーによって身体を寸断され、何も言えぬままに絶命してしまった。

更にレーザーが唸り、Xショットガンを構えていた岡崎迷彩服と、ステルス機能で姿を消していた宮藤メカネをも切り裂いた。

「お、おお……ま、待て……わしは違う。わしは……」

続けて千手観音が狙つたのは近くの物陰にいた徳川坊主であった。

目の前で行われた瞬殺劇に徳川は怯え、後ずさる。

だが千手観音はそんな徳川すらも逃がす気がないようにじりじりと距離を詰めた。

「ナ、ナム……シンキ……ミョウライ……」

徳川は震えながら両手を合わせてお経を唱えた。

そうする事で自分は寺の関係者であつて敵ではないと伝えようと考えたのだ。

すると千手観音はピタリと動きを止め、観察するように徳川を見る。

「はッ……そうかッ……そうか。」

経を唱えると……大人しくなるのかッ」

動きを止めた千手観音を前に、徳川は確かな手応えを感じた。

やはり仏像だ。お経は効果がある。

そう思い、彼は助かるといふ安堵から頬を緩めた。

しかし結論から言えばそれは間違いである。

何故なら今、ここに居るのは仏像などではない。仏像を着ただけの星人だ。

お経の意味など分かるはずもなく、千手観音が止まったのは単純に『こいつ何やってるんだ?』という疑問から来る物でしかなかった。

「ナムアミ……ダブツ……」

尚もお経を唱える徳川へ、無造作に水瓶の中の液体をぶっかけた。

すると徳川は断末魔の叫びすら発せず溶けてしまい、後には徳川だった赤い池が残されただけだ。

続けて千手観音が狙ったのは桜丘だ。

彼女は玄野の近くから動けず、加藤は落としてしまったYガンを拾いに本殿へ戻っていた。

故に孤立無援の状態でこの怪物と対峙する事になってしまったのである。

逃げる事は出来ない。腕と足を失った玄野を抱えたままでは早く動けないし、無理に動かせば玄野が血を流しすぎて死ぬかもしれない。

戦うしかない……桜丘は、愛した男を守るために命を懸ける事を決意した。

「あたし……やってみる……」

あたしこの仏像と闘ってみる……」

「馬鹿……逃げろ……」

「あたしキックボクシングのジム通ってるんだよ。試合もやッてるし」

「無理だ……馬鹿……」

「アイツ倒したら……ちょっとはあたしに惚れる?」  
「えッ」

玄野と桜丘は、ここにくる前にあのマンションの玄関で肉体関係となっていた。

しかしそれは玄野にとっては失恋の痛みを埋める為のものでしかなく、半ば自暴自棄になつてのものだ。というより本当にやらせてくれるなどと思つていなかったのだ。

しかし桜丘は玄野に惚れていた。出会つたばかりだが、きっと理由などないのだろう。

彼の泣き顔に母性本能が刺激されてしまったのかもしれない。

どちらにせよ、恋に理由などない。惚れたから守る、それだけだ。

「よし、やツてみる。一緒に家に帰るんだよ。」

絶対に、守ツてみせる」

勝ち目は薄い。仲間が殺されるのを目の当たりにしてきた。

それでもやるのだ。そうしなければ玄野を守る事など出来ないから。

故に桜丘は決死の覚悟で死地へと挑む事を決心した。

「その必要はないわ」

突如千手観音が弾け、少し離れた石畳の上に少女が着地した。

それは現状、チーム最大の戦力であり数多くの敵を葬ってきた娘だ。

逃げ回る外の仏像をようやく殲滅した彼女が、外に出た千手観音に気付いてここに駆け付けて来たのだ。

ほむらは残っているメンバーの中に岸本の姿がない事に気が付いたが、疑問に思う思考を切り替えて目の前の敵へ集中する。

「気を付けて、ほむら。あいつの時計は身体を再生させる効果を持ち、時計を回している時に触れると身体が消えるよ。」

まあこんなアドバイス、君には必要ないだろうけどね」

「そう」

キュウベえが敵の情報をほむらに伝え、ほむらはそれを基に戦術を組み立てる。

何故キュウベえが知っているかは後で問いただせばいいだろう。ほむらはXガンを足元に発射して石畳を破損させる。

そうして出来た隙間に爪先を引っかけ、脚力に任せて蹴り剥がした。

そして蹴り飛ばし、千手観音へとぶつけた。

更にその上から跳び蹴り。石畳を間に挟む事で消滅を避け、千手観音を蹴り飛ばして玄野達から遠ざけた。

ここでの戦闘は玄野が邪魔になるのだ。

飛んで行った千手観音を追いながら走り、とりあえず再生を見る為にXガンを連射した。

「……なるほどね」

瞬時に元に戻って行く千手観音を見ながら少し厄介だとほむらは思った。

だが少しだ。攻撃そのものが通用しなかったワルプルギスの夜に比べれば大した相手ではない。

再生するといってもお菓子の魔女のように再生がそのまま攻撃に繋がるわけでもない。

千手観音の持つ灯籠からレーザーが放たれるも、走る速度を落とさずに避け、一気に距離を詰める。

レーザー攻撃を知っていたわけではない。ただ光った瞬間に何かあってもいいように念のため回避動作に入っただけだ。

レーザーは照射されたまま曲がり、ほむらを斬ろうと襲い掛かって来る。

だがほむらは軽く跳躍してレーザーの上を越え、まるでフィギュアスケート選手のように身を振じりながら銃を向けてロックオンした。

撃つたのはYガンだ。再生するというのなら、これで動きを止めればいいだけの話である。

Yガンから発射された三つのアンカーは光のワイヤーで繋がれ、三角形を形作っている。

千手観音は跳躍してこれを避けようとするものの、発射されたアンカーは千手観音を追尾して曲がり、千手観音の周囲を廻る事でワイ



ヤーでがんじがらめにした。

その上でアンカーは上に向けてバーニアを吹かして地面に突き刺さり、完全に身動きを封じる。

だが千手観音は動けないながらも再びレーザーを発射しようと試みる。

しかしほむらは既に間近にまで迫っており、銃を持ったまま手の甲で千手の手を弾いてレーザーの軌道を逸らした。

続けて千手は水瓶の中の液体をかけようとするも、Xガンで水瓶を叩かれた事で逆に自らが浴びてしまった。

「きょーっ！ きょーっ！」

自らの武器で半身を溶かされながら千手が叫ぶ。

ほむらはその隙にYガンを空高くに放り投げ、ホルスターからXガンを抜いて武器をXガン二丁に切り替えた。

そして二つのXガンを尋常ではない速度で連射。

時計、灯籠、剣を次々と破壊し、あつという間に千手観音の武装を奪い取る。

千手観音も何とか残された剣で反撃するが、当たる直前にほむらが身体を捻って剣を避け、更に避ける動作をそのまま攻撃へ繋げてXガンを発射。最後の剣をも破壊した。

ほむらは避けて撃っているのではない。避けながら撃っている。

回避と行動が二工程ではなく一工程で終わっているのだ。

手数の差があるはずなのに、攻撃回数はほむらが上であった。千手観音が一度攻撃する間にほむらは三回は撃っている。

それでいて敵の出先を優先して潰すものだから、一度ほむらにペースを握られてしまえば成す術などない。一方的にやられるだけだ。

ワイヤーが千切られかけた所で、落ちてきたYガンをキャッチして発射。またも自由を奪って動く事すら許さない。

だが千手観音もまだ終わりではない。

転送されていく頭が外れ、観音像の中から異形の生物が飛び出して来た。

呑気に這い出しているのはほむらに狙い撃ちされると判断しての迅

速な離脱だろう。案外頭も回るようだ。

そして恐らくはこれこそが千手観音の正体なのだろう。

大きさは2 m以上はあるだろうか。

6本の腕を持つ怪物は全身が粘液でテラテラとぬめりながら輝き、生理的な嫌悪感を感じさせる。

顔はなく、首の中に埋まったままで何とも不気味だ。

歩く度に又チャ又チャと音を立てるそれを前に、ほむらはただ無表情で構えた。

生理的な嫌悪感などどうでもいい。魔女の中にはもつとサイケデリックなものもいたので耐性はある。耐性についている。

……ここまでストレートに気色悪いのはなかなかいなかったが、まあ我慢出来ない程ではない。

しかしほむらは警戒していた。

あの怪物の全身を濡らしている粘液……あれはもしかしたら触れれば溶けるのかもしれないし、毒なのかもしれない。

だからまずそれを確認するために、足元にあつた瓦礫の破片を踵で踏みつける。

すると破片は回転しながら宙を舞い、弧を描くようにほむらの頭上を越えて彼女の目の前まで落ちてきた。

それを掴んで怪物へ投げつける。

すると怪物はそれを避ける事もなく受け、瓦礫が地面へ落ちた。(……瓦礫が溶ける気配はない。少なくとも触れてもすぐに溶かされるとかはなさそうね)

怪物がほむらへ向かって走り出した。

6本の腕でほむらへ拳を放つが、ほむらはその全てを軽々と避けてバックステップを踏む。

そしてXガンを向けると怪物は跳躍するが、それを読んでいたようにほむらも銃口を上へ向けて引き金を引いた。

怪物が落下しつつ拳を地面に叩き込むが、ほむらの姿はない。

次の瞬間怪物の腕の一本が弾けて千切れ飛び、そして怪物は自分のすぐ後ろにほむらが背を向けて立っている事に気が付いた。

「……」

「……」

両者が背を向けたまま数秒の沈黙が流れ、そして弾かれたように二人が同時に振り向いた。

残された5本の腕で殴ろうとするも、ほむらの小柄な身体には掠りもしない。

格闘戦というのは大きくて重い方が有利なのは語るまでもないが、懐に潜り込まれてしまえば小さい方が有利になる。

怪物の右ストレートをほむらが紙一重で避け、続く拳を身を振じる事で避ける。

ほむらの背中スレスレを拳が通過して、回転しながらほむらがXガンを発射した。

そこに間髪を容れず次の拳打が飛ぶが、これも当たらない。

更に続けてアッパーカット。ほむらはこれに足を乗せて拳の勢いにあえて逆らわずに後方宙返りを決めつつ着地と同時にXガンを撃った。

Xガンの時間差ダメージによって怪物の腕がまた一本千切れ、更にそこから遅れてもう一本が千切れる。

「きょーッー」

3本になってしまった腕でほむらに殴りかかろうとするも、ほむらはこれに対し背を向ける。

そして大きく後方に宙返りをして怪物を飛び越え、怪物の背を取ってXガンを連射した。

怪物の腕が3本千切れ、とうとう腕を失う。

これに加藤達は拳を握り、ほむらの勝利を確信した。

だがまだ終わりではない。最後の一瞬まで戦いは分らない。

怪物の尻尾が動き、槍となってほむらの心臓目掛けて突き出される。

血飛沫が舞う。

肉片が飛び散る。

切断された怪物の尻尾が宙を舞い、そしてガンツソードを手にした

ほむらが怪物へ肉薄した。

剣の扱いは決して得意ではない。

だが数多の時間軸の中では時にはさやかと敵対する事もあった。

その時の動きは記憶しているし、見様見真似程度ならば不可能ではない。

剣閃が走り、怪物とすれ違ったほむらが背を向けたまま停止する。

そして怪物は、真つ二つになって崩れ落ちた。

二つに分かれた死体を一瞥し、ほむらは不満そうに目を細める。

「切り口が雑……やはり見様見真似では上手く行かないわね」

そう言いながらXガンを連射して、念のために怪物をバラバラにした。

やはり剣は銃に比べて苦手だ。

とはいえ、これは強力な武器である。

この剣の扱いに慣れておく事は、スーツと併せて今後の大きな課題になるだろう。

## 第11話 100点めにゆくから選んで下さい

ミッションが終わり、部屋に転送された生存者達は暗い雰囲気にもまれていた。

一時間前は十八人と二匹もいたのに、戻って来たのは八人と二匹だけだ。

実に半数が今回のミッションで命を落としてしまった事になる。

特に岸本を失った加藤と玄野の失意は深く、まるで通夜のようなだ。

それでも玄野にはまだ救いがあった。

今回から参戦し、玄野の恋人となってくれた桜丘聖が生きている。

無言で涙を流す玄野をあやすように桜丘が優しく抱きしめ、彼の嘆きを受け止めていた。

一方の加藤は生きているのに死んだように覇気がない。

彼を打ちのめしたのは岸本達の死だけではない。駆け付けたほむらが何の問題もなく千手観音を葬ってしまった事実こそが彼に止めを刺していた。

(お、俺が……俺が暁美に余計な指示を出さなければ……)

そうすれば岸本は死ななかつた……あの二人だって……)

「暁美ほむらは千手観音に勝てた」。

ならば自分のした事は何だったのだと加藤は思う。

放っておけば勝手に強敵を始末してくれた仲間の邪魔をし、余計な犠牲を出しただけではないか。

リーダー気取りで指示を出し、そして加藤を信じて付いてきた仲間が死んだ。

守るという事は背負うという事。背負った者が迷走して崖から飛び降りてしまえば、当然背負われた者も一緒に落ちる。

崩れる道の上でどこに進むべきかと優柔不断に迷い続けて結局落ちてしまえば、やはり背負われた者も落ちる。

迷いは少なく、されど迂闊な動きはせず。

矛盾しているようだが、それがリーダーに求められる事だ。

守るという言葉は軽くない。その事実を加藤は今になってようやく

く、本当の意味で理解していた。

「おばあぢやあああん！ もうおうぢがえりだいいいいい！」

「よしよし、亮太。もうすぐ帰れるからねえ」

何もせずひたすら隠れていた亮太が我儘を言い、カヨが困ったようにあやす。

戦力はなくとも加藤についてこなかった者が生き、戦力があるのについてきた者が死んでしまった。

それもまた、加藤を打ちのめす要因の一つであった。

「キュウ……ン。クウウン」

犬は落ち着きなく辺りを探しているが、いくら探しても探し人が見当たらずに肩を落とす。

この犬は岸本に懐いていたが、もう岸本は帰って来ない。

その事を犬なりに察したのだろう。その顔はどこか寂しげであった。

そしてミツシヨンが終わってから初めて岸本の死を知ったほむらは、何も言わずに窓の外を眺めている為にその表情は見えない。

だが、その握り拳は……僅かに震えていた。

『それぢわ ちいてんをはじめる』

ガンツがいつも通りに採点を開始する。

だが玄野達は見向きもせず、ただ無言で岸本を想い続けていた。

『かとうちゃ (笑)。0てん。』

リーダーなのにかつやくしなちすぎ』

『くろのくん。5てん。』

TOTAL10てん。あと90てんでおわり』

どちらも解放からは程遠い。

あれだけ死に、失い、苦しみ、それでも解放までの道がまだ開けない。

『たらこくちびる。0てん。』

がんばりはかんじる』

『からてか。6てん。』

TOTAL6てん。あと94てんでおわり』

『じえいかん。9てん。』

TOTAL9てん。あと91てんでおわり』

『ばばあ。0てん。』

かくれすぎ。もつとなんかしろ』

『ガキ。0てん。』

わがままいすぎ』

『犬。0てん。』

きよにゆうさがしすぎ』

『へんなの。0てん。』

やくにたつてはいるのだが……』

生き残っているのはJJ以外はほとんど前に出て戦っていないかった者達だ。

故にその点数も低く、解放は夢のまた夢だろう。

この中で解放の芽があるのは東郷とJJ、桜丘の三人くらいだ。

戦わなければ生き残れない。それがガッツのルールなのだから。

『ほむら。101てん。』

TOTAL187てん。100点めにゆくから選んで下さい』

一人だけ圧巻の点数であった。

最初の仁王像から始まり、雑魚仏像をあらかじめ潰して最後には千手観音を倒したのもほむらだ。

故にこれは当然の採点であり、強い者は先に解放されて弱い者だけが取り残されて死ぬという残酷な事実だけが示されていた。

そして、どうでもいいがここだけちゃんと『下ちい』ではなく『下さい』になっている。

『100点めにゆく。』

- 1、記憶をけされて解放される。
  - 2、より強力な武器を与えられる。
  - 3、MEMORYの中から人間を再生でちる』
- ほむらは腕を組み、しばし思索する。

100点を獲得した者への褒美は解放か、強い武器を得ての継続か、あるいは死者の再生かの三択らしい。

まず……1はない。

解放されたとしても、本当に無関係になるかという疑問が残るからだ。

一般人には見えていないだけで星人は確かにこの星におり、夜にはガンツに呼び出された死者と星人の戦いが起こっている。

Xガンで壁を破壊出来た事から、見えていないだけでガンツの戦士や星人が一般人に攻撃できる事も簡単に予想出来る。

そもそも、ここまでガンツの手引きとはいえ星人を抹殺してきた者が自由になつたとして、それで本当に狙われないのだろうか。

星人がもし逆襲してきたら？ 先手を打ってこちらを殺しに来たら？ その時ガンツは守ってくれるのか？

ガンツからの解放とは、ただ記憶を消して呼び出さなくなるだけで、その後の事など一切関与しない放流に過ぎないのではないか？

戦いから解放されるが、代わりに自衛手段を失う。それが1の選択肢の正体であるとはむらは推測した。

「暁美ッ！ 頼むッ、岸本をッ、岸本をッ、生き返らせてくれッ！  
俺を庇って死んでしまつた岸本をッ！ 頼む、暁美！」

「俺からお願いだ暁美！ どうか、どうか岸本を……！」  
お前ならッ、また100点くらいすぐ取れるだろッ！」

加藤と玄野がほむらに縋り、泣きながら岸本の復活を請う。

恥も外聞もないが、それだけ岸本が大事だったという事なのだろう。

しかしほむらが二人に向ける眼差しは、どこまでも冷たいものであつた。

願いを他人の為に使う……その愚かさと末路は身に染みて知っている。

「それで……岸本さんを生き返らせて、またこの地獄に突き落とすの？  
また0点からスタートさせて、星人に殺されるまで戦わせるの？」

「ッ！」

ほむらの言葉に加藤と玄野は言葉に詰まった。

そんなつもりではなかった。



だが生き返らせるといふのはそういう事なのだ。

生き返つても、待っているのは殺し合いという名の地獄でしかない。

「断言するわ。仮にここで私が岸本さんを再生させても……結局いつか、どこかで死ぬことになる。」

あの人は戦いになんて向いてないのよ。

貴方達は彼女の苦しみを無駄に長引かせたいの?」

「そ、それは……そんな、つもりじゃ……」

「それと……多分、再生を選んでも貴方達の知る岸本さんは戻って来ない」

ほむらはガンツを見ながら、少し沈んだ声で言った。

生き返らせたい気持ちがないわけではない。

だがガンツによる再生は論外だ。

何故ならこれは蘇生ではなく……きつと、コピーだから。

「どういう、ことだ……?」

「私達のオリジナルが死んだ時と同じよ。」

ここで再生を願つても、実際にこのミッションで死んだ岸本さんが帰って来るわけではない。

恐らくは……死ぬ前の岸本さんの記憶と人格を持ち、本人と区別が付かない……三人目の岸本恵が新たに生み出されるだけ。

そういう意味では、ここにいる全員が生後一年も経っていない生まれだての人間と言えるわね」

「そ、そんな事……」

「そんな事があるのよ。だって実際、岸本さんは二人いるでしょう?」

例えば今回生き返らせて、次に私が100点を取ったらもう一度岸本さんを生き返らせればどうなるか……。

きつと、生きている岸本さんとは無関係に新しく岸本さんが再生され、二人が増えるでしょうね。

……ねえ……それって生き返らせているって言える?」

玄野も加藤も、ほむらの言葉を嘘と思う事は出来なかった。

何故なら実際に、岸本はオリジナルが生きているのだ。

生きているのに、ここで『再生』されてしまった。

そんなものは蘇生でも何でも無い。ただのコピーだ。

岸本を再生するという願いは、今まで共に戦ってきた岸本を取り戻すものではない。

死ぬ前の岸本の記憶を持つ、全く別の誰かをここに生み出すだけの行為なのだ。

「岸本さんを生き返らせたいというのは、貴方達のエゴよ。

貴方達が寂しいから戻って来て欲しい……そんな事の為にまた一人、この地獄に突き落としていいの？ 私はそうは思わない」

肉体も記憶も人格も、その全てが同じならば確かに本人と言えるかもしれない。

だがそれが二人いれば、やはり別の人間なのだ。

そしてほむらは魂というものが存在している事を知っている。

きつと、前の岸本と新たに生まれて来る岸本は魂が違う。

ならば再生とは、本来別の所で生まれるはずだった魂をこの地獄に引きずり込む事ではない。

「岸本さんは生き返らせない……生き返らない。

哀れなコピーを増やす気は、私にはないわ」

こう言われてしまえば、玄野も加藤も黙るしかない。

岸本は戻って来ないし、再生させても新しい犠牲者を一人増やすだけなのだ。

要するにガンツの再生はただの自己満足である。何も救えない、見せかけの希望だ。

「それでも再生したいなら……自力で100点を取れるくらいに強くなる事ね。

生み出した岸本さんに敵を倒させ、100点を取って自由になるまで守れるならば、やるといういわ。

ただし、今の貴方達では絶対に無理だと思うけど」

ほむらは厳しく二人に言い、それから改めてガンツを見る。

1も駄目、3も駄目となれば叶える願いは決まっている。

異星人が地球にいるという事を知ったのは考えによつては僥倖で、

ここに誘われたのも決して悪い事ではない。

せつかく掴んだはずのまどかの幸せ、まどかの日常。

だがそれを脅かす可能性があるならば、摘み取る事こそが己の使命だ。

今ここにいる自分は暁美ほむらではなく、そのコピーに過ぎないが、まどかを守りたい気持ちに嘘はない。

ならば必要なのは見せかけの希望などではなく、確かな力だ。

ガンツの前に立つほむらの選択を、全員が息を呑んで見守った。

去るのか、それとも戦うのか。

普通に考えれば解放を選ぶだろう。誰でもそうだ。

しかしそれは即ち、次回からは暁美ほむらがいなくなるという事でもある。

たったの三回ではあるが、圧倒的な力を見せつけてたったの三回で100点まで到達したこの戦力を喪失するのはあまりに痛手だ。

それは一つの死刑宣告に近く、カヨや亮太は涙すら浮かべている。やがてほむらは意を決したように、願いを口にした。

「2を選択するわ」

まどかを守る私になりたい。

その最初の願いを覚えている。決して忘れない。

だから私は戦い続ける——この世界を守る為に。

それが死して尚揺らがない、ほむらの選択であった。

◇

暗い空気のままその日は解散となり、ほむらはまだ食べていなかった夕飯を作っていた。

作ると言っても、今日は簡単にペペロンチーノで済ませるつもりだ。

慣れた手つきで二つの皿にパスタを盛り、片方は多めに入れる。

それからトッピングの半熟卵を乗せてテーブルに運び……そこで、ほむらは失敗に気付いた。

「……ああ、そうか……そうだったわね……」

コトリ、と自分の席に皿を置き、大盛の皿を対面側に置く。

そうすれば少しは気が晴れるかと思ったが、逆に一層現実を実感しただけであった。

ここ一月の癖で、つい二人分作ってしまった。

あの少女ときたら見た目に反して意外と食べるので量を用意するのも大変だったし、多く盛る癖までついた。

だが、それでも……それでも、美味しいと笑顔で食べてくれるのだけは、悪い気分ではなかった。

「もう……居ないんだっけ……」

あまり好きなタイプの人種ではなかった。

騒がしいし、重いし、やたらじゃれてくるし、正直鬱陶しいと思っていた。

だがいなくなってしまうえば、部屋は広く感じられるし妙に静かに思えてしまう。

床に視線を落としたまましばらく佇んでいると、ほむら以外誰もいないはずの室内から音が聞こえた。

視線を向ければ、そこにはいつもはとつくに帰っているはずの犬の姿がある。

犬は部屋をうろついて匂いを嗅ぎ、もう戻って来ない岸本を探し続けていた。

「あら、まだいたの……」

「キュウン……」

「お前、岸本さんに懐いていたものね……けど、いくら待ってももう戻って来ないのよ」

「クウン……」

ほむらの言葉に、犬は目に見えて落ち込んだ。

ガンツの採点も理解している節があるし、案外賢いのかもしれない。

ほむらは携帯電話で犬に食べさせてもいい野菜を調べ、紙皿の上に刻んだキャベツを置いて犬の前に差し出した。

それからほむら自身も椅子に座り、遅めの夕飯を食べ始める。

その日、同居人の好みに合わせて少し濃い目の味付けをしたはずの  
パスタは、不思議と味が感じられなかった。

## 第12話 もう誰も死なせねえ

ほむらは夢を見ていた。

夢と分かったのは、今見ているものが既に過ぎ去った過去の出来事だからだ。

色彩が反転したような建物の中でほむらが走り、その後をマネキンが追う。

ここは魔女の結界の中で、魔女の結界というのはほぼ例外なく魔女の心の深層を映し出している。

この魔女はどうも衣装に並々ならぬ拘りがあるようで、使い魔はマネキンの姿をしていた。

しかし本体である魔女は透明であり、その上から衣装を適当に羽織っているという姿で何を着ても似合いそうにない。

「くっ……いー」

普段ならば時間停止が使えずとも積み上げた経験と戦闘勘で十分倒せる相手だった。

だがほむらはこの魔女と戦うまでに連載しており、既にソウルジェムは濁り切っていて満足に魔法が使えない状態に陥ってしまったている。

浄化するグリーンフィードも既になく、加えてこの魔女以外のあらゆる魔女はほむら自身が駆逐した後だ。

つまりは、これが最後だ。この魔女さえ倒せば地球から魔女はいなくなる。

前の時間軸のまどかの願いで魔法少女も生まれず、本当の意味でのハッピーエンドを迎える事が出来るのだ。

だというのに……この最後の最後で、ほむらは限界を迎えていた。「あぐっー」

マネキンの蹴りがほむらの腹にめり込み、派手に蹴り飛ばした。

何度も地面をバウンドしてようやくやく止まるものの、ダメージは深い。

恐らく骨が何本かいかれているし、内臓も潰れている事だろう。

それでも震える手で盾から武器を出そうとするが、その腕を踏みつけられた。

「ぐっ……う!?」

乾いた音が響き、腕が動かなくなる。

続けて他のマネキンがほむらに飛び乗り、残った手足をへし折ってしまった。

歯を食いしばり、悲鳴を上げる事こそしなかったが……致命傷だ。もう動く事すら出来ない。

その様子を見ていたキュウベえが、感情の無い声で言う。

「ここまでだね、暁美ほむら。君の最後の戦いはどうやら、敗北で終わるらしい」

「ふぎ、け……ないで……! こんな、事で……」

「無理だよ。もう君に魔力は残っていない、身体も動かない。傷を治す事も出来ない。

君に出来るのは、ここで魔女に殺されるか……絶望して魔女になるかのどちらかだ」

キュウベえに事実を告げられ、ほむらの視界が歪む。

これで最後なのに。

やっとここまで来たのに。

なのに、この最後の最後で負けるのか。

魔女という不安要素を残してしまうのか。

もう少して約束に手が届くはずだった。迷路をやっと抜けられるはずだった。

なのに……結局また駄目なのか? また届かないのか?

「……まど、か……」

今まで繰り返し返してきた時間のまどかの顔を思い出す。

本当はいつだって助けたかった。見殺しにしたいまどかなんて、見捨てていい時間軸なんて一つもなかった。

それらを踏み越えてようやくここまで来たのに、諦める事なんて出来ない。

たとえこの身がどうなろうと……まどかの幸せな明日だけは、守つ

て見せる。

その決意に呼応してソウルジェムが最後の輝きを放ち、紫の光でほむらを照らした。

「これは……なるほど、最後に魔力を暴走させて自爆するつもりか。恐れ入ったよ暁美ほむら、凄まじい執念だ。

……けど——」

——そして、ほむらのソウルジェムは光と共に砕け散った。

◇  
多くの犠牲を出して終わった前回のミッションから一月半が経過した。

ほむらにとつては慣れない二人暮らしから解放されて一人暮らしへと戻っただけのはずだったが、この一月半は妙な物足りなさを彼女に感じさせていた。

しかも嫌な夢まで見るし、気分は正直なところ最悪に近い。

思えばマミと同居した一月を除けば、誰かと一緒に暮らす事はほとんどなかった。

生まれた時から極度に心臓の血管が細かったほむらは、昔から転院と引越しを繰り返し、その果てに大規模な総合病院を抱える見滝原へと辿り着いた。

見滝原ならば医療設備が充実しており、優秀な医者も多く抱えている。あの街ならばほむらがこれ以上引越しを繰り返す必要はない。

だから病院近くのアパートを借り……そして、生活費の仕送りだけを受けながらほむらは一人で暮らす事となった。

親の仕事の都合はあったし、資金面での問題もあった。

だが今にして思えばきつと、疎まれていたのだろうと分かる。

魔法少女になってから尚更会う機会などなく、一人でいる事にすっかり慣れてしまった。

だが岸本との同居は、そんな慣れという名の殻に罅を入れるには十分過ぎたのだろう。

今でも岸本の為に買った日用品を処分する気になれず、彼女の部屋



もそのままだ。

だから嫌だったのだ、他人と慣れ合うのは。

まどか一人を救うだけで何度も失敗してきた自分がそんなに多くを抱え切れない事などほむら自身が一番よく分かっている。

大事なものを増やしても、それは掌から零れ落ちて辛いだけだ。

だから大事な者はまどかだけでいい。それ以外いららない。

失っても、それが大事でなければ辛くないから。

ほむら以上にダメージを受けているのは玄野と加藤だろう。

玄野は数日ほど抜け殻のようになってしまったし、加藤は覇気を失った。

だが喪失の痛みなど時間は考慮せず、無情に過ぎていく。

そして次のミッションもまた、始まりの時を告げるのだ。

今夜も悪夢の夜が幕を開ける。

どれだけ日常を望んでも、どれだけ平和な世界に帰りたくとも、ここに呼ばれた以上は100点を取らない限り助からない。

前回の生存者である八人と二匹が再び部屋に集結し、そしてそのまま新たな参加者を加える事なく皮肉に満ちたラジオ体操の歌が響いた。

歌の内容はこれから起こる事と正反対で、腹が立つほどに陽気で明るい。

亮太などはこの歌が完全にトラウマになっているようで、聞くだけで泣き喚いている。

——てめえ達は今からこの方をヤツつけに行って下ちい。

チビ星人。

特徴 強い。根にもつ。

気にしていること 背の低さ。

特技 人マネ 心を通わす。

「今回は……追加なしなのか……?」

「あるのか、そんな事ッて」

誰も新規参加がない事に加藤と玄野が驚きを見せる。

これで四回目となるが、今までは常に新しく誰かが補充されていた。

西の言葉を振り返っても、玄野達が来るまでは大体西と犬だけが生き残って他は死んでいたというから、やはりミッションの度に追加されていたのだろう。

玄野は誰も来ない事に困惑していたが、加藤は僅かな安堵を感じていた。

「来ないなら来ないで、俺達だけでやればいい。

考えによつては、今日は誰もこの地獄に連れてこられなかつたってことだ」

「そうね。こんな事に巻き込まれる人間は少ない方がいいわ」

加藤の前向きな言葉に桜丘も同意した。

人数は減ってしまったが、それでもまだ合計で八人と二匹もいるのだ。

ならばこの面子で戦い、勝てばいい。

むしろ余計な犠牲が増えなくていいではないか。そう彼女は考えていた。

「生き残るぞ……今度こそ、ここにいる全員で。

絶対……絶対だ！」

加藤は決意を新たに、自分に言い聞かせるように言う。

もう死なせない。誰も死なせたくない。

岸本の時のような悲しみはもう沢山だ。

死なせない、絶対に死なせない。まるで呪詛のように加藤はそれだけを脳内でリフレインし続ける。

「オーケイ、カトウ。ガンバロー！」

JJが不慣れな日本語で加藤に賛同し、親指を立てる。

今回は胴着だけを着ていたが、今回は胴着の下にスーツを着用していた。

元々肉体戦闘能力に優れる彼ならば、素手でも十分に戦えるだろう。

「……任務了解」

東郷は今回もXショットガンを武器に選択し、他の武器に全く興味を示さない。

今回の服装はビジネススーツの下にガンツスーツだ。これで生存率は大分上がったはずだ。

鷹のように鋭い瞳は既に戦場へ向けられており、戦いのプロは己の心を完全に律して戦いの時を待つ。

「ええ、生き残るわよ玄野くん。」

まだデートも一回しかしてないんだから」

桜丘は前回同様にスーツ姿だ。

彼女は勝気に笑い、玄野へ優しい視線を向けた。

「ああ……もう誰も死なせねえ。もう、誰も……」

玄野は、岸本の死を通じて何かを感じたのだろうか。

それとも恋人が出来た事で彼の中の何かが変わったのかもしれない。

その顔は今までのような頼りないものではなく、どこか鋭いものへと変わっていた。

分かりやすく言えば、少し男前になっていた。

「グルルルル……」

犬は——何か、今までと明らかに様子が違っていた。

前回までの間抜け面は消え、牙を剥いて唸っている。

そんな彼に、ほむらは厳しく『命令』をした。

「まだよ。おすわり」

すると犬はビシッ、とした姿勢でその場に待機した。

前回まで呑気な顔でウロウロとし、岸本の股間に飛びついていたものと同じ犬とは思えない。

しかし、これこそがある意味本来の姿なのだ。

彼——ライス（命名・ほむら）の犬種であるボーダーコリーは元々、体力と運動神経に優れたイギリス原産の牧羊犬である。

その知力は全ての犬種の中でトップと言われ、人との共同作業を好み、そして家族には愛情深い。

足場が悪く急な斜面の多い山岳地帯で活躍していたボーダーコ

リーはエネルギーに溢れ、不安定な足場の上でも活発に動き回れるだけの運動能力と体力を有している。

ドッグスポーツ競技でも優れた成績を残し、一時は上位を独占したという記録まである。

ボーダーコリーは決して愛玩犬などではなく、優れた能力を誇る使役犬なのだ。

こんな犬種をバター犬にしてしまっていた前の飼い主はおかしいとしか言えないだろう。

岸本の死後、マンションに居座るようになった彼をほむらは徹底的に躰け直した。

今のままでは戦力外だし、いずれ死ぬのが目に見えているからだ。

岸本の死が影響を与えたのか、それともほむらの躰けが厳しかったのか——どちらかは分からないが、彼はボーダーコリー本来の鋭くも凛々しい顔つきを取り戻していた。

ここにいるのは、もう役立たずのバター犬ではない。

ほむらに従順な一匹の優れた使役犬として彼——ライスは生まれ変わったのだ。

「これ……あのバター犬だよな？」

「なあ、これ、別の犬連れてきてねーか？」

前回までとは違う犬にしか見えない凛々しさに加藤と玄野は困惑を隠せなかった。

しかしボーダーコリーとは元々こういう犬なのだ。

それが前の飼い主によって間違えた育て方をされ、本来の能力を殺されてしまっていたのである。

「躰けたのよ。一月半だから付け焼刃だけどね」

ほむらは腕を組んだまま、何でもない事のように答える。

元々ライスは人の言葉を理解出来るほどに賢かった。

だからこそ、たったの半年でこうまで変わることが出来たのだ。

最初からポテンシャルは高かったのである。

「転送が始まったわ」

ほむらの言葉に全員の目つきが変わった。

彼女の言葉の通り、加藤の頭が消え始めている。  
今日も始まるのだ。地獄の一夜が。

——必ず生き残る。

前回の惨劇を知るからこそ、全員がそう強く決意した。

◇

今回の舞台は、どこかの高層建築物の屋上であった。

しかし今更どこが戦場になろうと驚くには値しない。

値しない……が、ほむらは無言で手に持っていた武器をキュウベエの耳毛に持たせた。

その武器の名前はZガンといい、前回の100点で獲得した武器だ。

ほむらはミッション前にZガンの性能を空き地で試してみたのだが、その威力は驚くべきものであった。

ZガンはXガンに比べてタイムラグが少なく、上から重圧を発生させて効果範囲を押し潰す武器だ。

まだ生物には試していないので具体的にどのくらいの威力なのかは未知数だが、今回の戦場とは致命的に相性が悪すぎる。

こんなビルの上でZガンなど撃とうものなら、確実に大きな被害が出るだろう。

折角の100点武器だが、残念ながら今回は使用を見送った方がよさそうだ。

「ま、問題ないわね。行くわよ」

いきなりZガンが使用不可能になったが、結局のところ今までとやる事は変わらない。

ほむらは屋上から屋上へと跳んで移動し、その後を離れる事なくライスが続いた。

今までの彼からは想像も出来ない俊敏さだ。

「いたよ！ あそこだ！」

キュウベエが敵を発見し、ほむらが素早くXガンを発射した。

今回の標的であるチビ星人はその名の通り、背の低い敵らしい。

真っ白な肌に感情を感じさせない表情が特徴的だ。

腕は太く、背中には翼のようなものがあつた。

頬にはナルトのようなグルグルマークがあつて少しひょうきんさを出している。

しかしこんな外見でも恐ろしい星人だ。ほむらの射撃を素早く避け、剛腕を振りかぶつてほむらへ肉薄する。

だがその横を何かが通過し、チビ星人の首から青い血が噴き出した。

やったのは——ライスだ。

その口にはチビ星人の肉片がくわえられており、鋭い牙で噛み千切つたのだと分かる。

「ウォウー」

犬の咬筋力は強い。

小型犬でも本気で噛めば人間の指くらい簡単に噛み千切れてしまう。

優れた中型犬であるライスならば、その牙はもはや凶器と言つていいだろう。

そんな生物がガンツスーツを着用し、本気で噛んだのだ。その殺傷力は計り知れない。

再びライスがチビ星人に噛み付き、動きを止める。

そこを狙つてすかさず放たれたほむらの銃撃が当たり、チビ星人の頭を吹き飛ばした。

更に後ろから跳んできたチビ星人も、振り返る事なく銃口だけを向けて引き金を引く。

するとチビ星人の拳がほむらに当たる直前に身体が弾け、バラバラの肉片だけがほむらを追い越して飛んでいった。

「よくやったわ」

「ウォーン！」

ライスを褒め、頭を撫でる。

それからすぐに他へと視線を向け、夜のビルを睥睨した。

戦いはまだ始まったばかりだ。ほむらの周囲を囲むように次々と新しい敵が降り立つ。

今の瞬殺劇を見て、一体では手に負えないと判断したのだろう。

複数のチビ星人がフェンスの上に乗る、ほむらから距離を保ちつつ彼女を見下ろした。

『同胞はもう動かない』

『許すまじ』

『お前も同じように解体してやる』

口は動いていないのに、声が直接頭に響く。どうやらテレパシーを使うようだ。

これまでの何を言っているのかも分からない星人に比べると、随分と理性的というか知性が高いようだ。

フェンスから飛び降りて、ほむらの逃げ場を塞ぐようにじりじりと距離を詰める。

それに対しほむらは動かさず、あえてチビ星人に自分を取り囲ませた。

「コーッー！」

「コッー！」

前後のチビ星人が拳打を放ち、ほむらは身を振じって避ける。

胸の前と背中スレスレを拳が通過し、ほむらはそのまま両側に向けて両手のXガンの引き金を引いた。

更にXガン二丁を空に放り投げ、胸の前と背中中の拳をそれぞれ掴んで回転。

すると拳を突き出したチビ星人も遠心力に振り回されて他のチビ星人に衝突……時間差でXガンの効果で弾け、攻撃しようとしていたチビ星人の体勢を崩した。

別のチビ星人がほむらの腕を掴みにかかるも、跳躍してその腕を踏み台に跳ぶ。

空中で丁度落ちてきたXガンをキャッチして上下反転。地面のチビ星人達へ向けてXガンを連射し、少し離れた位置に着地した。

そこにチビ星人達が走るが、先程空中から撃たれたチビ星人はほむらに到達する事すら出来ずに弾け、残り僅か五体となる。

一体目の拳打を避け、勢い余ってほむらの横を通り過ぎてしまった

彼にすれ違いざまXガンを撃ち込む。

二体目にXガンを撃つとそれを避けるが、二体目が視界を遮っていたせいで後ろにいた三体目にXガンが当たる。

接近してきた二体目の拳を避けて身体を密着させ、腹に一発。

そのまま蹴りで四体目にぶつけて跳躍し、四体目の頭に逆立ちするように手を置いてXガンを頭部に当てて離れる。

最後の五体目にはライスが噛み付き、首をへし折って噛み殺していた。

遅れてほむらに撃たれた順にチビ星人が弾け、肉片へと変わる。

チビ星人の死体を背に、動き回って乱れた髪を手で軽く流し……そしてほむらは次の敵を探して移動を開始した。

「せいやあッ！」

JJは空手の魅力に取りつかれた白人格闘家である。

日本人よりも優れたフィジカルを持ち、センスに優れた彼は空手歴一月で仏像を素手で破壊するほどに天才だ。

その戦闘力はスーツを着ていない状態でも、多数の仏像を撃破するほどである。

そんな男がスーツを着ればどうなるか……それは、今彼が戦っているチビ星人が証明してくれるだろう。

「せいつ、はッ！」

JJの拳がチビ星人の顔にめり込み、頭蓋骨を陥没させた。

チビ星人も負けじと反撃に出る。

その腕力は一撃でビルの壁すら砕くほどに強い。

だがJJはあろう事かそれを容易く防御し、またも拳を繰り出した。

「イヤッ！」

『……ッ！』

空手こそ最強の格闘技である。

事実はどうあれJJは心底からそう信じており、その想いは信仰にも近い。



かつてJJはただならぬ空手の使い手である日本人と出会い、その強さに魅了された。

今でも覚えている……目の前で見せられた数々の空手技を。

正拳突き、足刀、手刀……どれも芸術的であった。鮮烈に記憶に焼き付いた。

あの領域は遥か遠く、背中すら見えていない。

それでも目指すのだ。その為にも、こんなところで死んでいるわけにはいかない。

『おのれ……許さぬぞ……このような』

「でやーッ！」

チビ星人がその高度な知性でテレパシーを発し、何かを言いかけたが構わずJJは殴った。

彼はまだ日本に来て日が浅いのだ。

日常生活で相手の言葉に耳を傾けている時ならともかく、こんな時に日本語で話しかけられても理解出来ない。

『お前を決して許しはし』

「せいやあああッ！」

JJの拳がチビ星人を打ち抜く。

正しい構えから繰り出される正拳突きは彼の誇りであり、最強の武器だ。

たとえ異星人相手でも負けぬという自負がある。

『おのッれ！』

今度はチビ星人が怒りのままにJJの顔へ拳を叩き込んだ。

だがJJは倒れない。揺らがない。

敵の拳を受けたまま、その瞳はブレる事なく相手を見据えている。

「イヤアアアアアッ!!」

次々とJJの拳がめり込み、滅多打ちにする。

チビ星人も負けじとノーガードで迎え撃つが、差はすぐに表れた。

全身至る所を殴られ、折られ、チビ星人は無事な箇所がないほどに打ちのめされていく。

やがて、JJの拳に耐え切れなくなったチビ星人は血を撒き散らし

ながら倒れ、絶命した。

そんな彼の前でJJは腕をクロスさせ、そして拳を腰に当てた。

「押忍ッツ!!」

東郷十三は優れた射撃の腕でチビ星人を仕留め続けていた。

動きがいくら速くとも、狙われている事に気付けなければ回避動作は取らない。

そして気付いた時には頭を撃ち抜かれている。

敵を倒すのに曲芸染みた動きや派手さは要らない。

ただ一発の銃弾と、確実に眉間を打ち抜く腕があれば事足りる。

生憎と今使っているのは銃弾などないXショットガンだが、武器が変わっても東郷の腕は変わらない。

撃つ——ビルとビルの間を抜け、先にいたチビ星人の頭が破裂した。

撃つ——チビ星人が加藤を襲って跳躍するのを先読みして抹殺する。

撃つ、撃つ、撃つ——一発目でビルの窓を砕き、二発目で対面側の窓を砕き、三発目でビル一つ挟んだ先にいたチビ星人をヘッドショットで仕留めた。

そんな彼を背後から別のチビ星人が襲撃する。

だが、それすらも読んでいたように、素早く振り返って銃口を押し当てる。

「——俺の背後に立つな……!」

——射殺。

そうして余計な障害を排除した東郷は再び『仕事』へと意識を戻したのであった。

「ふッー」

桜丘の鋭い蹴りがチビ星人の顔へとめり込んだ。

キックボクシング経験者であり、試合もこなしている桜丘の戦力は

女性でありながらそこらの腕自慢を凌駕している。

チビ星人の拳を俊敏なフットワークで避け、的確に攻撃を当てていく。

チビ星人は確かに強い。だが背が低く、基本的に拳で戦う彼等はリーチが足りない。

蹴りと拳では蹴りの方が有利な事は素人でも知っている事だ。

加えて、桜丘は周囲をフェンスで囲まれた場所を戦場に選択していた。

あえて狭い場所で戦う事でチビ星人の最大の武器であるスピードを殺したのだ。

チビ星人を角に追い込み、逃げ場を塞ぐようにして戦う。

速い相手をコーナーに追い込むのはボクシングなどでもよく使われる手だ。

チビ星人の脚を執拗に蹴り続け、徹底的に機動力を削ぐ。

その上で遠心力を乗せたハイキックを放ち、チビ星人の首をへし折った。

「ふーッ……ふーッ……あたしも結構やるじゃない」

構えを解かぬまま自画自賛し、恋人である玄野へと視線を移した。

彼はビルからビルへ跳び移り、追ってきたチビ星人が空中で身動きが取れない瞬間を狙って撃ち落としていく。

この僅かな時間でチビ星人を攻略する方法を編み出し、実践しているのは流石のセンスとしか言いようがない。

「さすが玄野くん。惚れ直しちゃうわね」

童顔の恋人の雄姿に桜丘は微笑み、すぐに戦士の目に戻って次の敵を探し始めた。

## 第13話 俺に譲ってくれ

ほむらが最後の一体を仕留め、今回のミッションは終了となった。前回のミッションと比べれば今回は大分難易度が低かったと言えるだろう。

勿論楽という事ではない。チビ星人は一体一体が田中星人のボスを上回る強さを持っていたし、平均戦力という点では前回よりも上であった。

テレパシー以外は特殊な能力を有していなかったが、それでも強くて速くて賢いというシンプルな強さは驚異的だ。

だが豊富な攻撃手段とスーツを無視した攻撃力を持ち、再生能力まで有していた千手観音と比べれば見劣りする敵であった事は疑いようがない。

また、今までとの最大の違いはボスがいなかった事だろう。

今まではガンツに表示されたターゲットの他にも強敵がいたが、今回はそれがなかった。

そういう意味では、珍しくスマートに終わる事が出来たと言える。参加したメンバーが次々と部屋に転送され、やがて八人と二匹の全てが戻ってきた事で加藤は視界が歪むのを感じた。

今までは常に誰かしらが犠牲になっていた。

今回はこれまで一緒に戦ってきた北条や岸本まで失った。

だが今日は違う、誰も欠けていない。

四回目にしてようやく、誰も死ぬことなく夜を越える事が出来たのだ。

全員が生存してのクリアは決して不可能ではない。夢物語ではない。

確かな手ごたえを感じ、加藤は感涙に頬を濡らした。

「生き残れる……不可能なんかじゃない……」

誰も死ぬことなく、帰ってきてくる事は出来るんだ……」

この喜びを、岸本と分かち合いたかった……」

未練とは分かっている、そう思ってしまう事を加藤は止められな

い。

そんな彼を一瞥し、ほむらはガンツへ目を向けた。

そろそろ採点が始まる頃だろう。

『それぢわ ちいてんをはじめる』

いつも通りの採点だ。

だが今日だけは、普段のような辛さ抜きで見ることが出来る。

それが加藤には嬉しかった。

『かとう。3てん。』

TOTAL3てん。あと97てんでおわり』

四回も続けて、遂に加藤も初得点を獲得した。

彼自身はほとんどカヨと亮太を守る為に防衛に徹していたのだが、

その中で一体だけYガンで送っていたのだ。

Xガンは撃つのに躊躇してしまうが、相手を殺さないYガンならば

引き金を引ける。

『くろのくん。15てん。』

TOTAL25てん。あと75てんでおわり』

『さくらおか。6てん。』

TOTAL6てん。あと94てんでおわり』

『じえいじえい。6てん。』

TOTAL12てん。あと88てんでおわり』

『どうこう。18てん。』

TOTAL27てん。あと73てんでおわり』

『ばばあ。0てん。』

まもられすぎ。たたかえ』

『ガキ。0てん。』

うるちすぎ。なきすぎ。』

『らいす。9てん。』

TOTAL9てん。あと91てんでおわり』

『へんなの。0てん。』

やるきがまったくかんじられない』

『ほむら。36てん。』

TOtAL123てん。100点めにゆくから選んで下ちい」

今回は戦いに参加したメンバー全員がそれなりの点数を稼げたらしい。珍しい事もあるものだ。

また、点を得た事で今まで適当なあだ名だったものが名前に変わっている。

点数を稼げていないのは相変わらず戦っていないカヨ、亮太、キユウベえくらいのものだ。

「……………100点メニューは前回同様、2よ」

一瞬、自分の対面側の席で笑顔を浮かべている生前の岸本を思い出したが、それでもほむらは2を選んだ。

岸本は戻って来ない。再生を選んでも何も解決しない。

だからこれが正しい選択肢なのである……………そのはずだ。

そうほむらは自分に言い聞かせた。

そして今回手に入ったのは、武器ではなくノートパソコンであった。

一体どんなものかと思つて起動すると、基本的には普通のパソコンと違いはないが中にはXガンを始めとする武器の使い方が載っており、ほむら達が知らなかった使い方までも記されている。

例えばXガンはデジカメと接続する事が可能で、更にそのデジカメをこのパソコンと繋げる事で星人の得点が分かるらしい。

他にはこのマンションの隠し部屋に剣やバイクがある事も書かれている上に、この二回クリアが部屋のアンロック条件である事も記されていた。

なるほど……………順番が逆だったわけだ。普通ならばこのパソコンを手に入れて、初めて剣やバイクが解放される仕組みだったのだろう。

しかしきつと過去に、誰かが二回クリアを達成してあの部屋を解放していた……………そう考えれば辻褄が合う。

更にこれから手に入る武器……………ハードスーツや飛行ユニット、巨大ロボットなどの操作方法なども記されている。

もしも何の情報もなくこれらの武器を与えられたら逆に困っていただろう。

他には過去に現れたらしい星人の一覧やその特徴、弱点……そしてその時の戦いの詳細が記されている。

これらの星人はもう出ないだろうが、しかし次に現れる星人を倒す手がかりになるかもしれない。

情報は有用な武器だ。これは直接的に役に立つアイテムではないが、下手な武器よりも役に立つ。

「そんじゃあ、これで解散ね」

「それなんだけど、解散はちょっと待ってくれ。

帰る前に、皆の連絡先を交換し合おう」

帰ろうとした桜丘だが、そこに加藤が待ったをかけた。

ポケットから携帯電話を出し、連絡先の交換を提案する。

これまで、このメンバー同士での連絡先の交換などはなかった。

誰もが一秒でも早く、このマンションから離れたと思うからだ。

そしてミツシヨンのたびにメンバーが変わるので、一部の仲のいい

者同士以外は連携すら満足に取れずにいた。

例外と言えるのは恋人関係になった玄野と桜丘くらいか。

「俺達は生き残れた。だが次も上手く行く保証はない。

だからミツシヨンのない日でも皆で集まり、特訓をするべきだと思うんだ。

もツと連携とか作戦とか、そういうのを皆で共有して高める事が生存率を上げるんじゃないか」

それは実際、正しい判断だろう。

何の訓練もせずに挑むのと、しっかりと訓練してから挑むのでは全然違う。

全員はしばらく考え、やがて東郷が最初に携帯電話を出した。

プロである彼は連携と訓練の重要さをよく分かっているのである。

「その意見には賛成だ。俺の連絡先を教えておく。

いつでも構わない……必要な時は呼び出してくれ」

東郷が加藤と連絡先を交換し、それに触発されるようにほむら以外の全員が携帯電話を出した。

皆が連絡先を交換し合うのをしばらく眺めていたが、そんな彼女に

加藤が近付いてくる。

「暁美。君も出来れば……いや、君にこそ参加して欲しい。番号を教えてください」

「その必要はないわ。悪いけど、貴方達との訓練で得られるものがあるとは思えない」

「分かっている……俺達と君のレベルは大きく開いている。

だから俺達に戦い方を教えて欲しいんだ」

ほむらはこの中で最年少……ではないが、戦力外の亮太を数から外せば戦えるメンバーの中では最も年下である。

そんな相手に教わろうなどと、普通は考えないだろう。

だが既に、ここにいる全員がほむらを自分よりも上であると認めていた。

今ここにいるメンバーの中で最も生き残る力に長けているのは暁美ほむらだ。

「君は強い、ここにいる誰よりも。

だからこそお願いしたいんだ。

頼む……どうか俺達を、鍛えてくれ！」

「加藤勝……貴方は……」

加藤の取った行動にほむらは僅かな驚きを見せた。

頭を下げる……どころの話ではない。

加藤は床に膝をつき、頭を擦り付け、プライドを捨てて年下の少女に土下座したのだ。

前の戦いで彼は、力のない理想の脆さを知った。

いくら守ると口で言っても、背負えるだけの強さがなければ取りこぼしてしまう事を知った。

それは大きすぎる犠牲であり、二度と出してはならぬものだ。

だから力が必要だった。暁美ほむらのような、凜として進み続ける力が。

永遠に続く迷宮すらもこじ開け、ゴールへ進む強さが何よりも欲しい。

「暁美、俺からも頼む。俺ももう、あんな惨めな思いはしたくない」



玄野も加藤に倣って膝をつき、ほむらを真つすぐに見た。その顔つきは数日前までの気の抜けたものではない。

どうしても強くなりたいたいという強い意思に支えられた顔だ。

大きすぎる代償を払い、二人の少年は二人の男となっていた。

それに倣うように他の皆も床に座り、頭を下げる。

こうなつては流石のほむらも多少は動かされるものがある。

「……私は貴方達を背負う気なんかない。ただ生き残る術を教えるだけ。」

自分の命を自分で背負えるならば、その話を受けてもいいわ」

「ッ！ ああッ、感謝するー！」

ほむらはこめかみに指を当てて、小さく溜息を吐いた。

どうしてこうなつたのだろう。

まどかを救つた今、もう何も背負う気などないというのに。

迷宮はもう脱したのだから、これ以上を求められても重たいだけなのだ。

しかし、何だかんだ言つてもここで捨てる事が出来ないのが暁美ほむらという少女であった。

（他人に戦い方を教えた事なんて、ないけど……まあ、やってみるしかないわね）

ほむらはもう一度、溜息を吐いた。

面倒事というのはいつまでも尽きない。

◇

住宅街の中を男が歩いていた。

黒髪のセミロングヘアには艶があり、その顔立ちはすれ違った女が思わず二度見するほどに整っている。

背は高く、身体は均整が取れ、欠点という欠点がまるで見当たらない。

それは外見だけの話ではなく、学力、運動神経、芸術……あらゆる面において彼は完璧を体現した男であった。

彼は、かつてガントツの部屋にいた。

あの地獄の夜に誘われ、そして戦い続けた過去を持っている。

そして一度は100点を取り、解放されたはずであった。だが身体は解放されても心が解放されていない。記憶はなくとも、心が切望しているのだ……あの魂が騒ぐ殺し合いの世界を。

この世界は退屈で、何の刺激もスリルもない。全てが完璧であるが故に何をしてても面白味がなく、彼は現実に退屈し切っていた。

心が導くままに、臆気な記憶とも言えない記憶の残滓を辿り、手掛かりを探し続けた。

自分が何を探しているのかも分からぬまま探し続けた。根拠があつてやっっているわけではない。

だが記憶の矛盾があつた。死にかけてから数か月ほどの記憶がぼつかりと抜け落ち、その間に自分がやっていた行動を思い出せないのだ。

まるで死にかけてその瞬間に数か月の時間を飛ばされたような違和感。

その間自分が何をしていたかは思い出せないが……何か、とても楽しくて刺激的な事をしていたような気がしてならない。

やがて彼はその果てに、『黒い玉の部屋』という裏サイトを発見し、その魅力に取りつかれた。

そこには死者が集まる不思議な黒い玉の部屋を題材とした小説が投稿されており、妙なりアリティと迫力があつた。

普通に考えればただの作り話……日記風に書かれた創作でしかないと思ふだろう。

だが現実味があるのだ。その小説の中で舞台となった場所には本当に痕跡がある。

小説の中で壊された物は現実でも本当に壊されている。

管理人がそういう壊れている場所を先に見付け、それに合わせて小説を書いたのだ、と言う者もいた。むしろそれが普通の考え方だ。

だが和泉は確信しているのだ。黒い玉の部屋は実在すると。

そして、自分はきつとそこにいたのだと。

——戻りたい。

和泉はただ、それだけを望んでいた。

この市まで来たのも、小説に書かれている名前を辿り、玄野計という名前を辿って引越してきたからだ。

そして玄野計は実在した。しかも、幸運にも彼が不良に袋叩きにされている現場を目撃し、まるで動じていない姿も見ることが出来た。きっと制服の下にスーツを着ているのだ……でなければ説明がつかない。

戻りたくて戻りたくて……この平穏という名の檻から抜け出したくて、和泉はその痕跡を探し続けている。

どうすればあの部屋に行ける……？

死ねば行けるのだろうか。今ここで自殺でもすればあの部屋が招いてくれるだろうか。

しかしそうなる確証はなく、無駄死になる可能性もある。

ガンツが死者を招くのは補充の意味合いがあるとあのサイトには書かれていた。

ならば確実に補充されるタイミングを見極めなくてはならない

……誰かが死ねば、その分の席が空くはずだ。

そのタイミングを何とかして知る事が出来れば……。

それは危険な思想であり、危うい状態であった。

今の和泉は部屋に戻る事しか考えていない。

その為ならばきつと何でもするだろう。

それこそ、『大量に人を殺せば部屋に行ける』と言われればやってしまふほどには他を見ていない。

幸いにしてメンバーが合計で10もいる為、ガンツがそこまでして彼を誘う事はない。

だからそれはきつと、悪魔の悪戯だったのだ。

手掛かりを求めて当てもなく徘徊する和泉の耳に、それが聞こえてしまったのは。

それはきつと奇跡的な確率で、あり得ない偶然だったのかもしれない。

だが……悪い事は重なっていく。

確率論など無視して積み重なる。

ならばそれは偶然ではなく、悪魔の悪戯が起こした必然だ。

「おばあちゃんあああん！ 亮ちゃんもうあの部屋行きだぐないいいい！ 怖いよおおー！」

「困ったねえ……大丈夫よ亮太。キツと加藤さんや暁美さん達が守ってくれるからね」

和泉の目が見開かれ、そして遅れて歓喜に染まった。

それは、和泉とすれ違った老婆と孫の会話だ。何て事のない我儘に祖母が悩んでいるだけの話だ。

しかし出した名称に覚えがあった。

加藤——ねぎ星人編から登場するキャラクターの名前だ。

偽善者臭く、みつともなく泣いて惨劇を見ている男の名である。

暁美——こちらもねぎ星人編から登場するキャラクターで、彼女の登場はサイト内で物議を巻き起こした。

初参戦にして圧倒的な戦力と適応力を見せつけ、スーツ抜きでねぎ星人を葬ってしまうという鮮烈なデビューを飾ったが、彼女の登場はサイト内では『非現実的すぎるキャラクター』、『いねーよ、こんな女子中学生』、『せっかく今までリアルさが売りだったのに突然こんなキャラを出して失望しました』などと一時は炎上まで起こしたほどだ。

(間違いない……あの部屋の住民だ！)

和泉は口角を釣り上げ、老婆と少年の後を追うように歩いた。

汗が止めどなく流れ、手が震える。

あの二人がいなくなれば、部屋の住人は減る。補充が起こる。

だから和泉はあの二人を殺してしまおうと考えたが……やはり、殺人には少し抵抗があった。

少しではあるが良心の呵責もある。

だがそれ以上に彼を突き動かすのは戻りたいという病的なまでの渴望だ。

戻る為なら……その為なら、何でもする。その危うさが今の和泉にはある。

それでもまだギリギリで理性のブレーキが働いていた。

ここであの二人を殺して自殺したとしても、本当に部屋に戻る保証なんてどこにもない。

補充のタイミングを見極めれば部屋に戻るかもしれない、などというのは和泉の勝手な希望的解釈だ。違う可能性も大いにある。

だから和泉はまだ、迷っていたのだ。このままならば理性のブレーキが勝ち、かろうじて止まる事も出来ただろう。

だが悪い事は重なる。

確率論など無視して積み重なっていく。

「……………」

和泉のポケットの中に、何かが現れた。

ポケットに入れているのは財布と携帯電話、それと自宅の鍵くらいだ。

だがそれらを押しつけ、ポケットに本来入らないようなものが無理矢理に、たった今捻じ込まれた。

多少苦心しつつもそれを取り出してみれば、それは……小さな黒い玉だった。

和泉はそれを見て瞠目し、そして歓喜した。

『へやにもどりたいければ』

よわいひと へらしてください』

これは……これはガンツの招待券だ！ そう和泉は確信した。

弱い人を減らせというのは、考えるまでもなくあの二人の事だろう。

何故ガンツがそんな注文をするのかなど分からない。

放っておいても死ぬような人間をわざわざ、何故ガンツが減らしたがるのかという疑問はある。

だが最早そんな疑問はどうでもよかった。

和泉紫音は、たった今悪魔の後押しを受けた。

もう彼の頭の中には『これで戻れる』という考えしかない。

完全にその思考に支配されてしまっている。

(ど……どうせ生きててもすぐ死ぬような二人だ。

死ぬのが遅いか早いか……違いはそれくらいしかない！  
なら……空けてくれよ、お前達が今座ッているその席。  
行きたくないというのなら、俺に譲ッてくれ！)

——数分後。

そこには銃で撃たれ、抱き合うようにして息絶えた老婆と少年の姿  
があった。

また、その場にはもう一人分の大量の血液が飛び散っていたが……  
不思議な事に、その血の主はどこにも見当たらなかった。

## 第14話 やはりお前はここの住人だツたんだな

「うわあああツ、危ないツて！ 飛ばしすぎだツつーの！」  
夜の道路を、一台の車が走っていた。

いや、走るといふよりもそれは爆走という表現の方が正しいかもしれない。

カーブの度に車体が斜めになり、あちこちぶつけそうになりながら走る様は心臓によくない。

そんな車の中で玄野は慌てふためいた声をあげていた。

運転席にいるのはミツシヨンで知り合つて以降、正式に付き合う事となつた桜丘聖だ。

「どお、玄野クン、私の腕は！」

「もツと前！ 前見て！ こんな飛ばして大丈夫なのかよ!?

アంతタ免許取り立てツて言ツてただろ！」

「そうよ！ 今日で二度目のドライブ！」

「うわああ！ 死ぬ、死んじまう！ 降ろしてくれ！」

「大丈夫大丈夫！」

あまりに荒い運転に玄野は生きた心地がしなかった。

年上の彼女である桜丘は母性本能が強く、甘えさせてくれる、自分には勿体ない彼女だと思つている。

顔の彫りが深くて日本人に見えないが間違いなく美女だし、スタイルもいい。

性格も優しく、サツパリしていて頼り甲斐があり、少し付き合い難かつた岸本と違つて話しやすいタイプだ。

学校で危うく地味な同級生に告白させられそうになった時も、彼女の写真を見せて『他に彼女いるから他の罰ゲームにしてくれ』と言つたら同級生は何も言えずに黙つたほどだ。

勿論告白はしていない。代わりに罰ゲームで嫉妬の尻バツトをされた。

制服の下にスーツを着ていたから痛くなかつたが、最近転校してきた和泉紫音のスイングが何故か本気だったのは少し腹が立つた。自

分も可愛い彼女がいるくせに。

しかしそんな桜丘でもやはり欠点というものはあったらしい。

まさかこんな運転が酷いとは思わなかった。

……余談だが、桜丘がガンツ部屋に転送された際の死因は、バイクでスピードを出し過ぎての事故死である。

「……あッ」

桜丘は何かを感じたのか、慌てて車を道路の端に停車した。

その直後に玄野も強烈な寒気を感じ、身体が動かなくなった。

この感覚は、ガンツ部屋に転送される前の予兆のようなものだ。

強烈な寒気が走り、それから少しして身体が動かなくなり部屋に送られる。

もう少し桜丘が停車させるのが遅ければ、転送される前に二人揃って事故にあっていた事だろう。

かくして、今日もまた希望の朝を迎える為の夜が幕を開ける。

◇

玄野と桜丘が転送されると、そこには既に先に来ていただろうメンバーが集結していた。

友人にしてリーダーの加藤。

狙撃の腕が頼りになるプロフェッショナルの東郷。

少し日本語が怪しいが、格闘戦だけで敵を薙ぎ払うJJ。

しっかりと躡けられたのか、前回よりも更に凛々しくなった犬のライスはもう最初の頃の面影がない。誰だお前。

ライスの現飼主にして最強の戦力である暁美ほむら。

これに桜丘と玄野を加えた六人と一匹がこのチームの主戦力だ。

キユウベえは……正直、役に立っているのを見た事がない。

だが今回はそれだけではなく、前回見なかった……そして見慣れた顔があった。

「い……和泉?」

「玄野か。やはりお前はここの住人だったんだな」

和泉紫音。

三か月ほど前に玄野と同じ学校に転校してきた超が付くほどのイ



ケメン野郎である。

ただ顔がいいだけではなく、成績もトップで運動神経も抜群と非の打ち所がない。

その彼の横には何故かパンダがいて纏わりついているが、玄野にはそれどころではなかった。

「お、お前……死んだのか？」

「ああ……まあ……ちよつと車にはねられてな」

「そ、そうか」

こんな完璧超人でも死ぬときは死ぬんだな、と思うと何だか不思議な気持ちだった。

正直この男が車なんかにはねられるというのが想像出来ないが、まあそんなものなのだろう。

それに信じられない死因といえばトップは他にいる。

……暁美ほむら。

最初は別に疑問など感じなかったが、彼女の超人的な能力を見れば見る程、階段から落ちて死ぬような女ではないと思ってしまう。

「知り合いか？ 計ちゃん」

「あ、ああ……こいつ、俺の同級生なんだよ。」

多分西が作つたっぽい『黒い玉の部屋』ツてサイトでここの事を知つてた節はあつただけど……まさか本当に来るなんて」

「そうか。まあ来てしまった以上は協力するしかない。」

ええと……和泉さんツて呼ばれてたな。俺は加藤だ、よろしく頼む」

加藤が握手を求めるように手を差し出すが、和泉は別の方向に気を取られているようで気付いていない。

彼の視線はほむらへと向いており、観察するように鋭く細められている。

（人形のように整った容姿に、背中で左右に分かれている長い黒髪……落ち着き払った態度に、外見と不釣り合いな気配……そして肩に乗せた奇妙な生物。

間違いない、あいつが暁美ほむらだ。実在したのか）

「和泉さん?」

「ん? ……ああ、すまない。考え事をしていた」

ようやく加藤の手に気付いた和泉が加藤と握手を交わす。

しかしそうしながらも、彼の目は部屋にいる先住民を注意深く観察し続けていた。

そして気付くのは、今はなかなかの手練れが揃っているという事である。

『黒い玉の部屋』ではサイト運営者である中学生以外はどいつもこいつも間抜けですぐに死んでいき、その中学生一人と犬だけが生き残るのが定番の展開だった。

しかし今、部屋にいるのは強者の空気を纏う精鋭ばかりだ。

サイトでは馬鹿犬と言われていた犬ですらキリツとしており……いや、あれはもしかして別の犬だろうか?

「和泉さん、早速で悪いんだがスーツを着て欲しい。

こいつを着ているかどうかが生死を分けるくらい重要なんだ。

コスプレみたいで恥ずかしいだろうが……」

「ああ、着るよ」

「え?」

「サイトに書いてあつた通りだ。それを着ていないが為に死んだ奴が大勢いるんだろう?」

「なら俺は着る。死にたくはないからな」

和泉は自分のスーツを取りながら、少しずつ記憶を取り戻していた。

そうだ、まずスーツを着て、それから武器を取る。これが基本だ。更に、ガンツが開いてから入れるようになる部屋があり、そこに刀とバイクが置いてある。

和泉は記憶を頼りに部屋を開け、そこに無造作に置かれていた刀を拾った。

「そ、その部屋の事まで知ってるのか……」

「俺達は暁美に聞くまで知らなかつたのに……西の奴、そんな事まで書いてやがったか」

加藤と玄野はどうやら、和泉が迷いもせずいきなり隠し部屋を開いた事を西のサイトのせいだと思っているらしい。

しかしそんな中、ほむらだけは和泉へと疑いを持ち始めていた。

……素人ではないと一目で思わされた。

ほむらは和泉に、修羅場を抜けてきた者特有の強者の空気を感じている。

いかに元々の能力に恵まれていようと、あれは殺し合いの世界を実際に潜り抜けなければ身に付かないものだ。

やがてガンツからいつもの音楽が流れ始め、加藤が慌てたように辺りを見た。

「ま、待ッてくれ。まだあのお婆さんと子供が来ていないぞー！」

「どうなッてるの……？」

加藤に続いて桜丘も回りを見るが、やはりいない。

その事に全員が嫌な予感を感じ、ほむらは一瞬で予感を確信へと切り替えた。

「死んだ、のでしょようね。ガンツとは無関係に」

「そんな……折角、ここまで生き残ッて来たのに」

ほむらは目を閉じ、老婆の笑顔と自分を見る少年の瞳を思い出していた。

現実などこんなものだ。

救っても、それで漫画のように恰好よく活躍したりするわけではない。

生き延びたからといって何か役割を与えられる事などあるはずもなく、ただ死期を延ばすだけで死ぬ者は結局無意味に死んでいくのだ。

唯一の慰めは、これであの二人が地獄から解放され、人として死ねた事くらいか。

ミッシヨン中に死ねば、死体すら残らない。

一般人から見えなくされたこの者達はその死を表の世界では認識されず、やがてその死体もガンツによって処分される事だろう。

死体すら残らない死、という点では魔法少女と似ていると言えなく

もない。

だがあの二人は外の世界で人として死んだのだ。

それだけが唯一の救いだ……そう思わなければ、ほむらはやり切れなかった。

(あの二人は間引きされたようだね。まあそれも仕方ないか)

一方でキュウベえは、カヨと亮太がいなくなった理由をほぼ正確に把握していた。

人類よりも高度な文明を持つキュウベえにとって、ガンツのセキユリテイなどすぐに破れる障子と何ら変わらない。

パソコンが一つでもあればいくらでも情報を抜き取れるし、世界各国のやり取りだって全て把握出来る。

いや、パソコンなどなくてもいい。何ならほむらの携帯電話を勝手に使って見る事だって出来る。

故に彼だけはカヨと亮太が排除された理由を把握していた。

一言で言えば、二人が間引きされてしまった理由は『賭けにならないから』。それだけだ。

以前も語ったように、ガンツのミッションはリアルタイムで世界中の富豪や権力者に配信されて賭けの対象になっている。

誰が真つ先に死ぬか。誰が生き残るか。誰が点数を稼ぐか。

そうした賭けの中で、カヨと亮太は完全に邪魔になってしまった。

元々この二人は、言ってしまったえば大穴枠であった。

99%死ぬだろうが、もしかしたら生き残るかもしれない。生き残れば賭けた人はラッキー……その程度の扱いだ。

こうしたものは別に珍しくはない。今までにも何度も、どう考えても生き残れるはずがない大穴枠というのは招かれて来たし、悪趣味な賭けの参加者達はその死に様を楽しんで来た。

生き残る力のない弱者が戸惑い、もがき、泣き叫び、そして死んでいく……そんな姿を自らは安全圏から眺めるといふ優越感。娯楽。

それは賭けに参加している者達にとって最高のエンターテインメ

ントだったのだ。

全くもって効率の悪い話だとキュウベえは思うが、要するにカヨと亮太は最初から生き残る事など期待されていなかったのである。

だが彼等にとつて予想外の事が起こった。

本来ならばすぐに死ぬはずの二人が、いつまで経っても残り続けてしまったことだ。

普通はこうはならない。ガンツのミッションは残酷なまでに強い者だけが残って弱い者は間引きされていくように出来ている。

仮に隠れ続ける事で生き延びても、その時はミッション失敗でペナルティだ。

次のミッションで15点を取れなければ自動的に死亡が確定するという、徹底的に弱者を間引く為のルールが用意されている。

しかし晧美ほむらという特大のイレギュラーがそのあり得ない事を起こしてしまった。

カヨと亮太はミッション中にただ隠れているだけで、賭けの対象にならない。つまらない。

しかしほむらが敵を蹴散らすのでミッションは成功扱いになる。

賭けにならなくても戦ってくれば、その戦いを楽しむ事が出来る。

だが戦いすらしない。

いくら映像を見てもミッション開始から終了までずっと隠れているだけ……こんなのは娯楽にならない。

だから賭けを主催している者達……つまりは、マイエルバッハと日本の財閥チームはカヨと亮太を間引く事を決めた。

同じく賭けになりにくい対象でも、ほむらとカヨ達は違う。

常にトップしか走らない馬は誰もが賭けるから、賭けの対象としてみればあまり良いものではない。

しかし一位を取り続ける馬は人気者だ。ファンも出来る。

何より強ければカタストロフィにも使える。

カヨと亮太はそうではない。ただの走らない不人気な馬だ。

だが間引くにしてもやり方というものがある。

爆弾で殺す事は勿論容易かったが、何かルールを違反したわけでもない二人をおおっぴらに爆弾で死なせてしまうのはあまりスマートではない。

大勢の観客はカヨと亮太の退場を望んでいるが、それでも『主催者が自分で決めたルールを破るのはどうなのだ』という非難は当然出たろう。

いくら内心で退場を望んでいても、ルールというのは大切だ。主催者ならば尚の事守らねばならない。

例えば競馬で誰も賭けないような足の遅すぎる馬がいたとして、しかしそれはこの後に開かれるいくつかのレースに出馬が決まっているとする。

当然賭ける側は『あの馬はもういらないだろう』と思うし、賭けは盛り下がる。

しかし、だからといって主催者側がそれを追い出して別の馬に替えました！……では、非難される。

だがトラブルならばどうか？ 馬同士で喧嘩をして止むを得ず替える必要が出たならば……それは主催者のせいではない。

つまり、和泉紫音は利用されたのだ。

賭けを主導している者達にとっては結論から言えばどちらでもよかった。

爆弾で殺しても、和泉を使っても……どちらでも結果は変わらない。

ただ、和泉の独断と暴走という事にした方が説明が楽だ。

本当にただそれだけの……それだけの理由で和泉紫音は利用され、そしてあの哀れな老婆と孫は殺されてしまった。

しかしキュウベえはこの件に関して何も感じる事はなかった。

非効率的だとは思いうし無駄だとも思う。

最初から呼ばなければいいではないかとも思う。

だがそれだけだ。人間の考えが理不尽で効率が悪く、理解の範疇にないのはいつもの事である。

理解する気もない……それだけだ。

——てめえ達は今からこの方をヤツつけに行つて下ちい。  
かつペ星人。

特徴 なまる 汗かき。

好きな物 トカゲ 鳥。

口ぐせ おーらのどーごがなまつでんだ。いっでみろつつの。

今回のターゲットが表示され、それを見てから各々が準備を開始した。

標的が出てから転送されるまでの時間は短い。

その間に準備を済ませなければ準備不足でミッションに放り込まれる事となってしまう。

ほむらは腕にレーザーと周波数変換装置を取り付け、Zガンをキュウベえに引っ掛ける。

それからXショットガンとYガンもコートの内側にあるホルスターへ入れ、ガンツソードを腰に差した。

コートの袖口には既に二丁のXガンが収納されていて、いつでも取り出す事が出来る。

玄野はXショットガンとXガンを。加藤はYガンとXガンを手にした。

東郷はいつも通りにXショットガン以外には目もくれない。

JJは何も持たず、あくまで己の空手のみで挑む。

桜丘は格闘重視でありながらもXガンとガンツソードを持ち、そしてバイクへと跨った。

「使えるのか？ それ」

「任せて。あたしバイク得意だから」

「でもあんたの死因ツて……」

「平気平気」

流石に慣れているメンバーは準備が早い。

いや、今回は慣れている面子だけではなく初参戦のはずの和泉まで準備を完璧に整えている。

彼は初めてとは思えない程にスーツを違和感なく着用し、Xガンとガンツソードを手にした。

まるでソードが自分に最も合った武器だと分かっているかのような迷いのない動きだ。

「そのパンダ……一応、そいつにもスーツを着せた方がいいな」

加藤は『ホイホイ』と書かれたスーツケースを持ってパンダに近寄る。

パンダというのは見た目の愛らしさとは裏腹に割と凶暴で人が近付くのは推奨されていない。

見た目がいくら可愛くてもパンダは熊なのである。

しかしこのパンダはどうも人に慣れているらしく、和泉にじやれつく時はしっかりと加減しており、加藤が近付いてもコロコロと転がっているだけだ。

スーツも抵抗なく着せる事が出来たので、これで生存率も上がるだろう。

「始まったな……今回は東郷からか」

東郷の頭から先が消え始め、いよいよ地獄への入り口が開かれたと全員が緊張を高めた。

だが今回は自信があつた。

前回に犠牲を出さずに勝てた事もそうだが、今回はほむらに教えを請い、トレーニングを積んできている。

彼等の実力は確実に前よりも上のものとなっているのだ。

「いいか皆ツ、今回も生き残るぞツ！ 全員でツ！」

俺達はツ、誰も死なない！ 生きて帰るんだ！」

加藤が声を張り上げて鼓舞し、玄野、桜丘、東郷、JJ、ライスが頷いた。

やがて全員の転送が終わり、素早く状況の確認をする。

今の所、付近に敵はいない。リーダーを見てもとりあえずすぐ遭遇する位置にはいないようだ。

続いて場所。どうやら今回の戦場は駅近くの国際展示場らしい。

現在は『大恐竜博』の会場となっており、中には恐竜の骨などが展



示されているはずだ。

「敵は……近くにいないな」

「中にいるッぽいわね」

玄野がリーダーを慎重に確認しながら言い、桜丘は『大恐竜博』に複数の反応を発見した。

東郷は早速移動を開始し、建物の上へと跳躍する。

彼のスタンバイした位置を中心に陣形を組み、敵が東郷に近付かないようにしつつ、東郷の援護狙撃を受けながら戦う。それがベストの戦法だ。

そしてどうしても援護を受けられない建物の中には格闘能力に秀でたJJと桜丘を先頭にして突入するというのが皆で考えて出した最善の戦い方であった。

また、東郷の近くには必ず一人が待機して不意打ちを防ぐ事になっている。

そしてほむらは基本的に自由行動の遊撃だ。

とにかく片っ端から敵を駆逐して回るのが彼女の役割である。

一応この中で一番の実力者であり、今は全員にとっての師のような立場になってしまったほむらだが、だからといって今更協調性の無さが改善するわけでもない。

というより、連携が取れないというのが正しい表現かもしれない。

ほむら一人だけが突出しすぎている為に、玄野達が下手に援護をしなくてもそれはかえって彼女の邪魔になってしまう。

かろうじて彼女のスピードについていけるのは、ライスしかないない。

だからほむらは現状ではスタンドプレーに徹するしかないのだ。

そして、協調性がないといえどもう一人……。

「お、おい、和泉がいないぞっ！」

「あいつ……どこに行ッた」

和泉紫音もここに来ると同時に一人でどこかへ行ってしまう、彼の後についていったパンダもまた姿を消していた。

彼にしてみれば他のメンバーとの共闘などまるで興味がなく、興味

があるのはここにどんな敵がいて、どんなスリルを与えてくれるかだ。

何をしてもつまらない外の世界とは違う、生きるか死ぬかの快感がきつとここにはある。

それだけを望み、彼は一度解放されたはずの地獄に自ら帰ってきたのだ。

「気にする必要はないわ。それより陣形を乱さないで」

「しかし……」

「リーダーを見る限り、博物館に向かったらしいわ。」

私も今から行くから、見かけたらついでに拾ってくるわよ……必要があればね」

早くも浮足立っている加藤に、余計な動きをしないようにほむらは釘を刺した。

そうしなければ彼は和泉を探そうとして陣形を崩し、そして無駄な死者を出してしまうだろう。

やはりこの男はリーダーに向いていない、とほむらは思う。

善人である事は美德だが、リーダーが迷走すれば全員が迷走してしまうのだ。

故に皆を引っ張る者に必要とされるのは優しさなどではなく、状況を理解し最適解を出す機転と冷静さである。

何より加藤にはカリスマ性がない。彼にはリーダーに必要な素質が抜け落ちているのだ。

(強制的にでも玄野さんにリーダーを交替させるべきかもしれないわね)

そんな、本人に言えば落ち込みそうな事を考えながらほむらは地面を蹴って走り出した。

## 第15話 お前達は何なのだ？

恐竜博へ向けて走るほむらの視界に、今回の敵と思われる複数の生物が映った。

それはある意味ではこの場に相応しく、しかしこの時代には相応しくない存在だ。

全長は約2 m。猛禽類の鉤爪のような手足にワニのような口と鋭い牙。

ヴェロキラプトル……だっただろうか。

ほむらはあまり詳しくない恐竜の知識からそれらしき名を何とか引っ張り出し、とりあえずこの敵をラプトルと呼ぶ事にした。

「ヴオオオー！」

ラプトルが四体、ほむらを獲物と見て走ってきた。

ほむらも速度を落とさず走り、やがて手が届く距離まで近付いたところでラプトルが口を開いてほむらに襲い掛かる。

ガチン、とラプトルの牙が噛み合い、しかしそこに獲物の姿はない。ほむらは——上だ。ラプトルが噛み付くよりも一瞬早く宙を舞い、彼等を跳び越えながらラプトルを全てXガンのロックオン機能に捉えていた。

Xガンは二つの引き金を引く事で発射出来るが、先にロックオンを終わらせておけば銃口の向きや敵の位置に関係なく当てる事が出来る。

これはYガンも同様の事で、必中とまではいかないが一度ロックオンを終わらせたXガンの攻撃を避けるのは不可視の弾丸と合わさって非常に難しい。

少なくともほむらの姿すら見失っているラプトル達は自分が今ロックオンされ、撃たれている事にすら気付けないだろう。

ほむらはそのままラプトル達の背後に着地し、振り返る事なく駆け出す。

それによろやくラプトルが気付くも、追いかける前に身体が爆散して血の海に沈んだ。

ラプトルはほむらが倒したものが全てではない。

玄野達の所にも大拳して押し寄せ、しかし玄野達に近づく前に東郷の狙撃によって次々と頭が破裂していた。

ようやく近付いても、そこに待つのもまた精鋭だ。

JJの鉄拳がラプトルの顎にめり込み、そのまま跳躍。

天へ昇る龍の如き勢いでラプトルを殴り飛ばし、絶命させる。

ライスは縦横無尽に駆け回り、自らがラプトルよりも小さいのを活かして死角——胴体の下に潜り込んで素早く、その鋭利な牙で喉を噛み切っていく。

桜丘がバイクを爆走させてラプトルを片っ端からひき逃げし、玄野がロックオンで複数を捉えて同時に仕留める。

そして加藤は他のメンバーが撃ち漏らしたラプトルをYガンで丁寧に処理していた。

そんな中、東郷がその優れた視力で遠くにいる人型の何かを発見した。

それは麦わら帽子を被った、子供向けの漫画からそのまま出て来たようなのつぺりとした顔の異星人であった。

ガンツに表示されていたかっぺ星人……今回のターゲットに間違いないだろう。

「……………ターゲット発見。これより排除する」

東郷が引き金を引き、遠方にいたかっぺ星人の頭と胴体が弾け飛んだ。

これで今回の標的は始末したが、こんな事で終わるなどとは思っていない。

東郷が経験した過去二回のミッションでも、怒りんぼう星人と暴れんぼう星人はそれよりも強力な大仏と千手観音がいたし、チビ星人は一体ではなかった。

ならば他にボスがいるか、あるいは同じ星人が複数いるかのどちらかだ、という事は簡単に予想出来る。

しかし東郷にとってはどちらでもいい事だった。

自分に与えられた仕事はただ、撃つ事のみ。

ならば射程内に入った敵を淡々と処理し続ければいい。それがプロというものだ。

レーダーの反応を頼りに、恐竜博へ突入したほむらが見たものはトリケラトプスと戦っている和泉の姿であった。

今日ガンツに連れてこられたばかりの人間が星人と一騎打ちをしている……普通ならば援護に入らなければならぬ場面だろう。

しかしほむらはその必要はないと判断した。

和泉の動きが明らかに今日初めて戦う人間のそれではないし、何より彼は戦いを楽しんでいる。

下手に邪魔をして恨みを買う方が面倒臭い。

ほむらと和泉の視線が一瞬交差し、しかしどちらも相手と関わる気がないので声をかけるような事はしない。

ほむらはそのまま和泉を無視して別の反応がある場所へ向かい、和泉も何事もなかったかのように戦闘を再開した。

次の場所にいたのは、恐らく恐竜としては最も有名な存在であるT・レックスであった。

勿論ほむらはT・レックスの実物など見た事はないので、図鑑そのままの姿のそれが本当にT・レックスであるかどうかは分からない。

それが二頭。ジュラ紀の景観を再現した展示室で佇んでいた。

人工物である屋根や壁さえ目に入れなければ、まるで本当に太古の世界に迷い込んだような錯覚さえ覚えるが、ほむらのやる事は変わらない。

「試してみましようか」

いつも通りXガンを出そうとしていた手を止め、ほむらはキュウベえに持たせていたZガンへ手をかけた。

これだけの図体ならば、Zガンの破壊力を試すための的として丁度いい。

目にも見えぬ早業でZガンを抜き、発射する。

相手に反応さえさせない速度で撃てるならばロックオンの追尾機能すら必要なく、確実に当てる事が出来る。

発射音が響き、ここでようやくT・レックス二頭は自分達が撃たれ

た事に気付いたようだ。

だがもう遅く、少しのタイムラグを経て二頭のT・レックスは“消えた”。

……いや、消えたのではない。押し潰されたのだ。

Zガンによって生じた不可視の重圧が床ごと二頭を潰し、原型も留めぬ血の池へと変えてしまったのだ。

陥没した床の中は赤いプールのようであり、臓物や肉片が浮かんでいる。

「……………」

あまりの破壊力に使用した本人であるほむらすら言葉を忘れた。

性能はあらかじめ知っていたし、試し撃ちも済ませている。

だがそれでも実際に星人相手に使ってみると、衝撃が違う。

なるほど、解放を捨ててまで手に入れる武器なだけはある。Xガンとは殺傷力が段違いだ。

あの千手観音ですらこれで撃てば、持っている全ての宝具ごと押し潰して一撃で仕留める事が出来るだろう。

勿論撃たせてもらえれば……の話ではある。

大抵の使い手では撃つ前に灯籠レーザーで即死させられて終わるだろう。

すぐに衝撃から立ち直ったほむらはZガンをキュウベエの頭に乗せ、次の場所へと向かう。

Zガンという重い武器を押し付けられたキュウベエがプルプルしているが知った事ではない。

「わ、わけがわからないよ……」

部屋を移動すれば、そこにいたのは最大クラスの恐竜と言われるブラキオサウルスだ。

いや、正確に言うならブラキオサウルスの姿をした星人か。

ここまでのミッションで分かった事は、星人は星人なりに地球の文化を学んで社会に溶け込もうとしているという事だ。

ねぎ星人はアパート暮らしで基本的には何もせずに暮らしていた。パソコンで得た情報によると彼等はねぎだけで生きていけるらし

く、『ねぎ下さい』や『二本でいいです』などの言葉は彼等の主食であるねぎを購入する為に覚えた地球の言葉だろう。

そして、それ以外の言葉は必要なかったからそれしか覚え、会話が成り立たなかったのだ。

今にして思えば『ねぎあげます』というのは彼等にとつての大事な食料であるねぎを相手に差し出す行為であり、恐らくあれは降伏の意味をもっていたのだ。

あの時は分からなかったが、ねぎ親父には少し可哀想な事をしてしまった。

田中星人は地球人に擬態して暮らす事を選び、その擬態先としてテレビに映っていた有名人を真似た。

彼等が模倣先を選んだ『歌のお兄さん』は画面の中ではいつも子供達に囲まれ、慕われていたのでその姿と言動を真似れば地球人から警戒されないと思ったのかもしれない。

千手観音達は仏像に擬態する事を選び、そこでじっとしている事で地球に馴染む事が出来た。

チビ星人は……これだけはよく分からないが、恐らく彼等も人に化けるなりの手段があったのだと思われる。

そして今回の異星人は恐竜に扮し、恐竜博に隠れ住む事にした……というところか。

この事から分かるのは、これまで戦ってきた星人達は決して理解不能で支離滅裂な思考回路を持つ存在などではなく、常識がこちらと違うだけの確かな知恵のある生物だという事だ。

そして——今の所例外なく、先に仕掛けているのは常にこちらだという事。

ねぎ星人は放置しておけばきつと、あの後もアパートで暮らしてねぎを食べているだけだっただろう。

田中星人も、手を出さなければただお菓子を大量に買い込むだけの不気味なコスプレ野郎のまま終わっていた。

仏像達はあの戦いがなかったなら、今日もあの寺院で多くの参拝客に拜まれていたはずだ。

(読めてきた気がするわね、星人の正体が。

彼らはいわば不法滞在者。何らかの理由で地球に移住し、隠れ住んでいるだけで、今の所地球人に敵対的なわけではない。

そしてガンツはさしずめ、その不法滞在者を発見して追い出す警察のようなもの。

……ただし星人に人権はなく、追い出す方法は „Dead or Alive”。

そして、それを追い詰める私達もまた人権のない奴隷のようなもの)

あくまで予想である。

しかしこれまでに会ってきた星人の事を考えると、そこまでの外れだとも思えなかった。

だからほむらは銃を一度納め、対話を選んでみる事にした。

勿論、相手がそれを拒絶するならばその時は戦うだけだ。

「その貴方、地球の言葉は学んでいるかしら。

理解出来るなら答えなさい……貴方達は何故、地球に来たの

「キユ?」

「貴方達のような者がいるから、死者を流用した私たちのような複製兵士が生み出され、そして戦いへと駆り出されている。

答えなさい、貴方達は何を目的としてこの地球に入り込んできたの?」

「暁美ほむら……君は、知っていたのかい? 彼等の事を」

キユウベえにとつて、今までガンツの標的となったのが全て母星を失った漂流者だというのは周知の事実だ。

少なくともインキュベーターならば知っていて当たり前の事ではない。

しかしそれを教えていない暁美ほむらが言い当てたのは、流石に少しばかりの驚きがあった。

「ただの推察よ。けど、貴方の反応でそう間違えているわけでもない事が分かったわ」

「訂正するほどの間違いはないね」



「そう、訂正しなくていい程度の間違いはあるのね。後で聞かせてもらうわよ」

ほむらは両手をダラリと下げ、相手の返事を待った。  
勿論、決して油断しているわけではない。

この体勢からでもほむらならばすぐに射撃に移行する事が出来る。だからあえて隙を見せているのだ。

しばし睨み合い、やがてブラキオサウルスはしらばつくれる事が出来ないかと悟ったのか口を開いた。

「……小さき者よ、お前達は何なのだ？」

何故現地の生物なのだ？ 誰に頼まれた？

お前達には何も迷惑をかけていなかっただのに……」

やはり話そうと思えば話せたようだ。

先程のラプトルやT・レックスのような知能の低い『兵士』である可能性もないわけではなかったが、とりあえず運がよかったとおことう。

ほむらはブラキオサウルスを見上げながら、自分が言える範囲で答えた。

「私達は……駒よ。貴方達を排除しようとしている何者かが死者を複製して生み出した都合のいい兵士。

頼まれてやっているわけではないわ……私達に選択権は与えられていない……ただ貴方達と戦うしか道がないから戦っている。

現地の生物……というのは、この科学力を指してのものかしら」

「……そうだ」

「それは分からないわ。地球外のテクノロジーではあるのでしょうけど、どこの誰がこんな技術を地球に提供したのかは知る術がない」

ほむらの返答にブラキオサウルスは思案するように首をかしげた。

見た目は草食恐竜なので可愛らしいが、きつと彼なりに何か考えているのだろうか。

やがて彼はほむらを見据え、威圧するように言う。

「我等は……我らの住む惑星系は消滅し、そして我等は宇宙を漂流し続けた……」

その末に、ようやく生物が住めるこの惑星を見付け、少しずつ……移住を始めた。

我等はそれぞれ、この星の原住民に……あるいは文化に……成り代わり、ゆっくりと社会に浸透してきた」

「移住はもう終わっているの？」

「……いずれは、より巨大な者達がこの地球へ訪れる。今も宇宙船に乗って……ゆっくりと近付いている……」

ブラキオサウルスの言葉を聞き、ほむらは目を閉じた。

これが全てだとは思わないが、彼等の正体への取っ掛かりが掴めたのは大きな進歩と言つていいだろう。

現状ではまだ推測しか出来ないが……恐らく彼らの正体は、数種類の異星人が共生する巨大国家……いや、巨大コロニーだ。

ねぎ星人、田中星人、チビ星人、千手観音らが同じ生物だとはほむらには思えない。

あれらは間違いなくそれぞれが別の星で別の進化を遂げたものだ。しかしそれらが同じ理由で地球に来ていて、それでいて衝突をしていないならば彼等は横で繋がっているという事になる。

数多の異星人が一つの共同体を形成し、それらが地球という星に住みたがっているならば……穏便に終わるはずがない。

必ず土地が足りなくなり、必ず原住民を排除するという選択肢に辿り着く。

今来ている異星人は、いわば先遣隊。まずは事を荒立てずに地球に入り込み、地球を知り、そして有事には内部から地球人陣営を崩す兵にもなる。

そしてガンツは……ガンツの裏にいる何者かは、それを予見して異星人の排除に乗り出したのだ。

事を表沙汰にしないのは、混乱を避ける為だろうか。

これも推測でしかないが、どれだけ潜り込んでいるかも分からない異星人を下手に刺激しては一斉に暴れだしかねない。

軍が動いては、地球人が気付いているという事を相手に気付かれてしまう。

警察も同様だ。組織は動かせない。

だから、世界から消えた存在……いないはずの人間……即ち死者を使つて裏から潰して回る事にしたのではないだろうか。

つまり、自分達がやらされているのは暗殺なのだ。

そうほむらは考えた。

「そう……有難う。胸のつつかえが取れたわ。

おかげで——遠慮なく引き金を引ける」

ほむらはZガン抜き、ブラキオサウルスへ向けた。

よく分かった。やはりこいつらは敵だ。

実は少し不安があったのだ。自分達は無意味にわざわざ藪をつついているのではないかと思っていた。

案外彼等の数は少なく、放つておけば何も起こらないのに無駄に寝た子を起こしていただけではないのかと……そう思っていた。

とんでもない……ガンツは正しかった。

やり方は腐れ外道そのもので、到底許す気になれないが、異星人を秘密裏に処分するという一点においてのみ、ほむらはガンツと、その裏にいる者の正しさを肯定する。

こいつらは侵略者だ。今は無害な隣人の顔をしているが、本隊が来れば仮面を捨てて敵に早変わりする。

争う気がない——のではない。今は争う気がない。それだけだ。

本当に共生する意思があるならば人類側に話を通すくらいの事をするだろう。だがそれをやっていない。

インキュベーターと同じだ。表向きはどれだけ無害な顔をしていても、本質的な部分で人類を家畜か、あるいは現地のどうでもいい生物くらいにしか考えていないのだ。

事前に話す価値もないと思っている……だから彼等は無断で移住しているのだろう。

冗談ではなかった。

何度もループをして、何度も負けて、その果てにようやくまくどかが平和に暮らせる今を勝ち取ったのに、その平和の裏にこんな侵略者達が潜んでいては安心など出来ない。

だから撃つ、排除する。

まどかを脅かす全てを、先に逝ったオリジナルに代わってこの手で消し去る。

その鉄血の覚悟を、暁美ほむらは改めて魂に刻んだ。

「お前達にも事情がある事は理解したわ。

けど、だからと言って黙って侵略されてやるつもりはない」

もう迷いはない。

ほむらは躊躇なくZガンを撃ち、ブラキオサウルスを圧死させた。

## 第16話 俺はお前を超えてやる

ブラキオサウルスを仕留めたほむらだったが、戦いはまだ続いていた。

ブラキオサウルスは一体ではなく、もう一体いたのだ。

それも、先程の個体よりも遥かに巨大な親とも呼ぶべきものが。

加えて頭部には鋭利な刃が付いており、攻撃力も先程の個体とは比較にならない。

恐らくはこれがボスだろうとは思うが、ボスと思われる大仏が単なる前座でしかなかった千手観音戦の前例もあるので油断は禁物だろう

どちらにせよ、やる事は一つ。現れるならば倒すだけだ。

「許すまじ……許すまじ、小さき者。

我が子を殺めた者……この身滅びるまで滅してくれよう。覚悟せよ、小さき者」

ブラキオサウルスは流暢に言葉を話しながら、ほむらへの憎悪を滾らせていた。

しかしほむらはその憎悪を氷のような無表情で受け流しながら、恐竜の猛攻を悠々と避ける。

このブラキオサウルスはその巨体を活かした踏み付けや、長い首を使っての頭突きが主な攻撃手段だ。

特に頭突きは、本物のブラキオサウルスにはない刃が頭部に付いているので当たれば一撃必殺の威力を秘めている事だろう。

ただしそれは当たれば、の話だ。

ブラキオサウルスの不幸は、ここが室内だった事だろう。

恐竜博は多くの客が入り、恐竜の骨を展示するという役割上、普通の建物よりは言うまでもなく広い。

しかしそれでも室内である事に違いはなく、ブラキオサウルスの巨体には窮屈な場となってしまふ。

首を高速で振り、加速を乗せて頭突きを放つ。

しかし壁や障害物のせいで思うように動けず、その軌道はどうして

も限定されてしまう。

来る場所が分かれば避けるのは容易い。

ほむらは迫りくる打突を前に顔色一つ変える事なく、最小限の動きだけで避けてみせる。

そればかりか、ブラキオサウルスの嵐のような猛攻に晒されながら少しずつ前へと前進していた。

その異常さは、他の恐竜を始末して駆け付けてきた和泉が戦慄するほどだ。

(何だ……アイツは……何故あんな動きが出来る……!?)

和泉にはブラキオサウルスの打突は見えない。

それほどに速く鋭い攻撃なのだ。

自分がほむらと同じ場所にいたとして、あの打突を何度も凌げる自信などない。

だがそれをほむらは平然と行っているのだ……あろうことか、スーッなしで。

(暁美ほむら……人間、なのか……?)

『黒い玉の部屋』の管理人は基本的に毒舌で、地の文でも登場人物を『間抜け』だの『偽善者』だの『痴女』だのと散々に扱き下ろす。

だがそんな中であって暁美ほむらへの評価は『長い付き合いになるだろう』という、彼なりの最高評価であった。

これは結局の所、管理人——西丈一郎が田中星人との戦いで呆気なく死んでしまった為、長い付き合いにはならなかったのだが、これは要するに西をしてほむらは死なずに残り続けると確信するほどに別格だったという事だ。

そして実際に目で見て、それは正しかったと和泉も理解した。

確かに別格だ。他の連中とはレベルが違う。

身体能力が怪物染みているというだけではない。『読み』のレベルがおかしいのだ。

今だって、恐竜の打突を避けている動きそのものは派手ではない。常人並の動きしかしていない。

なのに掠りもしないのだ。敵の攻撃を完全に読み切り、徒歩だけで

回避してしまっている。

場慣れしているという次元ではない。

ガンツのミツシヨンと同等かそれ以上の修羅場を毎日潜り抜けて来たかのような異常な場慣れ。非日常と日常の融合。

他の連中のように日常から非日常に来たのではない。

別の非日常からこの非日常へ迷い込んできた……としか形容出来ない異端さが暁美ほむらにはある。

まるで別世界の住民であった。

暁美ほむらは自分達が見ていない物を見て自分達の知らない道を歩んできた存在だ。

(別世界の中の更なる別世界の住民、か……)

ゾクゾクとした高揚感が背筋を駆け抜けて行く。

冷や汗が気持ち悪いくらいに流れるが、それに反比例して和泉の口元は弧を描いていた。

やはり帰ってきて正解だった。

そう思う和泉の前でブラキオサウルスが地面に頭突きをし、砂塵が巻き上がる。

そして顔を上げた時——刃の峰の上に、ほむらが乗っていた。

ブラキオサウルスは気付いていない。彼の刃は頭の上に付いているのでそこに乗られてしまうと、どうしても死角となる。

そんなブラキオサウルスに向けてほむらがXショットガンを発射し、そのまま軽やかに跳躍して地面に着地した。

その直後にブラキオサウルスが倒れ、動かなくなる。

外傷はない。だがXショットガンのロックオン機能で心臓をピンポイントに破壊され、絶命したのだ。

そのブラキオサウルスへZガンで止めを刺し、原型を留めない肉塊へと変えてほむらは優雅に髪をかきあげた。

(戦いは常に冷静に……それでいて止めは容赦なく、念入りに、か……)

慣れている……恐ろしいほどに)

ほむらは今の戦いで汗一つかいてはいない。

身体を動かした事による体温調節の汗も、精神的動揺による冷や汗もない。

それはつまり、肉体的にも精神的にも余裕の戦いだっただけという事だ。

……ふと、和泉紫音は自分の腕が震えている事に気付いた。

それは恐怖から来るものなのかもしれないし、興奮から来るものなのかもしれない。

今、彼の心を占めているのは歓喜と恐怖であった。

生まれて初めて、格上と認める他ない他者と出会った。

何をしても人より出来て、何をしても褒めたたえられる。何もしなくてもその容姿のおかげでチャホヤされる。

何一つとして手応えのない日々……自分以外の人間がレベルの低い動物にしか思えなかった。

そんな彼だからこそ、この地獄に戻る事を求めた。

そして今、地獄の中で彼は出会ったのだ……世界の終わりすら何度も見届けてきた、暁美ほむらという存在に。

(超えてやるぞ……俺は、お前を超えてやる……！)

初めて、明確な目標が出来た。

こいつに並び、超えたいと願う相手に出会えた。

今はまだ、きつと相手の眼中にすらないだろう。

暁美ほむらは和泉紫音など、気にも留めていない。

今だって和泉に一瞥もくれる事なく、その横を通り過ぎて行った。

だが、いつか……いつか、無視出来ないようにしてやる。

そう和泉紫音は決意し、強くなりたいとこれまでになく強く想った。

◇

ボスを倒したほむらが外に出ると、どうやら玄野達の方も敵を掃討し終えたらしくこちらへ駆け寄って来るのが見えた。

犠牲者は今回もなしだ。全員が生きている。

倒れているラプトルの数は軽く三十を超えており、これだけでもメンバーの成長具合が分かるというものだ。



田中星人と戦っていた頃のメンバーならばまず、ほむら以外は全滅していただろう。

それを相手に無傷の完勝となれば、いつか全員が100点を取るのも夢物語ではない。

「あ、転送始まった」

まず最初に桜丘の頭が消え始めた。

随分と手応えのない相手だったが、本当にあれがボスだったらしい。

千手観音と比べると、その後の二回のミッションは少し拍子抜けしてしまいそうになる。

難易度を言えば田中星人からチビ星人、そして今回のかっぺ星人と順当に上がっているのだが……やはり途中の千手観音だけ出る順番を間違えている気がしてならない。

しかし全員が気を抜く中、ほむらは刺すような視線を感じて静かに臨戦態勢を維持した。

気配を感じたのだ……何かが、殺意を持ってこちらへ近付いて来る気配を。

「相撲だな。力士が一番だ」

「ふざけるな。裸のデブに何が出来んだよ」

「力士をただのデブだと思ってるのか？ 全身筋肉の鎧なんだぜ」

「いやもう結果出てるから」

「結果が出ている……？ ああ……あの事か。」

確かに……そう、惨憺たる結果だった。

だが……彼等は力士じゃない。元力士だ」

どこでも聞くような『最強の格闘技談義』をしながら、四人の男達が駅の階段を降りてきた。

全員が黒いスーツを着用しているが、アクセサリやサングラスで飾ったその姿はサラリーマンというよりはホストにしか見えない。

その中で坊主頭のサングラスをかけた男が相撲最強説を推し、黒髪無精髭の男がそれを否定している。

「ボクシングのヘビー級チャンピオンだな。奴等には誰も勝てねえ

よ」

「ストリートファイトだぜ。殴る事しか出来ねえ奴等が勝てつかよ」  
「ボクシングには蹴り技がない……そう思っていた時期が俺にもありました。」

俺は色んな異種格闘技見て答え出してんだよ。わかッてねーな」  
「横綱に勝てる人間はいねえ。逆三角形は三角形に勝てないんだよ」  
「いやヘビー級ボクサーだね。奴らのジャブは避ける事が出来ねえのさ」

二人の言い合いは平行線だ。

両者が最強と信じる者を推す以上、実際に戦って結果が出ない限りどちらも退かないだろう。

そこにリーダー格と思われる金髪の男が煙草を吹かしながら一石を投じた。

「ブルースリーは？ ジークンドーだろ」

「……まア、確かに……ブルースリーは強え」

一見すると何ら特筆すべき点のない日常の会話に思える。

そこら辺を偶然歩いているだけの仲のいい四人組に見えてしまっても無理はない。

しかし彼等はそのような会話をしながら、この場には『狩り』に来ているのだ。

「おッ、いたいたア」

「よし……」

「まじかよ。あッ、ちょっと、コンタクトすんの忘れた」

「バーカ。早くしろよ」

そんな四人のやりとりを、ほむらは無関心を装って観察していた。

四人のうちの三人の視線はこちらを捉えている。

偶然こちらを向いているというのではない。間違いなくこちらの姿が見えている。

そして最後の一人がコンタクトレンズを嵌めると、彼の視線もしっかりとほむら達へと向いた。

どうやらあのコンタクトレンズを嵌めると、こちらが見えるように

なるらしい。

この時点でまず、ただの一般人はあり得ない。

ほむらは視線を向けないまま、以前ヤクザから拝借した拳銃をポケットの中で手にした。

「なんだよ、消えてくぞオイ」

「さっさと片付けるぞ」

男達はあくまで自然な動作で近付いてくる。

そこには、これから何かをしようという緊張感はほとんど感じられない。

彼等もまた非日常の住人……日常の動作を行いながら眉一つ動かさずに人を殺める事が出来る。

そして坊主頭の男が指を向けると、何とその指先が本物の拳銃となつて手から独立した。

その視線は、彼らから見て最も近い位置にいる加藤へと向けられている。

加藤は背中を向けて玄野と話しており、気付いていない。

そして黒服が発砲――。

――するよりも速く、ほむらが連続で放った銃弾が四人の眉間を撃ち抜いた。

「がッ！」

「ぐあッ」

「ちッ」

「おおッ!?!」

四人の額から鮮血が吹き出し、突然の事に加藤達が驚愕の表情で振り返った。

ミッションが終わっているのに、突然無関係の男達を撃ったほむらの行動が理解出来なかつたのだ。

しかしその驚きは新たな驚きによつてすぐに塗り替えられる事となる。

眉間を撃たれたはずの四人が、死んでいないのだ。

「暁美！　これは一体……」

「敵襲よ！ 迎え撃ちなさい！」

事態を呑み込めていない加藤を叱咤し、ほむらは迷いなくZガンを発射した。

四人の男はすぐにその場から跳躍して重圧を避ける。

そのまま黒髪の男が指を銃に変えようとするも、驚くべき速度でほむらが彼の前に現れる。

彼等が避けると同時に……いや、避けるよりも先に跳ぶ方向を予測して先回りしていたのだ。

Xガンが躊躇なく連続で放たれ、そのままほむらは男に興味を失つたように彼を踏み台にして跳んだ。

「このこむす……がアツ!？」

黒髪の男が破裂し、血と肉片を撒き散らした。

続いてほむらは老人へと銃口を合わせるが、そこに金髪の男が刀を手割って入る。

二対一……しかしほむらに動揺はなく、ガンツソードで金髪の男の斬撃を止めた。

一瞬の均衡——しかし男の表情が苦痛に染まり、力が緩む。

ほむらと男が鏝迫り合いをしているその僅かな隙を狙い、ライスが男のアキレス腱を食い千切っていたのだ。

無論、その隙を逃すほむらではない。蹴りで金髪男を吹き飛ばし、体勢を立て直す。

着地と同時に老人がほむらに殴りかかるが、その腕が瞬時に弾け飛んだ。

「人を殺す時にはつまらんおしやべりをしている暇に引き金を引く事だ……」

一早く事態を理解した東郷の援護射撃だ。

ほむらは腕を失った老人の顎にXガンを叩き込み、脳を揺らして動きを止めつつ連続で発砲。

素早く足払いで転倒させて次の敵へと向かい、老人は爆散した。

「せいやあぁッ！」

「空手かい！」

相撲最強説を推していた坊主頭の相手をしているのはJJだ。

最強の格闘技は空手だろ。そう拳で語りながらJJは男を打ちのめした。

男は何とか距離を空けようとするも、JJはそれを許さない。

巧みにフットワークを駆使して距離を潰し、的確に急所へ拳を刺していく。

その最中、不意に男の頭に手が乗せられた。

老人を始末したほむらが片手一本で彼の上に乗れ、Xガンを脳天に突き付けていたのだ。

「待ッ……」

Xガンの引き金が引かれ、男の脳天に吸い込まれた。

そのまま結果を見届ける事もなくほむらは彼の上から降りて走った。

後ろで坊主が爆散し、金髪男の端正な顔が焦りに歪む。

彼とは和泉が斬り合いをしており、その技量は互角だ。

このまま割って入って止めを刺す。

そう考えていたほむらだが、しかし視界が突然あのマンションに変わった事で自分の転移が始まってしまった事を悟った。

どうやら、決着は次に会う時まで持ち越しになりそうだ。

## 第17話 我々には敵がいる

今回も何とか、一人も欠ける事なく全員が部屋へと戻ってくる事が出来た。

しかし場に漂うのは生還の喜びではなく、困惑だ。

今まで一度だって、ミツシヨンが終わった後に攻撃を受けた事などなかった。

加藤はほむらが部屋に戻ってきたのを見ると、問い詰めるように声を発した。

「暁美……何で撃った？ あいつらの目的が何かも分からないうちに撃つなんて……」

加藤の目には、ほむらが先に戦端を開いたようにしか見えなかったのだろう。

無理のない事だ。確かに先に発砲したのはほむらであり、彼女が一方的に攻撃を仕掛けたようにしか見えない。

だがそんな加藤の肩を玄野が掴んだ。

「計ちゃん……？」

「加藤、違う……あいつら、最初から俺達と戦う気であって……」

先に暁美が撃ったんじゃない……あいつ等が武器を出したのが先だ。だから暁美が動いたんだ」

「し、しかし……」

玄野に説得されても、加藤には納得出来ない事だった。

もしかしたら話し合いに来ていたのかもしれないのに、いきなり人の姿をした者を撃つなど、加藤には到底出来ない事だ。

そんな彼を和泉が鼻で笑う。

「おめでたい男だ。守られた事にも気付いていないのか」

「えッ」

「位置関係から言ッて、奴らに先手を許せばまず真ッ先に撃たれてい  
たのはお前だ。」

「そもそも奴等は普通じゃない。明らかにこちらを認識していたし、  
頭を撃たれても死ななかつた」

腕を組み、クールに決めながら和泉が言う。

それは彼の美男子ぶりと相まって非常に様になるが、パンダが懐いて纏わりついているせいでイマイチ恰好がついていなかった。

「暁美、あの連中は何者なんだ？ 人間……じゃねえよな」

「……敵である事は間違いないでしょうね。」

大方、星人か何かの一種で、ガンツのミッションの対象になる前に私達の事を突き止めて襲撃してきたって所じゃないかしら。まあ、予想だけだ」

「な、なるほど……ソツか、そうだな。頭のいい星人がいれば、そりゃあ襲撃される前に襲撃しようツて思うか……」

ほむらの推測に、玄野はとりあえず納得したようだ。

他のメンバーも加藤以外は表情を引き締め、例の黒服達を敵であると強く認識する。

人の姿をしているだとか、そんな事は関係ない。

気を抜けばやられる……ならば次に会った時は容赦しない。そう決意を固めたのだ。

『それぢわ ちいてんをはじめる』

こんな時でもガンツは空気というものを読まない。

機械的に恒例の採点画面が表示され、全員がとりあえずそちらを向いた。

『かとう。4てん。』

TOTAL7てん。あと93てんでおわり』

加藤はラプトルを四体ほどYガンで倒したが、点数が低い。

どうやらラプトルは見た目に反してたったの一点しか点数がないらしい。

『くろのくん。13てん。』

TOTAL38てん。あと62てんでおわり』

玄野はラプトルとしか戦っていないはずだが、一人で13体も始末したらしい。

Xガンのマルチロックオンを使用したのだろうか、それにしても凄まじい暴れぶりだ。

順調に才能を開花させ始めているようである。

『さくらおか。7てん。』

TOTAL13てん。あと87てんでおわり』

バイクで引き逃げアタックを繰り返した桜丘は、ラプトルを弱らせるという役割は果たしていたものの、止め自体は他に譲ってしまった。

しかし決して活躍していなかったわけではない。

『じえいじえい。6てん。』

TOTAL18てん。あと82てんでおわり』

JJは僅かに六体。やはりいくら強くても素手ではあまり効率がよくない。

むしろ玄野がマルチロックオンで一斉に仕留める前にこれだけの数を素手で倒したのを褒めるべきだろう。

『とうとう。15てん。』

TOTAL42てん。あと58てんでおわり』

狙撃手は今日も強い。

ラプトルを数匹始末し、かつペ星人も撃破した彼は今や立派なエースだ。

『いずみくん。11てん。』

TOTAL11てん。あと89てんでおわり』

こちらは量より質で、玄野達のいない所でトリケラトプスを相手に奮闘をしていたが点数では玄野や東郷に一步負けてしまった。

しかし今後の活躍に期待出来る点数だ。

『らいす。5てん。』

TOTAL14てん。あと86てんでおわり』

基本的に援護に徹し、敵の脚などを狙うライスは点数をあまり稼げない。

しかしそれでも、0点常習だった昔と比べれば見違える成長である。

『へんなの。0てん。』

わけがわからないよ』



相変わらず役に立たないナマモノである。

『ホイホイ。0てん。』

やるきは感じるのだが和泉につきまといすぎ』

パンダは採点にまるで興味を示さず、今も和泉にじやれている。

一体和泉の何がそんなに気に入ったのかは、きつとパンダ自身にしか分からないだろう。

『ほむら。50てん。』

TOTAL83てん。あと17てんでおわり』

そして今日も点数を荒稼ぎしたのはほむらだ。

彼女がいるせいで皆が点数を稼げず解放が遠のくが、彼女がいるから生存率が上がっている。

実際、彼女がいなければこの中の何人かは今頃ここにいなかっただろう。

そう考えると、何とも微妙な立ち位置であった。

「ともかく、今回も生き残れた……」

加藤が安堵の息を吐き、場にも緩んだ空気が蔓延し始める。

しかしほむら、東郷、和泉といったメンバーは依然として気を引き締めたままであった。

ほとんどのメンバーはこのミッションと日常を切り離して考えたがる。

異常なのはこのミッションの間だけで、それが終われば……少なくとも次に呼ばれるまでは日常に帰れるのだと思っている。

それは無理のない事で、心が擦り切れないようにする為の無意識の逃避であり、心の自衛だ。

だが違う、そうではないのだ。日常と非日常はもう切り離せない。ガンツのミッションがない時でも、見えていないだけで星人は存在している。

姿を消して……あるいは人や物に擬態して、奴等は今もこの星のどこかに隠れているのだ。

そして、ミッションと無関係にこちらを狩りにくる勢力がある事も確認出来た。

(手を打つ必要があるわね……でなければ、この中の何人かがミツシヨン外で狩られる事になる)

あの黒服達の事を調べる必要がある。

調べ——叩き潰す必要がある。

ミツシヨンの標的かどうかなど関係ない。向こうが仕掛けて来る以上、迎え撃つなんて呑気な事は言つてられないのだ。

奴等を追い、ミツシヨン外で殲滅する。

そう、ほむらは決意を固めた。

◇

玄野アキラは考える。

人間が神の味方か、悪魔の味方かに分かれるとしたら自分はどちらなのだろうと。

善と悪、自分はどちらなのだろう。

彼自身は、ずっと神の側だと信じていた。

兄の玄野計と違って、14歳なのに身長は180もあるし、苦勞せずに勉強が頭に入つて来る優秀な頭脳と、優れた身体能力を併せ持っている。

顔立ちはモデル並に整っており、異性にもとにかくもてる。

付き合っている彼女は年上でスタイルのいい美人だ。

そんな彼女は今、一糸纏わぬ姿で甲斐甲斐しく自分の髭を剃つてくれている。

「あつ、ごめん、今横にずらしちゃった！ 絶対切っちゃった！」

「いいッてほら、切れてないだろ。」

もういいよ……ヒゲなんかあんまないし……」

彼女は少し失敗をしてみたが、アキラは気にしていなかった。

元々髭なんてないようなものだし、それに肌も切れていない。

昔から何か、不気味なまでの強運というか偶然というか、そういうものが常にアキラを守ってきた。

不思議と怪我をせず、風邪もひかず、偶然と呼ぶには出来すぎなくらいに彼は何かに守られている。

「おこッた？」

「おこっけないよ」

髭剃りの失敗でアキラが怒ったのかと彼女が心配してくるが、アキラは穏やかに気にしていない事を告げた。

全てに恵まれ、満たされている。神に愛されるとはこういう事なのだろうとアキラはずっと考えていた。

だがそんな彼にもいくつか悩みがある。

……最近、何だか妙に心が冷えているのだ。

誰が不幸になろうと知った事ではないし、人類が滅亡しようとする気にはならないだろう。

命や愛という言葉を聞くと不思議と気分が悪くなる。

似たような症状がないかとネットで調べた事もあったが、大体どこでも『思春期なら誰もが通る道』だの『厨二病乙』だのといった答えしか出てこない。

実際アキラは14歳なので、そういう部分もあるだろうが何か違う気がするのだ。

それに頭痛が酷い。最近は常に悩まされている。

まるで自分が自分ではないような感覚……それが彼を苦しめていた。

彼女と別れた後も、頭痛は酷くなる一方であった。

何もかもが夢の中の事のように現実感が薄い。

そんな状態で歩いていたらからか、道で車にはねられてしまったが……何故か、何ともなかった。

少しぶつかったとかいうレベルではない。

高速で走って来る車にぶつかり、撥ね飛ばされた。

なのに無傷だ。痛みすら感じなかった。

(なんだよ……なんなんだよ……)

なんでだ？ 車に撥ねられたんだぞ？)

道を歩きながら、自分で自分に戸惑っていた。

自分の事なのに全く分からない。自分が自分であるという確証が持てない。

他の事が気にならなくなり、気付けば街角の呼び込みに誘われるま

まに『自分発見セミナー』という意味の分からない講習会に参加したりもしていた。

自分でも何をやっているのだと思う。

「ナノマシーンが今から数百年前に……」

このナノマシーンはウイルスのようなものでこれが体内に入った生物は……」

部屋の前で講師が何か胡散臭い事を言っているが、アキラにはどうでもよかった。

元々興味があつて来たわけではなく、ただ流されて入ってしまっただけだからだ。

それに、そんな事より頭痛が酷くて気が散る。

「全ての細胞が入れ替わるのに数週間かかる。」

見た目はそのままに見えても、自分が自分であつて自分でない感覚！」

講師の最後の言葉にアキラは思わず顔をあげた。

何故ならその感覚は、今まさに自分を苦しめているものであり、誰も説明出来なかったものだからだ。

「皮膚は頑丈になり筋力もとても強くなる。戸惑う事はない、新たな能力を全て受け入れるのだ」

これも心当たりがあつた。

剃刀を横にずらしても皮膚は切れず、それにここに来る前に車にはねられたが無傷で済んでいた。

「主食は人間の血液とする所から吸血鬼として、世界中で知られる怪物のモデルになっているのではないかと推察される。」

勿論普通の人間の食事でも生きてゆけるが、頭痛が慢性的に起こり、背中に湿疹が……丁度蝙蝠の羽のような……」

アキラは絶句した。

先程までただの胡散臭い講師としか思っていなかった男の言葉が、全て自分の症状と一致しているのだ。

吸血鬼？ ナノマシン？ 新たな能力？

どれも普通ならば信じ難い事で、笑い飛ばすべきものだろう。

だがアキラは、講師の言葉を笑う事など出来なかった。

「我々には敵がいる。それは十字架でも神父でもない。

黒い機械の服を着た連中だ」

スクリーンに映像が転写され、そこにSF作品のような黒いスーツを着た人間が映し出された。

現役のカンツメンバー……ではない。先日の戦いはほむらが暴れまわったせいで、黒服達は写真を撮る所ではなかったからだ。

なので今映し出されているのは、恐らくはもうこの世にいないだろう過去の誰かである。

とはいえ、そんな事をアキラが知るはずもない。

「人間ではない事に誇りを持つてほしい。人間を捕食し、唯一我々の天敵であるこの連中を根絶やしにする」

その後も説明は続き、吸血鬼の能力や弱点、生態などが語られる。しかしどれもアキラの頭には入っていなかった。

自分がいつの間にか人間ではなくなっていたという事実にも、それどころではなかったのだ。

セミナーが終わり、外を歩きながらアキラは思う。

神に愛されていた、などと思っていた過去の自分を笑ってやりた  
い。

何が神に愛されているだ……自分は悪魔に愛されていた。

気落ちしながら歩いていたアキラだが、不意にその足が止まった。前から歩いて来る女に、不思議と視線が釘付けになってしまったのだ。

流れるような美しい黒髪、人形のように整った顔立ち。

胸は平たいが、決してそれは彼女のイメージを損なうものではなくスレンダーな魅力を引き立てている。

年齢はアキラと同じくらいか。アキラと違って年齢離れた容姿をしているわけではなく、幼さを残すその容姿と身長は年相応だ。

しかし放つ雰囲気は異様だった。

まるであの少女一人だけが別世界から迷い込んできたような……  
研ぎ澄まされた、とでも言えはいいのだろうか。

刺すような……触れる者を切り裂くような……磨かれた日本刀のような……放たれる寸前の拳銃のような……凡そ日常では出会う事もないだろう、異質な空気を彼女は背負っている。

着用しているのは少女のファツションとしては珍しいビジネススーツに似た服だ。

首元にはネクタイを締め、ズボンは短パンだが下にタイツを着用している。

手には……手袋だろうか？ 少し変わったデザインの、革製のような手袋で指先まで覆い隠していた。

足元には飼い犬と思われる犬がリードもなしに追従しており、犬用の可愛い服でこれまた手足の先まで覆っている。

黒髪をなびかせて少女——ほむらはアキラとすれ違い、そのままセミナーの方向へと歩いていく。

そしてアキラが振り返った時、ほむらは既にその場から忽然と消え去っていた。

「ここね？ ライス」

「ぼー！」

アキラとすれ違ったほむらは、Xガンを出しながらライスへ確認を取る。

そうしてから誰も見ていない事を確認し、周波数変換装置を使う事で周囲の景色に溶け込んで姿を消した。

ほむらの現在の服装は新しく新調したビジネススーツ風のファツションだが、これは手足の先や首元を隠すために用意したものであり、下にはガンツスーツを着用している。

別になくとも困らないのだが、流石にスーツなしで消える事は出来ない。

ライスは犬用のファンシーな服を改造して着せているが、やはりこちらも下はガンツスーツだ。

ミツションが終わった後、ほむらはライスの嗅覚を頼りとしてあの黒服達の行方を追っていた。

そして今、ライスの優れた鼻があので黒服達と似た匂いを捉えたのだ。

それがこの、一見どこにでもあるような胡散臭い『自分発見セミナー』である。

「行くわよ」

「グルル……」

ほむらがセミナーの中へ突入し、後にライスが続く。

襲撃されるのを待つなど性に合わない。

向こうが戦争を望むならば、こちらから打って出て殲滅するのみだ。

ほむらの突入より僅か十分後。

『自分発見セミナー』は血の海に染まり、動く人間——否、吸血鬼は一人もいなくなった。

## 第18話 私は情報が必要としている

「まじッすよ、ここ渋谷ッす！」

人通りの多い渋谷の往来の中で一人の吸血鬼が電話をかけていた。帽子に眼鏡、ラフなコートを着用し、傍目にはただの人間にしか見えぬ。

実際、普段は人間として振る舞う事で社会に溶け込んでいるので見分けるのは至難の業だろう。

そんな吸血鬼の末端に属する男は名を茂武といい、同じ吸血鬼の組織に属する仲間へと声をかけていた。

その理由は、渋谷を歩いていた時に偶然ガンツメンバーと思われる男を見かけたからだ。

腹が立つほどに整った顔立ちと、男にしては珍しいセミロングヘア。

それは氷川——組織でも最強と目される四人の武闘派の中でもリーダー格に位置し、先日ガンツメンバーと交戦した中で唯一の生き残りでもある金髪的美丈夫——から仲間達に伝達された、黒い機械の服を着たメンバーのうちの一人と一致する。

無論それだけでは決定打にならないが、氷川が過去にもその男と出会っていたおかげで昔の写真を引っ張り出せたのが大きかった。

氷川曰く、しばらく見なかったので死んだと思っていたらしいが先日再会した事でそれが間違いであったと分かったのだとか。

その写真の男が今、恋人と思われる女を連れて渋谷を歩いているのを茂武が発見したのだ。

「今一緒に移動中です、はい！ 間違いないツスよ！」

はい、出来るだけ多人数、強い人お願いします。

……あッ、まじスか？ 斎藤さん達近くにいるんスか？ はい、充分ス！」

『ああ？ マジ？ 本物だろーな、おい。』

分かった、すぐに行く……』

「はい、お願いします！ ……とところで斎藤さん、風邪スか？」



なんか、声が普段と少し違うような……」

『あー……今ゲーセンいつからよ、それで変に聞こえんじやね？』

周りうるせーからよー……』

「それよりだ。俺が行くまで仕掛けるんじやねーぞ。

仲間になるべく多く集めろ。一人でも多くだ。

先日にくっちは大勢殺られてる……油断せずに集められるだけ集めろ」

茂武が話す電話の向こう側。

そこは地獄絵図であった。

壁や天井の至る所に血液が飛び散り、臓物や肉片が散乱している。

そして電話の持ち主であり、茂武が今話しているはずの斎藤は——物言わぬ屍となって床に転がっていた。

そんな彼を見下ろしながら、電話で話しているのは暁美ほむらだ。

手にはボイスチェンジャーを持ち、血の海の中で顔色を変えずにあまり得意ではない演技を続けている。

「ああ、絶対に先走るな。勝率は高けりや高いほどいい。

お前はとにかく、付近にいる仲間全員に声をかけるんだ。

じゃあ……今から行くからよ。待っている」

電話を切り、ほむらはボイスチェンジャーを片付けた。

ライスの鼻を頼りに吸血鬼の拠点の一つであるセミナーを潰したのが昨日の事で、そのうちの何人かを『尋問』して、吸血鬼の溜まり場となっているこのゲームセンターの位置や、何人かの名前と顔、住所やその他諸々の情報を得る事にほむらは成功していた。

余談だが今回はライスは留守番だ。

あのガンツがあるマンションの部屋は外からは開けられないので中には必ず誰かを残しておく必要があるからだ。

ライスは犬だが、とても賢いのでほむらが帰ればすぐに気付いて器用に後ろ脚で立ってドアを開けてくれる。

尚、そのライスを連れて行く必要がある場合は、ドアの間にキュウベえを挟む事で閉まらないようにしていた。

今回ほむらが狙ったのは、斎藤一騎という名の坊主頭の吸血鬼だ。組織の中では武闘派として知られているようで、彼を慕う者も多い。

ほむらは早速、その斎藤を急襲して他の雑魚諸共抹殺し、そして今度はその斎藤の電話に新しい獲物が連絡を寄こしてきたので咄嗟に演技をして多くの吸血鬼を誘い出したのだ。

また、入手した吸血鬼達の顔と住所は東郷に送信し、遠方からの狙撃で既に十人余りを暗殺している。相変わらず見事な腕前であった。人の姿をした者を撃つ事に戸惑いが少しはあるかと思つたが……やはり彼はプロだ。

玄野や加藤とは根本から心構えが違う。

そういう点では和泉も躊躇なく撃つだろうが、アレは単に良心のタガが緩いだけである。

自制と理性を働かせた上で、鋼の意思で引き金を引けるプロフェツシヨナルと、単に自制を捨てて自らの欲望に忠実に動く者は全く違う。

無論言うまでもなく、東郷が前者で和泉は後者だ。同列に並べては東郷に失礼である。

(……私はどちらなのかしらね)

何となくそう思つたが、自分はどちらでもないような気がした。

ほむらが現場に行くと、大勢の吸血鬼が和泉を取り囲んでいた。

近くには見知らぬ女性も一緒だ。和泉に寄り添うようにしているので、和泉の彼女なのだろう。

吸血鬼達は勝利を確信したように、和泉達を完全に舐め切った態度でクラブに連れて行くのだの拉致るだの、女は食つていいだのと話し合っていた。

なるほど、クラブに集まっているのか。いい情報だ、とほむらは思った。

とりあえず尋問用に一人だけ残し、後は片付けていいだろう。

そう決めたほむらは姿を消したままXガンのロックオン機能に全

員を捉えた。

一人だけはあえて急所を外して四肢に照準を合わせている。

——発射。

和泉を取り囲んでいた吸血鬼達が爆散し、ただ一人残された哀れな吸血鬼——茂武が恐怖と混乱に泣き叫びながら地面を転がった。

「！……これは……」

驚きに見張る和泉の前ではむらはステルスを解除する。

和泉の服装は学ランだが、よく見れば下にはスーツを着ているので案外彼一人でも何とかなつたかもしれない。

唾然としている彼の前を横切つて、倒れている茂武に近付くと彼の頭を踏みつけて動きを封じた。

四肢は奪つたが何せ吸血鬼だ。こちらの予想もしない攻撃をしてくる可能性もある。

なので情報は惜しいが、もしも妙な動きをすれば即座に撃ち殺すつもりであった。

「ひ……やめてくれッ！ 撃たないでくれッ、なんでも、なんでもするからッ！」

「……私は情報を必要としている。貴方がそれを提供出来るなら、撃たない事を約束してもいい。

先程、『クラブに連れて行く』と言っていたわね。その場所を言いなさい」

「そ、それは……勘弁してくれ、それを教えたら俺が氷川さんに殺されちまう……」

「そう、残念ね」

ほむらはXガンの引き金に指をかけた。

脅しているわけではない。

話さないなら話さないで仕方がないので、本当にここで始末する気なのだ。

その本気を感じ取ったのだろう。茂武はより一層怯えを強くした。

「まッ、待て！ 撃つのか!? 少しは取引しようとか、そういうのは……」

「言わなければ撃つ。言えば撃たない。条件は先に提示した通りよ」

「分かったッ、言うッ！　言うからやめてくれッ！」

「なら、早く言いなさい」

ほむらは銃を突きつけたまま、茂武の口から吐き出される『クラブ』の情報を脳に叩き込んでいく。

メモは取らない。携帯にも残さない。

ほむらの瞳は茂武から一度も外れず、油断なく銃口は突き付けたまままだ。

やがて茂武は情報を吐き終えたのか、縋るようにほむらを見た。

「い、言ッたぞ！　これでッ……」

「ええ、約束は守るわ。私は撃たない」

男の前でほむらが銃口を下げ、茂武の目が安堵に染まる。

だが次の瞬間、ガンツソードを出した和泉に彼は絶望した。

「けど、彼を止める約束はしていないわ」

一閃。

ほむらが彼の体の上から退くと同時に和泉の刀が吸血鬼の首を落とすとした。

自分でも詐欺師のような手法だとは思っているが、禍根は後に残せない。見逃す選択肢は最初からない。

長くに渡ってインキュベーターの『嘘を吐かずに騙す』やり口を見してきたせいで、すっかりそういう言い回しに慣れてしまった自分に少し嫌悪感を覚える。

腹が立ったので、肩の上に乗っていたキュウベえの顔を両手で挟んで圧迫した。

キュウベえは蛙が潰れたような鳴き声を出した。

「曉美ほむら……こいつらは……」

「この前の襲撃者のお仲間よ。貴方も災難だったわね。」

プライベートでまで襲われるなんて」

刺すような和泉の視線を受け流しながらほむらは銃を仕舞う。

次に向かうべき場所は分かった。

都内にあるクラブ……そこが吸血鬼の拠点だ。

ほむらは踵を返し、早速そこへ向かうべく歩を進める。  
だがそれを和泉が呼び止めた。

「待て、暁美ほむら……どこへ行く気だ？」

「今、そこで死んでいる奴から聞き出した場所に」

「ならば俺も行く。一方的に襲撃されるのは性に合わない」

「……それは、その彼女さんを家に帰してからね」

和泉の腕の中では、あまりに常識外れな事が続いたせいかわ女らしき女性が気を失ってしまっていた。

そんな彼女を殺戮現場に連れて行くわけにもいかないだろう。

ほむらがそう言うと、和泉は渋々了承を示した。

◇

吸血鬼狩りを始めてから数日。

ほむらと和泉は手分けして情報収集をし、都内にあるいくつかの吸血鬼の溜まり場を潰して回ったが、まだあの時の金髪男とは遭遇していない。

茂武から聞き出したクラブは当初はすぐに襲撃するつもりであったが、あえてまだ残している。

理由は、下手に自分達の知っている敵の拠点を全て潰してしまうと相手が散り散りになり、捕捉が難しくなるからだ。

それよりは一つくらい、奴らの『逃げ場所』を残しておいた方がいい。

その方が敵も集まってくれるし、居場所を失った吸血鬼もやって来るだろう。

クラブに襲撃をかけるならば、やはりあの金髪がいる時に仕掛けたというのがほむらの考えだ。

それに何もしていないわけではない。

ほむらは既に、クラブの中に盗聴器とカメラを仕掛けて敵の動きを把握できる状況を作っている。

周波数を変換してのステルスは、吸血鬼達が使う特殊なサングラスやコンタクトレンズを使う事で見破れるが、『そこに見えない人間がいる』と知らなければ、使おうともしないだろう。

更にクラブの吸血鬼達は踊ったり殴り合ったり、連れ込んだ女を餌にしたり……要するに遊ぶ事に夢中で警戒が全くと言つていいほどなかった。

自分達のホームという安心感もあったのだろうが、おかげでほむらは簡単に目的を達成する事が出来た。

——そして今日も、夜が始まる。

次々と転送されてきたのは、顔なじみのいつものメンバーだ。

今回はそれに加えて新たにガンツに呼ばれた者達が現れた。

人数は六人。そのうちの五人はガラが悪い、いつぞやの暴走族を思い出させるような連中だ。

ファツションはややお洒落で、暴走族や不良というよりは、チーマーというべきなのかもしれない。

要するに反社会的行動を格好いと誤解し、他人に迷惑をかける事を何とも思っていないロクデナシ達である。

最後の一人は……女子大生？　もしかしたら社会人かもしれない。パツとしない顔立ちの、ごくごく普通のどこにでもいるような女性である。

(……大外れ)

ほむらは、今回の新規参加者六人を早々に見限った。

女性の方はどう見ても戦闘力皆無。鍛えている様子もなし。

おどおどした様子から、そもそも性格も闘争向きではない。

言つては悪いが、長生きするか早死にするかの二択しかないだろう。自力での100点獲得は絶望的だ。

残る五人は論外。闘争向きの性格はしているだろうが、むしろこっちは生き残られた方が困る。

下手にガンツのミツションに慣れて力を得てしまうと、その力でどれだけ大勢の人間に迷惑をかけるか分かったものではないし、こちらに攻撃してくる可能性すらある。

生き残るよりは、さっさと死んでくれた方がよほど有難い存在だ。

そんな連中にも加藤は説明をし、生き残らせようと頑張っているがほむらは興味を失ったように壁に寄り掛かってミツションの開始を

待つ。

「お？ 何かめツちや可愛い子いんじやん〜」

「いや、ガキツしょ。いくら可愛くても俺は無理だな」

「いやいやいけるいける、全然いけるッて」

「お前ロリコンかよ」

折角無視していたのに、何故か向こうから絡んできた。

正直面倒なので、どうしてやろうかと思っていたがJJが立ち上がって牽制すると男達はすぐごと退散した。

あと一歩進めば彼の空手の餌食になっていただろう。

JJはほむらへ向き直り、グツと親指を立てた。

続いて懲りないチーマー五人は桜丘にも声をかけたが、こちらは流石に余裕のある大人の女性だ。相手にせずあしらっている。

——てめえ達は今からこの方をヤツつけに行って下ちい。

ゆびわ星人。

特徴 つよい でかい。

好きな物 うま。

自分よりちいさいものを憎んでいる。

口ぐせ 無言。

ガンツに映し出された今回のターゲットは、珍しくストレートに強そうな外見だ。

だが新人以外は皆、修羅場を潜ってきた強者達だ。

誰の顔にも恐れはなく、ただ静かに転送されるのを待っていた。

## 第19話 一般人の死者が出る

今回のターゲットであるゆびわ星人は、全長10mほどの騎士の姿をした星人で、馬に跨り、巨大な武器を持っている。

外見は今までもトップクラスに強そうであり、実際力は強かった。

不用意に出たチーマーのうちの一人がゆびわ星人の一撃を受けただけでスーツが駄目になってしまったので、攻撃力だけは田中星人の超音波数発分に比肩すると見ていい。

それを八体倒すのが今回のミッションの内容だ。

——結論を言えば楽勝であった。

出だしからこのような事を言ってしまうと、ゆびわ星人が可哀想になるのだがこれ以外に表現の仕様がなほほどに呆気なく今回のミッションは終わってしまった。

それはもう、戦闘描写を省く程度にはこれといった苦戦もなく、特筆すべき部分もないほどに。

確かに攻撃力は強かった。だが無駄に巨大なせいで攻撃は全て大振りで避けやすく、新人以外は一撃として攻撃を受けていない。

そして巨大なせいで小回りが利かず、簡単に馬の下などの死角に潜り込んで攻撃出来てしまう。

そして致命的なのが防御の薄さだ。頑丈そうな見た目をしているのに、普通にXガンが効き、剣で斬れ、JJや桜丘の格闘でも簡単に破壊出来た。

要するに、でかいだけの的だ。

多少戦闘慣れた人物ならば、スーツさえあればどんな方法でも倒してしまえるだろう。

この程度の相手に今更苦戦する要素もなく、八体のゆびわ星人をそれぞれが各個撃破して終わってしまった。

戦闘所要時間は僅か三分。ほむらの知る限りでは最短記録である。

しかもこの弱さで何故か一体10点という高得点だ。

結局今回のミッションは、主力メンバー……ほむら、玄野、加藤、東



郷、JJ、和泉、ライス、桜丘がそれぞれ10点を獲得しただけのポナステージでしかなかった。

唯一肝が冷えた場面といえは……カメラを持った少女が何故か戦闘区域をウロウロしていた事くらいだろうか。

身長はほむらよりも小さいので、中学生かあるいは小学生だと思われる。

放置するわけにもいかないので気絶させて離れた位置に運び、ついでにカメラは念のために壊しておいた。

◇  
手応えのなかったゆびわ星人討伐ミッションの翌日。

ほむらは食材の買い出しの為に、ライスの散歩がてら町を歩いていた。

キュウベえは留守番として今日もドアに挟まれている。

今日はうどんを食べたい気分なので、ネギと椎茸、餅と麺、かまぼこなどを袋に入れ、今はマンションに戻る最中だ。

ライスの食事にそこそこ高めのドッグフード、キュウベえの餌用に一番安い国外産キャットフードも買い溜めしておいた。

(……見られている?)

何かの視線を感じ、ほむらは立ち止まった。

魔法少女になって以降、出口のない迷路で気を張り詰め続けてきたほむらの感覚は鋭敏だ。

第六感とでも言うべき探知能力は、経験を重ねた魔法少女であれば誰しも持っているものであり、それが魔法少女など契約したての頃の美樹さやかくらいのものだろう。

魂と密接な関係にある魔法少女だからこそ、意思が発する波のようなものを感じ取れるのかもしれない。

魔法少女だった頃よりも大分劣化してしまったが、それでもほむらの感知能力は常人とは比較にならない。

その研ぎ澄まされた感覚が、誰かが自分を見ているという事をほむらに教えてくれる。

しかし敵意のような粘ついたものは感じない。

視線の元を辿れば……そこにいたのは、小さな子供であった。

古いアパートの前で体育座りをし、ほむらを……いや、ほむらの持つている買物袋を羨望の眼差しで見ている。

別に無視して通り過ぎてもいいのだが、何となく後ろ髪を引かれるような気がする。

何故あんな所に子供がいるのか。親はどうしたのか。

考える程に厄介ごとの気配がしない。

(遊びから帰ってきたタイミングでたまたま親がどこかに出かけていて、入れなくなっただけ？)

それとも親が昼寝でもしていて家に戻れない？ あるいは……)

考えても答えは出ない。

ほむらは溜息を一つ吐き、進行方向を変えて子供の前へと向かった。

それから目線を合わせ、威圧を与えないように小さく微笑んで見せる。

基本的に鉄仮面であるほむらにしては珍しい、柔らかい表情だ。

まどかを救うという目的を達し、肩の荷が下りた今だからこそ出来る顔だろう。

「こんな所でどうしたの？ お母さんは？」

子供はほむらを見つめ、ぼーっとしている。

やはりいきなり話しかけたのはまずかっただろうか、とほむらは思った。

子供の頃は親に『知らない人と話してはいけません』と強く教えられる時期だし、不審に思われているのかもしれない。

しかしその考えは杞憂だったようで、子供はただどどしく話し始めた。

「ママは……家の中にいる……」

「いるって……じゃあ、どうして貴方は外にいるの？」

「家の中には、ママが好きになれるいやつがいる……。僕が家に入ると、邪魔だって……どんツ！ ツてしてくる」

「……………」

ほむらは子供の言葉に眉をひそめた。

ママが好きな悪い奴……このフレーズからして嫌な予感しかしない。

少なくとも、父親でない事は確かだろう。

察するに、母親の浮気相手か何かなのだろうか……それが、この子を疎んでいるようだ。

そして母親はこの子を助けようとしていない。

「ちよつとごめんね」

ほむらは子供の腕をとり、袖をまくった。

するとそこには、服で見えないようににされていた痣が浮かんでいる。

この分だと身体の方にも痣があるだろう。

虐待……そして育児放棄。

このまま、この子を放置すればロクでもない結末を辿るのが目に見える。

なのでほむらは、110番通報をして警察をここに呼ぶ事にした。

子供を連れて行ったらただの誘拐になってしまおうし、子供の状態を警察に見てもらおうのが一番いい。

事件が起こってからでないと動かず、手遅れになってから行動する事に定評のある警察だが、流石にこれを見れば動いてくれるだろう……多分。

その後、育児放棄をしていた母親と虐待をしていた交際相手は逮捕され、少年は養護施設に入る事となった。

その少年は名をタケシといったが、ほむらが知る事はなかった。

◇

今日も夜がやって来る。

部屋に転送されてきたのはいつもの主力メンバーに、前回から参加のチーマー五人と浦中アヤカ。

更に新規参加者としてサラリーマン四人が新たに増えている。

ほむらの見た感じでは四人共ただの一般人だ。つまり戦力外が四人増えただけである。

いつものように加藤がスーツの着用を呼び掛けており、サラリーマンたちは渋々とそれに従っている。

「(こ)ど(こ)だよ」

「帰りてえ……」

意思の弱そうな、本当にどこにでもいそうな四人だ。

これは今回の敵次第ではチームマーと合わせて死者が大量に出るかもしれない、とほむらは考えた。

とはいえ、やる事は変わらない。自分はただ星人を素早く駆逐するのみだ。

冷たいようだが、ほむらが迅速に敵を減らせばその分味方の被害も減る。

しばらく待つとガンツに今回の標的が示されるが、そこに出たのは一見すると強面の人間にしか見えない男だ。

——てめえ達は今からこの方をヤツつけに行つて下ちい。

オニ星人。

特徴 つよい。

好きなもの 女 うまいもの ラーメン。

嫌いなもの 強いヤツ。

口ぐせ ハンパねー。

(あの吸血鬼達のように人間に擬態している? だとすれば厄介ね

……)

今回表示された星人は異色であった。

今までは程度の差はあれど、人の姿などしていなかった。

だが今回の敵は明らかに人の形をしており、おまけに好きな物がラーメンときた。

つまり……人に擬態し、ラーメン屋に出向いてラーメンを食べるだけの知能があるという事。

人の社会にそれだけ溶け込み、馴染んでいるという事だ。

こいつ一体だけならばいい。だがもしかして一体でないなら……あの

吸血鬼達のように大規模な組織で動いている可能性が浮上してくる。やがて全員の転送が始まり、ほむら達は池袋の街中に立たされた。た。

今回の舞台は池袋らしいが……ほむらは嫌な予感を感じずにはいられなかった。

(まずい……今までと違って人が多い)

今までのミツシヨンは街中だったり屋上だったり寺だったりと一貫性がなかったが、それでも人が少ないという共通点があった。

一般人がいらないわけではないが、それでも大半は家の中で就寝しており、数人がぼつぼつと歩いているだけだったのだ。

だが今回は駅前で、人通りも明らかに今までより多い。

営業している店も多く、どこを向いても視界の中に人が入る。

「ここって……池袋だよな」

「池袋じゃん!」

「なんだよ……このまま帰れんじゃねーの?」

「駅すぐそこじゃん」

「カミさんに笑われんなーこの恰好」

新規参加の四人はお決まりのリアクションをしており、早くも帰ろうとしている。

毎回ほむらは思うが、何故この手の馬鹿ばかりが部屋に来るのだろうか。

死ぬような体験をして見知らぬ部屋に転送され、その部屋からは出られない上にSFのようにレーザーで人間が描かれるシーンまで目の前で見て、そして一人一人消えながら外へ送られる。

そんな現実離れた光景を目の当たりにして、『あ、帰れるじゃん』となる思考が不思議でならない。

危機感というものが欠落している。

「そのオッサン達、帰るとか言ってるなよ」

「ハア?」

「オッサン?」

「タイムリミットがあるんだ。すぐリーダー見てくれ」

帰ろうとする四人に玄野が指示を出し、レーダーを皆が見る。

そこに表示された数は今までのミツシヨンよりも明らかに多く、ほむらは僅かに顔をしかめた。

人の多い所に潜む異星人という事で嫌な予感はしていた。

それでも大仏の時のように、『物』に擬態している可能性もまだ捨ててはいなかった。

だがレーダーに表示された反応は多く、おまけに位置もランダムで、動いている。

この時点で可能性は二つ。田中星人のように人に見えていないか、あるいは人に成りすましているか。

ガンツに表示されたオニ星人の容姿から考えるに、後者で間違いないだろう。

(今回はきつと……一般人の死者が出る。それも大勢の)

ほむらは少しばかり憂鬱な気分になった。

決して善人ではない事くらい自分で分かっているが、それでも無為に他者に犠牲を出して良しと思うわけでもない。

しかしこれでは何処かで確実に巻き込まれる一般人が出る上に、クリアしない限り終わらない。

そして下手に一般人を庇いながら戦えば自分が不覚を取る可能性が高くなる。

出来る事といえば、なるべく抵抗の間も与えずに星人を即殺していく事くらいか。

「数が多いからなるべく分かれて探した方がいいと思う。」

二人一組くらいになつてすぐ行くぞ」

玄野は自覚があるのかないのかは知らないが、加藤に勝るリーダーシップを発揮している。

日常生活ではともかくとして、やはりこういう非日常では玄野の方が順応と思考の切り替えが早い。

二人一組での行動が決まり、ほむらはいつも通りにライスとペアを組んだ。

玄野は桜丘、加藤はJJ、和泉はパンダとそれぞれの振り分けが決

まる。

チーマー五人と浦中アヤカもそれぞれペアを作り、サラリーマン四人は東郷につけた。

どうせ活躍は出来ないだろうし、それなら狙撃に専念する東郷の守りに置いた方がマシと判断したのだ。

キユウベえはいつも通りにほむらの肩の上だが、戦力外なので最初から数にカウントされてない。

レーダーを頼りに駆ビルへと入る。

反応はすぐ近くだが、星人らしき物はどこにも見えない。

だが反応は確かにあり、そしてそれはエスカレーターで登っている人々の中のうちの一人を示していた。

仏像ならば躊躇なく撃つという方法で確認するほむらも、流石に人の姿をしていては躊躇が生まれる。

撃つてみて、それで人間だったら目も当てられない。

だがそれを補佐する為にいるのがライスだ。

彼は高く跳躍すると、目にも止まらぬ機敏さで星人と思われる男性の首を食い千切った。

いかに擬態しようと、彼の鼻は誤魔化せない。

「あッ!? イッて! 何だ……一体何なんだ」

ほむらは無言でXガンの引き金を引いた。

首を噛み千切られて平気で話せる人間などいるわけがない。

星人は一瞬遅れて破裂し、下半身のみとなった。

しかし下半身のみとなったにもかかわらず、星人はそのまま走って逃亡しようとしたのですぐにXガンでロックし、もう一度撃つて今度こそ始末する。

やはり人間社会に完全に溶け込んだ星人が今回のターゲットだ。

これは面倒な事になりそうだ、とほむらは憂鬱な気分になった。

## 第20話 黒玉の連中は俺達が根絶やしにする

ほむらは駅構内で待ち構えていた星人の集団と遭遇し、彼等と対峙していた。

数は六体。いずれも人間に似ているが人間ではない。

首が伸び、頭だけが反転して顎から角のような触手が三本生えている。

手も触手状に変化し数本に枝分かれしていた。

だがそれ以外は人と変わりなく、半端に人の姿を保っているのが不気味でならない。

「なにになに？ 何あれ？」

「オバケ？」

「うオツ、宇宙人!？」

更に、今回の星人は一般人の目にもハッキリ見えているらしい。

人々は遠巻きに星人を見ながら驚きの声を発し、あるいは携帯電話で写真を撮っている。

「お、あれじゃね？」

「でもスーツ着てないぞ」

「いや、あいつだッて。ホラ、スーツ着た犬を連れてるし」

携帯電話を持っているのは一般人だけではない。

驚くべき事に星人達も携帯電話を手にし、それを見ながらほむらへと近付いてきた。

「お前等が池袋に来る事は知ってたんだよなア」

星人のうちの一人が流暢に話す。

他の星人もほむらを囲むように距離を縮めているが、ほむらはあえて更に一歩前へと踏み込んだ。

そしてXガンを連射。

囲んでくれるならばかえって好都合。密集しているから狙いがつけやすい。

星人達も慌てて反撃に出るが、その全てを回避しながら銃を撃ち続ける。



ライスも星人を食い千切って援護し、あつという間にほむらの周囲に生きている星人はいなくなった。

「うわッ、いきなりバラバラになったぞ！」

「うえ、キモ……」

一般人達は突然弾け飛んだ星人達に引いているが、ほむらはそれを気にせず星人達の持っていた携帯電話を奪い取った。

こちらに来る時、奴等が携帯電話を見ていたのが気になったのだ。

「……！」

見て、そして驚かされた。

そこには池袋の地図と、場所を特定するようなマーカーが表示されていたのだ。

そのマーカーは全て動いており、そのうちの一つは、ほむらの現在地を指している。

いや、正確に言えばほむらの隣にいるライスの位置か。

間違いない……これはこちら側の皆の現在位置を示しているのだ。つまり敵側に情報が筒抜けになっているという事になる。

(恐らく反応の出所は……スーツね。)

奴等は最初、私が敵なのかどうか分からないようだった)

位置を特定される要因があるとすれば、スーツ以外に考えられない。

しかしだからといって、今回はスーツを脱いで戦えなどと皆に言うるわけもない。

ともかく、一つ有益な情報を得ることが出来た。

毎度の事ながらガンツスーツを着用していないほむらは、今回の相手から見ればステルスしているに等しい。

ならばこの利を活かして立ち回るだけだ。

◇

——今回の敵は今までと違う。

経験者達は今回のミッションにつきまとう、ただならぬ違和感を肌で感じていた。

人に擬態し、人間社会に紛れ込む星人達。

言葉を介し、何より今回の星人は一般人にも見えている。今までこんな事はなかった。

言葉を話すくらいまでは過去にもいたが、一般人に星人が見えているのは初の事だ。

更にその言動は、まるで何処にでもいる若者のようであり、それが一層不気味さを助長していた。

故に玄野達は警戒心を高め、油断せずに事に当たる。

だが経験者から見れば不気味でも、経験の浅い者達から見れば弱そうにしか見えない。

チーマー五人と浦中アヤカはリーダーを頼りに、階段の上にいる男達を発見した。

見た目はただの人間にしか見えないが、リーダーを信じるならばあれは星人だ。

何よりガンツに表示された顔と特徴が一致していた。

後ろ向きに被った帽子にサングラス。強面の顔。顎髭。……間違いない、あれがオニ星人だ。

更にその上の階段の登頂部には金髪のホスト染みた男がいるが、こちらはリーダーに反応していない。

しかし妙な事に、金髪の男は星人達へと気軽に話しかけていた。

この金髪の男もまた敵であり、吸血鬼という名の星人のようなものなのだが、チーマー達がそれを知る術はない。

「来たな」

「手を出すな……黒玉の連中は俺達が根絶やしにする」

「お前等も全員行くのか？ 総力戦だな……だが」

「お前等は見てるだけだ」

何かを言いかけた金髪の男へ、サングラスの男が冷たい声で念押しをした。

彼の声に含まれているのは侮蔑……そして失望の感情だ。

「いつまでも俺達と対等であるような面をするな……」

俺がお前等と手を組んでいたのは、お前等に一目を置いていたからだ。

だがどうやら……俺の見込み違いだったらしい」

「おたくら、ハンターにやられてボロボロなんだッて？」

ま、無理せずに俺達に任せなよ……。

ここで万一にもアンタが死んだら、それこそ吸血鬼は総崩れだろ」  
サングラスの男の言葉を引き継ぐように、別の男が掌から火を出しながら金髪へ声をかけた。

その台詞こそ優し気だが、彼の言葉にはどこか、相手への嘲笑や侮蔑といったものが滲んでいた。

自分達が優位だと確信しているからこそその、上から目線の優しさがあつた。

彼等はもう、金髪の男を……いや、吸血鬼を自分達の同志とは認め  
ていない。対等だと思っていない。

たかがハンター如きにボロボロにされている時点で、対等とは程遠い弱者に成り下がったのだ。

オニ星人と吸血鬼は一応の同盟関係を結んでいる。

だがそれは決して、仲良しこよしなものではない。手を組む事で双方に利益があるからこそ……手を組むに値すると認めていたからこそその同盟だった。

故に、ハンターによつてボロボロにされてしまった吸血鬼はもう、オニ星人にとつては手を組む価値もない相手でしかなかったのだ。

「……そうかい。ま、精々気を付ける事だな」

金髪の男も、取りつく島がないと分かったのだろう。

若干不機嫌そうに言い、煙草を吹かした。

そんな金髪の男をその場に残し、四人の男が階段を降りる。

チーマー達はそれを見て軽薄な笑いを浮かべた。

「あいつらだ……」

「人間に見えるぞ」

「勝てるのか……こいつらに」

「余裕だろ。人間ッぽいし……」

「行ッてみよーぜ」

チーマー達は勝てると思っていた。

ガンツの装備を過信しており、人数でも勝っている。何より相手は弱そう。前回のゆびわ星人と比べれば全く威圧感がない。

だからこそ見誤る……相手の強さを。

それから僅か十数秒後……彼等は灰となって、この世から消えていた。

それは、今までの戦いではなかった。

オ二星人達は正体を隠す事をやめ、かつてない数で玄野達へと攻撃を仕掛けてくる。

今までにも強い星人はいた。

数の多い星人も、言葉を話す星人もいた。

だがそれでも、外の世界とは隔絶した……どこか、異世界の出来事のような感覚が玄野の中にはあったのだ。

自分達も星人も、一般人の眼には見えず何が行われているかも分からない。分かってももらえない。

平和に生きる人々と自分達の間にある、見えない分厚い壁。その存在を玄野は常感じていた。

最初はその壁が煩わしかった。

自分達がこんなに死にそうな思いをしている時に、外の人間は気付かずに平和を謳歌している。それが羨ましかった。

だがミツシヨンに慣れるにつれ、その壁こそが日常と非日常を隔てる守りだと考えるようになった。

どんなにミツシヨンが辛くても、どれだけ参加者が死のうとも……それでもミツシヨンが終わって日常へ帰れば、星人とは関係のない『いつも通り』が待っていてくれる。

ガンツに呼ばれるまで過ごせる日常は玄野達にとって唯一安らげる場所で、安らげる時間だった。

だが奴等はその壁を、いとも容易く通り抜けたのだ。

現実という世界に……今まで星人を認識すらしていなかった日常に、土足で上がり込んだ。

(わかッてきた気がする……俺達は、防波堤なんだ……！)

何故死者を使うのか。何故戦わなければならぬのか。

それは、ガンツに呼ばれた者が大なり小なり感じる疑問だ。

だが玄野はうつすらと、彼なりの答えを出しつつあった。

自分達は……いや、このミッションは、日常と非日常を隔てる壁で、

防波堤で、予防線なのだ。

越えさせてはならない一線を守る為に。

非日常が日常に踏み込まないように。

誰かが奴等を倒さなければならぬ。誰かが奴等を止めなければならぬ。

そうでなければ奴等は容易く日常へ浸食し、世界を塗り替えてしまうから。

だから、死という形で日常から離れた者を使うのだ。

「玄野くん！ こいつ等、どんどん出て来るよッ！」

「ああ、だが個々の力は大了事ない。口から出すヤツにだけは気を付ける」

桜丘と背中合わせになり、玄野は確実に敵の数を減らしていく。

そうして戦いながら玄野は一つの事を予感していた。

それは、この戦いが終わった後の事だ。

これだけの数の敵はかつていなかった。

だがもしも、この戦場を乗り越えたならば……その時に自分達が得る点数は今までの比ではないだろう。

「聖……生き残るぞ。今回クリアすれば……自由になれる！」

一緒に！ 日常へ戻れるぞッ！」

「ええー！ 一緒に自由になるわよッ、玄野くん！」

非日常の世界から日常の世界へ。この愛する人と共に！

その強い意思をもって玄野と桜丘は奮戦した。

◇

「お前……ある程度はやるみたいだな」

「そういう貴方も、雑魚とは違うみたいね」

公園の中央でほむらはサングラスをかけた男と対峙していた。

手から炎を出し、見るからに他の雑魚共とは別格という空気を出した男だ。

頭からは二本の角が生え、その様はまさに『オニ星人』と呼ぶに相応しい。

ほむらは彼の名を知らない。

だが名付けるならば、さしずめ『炎鬼』といったところだろうか。

彼——炎鬼は炎を、ほむらはXガンを、それぞれ殺意をもって相手へと向けて睨み合う。

ライスは体勢を低くして唸り、牙を剥き出しにした。

「おるアー！」

先に動いたのは炎鬼の方であった。

彼は掌に乗せた火球をほむらへ投げつけ、それと同時に走る。

ほむらもまた火球を軽く避けて炎鬼へとXガンを発射した。

炎鬼はXガンの性能もよく知っているようで、何とか照準を合わせられないようにステップを踏んでいる……が、それでもほむらの眼とXガンのロックオン機能を誤魔化す事は出来ない。

狙いすました一撃が的確に鬼を捉え、その機動力を削ぐ。

「がッー！」

炎鬼の太ももが爆ぜ、肉片が飛び散った。

立っている事が出来なくなり、片膝をついてしまう。

「ガアアアアッー！」

そこにライスが飛び掛かり、首に深く牙を突き立てた。

炎鬼も咄嗟に腕でライスを振り払うが、ライスが離れると同時に首から血が噴水のように溢れ出す。

今の一撃で首の肉をほとんど持っていかれたのだ。

それでも何とか敵からの攻撃を逸らそうと、掌から炎の弾丸を連続で発射した。

それをほむらは軽やかなステップで避け、炎鬼へXガンを発射した。

しかしそれと同時に炎鬼の全身が火炎に包まれてその場から消えてしまう。

炎を操るだけでなく、自らが炎と化す事も出来るらしい。

(消えた? ……いえ、違うわね。

身体を炎と化し、隠れているだけ。

先程の炎の乱れ射ちは苦し紛れの攻撃なんかじゃない……自分の姿を隠す為のカモフラージュ……)

ほむらはその場で止まり、地面の炎を注視した。

木を隠すなら森の中。それと同じで、火を隠すならばやはり炎の中だろう。

炎鬼は身体を炎と化して移動出来る。

だが何もない場所でそれをやれば、当然目立ってしまうだろう。

いかに変化しようと、そこにしか炎がないならばそれが炎鬼だと分かる。

だが周囲が燃え盛り、地面のあちこちが燃えていけば、どれが炎鬼かは分からない。

——が、それは相手が目で判断していれば、の話だ。

「ばうッ!」

「……そこね!」

ライスの鼻は見逃さなかった。

地面で燃え盛る炎の中で、一つだけ不自然ににじり寄って来ていた炎を。その匂いを。

ライスの鳴き声に反応してほむらはすぐにZガンを構え、彼が吠えた場所へ躊躇なく引き金を引く。

直後、効果範囲ごと纏めて叩き潰す重圧が発生して炎鬼を押し潰した。

炎だったものが地面に押し付けられると同時に肉片へと変わり、動かなくなる。

そこに更にもう一発。

念には念を入れて死体蹴りを敢行し、完膚なきまでに葬った。

「はッ、せいや!」

「しッ!」

JJは駅前で一人の男を相手に互角の格闘戦を繰り広げていた。戦っている相手は帽子を被った、顎髭の男だ。

JJと一緒にいた加藤は現在、雑魚の相手で手一杯でこちらに近付  
けず、JJは敵と一対一を強いられていた。

敵はトン、トンと軽快なリズムを踏んで拳を構える。

どうやらボクシングをやっているらしい。

リズムカルに放たれるジャブを、しかしJJは的確に防ぐ。

そればかりか攻撃の合間を縫って反撃し、渾身の正拳突きを放つ  
た。

だが男はこれを、軽やかにバックステップを踏む事で避けた。

そこから一步踏み込んで右ストレート。

だがJJはこれも冷静にブロックし、男の腹へ拳を突き刺した。

たたらを踏む男。すかさずJJの第二撃が顎へ炸裂し、彼の身体を  
宙へ浮かす。

まるで天へ昇る龍の如く。

JJは男の顎を突きあげながら自らも跳躍し、高く男を吹き飛ばし  
た。

吹き飛んだ男は弧を描いて地面へ落ち、よろめきながら立ち上が  
る。

「はッ……ははははははー！」

そして面白そうに笑い、その身体が変化を始めた。

今まで人の肉だったはずの身体がまるで岩のように硬質化し、巨大  
化する。

頭部からは角が生え、その姿はさしずめ岩鬼といったところか。

「はははははははは!!」

岩鬼は笑いながらJJへと襲い掛かった。

これまでのボクシングスタイルから一転し、今度は力任せのラフ  
ファイトだ。

放たれた拳をしっかりとガードするも、JJの身体は軽々と吹き飛  
ばされてしまう。

道路に停まっていた車を数台巻き込んで飛び、砂塵を巻き上げなが



ら転がった。

しかしスーツの力があればまだ致命傷ではない。

JJは即座に立ち上がり、再び岩鬼との距離を詰めた。

「はははッはははー」

岩鬼が剛腕を振るう。

しかしそれをJJは静かに、冷静に避けた。

「イヤー！」

JJの拳が当たる。

だが岩鬼はまるで動じず、口の端を釣り上げた。

二人の腕と足が目まぐるしく動き、息もつかせぬ攻防が続く。

避ける、当てる、避ける、当てる……。

それを数十秒は続けただろうか。

やがて岩鬼が焦れたように渾身の拳打を放ち、JJが体勢を低くして懐へ飛び込んだ。

そして跳躍して岩鬼の首の後ろに手を回し、高速で両の膝蹴りを連続で叩き込む。

「でやああああッ！」

文字通りの岩を叩くような音が響き、岩鬼の上体が仰け反った。

だが見た目通りに、とにかく硬い。

ダメージは通しているが、攻撃しているJJの膝の方が痛むほどだ。

「いざかッしいッー！」

岩鬼がJJの足首を掴んだ。

そして力任せに道路へ叩き付け、蜘蛛の巣状の罅が入る。

だが手が緩んだ一瞬にJJは道路に掌をつけ、スーツで強化された握力で道路に指をめり込ませる。

そして回転！ 逆立ちの姿勢のまま廻り、遠心力で強引に岩鬼の腕を振りほどきつつ、蹴りを顎にめり込ませた。

そのまま腕の力だけで跳躍。まるで空に落ちるように岩鬼の顎を蹴り上げる。

「ぬッうー！」

岩鬼がたまらず倒れ、JJは体勢を直して着地した。

そして岩鬼が起き上がると同時に跳び蹴りを胸板へ打ち込んだ。たまらず岩鬼が仰け反った所で、今度は岩鬼の胸板の上で何度も足踏みをするように蹴りを繰り返す。

最後に蹴りの反動で離れて着地し、構えを取った。

「スウウウウ……ッ」

深呼吸をし、腰を深く落とす。

右拳を引き、静かに敵の攻撃を待った。

それに対し、岩鬼も逃げる事はしない……否、人間相手に逃げるなど彼のプライドが許さない。

たとえ敵の狙いが分かっていると、そこから逃げるのはある意味で敗北だ。

故に岩鬼は逃げを選択出来ない。

ただ、正面から敵の狙いごと捻じ伏せるのみだ。

「オオオオオオオオオオオオッ!!」

岩鬼が走り、全ての力を込めた右拳を振りかぶる。

それと同時にJJが、同じく全霊を込めた右拳を繰り返した。

「イヤアアアアアッ!」

岩鬼の攻撃の速度を利用したカウンターだ。

街灯で道路に照らされた二人の影が重なり、重い打撃音が響き渡る。

岩鬼の拳がJJの顔に当たり——頬の皮を削りながらJJが更に前へ出た。

そしてJJの拳が岩鬼の胸に突き刺さり、貫く。

岩鬼の頑強な身体を突き通した拳は彼の背中から飛び出していた。

「ぐッ……おおオオおおオ……ッ!」

貫かれた場所から亀裂が広がり、岩鬼が崩れていく。

倒れていく好敵手から一步離れると、JJは腕を交差させてから腰に落とし、敬意と共に一声発した。

「押忍ッ!」

その光景を最後に目に焼き付け、そして岩鬼は完全にただの残骸と

なつた。

だがまだ戦いは終わっていない。今この時も戦友達は戦っている。ならば行かなければなるまい。

この拳で敵を倒し、そして仲間を守る為に。

JJは傷付いた身体で、次なる戦場へ向けて疾走した。

## 第21話 ハンターをなめすぎたのさ

引き金を引く。

ビルの下をうろついていた星人が一匹弾け飛ぶ。  
引き金を引く。

別の場所で徒党を組んでいた星人を撃ち抜く。

東郷がXショットガンを撃つ度に星人の数が減り、何が起こっているのかも分からぬままに怪物が死んでいく。

東郷十三は現在、見晴らしのいいビルの上でオニ星人達を狙撃していた。

今回初参戦のサラリーマン四人は彼の護衛という事で同じ場所にいるが、結論から言えば全く役に立っていない。

殺し合いを強いられるこの地獄の中にあつて、まだ夢の中にでもいるような気分なのか呑気に雑談をしているだけだ。

「あーあ、早く終わんねーかなー……」

「マジ……ありえねーって、宇宙人とか」

「しかしアイツ……いい腕してるよな。サバゲーか何かやツてんの？」

「あーあ、帰り遅くなツたの何て説明しよう」

ずっとこんな感じだ。まるで危機感というものがない。

だが仕方のない事だろう。

彼等は一実際に命のやり取りをする場に立っているのではなく、ただ東郷に任せて棒立ちしているだけだ。

邪魔にならないだけマシな部類と思うしかない。

しかしここは殺さねば殺される地獄だ。初心者であつても慈悲などない。

気を抜けば死ぬ……そんな、地獄では当たり前な事を彼等はこれから身をもって知る事となるだろう。

「あッ、おい。誰か来たぞ」

東郷達しかいない屋上に、誰かが近づくような足音が聞こえた。

サラリーマン達は警戒態勢も取らずに呑気に構え、東郷はすぐに銃

を向ける。

一般人か、仲間か……それとも敵か。

高まる緊張の中、現れたのは同じガンツスーツを着た長身の男……加藤であった。

「待てッ、撃つな！俺だ！」

何だ、仲間か……そんなほつとした、緩んだ空気がサラリーマン達の間を流れた。

しかし東郷は警戒を解かずに、静かな声で加藤へ聞く。

「……お前か。何をしに来た」

「ここはヤバイ！ 奴等に居場所がバレている！ すぐに離れないと、大挙して押し寄せて来るぞッ！」

「えッ、それ、やばいじゃん！」

「逃げようぜッ、早く！」

加藤の言葉に、サラリーマン四人は浮足立った。

安全と思っていた場所が安全ではない。

その事実には動揺が走るが、東郷の眼は冷たいままだ。

彼はひとまず銃身を降ろし、加藤へ話しかける。

「そうか……すまないな、高畑。わざわざ教えてくれて」

「ああ、いいッて事よ。さあ早く行こう」

東郷の言葉に加藤は朗らかに笑い、先に行くよう促す。

だが東郷は無言でXショットガンを加藤の頭に向け、躊躇なく発砲した。

その暴挙にサラリーマン達が驚くが、撃たれた加藤はただ舌打ちをただけだ。

直後に頭が膨らみ、爆発の兆しを見せるもすぐに収まってしまう。

「……何で分かッた？」

「高畑なんて名前の奴は俺達の仲間じゃない」

続けて引き金を引くも、加藤の姿をした敵は俊敏に動く事でXショットガンを避けた。

そして彼は驚くべき事に、サラリーマンのうちの一人に飛び掛かるとまるで液体のように彼の耳や鼻、口の中へと入ってしまう。

加藤に化けていた事といい、細胞単位で変身する事が出来る宇宙人なのだろう。

Xショットガンが効かなかったのも、その体質によるものか。

「うッ、おエ……」

体内に潜り込まれてしまったサラリーマンは息が出来ずに苦しそうに呻き、倒れこむ。

それを見ながら東郷は慎重に距離を取りつつ、銃口を向けた。

他のサラリーマン達はただ狼狽える事しか出来ない。

「えッ、死んだ？」

「どうする？ 今の内に撃ツとくか？」

「中にアイツ、いるんだよな……」

中に宇宙人がいるのは確かだ。

しかし今撃つても死ぬのはサラリーマンだ。

ただでさえ銃の効きにくい相手に、サラリーマンの身体が壁になってしまうのではほとんど効果がないだろう。

「ちよツと……大丈夫、大丈夫だから……」

そうこうしているうちに敵を飲んでしまったサラリーマンが起き上がった。

顔色は青いが、普通に話せている。

「ちよツとさツッキ苦しかツたけど……」

「さツッキの奴、まだお前の中だぞ」

「あッ、そツか……どうしよう」

どうしよう、などと言っているが結論から言えば彼はもう駄目だ。いかにガンツスーツといえど、万能ではない。

身体の中に入り込まれてしまえば、もう助かる方法などないだろう。

「あッ、お、えッー！」

宇宙人を飲んでしまったサラリーマンの腹が盛り上がり、中から食い破られる。

出てきたのは巨大な蠅だ。

それが近くにいた別のサラリーマンに飛びつき、またしても耳から

入り込んでいく。

そのサラリーマンも撃たないでくれと言っているが、そう言っているそばから背中が盛り上がり、破綻してしまった。

再び中から宇宙人が飛び出し、東郷がXショットガンを発射した。しかり当たりながらもサラリーマンに飛びつき、またしても中から食い破る。

気が付けば四人いたサラリーマンは全滅しており、東郷とオニ星人の一騎打ちとなっていた。

「次は……お前を中から食い破ってやるよ」

「……」

東郷は動じずにXショットガンを連射した。

しかしそれだけでは効果が薄い。

効いていないわけではないのだが、連射しなければダメージを通す事も出来ないほどに相性が悪いのだ。

オニ星人が俊敏な動きで東郷へ接近し、飛び掛かる。

東郷はすぐにその場から横に跳び、Xショットガンを連射した。

オニ星人の頭部が膨れ上がり、更に同じ場所を立て続けに東郷が打ち抜く。

「ぐっ……てめえ……」

オニ星人の顔が今までと違い、苦悶に歪んだ。

いかに細胞を変化させてダメージを逃がそうにも、連射されては対応し切れないらしい。

咄嗟にオニ星人が跳んで東郷の狙いを外そうとするが、彼の射撃の腕はそれを許さない。

動く標的相手だろうと寸分変わらずに同じ場所を撃ち続け、とうとう耐えきれなくなったオニ星人は逃げを選択した。

蠅に変身して空を飛ぶも……それでも東郷は決して的外さない。

正確無比な射撃が僅かなズレもなく同じ箇所を撃ち続け、500m近く離れてもまだ当て続ける。

やがてオニ星人が化した蠅が空中で血を撒き散らして落下し、それを更にXショットガンで撃ち、バラバラにした。

そうしてからようやく、東郷は敵の無力化を確信してその場を立ち去った。

◇ オニ星人のボス……最初にガンツにターゲットとして表示されていたその男は憤っていた。

黒いスーツのハンターを根絶やしにする気であった。出来ると思っていた。疑ってすらいなかった。

だが蓋を開けてみればこちらの幹部が全滅したとの報を知らされ、更に下っ端も皆殺し……誰一人として生きていない。

その事を同盟相手である吸血鬼から伝えられた彼は、憤怒に顔を歪めていた。

「全滅だツてよ……予想してなかったな、こんな結果は……」

煙草を吹かしながら、金髪の吸血鬼——氷川が言う。

ハンターによって痛手を被っているのは彼等も同じだ。

ここ連日で、暁美ほむらの襲撃を受け続けた吸血鬼は著しくその戦力を削られてしまっていた。

だからこそ今回はプライドを二の次にしてオニ星人と共闘すべくここに来たのだが、それを蹴ったのはオニ星人の方である。

故にこの現状は、氷川から見れば自業自得でしかなかった。

「ハンターをなめすぎてたのさ……どうする気だ？」  
「……………」

オニ星人のボスは無言で歩き始めた。

返事はない。だが返事がない事こそが、彼の無言の怒りを何よりも雄弁に語っていた。

彼はこう言っているのだ……『俺が全員殺す』と。

そんな元同盟相手に氷川は声をかける。

「教えといてやるよ。奴らの中にも猛者がいる。

黒髪ロンゲの男と……それと、黒髪の小娘だ……」

特に小娘の方……年齢は中坊くらいだが、見た目に反してこいつが一番ヤバイ。俺達の兵がかなり殺られているが、実行犯は多分こいつだ。



まあ……お前なら勝てると思うが気は抜かない事だ」

ボスはその声に返事をせずに、足を進める。

まず最初に向かったのは、岩の鬼の死体が見付かった道路だ。

そこにいけば、確かに見間違えようのない同胞が物言わぬ死体となつて転がっていた。

次に道路……ここでは変身の能力を有していた鬼が空から落下したのか四散し、ゴミのように死んでいる。

公園に行けば、そこにあつたのは何かで潰したような破壊跡と、火事の跡のような焦げ目だけだ。

炎の力を有していた仲間が死体すら残っていない。

他にも、街中の至る所に同族の死体が転がっている。

人間達はその死体を見ながら「気持ち悪い」、「早く片付けろ」と好き勝手に言っており、死体の首を蹴り飛ばしている者すらいた。

ボスの顔が憎悪に歪み、拳が強く握られる。

彼は駅前に大勢の人間が集まっているのを見付け、怒りのままに叫んだ。

「ハンターッ！」

もう人間社会に溶け込むだの、擬態するだの、そんなのは止めだ。

仲間を皆殺しにされた上で自分一人だけが大人しくしていても、何の意味もない。

ならば、同胞の恨みを晴らそう。

仲間を皆殺しにしたハンターと同じように、奴らの同胞である人類を皆殺しにしてやる。

「ハンターッ！」

その感情に突き動かされるままに叫ぶ。

まずは仲間を皆殺しにしたハンターを殺す。

ここにいる一般人は全員、その為の人質だ。

何人か殺し、脅せばハンターも出て来るしなくなるだろう。

「ハンターッ！ 俺を止めてみせろ！」

これは戦争だ。

人類が死滅するか、自分が死ぬかの戦いだ。

「誰？ 何だ？ 何叫んでんの？」

「いっちゃツてる奴じゃない？」

「何アレ？ 誰？」

「アソコ……ホラ」

「ハハハハハハハ」

「ヤベー奴……」

「笑ツちやう……」

「ハンターツてなんだよ」

「撮影じゃないよね……？」

「役者……？」

未だに状況を把握出来ない間抜けな一般人達はボスを見て笑っている。

だが直後に彼等の笑みは凍り付く事となった。

一般人が見ている前でボスがみるみる変化していき、宇宙人としての姿を晒したからだ。

上着を破いて現れた筋骨隆々の身体は2mを超え、顔の至る箇所からは角が生えている。

背中や肘からも角が生え、その姿はまさしく「鬼」と呼ぶに相応しいものだ。

「ハンターツ！ 俺を止めてみるオツ!!」

明らかに人ではないそれを見て、人々がざわめく。

何人かはまだ映画の特殊メイクか何かと思つて呑気に構えているが、ただならぬ雰囲気怯える者も出始めていた。

それでもまだ彼等に余裕があるのは近くに警察がいて、いざとなれば守ってもらえる……などと思つているからだろう。

まるで対岸の火事だ。

今、この場所こそが火災現場だというのに、平和に慣れ過ぎた脳はそれすら認識出来ない。

「撮影？ 何やツてんだよ、責任者どこ？」

「おいッ、お前に言ツてんだよッ」

まるで現実を認識出来ない間抜けな警官が二人、無防備に鬼に

近付いた。

あまりにも軽挙……人間を憎む野生の大熊の前にノコノコと出歩いて職務質問をする馬鹿はいない。

彼等はそれと同じ……いや、それ以上の間抜けだった。

鬼が残像を残すほどの速度で移動し、直後に二人の警察官が電車にでもはねられたかのようにバラバラになる。

人外の膂力とスピードを持つ鬼ならば、ただの体当たりですら人間などバラバラに出来てしまう。

肉片と臓物が道路に散らばり、ここでようやく人々は現実を認識した。

CGではない。特殊メイクでも映画の撮影でもない。

……これは、本物だ！

「きゃアアアア！」

「わアアア！」

死体を見てしまった人々が叫び、我先にと逃げようとする。

警官隊も慌てて動き、ライオットシールドを前に構えて鬼へと向かった。

「おさえ込めッ！」

だがそんなもので鬼は止められない。

またしても高速で動いた鬼が、一瞬で盾ごと警官隊を肉片に変えてしまう。

「止まッたぞッ！」

「発砲許可ー！」

「撃て！ ガス弾撃ち込めッ！」

続いて銃を撃つが、これも効果がない。

銃弾などものともせず鬼が走り、またしても警官隊が肉片へ変わる。

気付けば二十人以上いたはずの警察が全て残骸と化しており、人々を守る者はいなくなっていた。

「野次馬の連中！ よく聞け！ そこから一步も動くな！」

逃げた奴から殺す！ 動いても殺す！

今日！ この場にいる事を呪え！」

人々は震え、恐怖した。

もう、呑気に構えている者など誰もいない。

皆が思い知ったのだ。自分達が興味本位で来てしまったこの場所は地獄だったのだと。

特に、宇宙人見たさにわざわざ遠くからここまで来た者など後悔しかないだろう。

彼等はこれから、好奇心の代償を命で払う事になるのだ。

そんな人々から鬼が視線を外し、横を見た。

そこにはまさに目当ての、黒いスーツに身を包んだハンター——和泉が立っている。

高得点のターゲットとして、分かりやすすぎるくらいに目立っていた鬼を仕留めに来たのだ。

そして、一般人を巻き込みながら鬼と和泉の戦いが始まった。

## 第22話 俺は止まらない

「何か確実に変化してる。今回の敵は一般の人にも見えてるし」  
走りながら、玄野が確信をもった声で言った。

ボス以外の星人を倒したガンツメンバーは現在、和泉とパンダ以外の全員が合流して街中を走っている。

全員……といってもチームマーやサラリーマンはいない。あくまで現在生きているメンバー……玄野、加藤、ほむら、桜丘、東郷、JJ、ライスの六人と一匹だけだ。

一応キュウベえもいるが、この役立たずは誰も数にカウントしていなかった。

「テレビカメラとか一杯いたよ。日本中が知ツちやツたよ」

桜丘の声には若干の恐れのようなものがあつた。

これまでガンツのミッションは日常から隔離された非日常での出来事であつた。

現実である事は変わらないが、表と裏できつちりと区分けされていたのだ。

だがその区切りはもうない。今回の星人は完全に表の世界に進出し、何人かの一般人が巻き込まれて死んでしまっている。

こんな事は今まで一度もなかった……だから分からないのだ。これからどうなってしまうのか、その知識が誰にもない。

「どーなツてくんだ、これから……」

「分からない……けど、今回恐らく全員に近いメンバーが自由になれる可能性が高い！」

加藤の問いに、玄野は今ハッキリと分かっている事だけを答えた。

今回のミッションは今までと違い、敵の数がやたら多かつた。

一匹1点だったとしても、かなりのメンバーが100点に到達出来るはずだ。

「……嫌な空気ね」

普段通りの抑揚のない冷静な声で、ほむらが呟いた。

その声に全員が会話をやめ、耳を傾ける。

最年少ではあるが、未だに底を見せていないこの少女の言葉は聞くに値する。

何というか、潜った場数が違うような……一般人では持ちえない視点を彼女は持っている気がするのだ。

「流れが今までと違うわ。表と裏の境界線が薄らいでいるような……そんな気がする」

「ああ……俺もそう思う。暁美、お前はこれからどーなると思う？」

玄野の問いに、ほむらは少し考えながら機械を見た。

こちらの表示もおかしい。

まるでバグっているように映像が歪んでいる。

そこには今までであったはずのもの……移動禁止の範囲が何故か見えぬ。

これはつまり、星人が指定範囲の外に出る可能性が高いという事なのだろうか。

そして、星人がどこに行こうと追いかけて倒せというガンツの意思なのかもしれない。

「……今回のミッションで一つの境界線が壊れたのは間違いないわ。

もしかすると、今後は星人が身を隠す必要がなくなるかもしれないわね」

「そッ、それッて、つまり……これからは敵が、ミッションとか関係なしに出るかもしれないッて事か!？」

「これは私の勘だから聞き流してくれていいけど……もしかすると、星人と地球人全体との戦いのようなものが近付いているのかもしれないわね。

奴等もこれからはどんどん表に出て来るでしょうし、そうなれば地球の軍だつて動く。

……どちらにせよ、今回を境に大きく変化すると思つた方がいいわ」

ほむらの言葉に、一同が無言になってしまう。

聞き流していい予想……とは思えなかった。

ほむらの言葉には妙な現実味と確信があつた。

「そろそろ敵に近づく。東郷さんは今の内に狙撃ポイントを探して」  
「分かった……無理はするなよ」

ほむらの指示を受け、東郷が一行から離脱した。

彼は今から、ボスを狙い撃てる最適なポイントを探してそこに陣取らねばならない。

向かう先では既に戦闘が始まっているのか、何度も雷のような電撃が迸っていた。

どうやらボスは雷の使い手らしい。

これは厄介ね、とほむらは思った。雷というのはとにかく速いのだ。

雷の速度は凡そ秒速150km程と言われており、こんなものはいくら魔法少女であっても時間を止めでもしない限りはまず回避出来ない。

撃たれる前に予測して回避する事は可能だが、撃たれた後に避けるのは無理だ。

そして今のほむらは魔法少女ではなく、魔法少女の身体能力を持っているだけの人間で、勿論時間など止める事は出来ない。

加えて、その身体能力すら魔法少女の中では最弱レベルときた。

膨大な経験値と戦闘勘、先読みこそあるものの流石にスーツなしで戦うには限界が見えてきたかもしれない。

(もつと自分の訓練に時間を回しておくべきだったかしらね)

スーツに慣れるまではスーツを着ない方が強い。

故にほむらは、練習こそしていたものの今まではスーツをそれほど必要だと思つた事はなかった。

魔法少女の身体能力を持つほむらは元々、スーツなど着ていなくてもビルからビルへ飛び移るだけの身体能力を有していたし、耐久力だつてワルプルギスの夜が投げたビルに衝突して別のビルまで派手に吹き飛んでも五体満足でいられるだけのものがあつた。

つまりほむらは素の状態でもスーツを着た玄野達より速くて強くてタフなのだ。

そこに彼女の先読みと銃の腕前が合わさり、これまでのミッション

でも苦戦を強いられた事はなかった。

だから……どこかで軽視してしまっていたのだろう。

玄野達に訓練をつけるようになって以降は、彼等を鍛える事を優先して自らの訓練時間を削ってしまった。

(今回のミッションが終わったら、本気で訓練しないとね)

恐らくここからは戦いのレベルそのものが変わる。

そんな予感を感じながら、ほむらは戦いの場へと走った。

ほむら達が到着した時、その場は地獄絵図と化していた。

多くの警官がバラバラの死体となって地面に転がり、一般人もかなりの数が屍と化している。

車やバイクが横転し、下半身のない男の死体に縋りついて泣く女性の姿などもあった。

そしてその中で和泉が、戦意喪失したように膝を突いて項垂れている。

よく見ればスーツのあちこちから液体が漏れており、恐らく鬼の攻撃によってスーツが破壊されたのだろう。

和泉は決して弱くない。

まだこれで三回目のミッションだが、その技量はベテラン組にも劣るものではなく、むしろ勝っていると言えるだろう。

刀を持った時の近接戦闘での強さは、ほむらを除けばトップと言っている。

その彼が、全くダメージを与える事も出来ずに追い込まれている。

それだけでこの鬼の強さが今までとは桁違いである事は間違いないと、誰もが感じ取れた。

「俺はこれからこの街の人間を一人残らず殺す！」

この街の人間がいなくなれば次の街だ！

俺は止まらない！ 虫けら共、可能なら俺を止めてみる！

俺は一人でもお前等全体相手に勝って見せる！

全人類が相手でも俺は勝って見せる！」

それは、自信……というよりは、同胞を全て失ったが故の捨て鉢な



のだろう。

そんな事が可能ならばとうにやっていたはずだ。今までそれをやらずに社会に潜伏していたのは、つまりそんな事は出来るわけがないと彼自身が分かっていたからだ。

しかしそれは、今までの星人とは明らかに異なる地球人への宣戦布告であった。

「おおオオッー！」

先陣を切ったのは玄野だった。

素早く抜刀し、鬼へ向けて刀を突き出す。

だが鬼は跳躍してそれを避けると、手を上へ向けた。

それと同時にバチバチと電気が迸り、攻撃の予感に全員が反応する。

「聖！ 和泉頼むー！」

玄野の指示で桜丘が和泉を抱え、全員が跳躍してその場を離れた。

直後に雷が道路を撃ち抜き、轟音を立てる。

再び玄野が刀を振りかぶって鬼に挑むも、大振りの一撃は容易く避けられ、続く横薙ぎの剣も回避された上で背中を肘で強打された。

倒れた所を蹴られ、玄野が吹き飛ばされる。

それと入れ替わるようにJJと桜丘の格闘技コンビが飛び込み、鬼へ果敢に近接戦を挑んだ。

空手とキックボクシングという違いはあれど、どちらも格闘技経験者であり高い格闘能力を有している。

しかし残像を残すほどのスピードで動く鬼を捉えられず、二人共殴られて宙を舞った。

「下がりなさいー！ こいつは私がやるー！」

続いてほむらが鬼の前に躍り出て銃口を向ける。

鬼はまたしても高速で動く事で狙いから外れ、ほむらの背後を取る……が、この程度のスピードの敵など、魔法少女時代にいなかったわけではない。

ほむらは即座に反応し、振り返りながら銃身で鬼の顔面を強打した。

「ぬッ、この、小娘ッが！」

鬼が豪腕を繰り出し、左右のワンツートを放つ。

だがほむらは最小限の動きでそれを避け、Xガンを連射した。

しかしこちらも当たらない。この鬼のスピードならば、引き金を引かれると同時にその場から離れる事が出来る。

サイドステップをしてXガンから逃れた鬼はすぐにほむらへ近付いて雷撃を落とす。

撃たれる前に回避動作に移っていたほむらは後方に跳躍して雷撃を避け、宙返りしつつXガンを撃った。

しかしやはり駄目だ。この鬼のスピードでは、回避しようのない零距离射撃でもない限りまず避けられる。

着地と同時にほむらと鬼が接近し、鬼が拳を繰り出した。

身体を屈めつつパンチを避け、鬼の膝を蹴りで叩く。

更にもう一度蹴り。顎を跳ね上げ、上がった喉に銃口を向ける。

だがそのXガンを鬼が裏拳で跳ね飛ばし、銃が宙を舞った。

続く左拳がほむらの顔へ迫る。

これを頬スレスレで避けつつ回転し、遠心力を乗せてハイキック。

鬼の脳天で甲高い音が響き、鬼がよろめいた。

その隙を狙う様にすかさず腰に差していた刀を抜いて薙ぎ払う――が、もう鬼はそこにいない。

「……………」

悪寒を感じてすぐに横へ跳躍。

それと同時にほむらが立っていた場所を雷が抉り、爆風で吹き飛ばされてしまった。

何とか空中で受け身を取るも、近くに転がっていたパトカーに痛烈に叩き付けられる。

そこに鬼が追撃をかけようとするも、今度は加藤とライスが突撃した。

「グルウアアアアアア！」

ライスが牙を剥いて飛び掛かり、鬼の脇腹へと噛み付いた。

ブチブチと音を立てて鬼の肉を食い千切るも、すぐには噛み切れな

い。

並みの星人など一撃で噛み殺すライスの咬筋力でもすぐには千切れないほど頑丈なのだろう。

「こッのツ、犬風情が！」

「ギヤイン！」

鬼に殴られ、ライスが地面を転がる。

続けて鬼が高速移動し、雷光が加藤を吹き飛ばした。

「でやあああッ！」

再びJJが格闘戦を仕掛け、鬼の胸板を拳の連打で叩く。

鬼は一瞬よろめくも、すぐに反撃の拳をJJの横面へめり込ませた。

JJの折れた歯が宙を舞い、だが彼は倒れない。

諦めずに果敢に殴り、殴り返される。

鬼の攻撃を防いだ右腕から甲高い音が響き、右腕が使い物にならなくなった。

「うオオオオオオッ！」

JJが吠え、鬼にタツクルをして地面に倒した。マウントポジションだ。

その状態で残っている左拳を何度も鬼の顔に叩き込むが、鬼の周囲が帯電を始めていた。

「ヤバイッ！　そこから離れろオッ！　JJ！」

次に鬼が繰り出す攻撃を察知した玄野が慌てて叫ぶが、もう遅い。

鬼を中心として雷撃が放たれ、JJが吹き飛ばされる。

たったの一発でJJが血飛沫と共に舞い、四肢を失って墜落した。

「誰かJJさんの止血を！」

ほむらが指示を飛ばし、先程落としたXガンを拾ってすぐに鬼へと飛び込む。

更にキュウベえに持たせていたZガンを取り、左右の手に銃を携えている。

鬼も彼女だけは別格と理解したのだろう。すぐに迎撃態勢を取ってほむらへと向き直った。

牽制のXガンの射撃を避け、鬼が肘打ちを放つ。

それを避けて次弾発射……しかしこれを鬼は避けずに腕で受け、構わず拳を繰り出した。

これをスウエーバックで避けつつ、拳を蹴り上げる。

そのままバックフリップに移行し、サマーソルトキック。

完全に鬼の拳が上がり、一回転してほむらが着地した。

それから少し遅れて、先程Xガンを受けた腕が破裂するが……規模が小さい。

腕の一部が弾け、肉片が四散したものの腕は健在のままだ。

(呆れた頑丈さね……)

鬼がダメージなど気にせずほむらへと殴りかかった。

多少のダメージを気にして勝てる相手ではないと判断されたのだろう。

鬼が次々と拳を繰り出し、それを避けながらほむらが蹴りや銃底での打撃で鬼にダメージを蓄積させる。

そしてZガンを発射するが、鬼もこれには今までと違う不吉な何かを感じたらしく高速移動でその場を離れた。

直後に道路が押し潰されたように陥没し、二人の間を隔てる。

「人間め……」

鬼が炎の如き怒りの表情を浮かべ、ほむらは氷の無表情で構えを取る。

過去に戦った魔女と比較しても、これほど手強い相手はそうそういなかったかもしれない。

呼吸を整え、ほむらは目の前の相手に全神経を集中した。

## 第23話 見えてんのか、俺達

ほむらと鬼の戦闘は徐々にほむら優勢の様相を見せていた。鬼との戦いが長引けば長引くほど、ほむらは彼の動きを見切り、予測の精度も上がる。

どんな豪腕も、威力のある雷撃も、当たらなければ意味がない。鬼の蹴りをほむらが紙一重で避け、肘打ちを顔面へ叩き込む。そのまま流れるように銃底で殴り、怯んだ所で今度は水面蹴り。足元を崩し、よろめいた鬼の巨体を蹴り飛ばした。

好機——！

ほむらはすぐに銃口を構えるが、しかし何か気付いたように横へ跳んでからXガンを撃った。

だがこのタイムロスが災いし、鬼がXガンを避けてしまう。標的を外したXガンは道路を破壊し、二人は一定の距離を保って睨み合った。

「今……何故撃たなかった？ 絶好の機会だったはずだ」  
「……………」

何故ほむらは撃たなかったのか？

その事を鬼が疑問に思うも、ほむらは当然答えない。

しかし鬼は周囲を見回し、何かに気付いたように顔を歪めた。

「クツクク……フハハハハハ！ そうか！ そういう事か！」

鬼が笑い、サイドステップを挟んでからほむらへ接近する。

ほむらはそれを迎え撃つが、何故かXガンを撃たない。

鬼が雷を落とし、それに追いつめられるように後ろへと跳ぶ。

そして横に移動して銃を構えるも、同じく鬼が横へ移動した為に再び撃てなくなってしまった。

何故ほむらは撃たないのか？ その理由は、ほむらと鬼を結ぶ一直線の射線上……その先にこそあった。

——鬼の背後には、一般人がいるのだ。

つまりこの位置関係でXガンを撃ち、回避された場合は一般人が死ぬ事になる。

だからほむらは撃てなかった。

撃つ事が出来ない位置関係がある……その情報を鬼が知ってしまつたのは大きい。

ここから先、鬼は常に野次馬を後ろに置くように戦うはずだ。

そうなれば、ほむらは威嚇射撃すら満足に行えないだろう。

「……甘く見ないで！」

しかしそれはZガンならばの話。

局地的に重圧をかけて潰すZガンならば射線上の先にいる一般人を撃ち殺す事はない。

ほむらがZガンを発射するも、鬼は高速で走る事で回避してしまふ。

Zガンは強力な武器だが、サイズが大きく小回りが利かない。

そして一度距離を詰められてしまえば、とても使えたものではないだろう。

何故なら下手に撃てば自分まで巻き込んでしまうからだ。

「っー」

鬼に距離を詰められたほむらはZガンを加藤の方に投げ捨てた。

腰に戻している暇はないし、その辺に捨てて万一にでも敵に拾われて使われては面倒だ。

その点加藤ならば、とりあえずは持つていてくれるだろうし自分が近くにいる間は間違えても撃たないだろう。

一時的に預けるならば、とりあえず加藤に持たせておくのが安全だ。

鬼が高速移動をしながらほむらへ攻撃し、ほむらはそれを避けながら応戦する。

繰り出された豪腕を上体を逸らすように避けて、ブリッジから逆立ちへ移行して鬼の腕を蹴り上げた。

更に逆立ちのまま腕を振って回転。上下反転した姿勢で回し蹴りを放ち、鬼の頬を蹴る。

最後に両足で鬼の顔を蹴り、その反動で離れると地面を転がってすぐに体勢を立て直した。

しゃがんだまま銃を向けるが、これだけは鬼も避ける。すぐに一般人を射線上に挟み、ほむらの銃撃を封じた。この位置関係ならばほむらは決して撃てない。

そう確信しているが故に鬼は一直線に走る。

これに対しほむらはXガンを——構わず発射した。

「ッ!？」

鬼の後ろには一般人がいる。

したがってもしも鬼がこれを避けてしまえば一般人を殺してしまふ為にほむらは撃てないはずであった。

しかし、このままでは勝てないと悟ったのだろうか？

それとも多少の犠牲は止むを得ないと割り切ってしまったのだろうか？

鬼は咄嗟に横に跳び、玄野達が青褪める。

誰もが、数秒後に一般人が肉片に変わる光景を思い浮かべ……鬼の太ももの肉が弾け飛んだ。

「なッ……にッ!」

鬼の口から驚愕の声が漏れた。

ほむらのXガンによる射撃は確かに避けたはずだった。

ダメージを受けるのは後ろにいる一般人のはずだった。

だがその認識が間違いなのだ。何故ならほむらは既に、ロックオンを済ませている。

そう、Xガンにはロックオン機能が存在する。これを使えば銃の向きや敵の位置に関係なく確実に当てる事が出来るという優れた機能だ。

「貴ッ様……撃たなかつたのは一般人を巻き込まない為ではなく……俺にそう思わせる為ッ……か」

「ええ。貴方ほどのスピードで動き回られてはロックオン機能に捉える事すら難しい……」。

だから貴方には『避ける必要がない』と思わせる必要があった……『一般人を射線上に置けば撃つて来ない』……そう思う事で貴方は逆に自らの動きを制限した」

Xガンのロックオン機能は捉えさえすれば強いが、その為には相手を一度照準に入れてトリガーを引かなければならない。

だが鬼ほどのスピードで動き回る相手にそれをやるのは困難だ。だからほむらは戦いながらブラフを撒き、鬼自身が動きを止めてくれるように誘導したのだ。

『射線上に一般人がいれば誤射を恐れてほむらは撃たない』と思わせた。

撃たないならば横に避ける必要はない。故に動きは直線的になり、ロックオン機能に捉えるのが容易くなる。

その狙いは見事に嵌り、こうして鬼の足を破壊する事に成功した。足さえ潰してしまえばこちらのものだ。自慢のスピードは半減し、戦いやすくなる。

それでもまだ十分速いだろうが、ほむらならば問題なく捉えられる速度だ。

「まだだッ！ 人間如きにッ、俺が負けるかッ！」

鬼はそう叫び、近くに転がっていたパトカーを片手で持ち上げてほむらへ投げつけた。

苦し紛れの攻撃だ。追い詰められた者が近くにある石などを適当に投げているに等しいささやかで無力な抵抗である。

こんな攻撃はほむらに当たらない。その程度の事は鬼だつて分かっているだろう。

その予想の通りにほむらは軽く避けようとし――。

「!!」

自らの後ろに、一般人の少女がいる事に気付いた。

このままパトカーを避ければ、間違いなくあの少女は潰されてしまうだろう。

ほむらは反射的に少女の方へ駆け出し、抱えてその場から跳び退く。

だがそれは鬼を前にしてあまりにも大きな隙だ。

スピードが半減したといえど、それでも鬼は速い。

振るわれる拳を前に咄嗟に少女を近くの人の方へ投げ、そして



自らも後ろへ跳びつつ腕で鬼の拳をガードした。

「……っ!!」

枯れ木が折れるような音が響き、ほむらの身体が吹き飛ばされた。地面に背中から打ち付けられ、バウンドしてから倒れる。

そこに鬼が更なる追い打ちをかけようとするが、この危機に咄嗟に玄野達も動いていた。

「俺達も行くぞッ！ 聖！」

「分かッたわ、玄野クン！」

玄野と桜丘が走り、鬼に挑みかかった。

これまでのほむらとの戦闘で消耗している今の鬼ならば、玄野や桜丘でも十分戦える。

玄野の拳が鬼の顎を跳ね上げ、桜丘のキックが腹にめり込んだ。

鬼が負けじと高速で動いて雷撃で桜丘を吹き飛ばし、玄野の背後へ回り込む。

だがスピードは半減している。先程と比べれば遅い。

玄野はしっかりとその動きを目で追っていた。

そして鬼の脇腹に肘をめり込ませ、動きを止める。

「あッ、当たッた！」

加藤が驚く中、玄野は更に鬼の嵐のような乱撃を全て刀で防いでみせた。

ほむらやJJの与えたダメージで鬼のスピードが鈍っているというのは確かにある。

だがそれ以上に、この善戦を可能としているのは玄野自身が持つ生存能力……センスによるものであった。

玄野計は決して運動能力に特別優れた男ではない。

体格も加藤ほど恵まれておらず、頭もそれほど回るわけではない。

しかし生き残る事にかけて、彼は並外れたセンスを持っていた。

人は窮地に追い詰められると動揺する。思考も鈍り、焦りは判断力を奪う。

しかし玄野はそうではなかった。

むしろ追いつめられれば追いつめられるほどに、彼の感覚は研ぎ澄

まされていく。

決して強いわけではない。速くもないし賢くもない。

だが彼には分かるのだ……自分が生き残る為に今、何をしなければならぬのか。

「きさまアッ！」

鬼が残像を残すほどの速度で玄野の後ろへ再び回り込む。

今度は目で追えていない。完全に見失っている。

だが玄野は勘だけで背後に肘打ちを放ち、鬼の顎へめり込ませた。

「おのれッ！ 知れッ身の程をッ！」

「ぐッ、いッ！」

何度も鬼の打撃が玄野を襲う。

かろうじて刀で防御しているが、刀から伝わる衝撃だけで腕が痺れそう。

骨の芯まで響きそうな重さが、鬼の拳にはある。

やがて耐え切れなくなった刀がへし折れて吹き飛ばされるも、道路に手をつけて倒れる事を避け、すぐに突撃した。

「おおオオッ!!」

「ガアッ！」

玄野の突撃に合わせて鬼が拳を出すも、玄野は身長差を活かして身を屈めて拳を避け、鬼の脇腹に左拳を突き刺す。

頭が下がった所で今度は右のフック。

もう一度左拳を脇腹に叩き込み、渾身の右アッパーで鬼の顎を跳ね上げた。

「い……いけるッ……いけるわよッ、玄野クンッ！」

「やッぱ……計ちゃんはずげえ……ッ」

雷撃のダメージで動けない桜丘が恋人の勇姿に勝利の希望を見出し、加藤は玄野の戦いぶりに見惚れていた。

玄野が殴り、鬼が殴り返す。

体格の差もパワーの差も、スピードの差も圧倒的だ。

なのに負けない。

誰が見ても負けるとしか思えない条件で、玄野計は互角に戦い続け

ている。

その隙にほむらは無事な方の腕でガンツソードを抜き、ビルの屋上を一度見た。

「おおおオオオッ！」

鬼の蹴りがようやく玄野にクリーンヒットし、彼をバスへ叩き付けた。

玄野の身体がズルズルと地面へ落ち、スーツからは液体が零れる。今の攻撃で玄野のスーツが死んでしまったのだ。

後一撃でも喰らってしまえば、もう玄野は助からないだろう。

しかし彼が稼いだ隙を突き、今度はほむらが飛びこむ。

「ぬッうー！」

鬼がほむらを止めようと腕を伸ばすも、もう遅い。

ほむらは体勢を低くして地面を蹴り、鬼を正面から串刺しにした。

刀身が鬼の筋肉を貫いて背中から生え、夥しい血が流れる。

決まったか——？ そんな空気が一瞬流れるも、鬼はまるでこれこそ待っていた展開だとばかりに笑い、抱きしめるようにほむらを拘束した。

「あぐっ！」

「曉美！」

「フハハハハ！ 油断したな！」

お前を無傷で倒せるなどと思ツちやいない……これこそ、俺が待ツていた好機なのだ！

お前さえッ！ お前さえ倒してしまえば他の連中などどうにでもなるッ！」

ギリギリと鬼の腕力で圧迫される。

いかにほむらといえど、スーツ無しを生身でこれは堪える。

すぐにほむらを助けようと玄野と加藤がXガンを構えるが、鬼はそちらに振り向く事でほむらを盾にした。

「撃てるものなら撃ッてみる！ こいつが死ぬぞー！」

「ぐ……」

「ど、どうする、計ちゃん?！」

ほむらを盾にされてしまつては、玄野達は何も出来ない。

助けようとして、その対象を殺してしまつては本末転倒だろう。

しかしほむらの紫色の瞳に諦めの色はなかった。

むしろ逆……ほむらのその瞳は、勝利を確信したものであった。

「気が、合うわね……」

「何……？」

「私も、リスクなしで貴方を倒せるとは思つてないわ……好機を待つていたのはこつちも同じよ」

ほむらの言葉の意味を理解するよりも速く、鬼のうなじが弾け飛んだ。

続けて体内の心臓が破裂し、夥しい血を吐き出す。

それはまるでXガンで撃たれたかのように……いや、＼ように＼どころの話ではない。

彼は今まさに、Xショットガンによる狙撃を受けたのだ。

そう……これはビルの屋上で鬼を狙っていた東郷による狙撃だ。

ほむらは彼が狙撃ポイントに到達した事に気が付いたからこそ、あえて鬼に捕まるような事をした。

そして鬼が自分を盾にする為に玄野達の方を向く事も分かつていたのだ。

だがそれは東郷に背中を見せる事となり、故に彼は撃ち抜かれてしまったのである。

勝負ありだ。いかに屈強な鬼と言えど首と心臓を破壊されては生きていけない。

むしろ即死しないだけ、十分に化け物と呼べるだろう。

「おの、れ！…こうなれば、せめて貴様ツ、だけでもツ！」

「っ！」

鬼は血を撒き散らしながら、大口を開けた。

このままほむらの首に食らいつき、道連れにしようというつもりだ。

だがその刹那にライスが鬼の顔に喰らいついて動きを止め、更にライスが稼いだ一瞬で玄野が鬼の口にXガンを噛ませ、ほむらへの噛み

付きを防いだ。

更に加藤がタツクルをして鬼を弾き、拘束が緩んだ隙に玄野がほむらを抱えて後ろへ跳ぶ。

「曉美イツ！ やれるな!？」

「当然よ！」

すぐに玄野の腕から脱し、ガンツソードを構える。

玄野も同じく刀を構え、二人は同時に鬼へと走った。

鬼も咄嗟に迎え撃つが、もう遅い。

玄野の刀が鬼の胴を深々と斬り、ほむらの刀が首を斬り飛ばす。

そして二人が通り過ぎた後には、三つに分断された鬼の死体だけが残されていた。

すぐにほむらは振り向き様にXガンを連射し、鬼を粉微塵の肉片に変えた。

「ハア……ハア……終わツたな……」

「……ええ」

しばらく注視しても動く気配はない。

ほむらはXガンを仕舞い、それから玄野へと背を向けた。

「今回は貴方に助けられたわね。一応、お礼を言っておくわ」

「えッ、あ、ああ……気にすんなよ。俺だッていつも助けられてる」

今回の戦いは、ほむらにとっても決して楽なものではなかった。

野次馬さえ邪魔にならなければ一人でも倒せただろうが、そんなものはい訳に過ぎない。

結果としてほむらは、玄野がいなければ死ぬか、死なないにしても重傷を負っていた。

今まで、『同じ敵と戦っているだけの他人』というスタンスで無関心を貫いていただけに、助けられたという事実には少しばかり居心地の悪さを感じる。

だがそんな気持ちは、次の瞬間に聞こえてきた野次馬の歓声によって思考から追いやられる事になった。

人々は歓喜の叫びをあげ、何人かは涙を流していた。

それだけならばいい。自分達の脅威になっていた恐ろしい鬼が死

んだ事を喜んでいただけと取れる。

しかし歓声の中には『凄い』だの『ありがとう』だのといった声も交じり、人々は間違はなくほむら達を見ていた。

「どーなッ……て……見えてんのか、俺達……」

「……そう、みたいね」

「頭の爆弾はッ」

「作動しないみたいね」

「これ……どうなッてんだ？」

「私が聞きたいわよ」

玄野の問いに、ほむらも答える事が出来ない。

長年の戦歴のおかげで露骨に動揺を見せてはいないが、ほむらもこれでかなり混乱しているのだ。

この人数の人間に戦いを最初から最後まで見られていたとすると、かなり不味い。

もしかしたら携帯電話で撮影した者がいるかもしれない。

それらの映像が出回ると、そこから暁美ほむらという名前に辿り着くかもしれない。

そうなってしまうえば、吸血鬼達が自分の知り合い……つまり、まだか達に手を出す可能性も出て来るのだ。

「助かった……」

「生き延びた……」

「すげーよあんたらッ」

ガンツメンバーの周囲には人々がどんどん集まり、最早気のせいでは済まされない。

完全に見えてしまっている。

加藤や、倒れているJJの周囲にも人が集い、救急車を呼ぼうとしていた。

「救急車早くしてくれッ」

「あんたらよくやッてくれた！」

「本当にッよくやッたよッ！ 救急車今呼んでッからッ」

全員が人々に囲まれ、特に鬼を直接倒した玄野とほむらの周囲は人

の壁が出来てしまっている。

彼等は皆、まるでヒーローを見るように二人を見ているが、二人はただ困惑するしかなかった。

「——っ！」

「あッ、おい！」

とりあえず、ほむらはその場から跳躍して人々の壁を突破して開けた場所に着地する。

それから再度跳躍して近くの建物へ跳び、壁を蹴って別のビルの壁へ跳躍……それを繰り返してあっという間に夜の闇へと消えて行った。

今更遅いかもしれないが、とにかく長い間顔を晒していたくない。故に、ひとまずの緊急離脱である。

ここで玄野を置いて一人で逃げる辺り、絶妙に優しさが足りていない。

「あッのッ、やろー！」

「おー……」

「すッげ……」

置いていかれた玄野が恨めしそうに叫び、人々はただ、その超人的な動きに感心していた。

そうして何とか観衆の眼から逃れたほむらはビルの屋上で座り、キュウベえへと話しかける。

「キュウベえ、これはどうなっているの？」

「さあね。ただ君も言っていただろう、今回を境に大きく変化する……と。」

その変化の一環なんじゃないかな？」

確かに変化するかもしれない、とは言った。

だが、だからといっていきなり一般人に見えるようになるのは不意打ちすぎる。

何とも厄介な事になったものだ……そう思っていると、視界がマンシヨンの部屋へと切り替わった。

どうやら転送が始まったらしい。

先に転送されていたらしい玄野の、恨めし気な視線が印象的であった。

◇ 全員が無事に転送され、今回も主なメンバーは誰も欠けずに終わる事が出来た。

重傷だったJJも無事に帰ってきており、玄野達は露骨にほっとしていた。

チームやサラリーマンは死んでしまったが、あれはほむら的には最初からいないようなものでカウントしていない。

むしろチームは邪魔としか思っていないだったので、酷い言い方になるが死んでくれてよかったくらいだ。

浦中アヤカとサラリーマン達は少し可哀想だったが……まあ、どのみち彼等では生き残る事は出来なかっただろう。

黒玉から音が鳴り、『それぢわ ちいてんをはじめると表示された。』

今回は全員がかなりの高得点を期待出来るが……さて、どうなるだろうか。

『とうごう。102てん。』

TOTAL154てん。100点めにゆくから選んで下さい。

100点めにゆく。

1、記憶をけされて解放される。

2、より強力な武器を与えられる。

3、MEMORYの中から人間を再生でちる』

これで東郷という強力な狙撃手ともお別れか。

そう思い、ほむらは少しだけ彼という戦力の喪失を惜しんだ。

他のメンバーと違い、東郷は最初から戦いの心構えが出来ていたプロフェッショナルだ。

今後、彼のような優秀なメンバーが来るかどうか分からないので、東郷の離脱は正直痛い。

とはいえ、自由になれる権利は誰にでもある。

ほむら自身は以前に『1番は記憶と自衛手段を失うだけの論外』と



して切り捨てたが、それは既に帰る場所のないほむらだからこそ出した答えである。

解放されても星人は地球のどこかに今も潜んでいるし、ミッション外で吸血鬼などの輩に絶対に襲われないという保証もない。

だが、だからといってここに留まって次以降のミッションで生き残れる保証もまたないのだ。

だからほむらは、この100点選択に対して一切口を挟む気はなかった。

忠告は簡単だ。だがその忠告はこの部屋に留まるようにする誘導でもある。

答えを出した後ならばともかく、答えを出す前に決定そのものを曲げてしまうような事を言うつもりはない。

願いは徹頭徹尾、自分の為だけに使うべきだ。

他人に誘導されたり、他人の為に使うものではない。

それを履き違えた者の末路は、もう何度も目にしてきた。

周りを巻き込みながら破滅への道を突き進んだ少女がいた。

家族の為に願い、家族を死なせてしまった少女がいた。

そして……何度も繰り返す迷路に閉じ込められた、愚かな少女がいた。

それを今でも覚えている。故にほむらは何も言わず、東郷の選択を見守る事にしたのだ。

「……2番だ。強い武器を用意してくれ」

そして東郷の選択は自由ではなく、戦いを続ける事であった。

これに玄野達は驚くが、東郷は不敵な笑みを見せる。

「いいのかよ……セツかく自由になれるのに」

「ああ。この部屋で行われているものは……何というか、ただのゲームじゃない。

これから、大きく何か動くような気がしている。

俺は戦場に留まる事にした……何が起こるのかを、見届けたい」

このゲームから自由になっても、星人はいるし戦いは続く。

ならば留まって見届けたい。それが東郷の選んだ答えであった。

## 第24話 お疲れ様

『和泉くん。126点。』

TOTAL147てん。100点めにゆくから選んで下さい』

「2番だ！次までに用意しといてくれ」

東郷の次に表示されたのは和泉だったが、彼は当然のように自由ではなく武器を選択した。

元々、この部屋に来たくて自分から来たような人間だ。わざわざ自由など選ぶはずがない。

ここにいる事が既に彼にとっての自由なのだ。

続けてガンツの画面には玄野の顔が表示された。

『くろのくん。105てん。』

TOTAL153てん。100点めにゆくから選んで下さい』

「……」

すぐにでも1番の自由を選択すると思われた玄野だったが、しかし彼は意外にも即答しなかった。

ミッション中は、100点を取ったら絶対に1番を選ぶほうと思っていた。桜丘と一緒に自由になって、平和な日常へ帰るのだと……そう思っ

ていたからこそ辛い戦いだって乗り切れた。

だが状況が変わってしまった。このまま1番を選ぶのが正しいとは思えなくなってしまった。

だから玄野は少し考えるようにし、それから決意したように顔をあげる。

「3番……死んだ人間を生き返らせてくれ！

生き返らすのは……西丈一郎だ」

この答えには加藤もそうだが、ほむらも流石に驚きを隠せなかった。

自分の自由を捨ててまで何故そこで、西丈一郎なのだ。

西と玄野は別に親しかったわけではない。会話だつてほんの少ししか交わしていないし、むしろ険悪だったと言えるだろう。

恐らくは自由か、あるいは岸本辺りでも蘇生するかと思っていただけにこの選択には驚くしかない。

「計ちゃん、どうして？ 自由になれるんだぞ……？」

「……いいんだ。自由になる前に、知らなきやいけない事がある」

自由と引き換えにしてまで、何を欲するのか。

ほむらはすぐにその答えに行き着き、納得した。

玄野が欲しいのは情報だ。

ミツシヨンが変わってしまい、これからどうなるのか分からない。

だから、もしかしたら知つていそうな西をここで呼び戻す事にしたのだ。

「知っているかしらね。彼は私達が来る一年前から部屋にいたと言つていたけど……私達だつてもう半年以上はここにいる。」

年季を言えば私達の倍程度しか部屋にいなかった事になるわ」

「……そうだな。けど、今はアイツ以外に知つてそうな奴がいない」

ほむらの当然な疑問に、玄野は自信がなさそうに答えた。

これで西が何か掴んでいればいいが、何も知らなければ100点を無駄にするだけだ。

皆が見守る中、ガンツからレーザーが照射されて西が復元されていく。

やがて完全に復活した西は、茫然とした顔で部屋を見回していた。

どうでもいいが、西はこんな顔だっただろうか？

気のせいか、以前よりもずっと顔立ちがよくなっているような気がしてならない。

これは本当に西だろうか？ 間違えて別の誰かを再生しているのでは……とほむらは訝しんでしまった。

「……………ハア？」

復元された西は、状況が掴めないようでもポカンとしている。

無理もないだろう。何せ彼の視点で見れば田中星人にスーツを破壊されて必死に逃げていたと思つたら部屋にいて、更に部屋には見知らぬメンバーだらけときた。

その中でもかろうじて面識のある玄野とほむらへ視線を向け、説明

を求めるように口を開く。

「玄野……暁美……これ……」

「貴方が死んでから、もう半年経っているわ。」

そして今、玄野さんが100点のメニューから貴方を再生した。これで大体把握出来るかしら」

「マジか……俺、死んじまったのか……」

「ええ。私は貴方が死んだ瞬間を見ていないけど、玄野さんと加藤さんが言うには田中星人に殺られたって。途中までは記憶あるんでしょう?」

「ああ……チクシヨウ! ダッセエ、くツそ……」

西は自分が死んだ事を恥じ、額を押さえる。

あえて誰も言わなかったが、彼の死に様はかなり情けないものであった。

大口を叩いた拳句田中星人一体にも勝てず、散々見下していた他メンバーに助けを求めるも助けてもらえずに、田中星人の超音波によって顔中の穴から血を噴き出して死んだ。

しかも死の間際にはママ、ママと連呼するオマケ付きだ。

西自身も、もしかしたら自分がそんな事を言っていたかもしれないと思っっているのだろう。

何となく、居心地が悪そうだ。

だが和泉を視界に入れた事で、その表情は驚きに彩られた。

「和泉……何で、戻ってんだよ……」

どうやら西と和泉の間には面識があるらしい。

しかしその割には和泉は何のリアクションもなく、西を無視している。

それを見てほむらは和泉の正体に合点がいった。

妙に戦いに慣れているとは思っていたが、なるほど……和泉は100点獲得者だったわけだ。

そして彼は過去に一度、記憶を消されてこの部屋から解放されている。

「なんだおい……記憶なくしてんのか?」

「知らねーツつの」

「チツ……。で……。何で俺を再生した、玄野。何か魂胆があんだろ」

「……。今、お前がいた時から……。状況が変わってきてるんだ。」

星人も俺達も……。街の人間に見えるようになってきてるし時間制限もなくなッた……。

これからどーなッてくか、分からなくなッてきてる……。どんな法則が変わッていつてる。

この中の誰も……。その事について説明出来ないんだ……」

玄野の言葉に、キユウベえは内心で『僕は出来るけどね』と思っただいた。

とはいえ、それをわざわざ教えてやる義務も義理も彼にはない。

下手に教えて、それで玄野達が財閥チームやマイエルバツハと敵対しても面倒なだけだ。

「……なるほどね。納得」

とりあえず復活させられた理由に合点がいったのだろう。

西は薄ら笑いを浮かべ、玄野を見た。

「シツかし情けねーな。半年以上も前に死んだ俺にアドバイス求めんのかよ」

「そう言うものではないわ。その情けなさのおかげで貴方はこうして戻って来れたのだから。」

再生の対価として、情報を提供するくらいの誠実さは見せて欲しいのだけれど」

西が玄野を嘲るように言うが、そこにほむらが口を挟んだ。

正直なところ、わざわざ100点を使つてまで復活させるほどの情報を西が持っているとは思えない。

だが折角100点を使つたのだから、せめて知っている事くらいは吐いてもらわねば玄野が報われないだろう。

だから少しだけ助け舟を出してやる事にした。

今回は……。そう、今回だけは特別だ。

不本意だが今回の戦いは玄野に助けられてしまったから、その分を返さないと気分的によろしくない。

「貴方も一方的に借りを作つたままじゃ意味が悪いんじゃない？」

それに情けなさという点では、貴方の死に方も人の事を言えないわよ。

死の間際にこそその人の本質は出るというけど、聞いたところによると貴方はママーとか言いながら……」

「わーッた！ わーッたよ！ 話せばいいんだろ！」

西の死に様を引き合いに出し、舌戦を仕掛ける。

すると流星に死に様を知られている西の分が悪く。あっさりと白旗を上げてしまった。

「対価……ね……」

フン……まア確かに……お前等に借りを作つたままツてのは気分的によくないな……」

分かつたよ、教えてやる……」

渋々、といった様子で西が言う。

その目はほむらに向いており、これ以上余計な事を言うなど念押ししているようだ。

「多分……カタストロフィが近いんだと思う……」

「カタス……何だ、それ？」

「具体的には分かつてない。世界中で核戦争が起こるのかもしれないし、隕石が落ちて来るのかもしれない……」

ただ……今の世の中がひっくり返っちゃうような何かが起こるって言われてる。

それが近付いて来てるから法則が変わった……と思う。多分だけどな」

一応、西を復活させた事でそれなりに有益な情報は手に入った。

玄野の100点もまんざら無駄にはならなかったようだ。

それに何だかんだで西はこの部屋で一年生き延び、90点近く取つた男だ。

これから先も、そこらの新人よりは戦力になれるだろう。

『さくらおか。100てん。』

TOTAL123てん。100点めにゆくから選んで下さい』

続いて表示されたのは桜丘だ。

彼女も流石の奮闘ぶりで見事100点を獲得している。

玄野は彼女に「1番だ」と促しているが、少し考えるような素振りを見せた後に顔をあげた。

「ねえ……誰か他に生き返らせたい人、いる？」

「は？ 何言ッてんだよ！ 1番だッて！」

「あたしだけならもそれもいいんだけどね……玄野くんがまだ残るんでしょ？」

じゃああたしだけ自由になるわけにはいかない。自由になるなら二人一緒に、よ」

「馬ツ鹿ッ、お前まで俺に付き合う必要ねーんだッてッ！」

桜丘はどうやら、玄野に付き合う形で残留するようだ。

命がけで残る辺り情熱的というか何というか……。

しかし、これも一つの選択なのだろう。もし自由になればガンツ絡みの記憶は失われる。

つまり玄野との関係も白紙に戻ってしまうわけで、二人の関係はご破算だ。

酷い話になるが、桜丘がこれからも玄野と一緒にいたいならば自由を得ることなく二人で部屋に留まらなければならない。

「いーから……ほら、誰かいないの？」

「誰か……岸……。……いや、それならせめて2番を選んで強力な武器を手に入れてくれッ！」

そうすれば生存率も上がる！」

一瞬岸本と言いかけた玄野だったが、考え直して2番を促した。

昔惚れていた片思いの相手よりも、今の彼女……というわけではないだろうが、岸本を蘇生する事よりも桜丘に生きて貰う方が玄野にとっての優先順位が高いのだろう。

それに岸本恵は実際、再生しても行き場に困るだけだ。

ミッション中はこのマンションに住むとしても、それからどうする？

ミッションの中でまた死ぬしか道がない。

100点取って解放されても、オリジナルが彼女の実家にいるのだから行き場など最初からないのだ。

桜丘も玄野の助言を受け入れ、2番を選択した。

『じえいじえい。80てん。』

TOTAL108てん。100点めにゆくから選んで下さい』  
続いてはJJが100点だ。

次から次へと出て来る100点ラッシュに西は目を剥いている。

JJはしばらく悩み、名残惜しそうに部屋のメンバーを見渡す。だが決断したように、口を開いた。

「1番……」

まあ当然の判断だ。誰もそれを責めたりはしない。

彼はここまで十分に戦ってくれた。もう自由を得てもいい頃だ。

玄野が拍手を送り、それに合わせて加藤や桜丘などの戦友もJJの自由を祝福した。

「お疲れ様、JJ。あんたの強さに何度も救われたよ」

「どうか幸せになっしてくれ」

「お疲れ様……元気でね！」

玄野と加藤、桜丘の言葉にJJが涙ぐみ、それから東郷を見る。すると東郷は無言で笑い、握手を交わした。

JJはそれからライスの頭を軽く撫で、ほむらと視線を交わし合う。

「サンキュー……サンキューベリマッチ……」

留まる者がいれば去る者もいる。

JJは足元から消えて行き、少しずつ転送されていく。

もう彼が今後、この部屋に呼ばれる事はない。

この部屋で戦った記憶も失い、そして一般人として生きていくのだろう。

少しばかり寂しさを感じるが、これが一番いい選択なのだ。

やがてJJの転送が胸元まで迫り、彼は涙ぐみながらも優しく微笑んだ。

「……皆……本当にありがとう……」。



この部屋で一緒に戦えたのが君達で……本当によかった……。どうか皆も生きてくれ！」

最後にそう言い、そしてJJは消えて行った。

彼がいなくなってから少しの間部屋に沈黙が流れ、静寂が支配する。

やがて玄野が、絞り出すように声を発した。

「あいつ……話せるじゃん………フツーに」

玄野の言葉は西を除くこの場の全員の代弁であった。

今までJJは日本語が不得意だとばかり思っていたのだが、どうやらそんな事はなかったらしい。

最後の最後でまさかの新事実発覚であった。

加藤は、そういえばと思いつく。

最初にスーツを着せようとした時も、思い返してみればJJは普通に『地獄に落ちろ』と日本語で話していた。

微妙な空気が流れる中、ガンツの画面が切り替わった。

『らいます。77てん。』

TOTAL101てん。100点めにゆくから選んで下さい』

続いてはライスだ。

彼もまた100点に見事到達し、自由になれる権利を得た。

最初の頃の0点常習だったあの間抜け犬からは想像出来ない成長ぶりだ。

これには西も驚き、ライスと画面を何度も交互に見る。

「えッ……これッて……あの犬？　だよな……」

いやでも顔つき違うし、別の犬か……？」

「私が躰け直したのよ」

「マジかよ……」

愕然とする西を他所にライスは意見を求めるようにほむらを見上げる。

しかしほむらはあえてここは冷たく突き放す事にした。

100点を得たのはライスだ。ならばその使い道も彼が選ばなければならぬ。

願いというのは他人に決められるものではなく、自分の為に使うものだ。

それは魔法少女も、ガンツも変わらない。

「キーン……」

ライスは少しばかり悩み、やがてガンツの前に行く肉球で2番を選択した。

強力な武器……といってもライスではZガンを使えないので、ただ残留する為にとりあえず2番を選んだようなものだ。

ここで岸本の蘇生を選ばないのは、蘇生させても無駄に苦しませるだけだと彼なりに理解しているからなのかもしれない。

「そう、それがお前の選択なのね」

「ワオウ！」

「ならいいわ。けどZガンはお前には使えないから、他の誰かに渡す事になりそうね」

ライスはほむらと共に戦い続ける事を選んだ。

そんな彼の頭を優しく撫で、それから画面を見る。

『かとう。76てん。TOTAL93てん。ダイジョブ！ 次でいける！（笑）』

「……」

「ドンマイ、加藤」

「あ、ああ……」

続いては加藤だが、残念ながら彼は100点に届かなかつたようだ。

皮肉なものだ。一番解放を望んでいるのに、その彼が100点を取れないとは。

なかなか敵を撃てない性格が災いしてしまったというべきか……。

他のメンバーに比べて今まで点数を稼いでいなかったのも痛手だったのだろう。

とはいえ、残り7点だ。次のゲームを生き残りさえすれば解放への道も開けるだろう。

『ほむらちゃん。127てん。』

「TOTAL220てん。100点めにゆくから選んで下さい」

「……何でちゃん付けになってるのよ」

ほむらは前からの点数と合わせて、圧巻の200点超えだ。

西は「すツげ……」と呟いており、感心したようにほむらを見た。

勿論ここでのほむらの選択など決まっている。

「両方2番よ」

迷う事なく武器を選び、これでほむらは4回目の100点達成となった。

これで更にほむらの戦力が増すだろうが、問題は手に入る武器の内容だ。

前のようにどうしようもない物が出てきたら目も当てられない。

いい物が入手出来るといいのだが。

その後はキュウベえとホイホイが表示されるも、両者共に貫禄の0点で採点は終了となった。

今回でJJという戦力が離脱してしまっただが、代わりに西が参入したので全体的にそこまで戦力が落ちてはいないだろう。

もつとも西はチームプレイをしないタイプなのでチームメンバーが一人欠けてソロプレイヤーが一人入って来た……と考えるとやはりマイナスかもしれない。

もつともソロプレイヤーという点ではほむらや和泉にも言える事なので今更だ。

そうして今日もまた夜が明け、偽りの日常が戻って来た。

## 第25話 マズイ事になつてきた

予想はしていたが、オニ星人との戦いが終わった次の日から世間は  
大騒ぎであった。

テレビではどのチャンネルを回しても池袋の宇宙人特集が生まれ、  
様々な分野の専門家があれやこれやと話している。

その内容は的外れなものばかりで、CGや大掛かりな悪戯だとする  
声もあるが、実際に現場に立ち会った人間が大勢いる上に死者まで出  
ているのだ。

人間に近い宇宙人のような何かがいる……世間はそう認識してし  
まった。

幸いなのは報道規制が入り、警察が全てを解決した事になっている  
事くらいだろうか。

恐らくは国が裏から手を回したのだろう。

やはり国は知っている……ガンツの事も、星人の事も。

そうでなければ情報を隠そうとなどしない。

それを幸いとは言いたくないが、とりあえず今の所、ほむら達の姿  
を収めた映像が世間に出回るような事にはなっていない。

しかし日本に住む人々は知ってしまった。人ではない何か潜ん  
でいる事を。

そして情報規制されているが、何人かは知っている……怪物と戦う  
黒いスーツの一団がいる事を。

それを裏付けるようにほむらの携帯電話に玄野から、連絡が入って  
来た。

「玄野さん。どうしたの？」

『曉美か……ちツとな、マズイ事になつてきた。』

昨日俺ン家にフリーライターの菊池……誠一ツて人が来たんだけ  
ど……。

そいつ……西が運営してたサイトから俺の名前に辿り着いちまッ  
たみたいでさ。

そいつが言うには多くの人間が今、俺を探してるらしい……今は別

の、黒野啓ツてヤツに注目が集まってるみたいだけど……そいつ、俺達が映ってる映像まで持ッてた……。

そいつが言うには、事件の直後にテレビ局に没収されて世間には出回ッてない映像のコピーらしい』

「それは……不味いわね」

最悪だ、とほむらは思った。

何が最悪ッて、映像が残っているのが最悪なのだ。

コピーである以上、その菊池とやらを捕まえて映像を没収しても意味はないだろう。

もうネット上の何処かにバックアップされていると思ッた方がいい。

今更ながら西はとんでもない手がかりを残してくれたものだ。

あれのせいで玄野とほむらは名前が割れてしまっている。

特に暁美ほむらなど、そうある名前ではない。

一応自分は故人という事になってる上に普段はマンションの中にいるので玄野のように簡単には発見されないと思うが……それでも不安ではある。

『それと、ドイツにも似たような黒い球があッて……何か、宗教団体があんならしいッて……』

「私達だけじゃないんでしょね。恐らくは日本各地どころか、世界各地に似たような黒い球の部屋があッて、そこで色々な人が星人と戦わされているんだと思うわ」

椅子の上で足を組みながら、ほむらは無造作にテレビを点けた。

適当にチャンネルを回せばやはり池袋の事件について特集が組まれており、皆が好き勝手な推論を述べている。

『どーすればいいかな……。とりあえず誤魔化して帰ッてもらッただけど、アレはもう、ガンツメンバーの一人が俺ッて確信してる……と思ッう』

「下手に情報を与えなかったのはいい判断よ。その手の人間は己の知識欲に忠実で、責任感なんてものはない。真実を暴いた結果、私達がどうなるのか、そんなのは考えてないのよ。」

下手すればあちこちに私達の情報をばら撒かれるだけだわ」

『あ、ああ……けど、どうする？ 追及を逃れるにも限度があるし……』

「……名刺みたいなものは渡された？ もし手元にあるなら、その男の連絡先を教えてちょうだい」

『！ どうする気だ？』

「私が直接会って人物像を確かめるわ。厄介だけど、上手くすれば情報源になってくれるかもしれない。

少なくとも、貴方に辿り着いている時点で情報収集の力は本物でしょうし、出来れば味方にしたいわ」

——そして無理そうならば始末する。

その言葉はあえて玄野には伝えず、彼の返答を待った。

『わかった……悪いな、こんな事で頼ツちまって』

「いいえ。むしろ私に言ってくれてよかったわよ。」

この事、まだ他の人には言わないでね」

他のメンバー……特に加藤などがこれを知れば、何を口走るかわからない。

その点で言えば、ほむらに先に聞くと言うのはいい判断だった。

電話を切り、ほむらは考える。

情報を話せば頭の爆弾が起動して死んでしまうが、しかしその規制はかなり緩くなっているはずだ。

少なくとも姿を見られているし、戦っている場面もばっちり目撃されてしまった。

だからそこまでは話しても大丈夫だ……多分。

とはいえ多分なんてあやふやなものに命を賭ける気はない。

だからこちらからは何も言わない。あくまで向こうの推理力に任せただけだ。

「面倒ね……」

小さく溜息を吐き、ほむらは背もたれに体重をかけた。

◇

菊池誠一はフリーライターである。

彼は二年ほど前から一つの事件……いや正確には一本の線で繋がっている複数の事件を追っていた。

最初は、何でもいいから記事を書きたかった。

何かスクープになりそうなものはないかと日本各地を探し、そして彼は原因不明の破壊跡が日本各地にあるという不思議に辿り着いた。

最初は——正直なところ、そこまで大きな事件だとは思っていなかった。

事故か故意かは知らないが、単純に何らかのどうでもいい……取るに足らない理由で壊れたものが各地にあるというだけで、紐解いてしまえばきつとつまらない答えになるだろうと思っていた。

例えば壊れた家の塀などは車がぶつかって犯人がそのまま逃げただけだろうし、他のも似たようなものだろう。

だから菊池は当初、それらを強引に結び付けて面白おかしい、それっぽいミステリー記事にでもでっちあげようと思っていたのだ。

だが追いかけるうちに、不可解なものが見え隠れし始めた。

壊れた場所を色々と探すうちに、そのうちの何件かで壊れた瞬間を見たという目撃者と出会ったのだ。

当然菊池はそれらの人々にインタビューをしたのだが、彼等彼女らは共通してこう供述した。

『突然壊れた』

こう答えたのが一人や二人ならばいい。

何か見間違えただけだろうと思える。

しかし目撃者全員がそう答えるのでは、流石に何か不気味な物を感じるしかない。

菊池は気付けば、すっかりこの事件に夢中になっていた。

現代に現れた本当の怪奇現象なのではないかと彼の勘が告げているのだ。

それから半年……菊池の考えを裏付けるような、あるサイトが登場した。

それが『黒い玉の部屋』という日記風の小説サイトだ。

管理人は中学生らしく、自分が巻き込まれたという体で物語を書い

ていた。

その小説の内容とは、表の世界で死んだ者達がマンションの一室に呼び出され、黒いスーツや現代科学では考えられない武器を持って様々な怪物と戦うというSFアクションだった。

これのおかしな所は、物語として成立していない所にある。

主人公がいらない。あえて言うならば管理人自身がそうなのだろうが、ひたすら他の参加者を馬鹿にして死に様を眺めているだけで、お世辞にも好感の持てる主役ではなかった。

ヒロインもない。時折顔立ちがそこそこ整った女キャラは出ない事もないが、大抵すぐに死ぬ。

ドラマもない。登場人物のほとんどが馬鹿みたいにゲームに振り回されて馬鹿みたいに死ぬ……本当にただそれだけだ。ストーリーも伏線もあつたものじゃない。盛り上がりすらない。

ハッキリ言つて、とても小説と呼べるものではなかった。

しかし妙なリアリティがあつた。フィクションからは感じられないリアルな何かがあつた。

何より菊池を驚かせたのは、作中で壊れた場所が本当に現実でも壊れているという事だ。

それだけではない。何より注目すべきは——作中の登場人物が全員、実在している……あるいはしていた事だ。

作中に出る人物の名前や外見、職業……それらを調べると驚くほどに現実と合致する。

生きて帰つたとされる人物は本当にその時期は生きているし、死んだとされる人物は試しに訪問してみれば行方不明になっていた。

そして極めつけはあの池袋の宇宙人事件だ。

何とか手に入れた映像の中では黒スーツの一団が怪物と戦っている姿がぼつちり収められており、その装備が小説の内容と一致しているのだ。

こうなればもう疑いの余地はない。

あれは小説などではなく実話を記した日記で、本当に起こっていた出来事なのだ。



小説はねぎ星人編で止まってしまっていたが、菊池はそこから手がかりを探した。

ねぎ星人編で管理人以外に生き残ったのは四人……玄野計、加藤勝、岸本恵、そして暁美ほむら……。

菊池は調べるうちに、このうちの三人が実在して生きている事を突き止めた。

そこでまず最初に岸本恵を当たったが、これは不発だった。

容姿は小説通りなのだが、本人は全く知らないという様子であり、演技しているようにも見えなかったのだ。

そもそもねぎ星人と戦っていた頃は彼女は病院で手術を受けていたらしく、どう考えても辻褄が合わない。

これに関して菊池は、恐らく今生きているのは『オリジナル』の方で、部屋に呼び出された岸本恵ではないのだろうと結論付けた。

となると、彼女は本当に無関係だ。これ以上いくら探しても何も出てこない。

次に加藤勝……作中では『凶体だけ』だの『泣いてばかり』だの『偽善者』だの『だっせえヤツ』だの散々言われていて、少し可哀想に思えてしまった男である。

どうやら管理人との相性は最悪だったらしい。

彼は親戚の家で暮らしているらしいが……残念ながら取材する事は出来なかった。

親戚の家に訪ねても、門前払いされてしまうだけだからだ。

何とか、家から出たタイミングを計って取材したいところだが……。

そして玄野計だが、こちらは当たりだ。

本人は知らないように装っていたが、明らかに目が泳いでいたし動揺していた。

間違いない……彼はガンツの部屋の住人である。

最後に残るのは暁美ほむら……。

登場人物の中で最も現実離れしており、『黒い玉の部屋』の事を現実と信じている閲覧者達ですら『管理人の創作キャラ』と大半の者が考

える少女だ。

実際、彼女だけは他の登場人物と明らかに違う。

スーツなしでスーツ着用者を上回る戦闘力を有し、何の躊躇もなく異星人を殺害してみせた存在。

さしもの菊池も、これだけは実在しないだろうと半信半疑にならざるを得ない、そんな非現実的な……まるで別の作品から迷い込んで来たかのような特大の異物が暁美ほむらであった。

しかし——しかしだ。

あの映像の中に、彼女はいた！

人形のように整った顔に、背中で分かれている黒髪。

更に目撃者の談では、軽々とジャンプで人を飛び越えてビルからビルへ飛び移り、あつという間に月明かりの中に消えて行ったという。念のために調べてみれば、それらしき少女の存在も確認する事が出来たのだ。

中学一年生の頃は東京のミッション系の学校に通い、それから病気の治療の為に医療設備が充実している見滝原市へ。そして見滝原中学校へ転校し……僅か一月後に起こったスーパーセルに巻き込まれ、帰らぬ人となった。

ならば彼女は、スーパーセルで死んだ暁美ほむらなのだろうか？

しかしそれでは時期が合わない。

黒い玉の部屋に暁美ほむらが登場したのは、見滝原のスーパーセルからかなりの日数が経過してからの事である。

だが彼女に関してはおかしな部分がいくつか見受けられた。

生まれつき心臓の血管が細く、治療の為に見滝原に引っ越した……ここまではいいでしょう。

だが見滝原中学に入ってからがおかしい。成績優秀で運動神経抜群。

非公式ではあるが県内記録すら塗り替えるほどの能力を見せていたと教師は語っていた。

何だそれは。おかしいだろう。

心臓が弱くて入院していた少女が、何故そんな事が出来る。

それが出来るならばそもそも入院などしないだろう。まるである時を境に別人にすり替わったかのようだ。

この少女だけは調べれば調べるほどに、意味がわからなくなる。思わず、『わけがわからないよ』と言いたくなるほどだ。

(とりあえず、やはり玄野計だな……彼を取材していけば絶対に何か分かるはずだ)

菊池はひとまず、不可思議な少女を思考から追いやって玄野の事を考え始めた。

だが菊池が望まざとも手掛かりというのは意外にも、向こうからやって来る事がある。

街中を歩く菊池は不意に、向こう側から歩いて来る俗世離れた少女を視界に入れた。

人形のように整った顔立ち。

気の強そうな紫色の瞳。

風になびく黒髪。

白いワイシャツの上からネクタイを締め、上には黒いビジネススーツ。

更にその上に灰色のPコートを羽織り、男性的なファッションながらも素体がいいのか、妙に絵になっていた。

下は灰色の半ズボンで、足はタイツで覆っている。

彼女は菊池の前まで歩くとそこで止まり、射貫くような視線で彼を見上げた。

「菊池誠一さんですね？」

「……あ、暁美、ほむら……」

「自己紹介の必要は無さそうですね……よかったら、そこで少し話していきませんか？」

そう言いながら彼女は、近くの喫茶店を示しつつコートの内側から拳銃をチラつかせた。

どうやら拒否権はないらしい。

脅しとは思わなかった。

暁美ほむらの瞳は、女子中学生とはとても思えない鋭さと剣呑さを

秘めていた。

菊池も色々な人間と会って来たし、その中には軍人だっている。

だから分かったのだ。この眼は、やると言ったら本当にやる人種の眼だ……と。

(どうやら僕は……藪を突いて、龍を出してしまつたらしい……)

菊池は、緊張感から乾いた喉を潤すように唾を飲み込んだ。

## 第26話　ゴキブリは皆殺しにする

ほむらと菊池の入った喫茶店はいい具合に混んでおり、あちこちから話声が聞こえている。

店内にはジャズが流れ、雰囲気も悪くない。

ほむらは他に客のいない隅の席を選ぶとそこに座り、対面に菊池が腰を掛けた。

それから彼は居心地悪そうにしていたが、やがて意を決したように声を出す。

「その……僕に声をかけたツて事は……君達の事を教えてもらえる……のかな？」

「いいえ。貴方は勘違いをしているようだから、その訂正に来たのよ」「訂正？」

「貴方は私達が情報を隠して話さないと思っっている。けれどそうではない……私達は話さないのではなく、話せないの。だから迷惑なよ、貴方みたいに嗅ぎ回る輩は」

ほむらは、あえて厳しい言葉を最初に投げかけた。年上相手だがあえて敬語も外し、威圧的に話している。

これでまずは菊池の出方を窺うつもりだ。

この言葉からある程度こちらの情報を察してくれる程度に頭が回るならばよし。

そうでないなら、話はここで終わりだ。

何とかこの件から手を引くように説得するか……それでも尚こちらの世界に悪戯半分に踏み込む気ならばその時は、無理矢理にでも退場させるしかない。

「話せない……そうか。疑問には思ってたんだ……」

殺し合いの場に呼ばれているのに、何故誰も外に助けを求めないのか……。

そうか……多分、話さないようにする為の何らかの措置が施されている……ツて事か」

「私は貴方の問いに肯定も否定もしない。私から何かを話す事もな

い。

それが嫌ならば、話はここで終わりよ。どうする？」

「……………この代金、僕が払おうか。何か食べたいものはあるかい？」

「そうね。なら、この抹茶ラテを」

どうやら菊池は思ったよりは察しのいい人間らしい。

ほむらの与えた僅かな情報だけで、ほむらの口からは何も伝えられない事を理解した。

だがほむらは何も言わないが、菊池が質問をする事は出来る。

無論ほむらはこれにハッキリとした答えを示す事はないが、反応を見て菊池が勝手に推理をする事は出来るだろう。

ここが譲歩出来る限界ライン……それを突き付けた上で話を続けるかどうかの問いに、彼はここの代金を払う事で続行を示した。

しかしほむらも、すぐに飲み終えてしまえるような抹茶ラテを選択しているので、現状は長く話す気はないという意味表示をしている。

「君達は……戦っているのか？ あのだいに出たような怪物とも」

「さあね。貴方は『黒い玉の部屋』というサイトを見ているのでしょうか？ なら私が言う事は何も無いわ」

「そうか、ありがとう」

菊池の問いに対するほむらの返答は肯定だ。

これはつまり、『黒い玉の部屋』を見ているならばそれ以上の情報は必要ないという事であり、つまりはあのサイトに書かれている事に間違いはないという事でもある。

菊池は近くの店員に声をかけ、抹茶ラテとアップルパイを注文した。

それから今度はほむらが口を開く。

「分かっているとは思うけど、貴方と無駄話をする為だけに呼んだのではないわ。」

「こちらからの要求もある事くらいは理解しているでしょうね」

「まあね。僕は何を差し出せばいい？」

「私との無駄話で貴方が得たものに釣り合うだけの情報を」  
「……なるほど。そうだな……じゃあ、君達がガンツと呼んでいるものによつて行われている戦いだけ……僕の考えでは、そんな昔からヤツてるわけじゃない。」

恐らくはここ数年……十年以内の間に始まった事だと思う」

これはなかなか貴重な情報かもしれない。

ほむらは店員を呼び止め、チーズケーキを一つ追加注文した。

もう少しだけ腰を据えて話を聞こうという姿勢を示したのだ。

とりあえず興味を引けたことに菊池はほつとした顔を見せる。

「じゃあ次は……そうだな。君達と敵対している組織があると聞いた。」

渋谷で黒尽くめのモデルのような風貌の男達に女が数人連れて行かれたら、後をつけてみろって……」

「それなら、私達とは関係ないから話せるわ。」

結論から言うと、止めて置く事をお勧めしたいわね。下手に尾行なんてすれば、貴方はその日のうちに死ぬ事になる」

「そんなにヤバイのか……?」

「人と思わない方がいいわ。貴方だって自殺願望はないでしょ?」

「そうだな……君がそう言うなら、本当にヤバイだろう。」

分かった、後を尾けるのは止めておくよ」

「賢明ね」

二人の前に抹茶ラテとアップルパイ、チーズケーキが運ばれて来た。

それを見てほむらは少し注文をミスったかな、と呑気に思う。

チーズケーキに合わせるならば苦いコーヒーにするべきだった。

「で、さっきの話だけど。何故十年以内と思ったの?」

「実は日本だけじゃなく、世界各地に似たような謎の破壊跡があるんだ。」

それらを辿っていくと、最初に発見されたのが大体そのくらいになるんだよ。」

……ただ、それはあくまでこのゲームが行われたのがそのくらいッ

ていうだけで、黒い玉がいつからあつたのかとか、宇宙人がいつからいたのかまでは分からない」

「……そう」

これはほむらもとづくに予想していた事だ。

自分達が今まで転送されていた場所はいずれも、関東圏内だった。だが宇宙人が都合よくそこだけに集中しているなどあり得るはずもなく、様々な場所に散っているだろう事は簡単に予想出来る。

頑なに日本ばかりを襲うゴジラではないのだから、むしろこんな狭い島国に拘る理由こそない。

続いて菊池は、新たな問いをほむらへ投げかける。

「ガンツに呼ばれた黒服は……君のような少女が多いのかい？」

「……何故そう思ったの？」

「ガンツを調査するうちに、僕は一つの奇妙な事に気が付いたんだ。

それは、君と同じくらいの年頃……主に第二次成長期の少女の不審な行方不明事件が多いって言う事だ。

僕の考えでは、ガンツに呼ばれた少女がミッションの中で帰らぬ人になっっているのだと思うが……どうも、この比率がやや偏っている気がするんだ」

ほむらは目を閉じ、チーズケーキをフォークで切り分けて口へ運んだ。

菊池の言いたい事は分かる。

ガンツに呼ばれた死者は、ミッションの中で死ねば表の世界に帰る事はなく永遠の行方不明者となってしまう。

だが、その行方不明の比率を調べると、第二次成長期の少女が妙に多い……という事だろう。

しかしその原因はガンツではない。星人とは別に、ずっと昔から地球に寄生していたインキュベーターとかいうナマモノのせいだ。

菊池が調べた『行方不明の第二次成長期の少女』には、全てとは言わないが……恐らくかなりの数の魔法少女が紛れているはずだ。

勿論中には本当にガンツのせいで行方不明になった少女もいるだろうし、そういうのとは全く無関係の理由で行方が分からなくなった



子もいるだろう。

「……さあね。ただ、貴方もあの池袋の映像を持っているなら分かるでしょう?」

「少なくとも、少女と呼べるのは君くらいしかいなかったね……。」

一応『黒い玉の部屋』の小説の中には、過去のミッシヨンで神功明里という名の少女もいたにはいたが、どちらかというとなりの方が多く呼ばれているように見える。

……うーん……これはただの偶然かな」

どうやら、これに関してはまだの偶然と考えてくれたようだ。

実際、ガンツに呼ばれるメンバーはどちらかといえば男の方が多いので『少女がガンツに多く呼ばれている』というのは間違いだ。

これで下手に魔法少女について嗅ぎ回るならば厄介だが、とりあえず今の所はその気配もない。

まあ、ほむらも東京チーム以外についてはあまりよく知らないのも、もしかしたら本当に女ばかりが呼び出されているチームもどこかにあるのかもしれない。

その後ほむらは、菊池といくらかの情報交換をした後にチーズケーキを平らげて店を後にした。

◇ 勿論代金は菊池持ちである。

「よオ、和泉」

「……お前か」

とある電車の中。

そこでは偶然通学電車が同じだった和泉と西が話していた。

というより、和泉が座っているのを見つけた西が一方的に話しかけたというべきか。

和泉紫音という男は、一年以上に渡り様々な参加者を見てきた西の中では珍しく印象に残っている人物だ。

同じ時期にあの部屋に招かれたというのも一因かもしれない。

和泉は最初の頃から冷静で冷徹、あらゆる能力が高く、常に高い戦績を維持してきた男だ。

基本的に斜に構え、他人を酷評する西でも評価するしかない傑物である。

「どうよ……今のチーム」

最近再生したばかりの西は、今のチームがどれだけのものか分からない。

連続で100点を叩き出していたのを見るに、自分がいた時よりはかなりマシになっているのが分かるが、だからこそ聞きたかったのだ。

この完璧超人と呼べる男から見て、今のチームはどれだけの基準に達しているのかを。

「……………駄目だなありゃ。」

あれじゃカタストロフィの時点で役に立たない……一人を除いてな」

「暁美ほむら、か」

「あの女だけは別格だ。俺ですら時折ゾツとさせられる」

「……なア、あいつ何回100点取ってんの？」

「玄野が言うには、俺が参加した時点で既に2回……。」

前のミツシヨンで一気に200点を取ったから4回か……」

和泉の口から出た回数に、西が口元を歪めた。

「半年で4回クリアとか、とんでもねえな。どういう生き方すりゃあんな女が出来んだよ」

「俺が知るか……だが、他は駄目だ。」

もツと強いアイテムを集めない。もう、時間がない」

「日本はもう今から頑張ったって遅いだろ。」

アメリカとかドイツとか……イスラエルとかに任せときゃいいじゃん」

「俺は日本人だ……日本人の優秀さを、トップである事を見せたい」  
同じ古参組であつても和泉と西では考え方が違う。

西は最終的に自分が面白くて、自分以外が状況に振り回されているのを見られればそれでいい。

要するに彼は傍観者なのだ。

その上で自分が美味しい所を搔つ攫えれば最高だと思っている。対し、和泉は自己主張が強い性格だ。

自分が先頭にいなければ気に入らない。自分がトップでなければ許せない。

故に、和泉は自分一人であってもカタストロフィで活躍する気であった。

いや……活躍しなければならぬ、という強迫観念にも似た何かは彼の中にはあった。

「あ、おい。電話鳴ってんぞ。誰から？」

「……暁美だな。あいつからという事は……件の連中に関してか」

「何？ 何かあんの？」

「最近、ミツシヨン以外でも襲撃してくる面倒な奴等がいてな……暁美はそれを狩っている。

俺も……放っておくと面倒臭そうだからこの件に関しては手を貸してやッてる。多分、その誘いだ」

和泉はそう言いながら電話を取り、メールを確認した。するとそこには意味不明な記号の羅列が並んでいた。

二人は顔をしかめるが、その意味合いは違う。

「何コレ……暗号？」

「ああ……記号の配置と間隔で五十一音を表してる。

万一、誰かに見られてもいいようにッて……」

「ふうん。何て書いてあんの？」

「……明日……玄野の家が吸血鬼の襲撃を受けるらしい。

そこで奴等を待ち受け、皆殺しにするから来たきや来い……だよ」

「おツかねー。で、行くの？」

「ああ……俺もあの連中にはうんざりしてるんでな。ゴキブリは皆殺しにする。

……それに……どうもあの金髪の男だけは殺しておかなきゃいけない……そんな気がする」

和泉はミツシヨンでの命がけの戦いに焦がれて、わざわざ戻って来

た破綻者だ。

しかしそんな彼でも、日常の中で襲撃されるのは流石に面倒臭く感じている。

虫取りが好きだからといって、家の中にまで虫が湧いてきたら鬱陶しいだろう。それと同じ事だ。

「ふーん……じゃあ俺も行くのかな。」

オフの日にやるのは面倒だけど、その吸血鬼ツて連中見てみたいし……それに死体も沢山見れそうだ。

……ところで、俺の事少しは思い出したか？」

「……お前の事はどーしても思い出せないな」

「ふんッ」

一見親しく話しているようだが、和泉にとっては先日会ったばかりの初対面の人間が気安く話かけてきているに過ぎない。

それを感じ取ったのか、西は拗ねたように鼻を鳴らした。

◇

次のミッションに入る前に、ほむらは一つ片づけておきたい事があった。

それは件の吸血鬼達の殲滅だ。

あれからも狩り続けて大分数を減らしたが、それでもまだかなりの数が残ってしまったている。

そればかりか最近、新たに二人ほど増えてしまっていた。

一人は黒髪のエキゾチックな顔立ちの女だ。

他の『獲物』と一緒に連れて来られたが、どうやら吸血鬼だったらしく彼等の仲間入りをしてしまった。

まあ、これは他の吸血鬼と一緒に始末していいだろう。

どうにも、本人もノリノリで吸血鬼をやっているようだし、元からそういう奴だったと思っっている。

問題はもう一人だ。こちらは女よりも先に吸血鬼の仲間入りをしており、長身のハンサムな男である。

その顔立ちは玄野に似ており……それもそのはずで、彼の名は玄野アキラといった。

つまりは、玄野の弟だ。

どうにも吸血鬼に馴染めていないようで、先述の女の事を助けようとする素振りを見せていたが、問題はそこではない。

問題は、彼を経由して玄野の住所と名前が吸血鬼にバレてしまった事である。

彼が兄の事をバラしたわけではない。

吸血鬼達が入手していたガンツチームの映像……そこに映っていた玄野の顔立ちがアキラと似ていたことで肉親の線を疑われ、アキラの事を調べる事で簡単に玄野の現在の住所や名前が割れてしまったのだ。

アキラもこれに罪悪感を感じたのか、隠れて兄に電話で警告を送ったりと、かなり危うい位置にいる。

それらの情報をほむらは、クラブに取り付けておいた盗聴器や監視カメラから得ていた。

「……というわけで、今夜で奴等との決着を付けるわ。

玄野さんの護衛に東郷さんや他のメンバーを向かわせるけど、玄野さんも戦いに備えておいて。

いつ戦いになってもいいようにスーツの着用も忘れないように」「わかった……暁美はどうすんだ?」

「私は、奴等が玄野さんの家に向かった隙を突いてクラブに残った連中を根絶やしにする。

こつちが終わったらすぐに合流するわ。つまり、挟み撃ちになるわね。

他の拠点は全部潰したから、今夜そつちに襲撃に向かう連中とクラブの連中を全員始末すれば、吸血鬼は全滅するはず……奴等との戦いを終わらせるわ」

襲撃は今夜である事が分かっている。

逆に言えば朝や昼の間は準備に回せるわけだ。

ならばまず、その時間を活用してこちらは準備を揃え、罨を張る。

襲撃する者というのは、存外にして襲撃する時こそ無防備になるものだ。

狩る者というのは、自分が狩られる側に回ると脆い。

ほむら自身も魔法少女時代、自分が狩る側だという慢心に足元を掬われた経験が何度かあった。

故にこちらからは仕掛けない。

奴らに、自分が狩る側だと錯覚させた上で待ち受け、そして狩り尽くす。

「ここ数日観察し続けて分かったけど、奴らの弱点は太陽光よ。

昼間は皮膚を強くする薬で何とかしてるけど、夜は慢心してるのか誰も使っていない。

だから今、桜丘さんに太陽光に近い照明を買って来て貰ってる。

すぐにそつちに届くと思うから、家の照明を全部それと取り換えて

……そうすれば罠として使えるはずよ」

『ああ……ところで、アキラは……』

「……………」

『アキラの奴を、助ける方法とかねーのかな？ あいつ……俺の事を心配して電話までかけてきて……仲はよくなかったけど、悪い奴じゃないんだ！』

なのに吸血鬼なんかになっちゃって……。

きつとあいつ、俺に警告を送った事でやばくなってるはずだ。

暁美、お前なら……お前なら、助けられるはずだ！ そうだろう!』

「残念だけど……私も全能ではないの。むしろ……」

言いかけて、ほむらは目を閉じた。

思い出すのは幾度も繰り返したあの一月で、取り零してきた仲間達の顔だ。

何度失敗しただろう……全員を救おうと欲張って、何度状況を悪化させただろう。

二兎を追う者は一兎も得ず。ほむらは己の無力さをあのループで嫌というほどに思い知らされていた。

それでも何とかやり遂げたのは、やり直しが利いたから……。

だがもう、やり直しなんて出来ない。時間は巻き戻らない。

トライ&エラーによる統計もなく、何もかも上手く行くななんて思う

べきではない。

ベストなど目指してはならない……ベターで妥協しなければならないのだ。

だって、もう砂時計はひっくり返らないのだから。

『むしろ……何だよ?』

「何でもないわ。悪いけど、弟さんの事は諦めて」

『なッ、おい! それッて』

「とにかく、今夜決着を付けるわ。しっかりと備えておいて」

そう一方的に言い、電話を切った。

玄野から着信が入るが無視し、ほむらは天井を見上げる。

自分の手は小さくて、いつだって拾えるものには限りがあった……。

魔法少女でなくなった今、奇跡も魔法もありはしない。

だから非情であろうと取捨選択をする。しなければならぬ。

もう二度と、失敗なんてしたくないから。

## 第27話 逃がさねーよ

玄野を襲撃するために吸血鬼達が車に乗り込み、次々と出発していく。

それを七階建てほどのマンションの上から見送ってからほむらは、ライスを抱えると気負いなく跳躍して地面へと着地を決めた。

周囲の人間達はほむらの存在に気付いていない。

何故ならほむらは今、私服の下にガンツスーツを着込んでいて姿を消しているからだ。

「行くわよ」

ライスを連れて吸血鬼達の拠点である地下クラブへと突入する。

今ここに残っているのは、玄野襲撃から外された吸血鬼達だ。

彼等は自分達の巢にたった今、最も危険な相手が飛び込んできた事にも気付かず雑談をしていた。

「玄野の奴……何か様子がおかしかつたな」

「そりゃアレだ。実の兄が黒スーツの一員だったんだ。心中穏やかじゃねーだろーよ」

「おかしな事を考えなきゃいいんだがな。あいつはいずれは幹部にだってなれる男だ」

「なあに、心配はいらねえよ。アイツも言ッてただろ、兄貴とはそんなに仲良くなかつたッて。」

暗くて何考えてるか分からなくて気持ち悪いとか言ッてたじゃねーか。そんな相手をわざわざ守ろうとして氷川さんに歯向かうような馬鹿じゃねーよ」

数はざっと見て、二十人ほどか。

ほむらは素早く両手に持ったXガンのロックオン機能で吸血鬼達をロックしていく。

引き金を引くのは一度だ。それで全て片付ける。

奴等には無警戒のまま、何が起こったかも分からず消えてもらおう。

吸血鬼達は自分の命が握られている事に気付かない……気付けない。



い。

彼等には消えたガンツメンバーでも見る事が出来るコンタクトレンズやサングラスがあるが、襲撃の可能性を考慮していないこのクラブでは安心してしまっているのか、誰も付けていないからだ。

そして仮に付けていても無意味だっただろう。

何故なら今日という日を盤石にすべく、ほむらによってサングラスの8割以上が市販の、よく似たデザインのサングラスにすり替えられてしまっているからだ。

ほむらに拠点の位置がバレ、侵入を許した……その時点で彼等は、既に死が決定されていたのだ。

ギョーン……と、Xガンの発射音が重なって響いた。

「おい……何だ、今の音」

「ぎょんって……今のツてまさか」

「やべえッ！ サングラス付けッ……」

気付いた時にはもう遅い。

吸血鬼達の頭が一斉に破裂し、肉片と脳漿を撒き散らした。

クラブの吸血鬼を全滅させたほむらは、しかしそのまま警戒を解かずにクラブ内を歩く。

ライスの鼻を頼りにロッカールームや風呂、事務所、トイレ……そうした個室を一つ一つ探し、生き残りを発見してはXガンで駆除していった。

「は？ おい……誰だ、ドア開けたの……今入ッぶげらー！」

トイレに籠っていた吸血鬼をそのまま撃ち殺し、隣のドアを蹴り開ける。

それを繰り返し、やがて一人の生き残りもいなくなった所でほむらはクラブを出て行った。

これでまずは半分。

後は玄野を襲撃しに向かっている吸血鬼を根絶やしにするだけだ。

◇

玄野の住むアパートでも戦いは始まっていた。

狙撃地点に陣取った東郷がXショットガンで次々と吸血鬼を仕留

め、なかなかアパートに近寄せない。

何とか突入した吸血鬼もいたが、次の瞬間室内に明かりが灯ったと思った瞬間、砂のように砕け散った。

ほむらが桜丘に買わせた太陽光照明だ。

その罠にかかった吸血鬼がどんどん死んでいき、これでいきなり吸血鬼の数が半減してしまった。

「やっってくれる……」

氷川はすぐに電線を銃で撃ち、これで照明トラップは無効化された。

それから刺すような視線で仲間の吸血鬼達を睨む。

先に突入した仲間達を塵に変えたのは太陽光照明だが、そんな設備を都合よく持っていたとは思えないし、仮に持っていたとしてもあまで効果的に使うには事前情報がなければ不可能だ。

つまりは、『吸血鬼の弱点は日光』と知っていなければ、あんなトラップは用意出来ない。

加えて、トラップを用意していたという事は自分達が今夜襲撃をかけるという事を知っていたという事。

つまり……内通者がいる。そう氷川は判断した。

その判断は半分正解で、そして半分間違いだ。

確かに内通者は存在している。玄野の弟である玄野アキラがそうだ。

彼は兄の窮地を見過ごす事が出来ずに、襲撃がある事や吸血鬼の弱点の事まで玄野にバラしてしまっている。

だがそれがなかったとしても、暁美ほむらによって吸血鬼は既に丸裸にされていた。

アキラが裏切らずとも結果は何も変わらなかっただろう。

とはいえ、そんな事を氷川が知るはずもない。

「アキラ……お前か？」

氷川の視線に射すくめられ、アキラが露骨に反応を示した。

氷川が一步距離を詰めると、後ずさるように一步距離を空ける。

そんな彼を他の吸血鬼も不審に思ったのだろう。何人かで羽交い

絞めにし、彼の懐から携帯電話を奪い取った。

そして電話のアドレス帳や履歴を見るが、少なくともそこに玄野計の名は見当たらない。

「貸せ」

氷川に言われ、吸血鬼が電話を投げ渡した。

それを見て氷川は目を細める。

着信履歴や発信履歴、電話帳には玄野計の名は見付からない。

とはいえ、そんなのは削除すればいいだけの話だ。

ここに証拠がないからといって、それで身の潔白が証明されるわけではない。

「履歴が不自然に全部消されてるな……これは万一にも消し損ねて証拠が残るのを恐れたからか？」

「ハア？ そんなんじゃないやねーッて！ ただ、何となく整理したくなっただけだ！ そういう事もあるだろうッ！」

「まア……そうだな。そういう事もあるか。じゃあ次だ」

そう言い、氷川は刀を出してアキラの首へピタリと当てた。

冷たい刃の感触にアキラが震え、首からは一筋の血が流れる。

「お前、何で薬飲んでんだ？ 夜はいらねーだろ、そんなの。」

……最初から分かッてたんだろ？ お前の兄貴が太陽光を使うのをよ」

「言いがかりはやめろッ！ そんなの……」

「お前は新人だから知らないようだが、日光に強くなる薬を飲むと少しだけ肌の艶とか色とかハリとか……まア、そういうのが変わるんだ。よく観察しないと分からない程度の差だがな」

氷川は淡々と、しかし内通者がアキラだと確信したように話す。

その説明に他の吸血鬼は「え？ そうなの？」という顔をしているがアキラはそれに気付く余裕もない。

「……ね、念の為だ……最近は何夜でも、まだ明るい事もあるから……」

「そうか。ところでさっきのは嘘だ。肌の色なんかで分からねーよ」

「なッ」

「で……何で嘘を吐いた？ 最初からそう言やいいだろ」

氷川が冷たく、しかし殺意を隠さない眼でアキラを睨む。

アキラはその氷のような眼に震え、もう言い逃れは出来ないと悟った。

いや、もしかしたらまだ言い逃れは出来たかもしれない。氷川は半信半疑で、実際の所はまだアキラだと確信しているわけではない。

だがアキラは焦ってしまった。もう言い逃れは出来ないと思い込んでしまった。

結局のところ彼は、どこまで大人びていてもまだ十四歳の子供なのだ。

氷川と渡り合うには、絶対的に人生の経験値が足りていない。

「がッあああああッ！」

アキラを拘束していた吸血鬼を振りほどき、自棄を起こしたように刀を持って氷川へ斬りかかった。

氷川は首を動かすだけで刀を避け、そして虫でも払うかのように刀を薙ぐ。

するとアキラの首と胴が分かれ、道路に崩れ落ちた。

「馬鹿が」

氷川はアキラの死体を一瞥して吐き捨てるように言い、アキラの頭を掴んでアパートへ視線を戻した。

トラップは無効化したが、そんなのは玄野達も予想していたことだ。

氷川が電線を切ったのを合図に、周囲に隠れていたガンツメンバー……桜丘、加藤、和泉、西が既に飛び出している。

勿論全員ステルス機能を発動させており、その姿は吸血鬼には見えない。

次々と撃たれ、斬り殺されていく仲間を見ながら吸血鬼達は焦る。

「やべえッ！ 他にもいるッぞッ！」

「何やってんだ！ 早くサングラス付けろッ！」

「もう付けてるッ！ なのに何でだ……見えねッがあー！」

サングラスを付けているのにガンツメンバーが見えずに、どんどん死んでいく。

先も述べた通り、既にそれはほむらによってすり替えられているのだ。

だから見えるはずもなく、狩る側だったはずの吸血鬼は気付けば一方的に狩られる立場になってしまっていた。

玄野もアパートから飛び出し、次々とガンツソードで吸血鬼を切り伏せていく。

彼を頭上から強襲しようとして、唇の厚い新入りの女吸血鬼が跳びあがったが……次の瞬間、足が破裂して地面に転がった。

「あッがあああー！」

「はい残念く。お前隙だらけだツツーの、バーカ」

撃つたのは西だ。

彼は加虐的な笑みを浮かべて姿を現し、女吸血鬼を見下す。

西は更に二発Xガンを撃つと女吸血鬼の両手が破裂し、悲痛な叫びが木霊した。

「いいねエ〜……俺さア、前からこれで人間撃つてみたかつたんだよね。

小動物じゃ満足出来なくてさア……星人はホラ、何か人間と違うし？

なあ、今どんな気分だ？ アンタみたいなさかした女が死の間際にどんな顔になるのかさア、俺に見せてくれよ」

西丈一郎は精神破綻者である。

身近で親しい者には深い愛情を示す事もあるが、それ以外に対しては極端に冷たく、痛めつけても罪悪感を覚えないどころか快感すら感じる。

そんな彼の異常性は幼い頃から虫や小動物を殺す事で発散されてきたが、今では星人を殺す事が生き甲斐となっていた。

ある意味、あの部屋に招かれるべくして招かれた人間と言えるだろう。

もしも部屋に招かれなければ、いつか関係のない人間を衝動のままに殺していたかもしれない。

皮肉な話だが、彼が今日まで殺人者にならずに生きて来られたのは

あの部屋に招かれたからとも言えるのだ。

「あッ、ハアッ、ハアッ、や、やめ……て……ッ！」

おねがッ……ころさなッ……わたし、最近ッ吸血鬼になっただけ……」

女吸血鬼の命乞いを無視して更に西が撃つ。

すると今度は脇腹が吹き飛び、臓物が零れた。

「あああああ、あ、あ、ッ！　ぎやあああッ！」

「何か……違うんだよな……。あいつならもッところ、違う反応見せてくれそうッていうか……。」

まあいいや。もうお前は死ね」

西は女吸血鬼の顔にXガンを当てて引き金を引いた。

それから少しして顔が砕け散り、女吸血鬼が動かなくなる。

「西！　悪趣味だぞッ！　そんな甚振るような真似をして楽しいかッ！」

「うッせーよ、偽善者。楽しいからやッてるに決まッてんじやん」

西のその残忍さは味方であるはずの加藤からも非難されるようなものだ。

しかし西丈一郎とはこういう男である。

他人から言われたくらいで更生する類の人間ではない。

「ちッ……」

氷川は流石に形勢不利と見てこの場から離脱しようとする。

だがそんな彼の前にバチバチと音を立てて、一人の男が立ち塞がった。

それは氷川とも因縁がある和泉だ。

「どこに行くんだ……逃がさねーよ」

「お前か……」

氷川はいつも通りの涼し気な表情のままだが、冷や汗を流していた。

見せしめにする為に持っていた裏切者……玄野アキラの生首を捨て、剣を構える。

それを見て玄野は硬直してしまっただが、和泉には何の効果もない。

彼もまたガンツソードを構え、氷川と相対するだけだ。

二人が同時に踏み込み、剣を衝突させる。

火花が散り、両者譲らぬ互角の戦いを繰り広げた。

氷川の刀を和泉が避け、和泉の斬撃を氷川が避ける。

だがこの戦い、有利なのは和泉である。

何故ならスーツの耐久が残っているうちは、和泉は刀で斬られる事はない。

故に氷川が和泉に勝つには、まずスーツを壊さなければならないのだ。

対し、和泉のガンツソードは一撃で氷川を斬り殺す事が出来る。

両者の技量が互角である以上、耐久の差はそのまま勝敗へと繋がってしてしまう。

「くっそッー」

幾度も剣が衝突し、氷川に傷が増えてきた。

結論から言えば、氷川は一对一では和泉に勝てない。

彼が和泉に勝つには、まずスーツを壊す事を大前提に置かねばならず、仲間に動きを止めて貰ってスーツを壊して、ようやく二人は対等になれるのだ。

二人の剣が交差し、氷川の刀が和泉の腹に当たった。

それと同時に和泉のガンツソードが氷川の胸に当たる。

血飛沫が舞い、二人の影がすれ違った。

——刹那。和泉は一つの未来を視た。

それは今とは異なる景色だ。

自宅のマンションの前で大勢の黒服を相手に戦う自分が見えた。

そして恋人の涼子を庇い、氷川に斬られて死んでいる自分が見えた。

『いいもの、見せてあげるよ。』

キミがどんな存在か、『鍵』にどんなに届かないか、ゴミみたいな存在なのか』

これは誰の台詞だ？

これはいつ、どこで見た映像だ？ 誰に見せられた映像だ？  
続けて更に過去の映像が和泉の脳裏に蘇る。

今度は他のガンツメンバーを率いて、何かに怯えるように戦う自分の姿だった。

そのミッシヨンの中で氷川と出会い、和泉は必死に戦った。

だが倒す事は出来ず……そして100点を獲得した時に和泉は意思に反して口走った。

『一番だガンツ。俺は抜ける』

和泉の意識はスーツからキュウウン、という音が聞こえた事で現実へと戻された。

氷川の一撃でスーツの耐久限界を迎え、壊されてしまったのだ。

しかし和泉は表情を変えずに振り返り、氷川を見た。

——彼は、胸から下が切り離されて倒れていた。

(……何だ、今は……？ 俺が以前にこいつと戦った時の記憶……か?)

和泉は脳裏に過った映像を疑問に思うも、今は戦闘の最中だ。呆けている場合ではない。

気を引き締め直し、冷たく氷川を見下ろす。

「終わりだな」

「ハアツ……ハアツ……くそ……ここまでか……」

氷川は恨めし気に血を吐きながら呟くが、こうなればもうどうしようもない。

何人かの吸血鬼は逃げたが、これではもう組織の立て直しは出来ないだろう。

……いや、立て直しどころではない。今日で全滅だ。

逃げたはずの吸血鬼の断末魔が曲がり角の向こうから響き、そこからほむらが歩み出てきた。

「曉美か。お前が来たって事は向こうも終わってたんだな」

「ええ。クラブにいた吸血鬼は全て始末したわ」

和泉の問いにほむらが淡々と答える。



その会話を聞きながら氷川は笑った。  
それは余裕とか、そんな笑みではない。

諦念の笑み……分かりやすく言えば『笑うしかない』という心境だった。

ほむらはそんな彼を意にも介さず、自らの首元に触れる。

「そろそろ、ガンツからの呼び出しが来るわね」

「ああ。いいタイミングだ」

ガンツに呼ばれる直前、それを知らせるようにゾクゾクとした独特な悪寒が首元を中心に感じられる。

ガンツメンバーが部屋に転送されて消えて行き、それを見ながら氷川はほむらへと話しかけた。

「なあ……最後にいいか？」

「何？」

「俺の胸ポケットに……煙草とライターがある……」

最後に……一服、させてくれねえか……」

「……………」

どうせ放っておいても死ぬ男だ。

両手もないし、最早何も出来まい。

ほむらは一応警戒しつつも胸ポケットから煙草を出し、氷川の口にくわえさせて火を付けてやった。

「ありがとうよ……」

人生最後の一服を味わう氷川にほむらは何も言わず、そのまま転送されていった。

そうしてその場には誰もいなくなり、氷川の吸う煙草の煙だけが漂う。

やがて彼は煙草をすっかりと味わい——そして、目を閉じて二度と動かなくなった。

◇

吸血鬼は殲滅した。

だが戦いは終わらず、今日も夜が始まる。

ほむら、玄野、加藤、桜丘……東郷、ライス、ホイホイ、和泉の馴

染みのメンバーに加えて前回からの新規枠である西。

以上七人と二匹がガンツの部屋に集まり、沈黙が場を支配した。毎度の事だがキュウベえは誰も数に含まない。

玄野は実の弟の死を目の当たりにした事で落ち込んでおり、加藤と桜丘はそんな彼を何とか慰めたいが何を言えばいいか分からない。

そんな中でほむらが、ガンツの中から武器を引っぱり出した。

「前回の100点達成の武器があるわ。皆、今のうちに持っておいで」  
前回は大勢が100点を取り、何人かは武器を選択した。

和泉と東郷、桜丘がZガンを手にし、それからほむらはライス用のZガンを取ると、玄野の前に置く。

「これ、貴方が使って。ライスはZガンなんて使えないから、貴方が持っている方が役に立つわ」

「あッ、おい暁美！ それなら俺にくれよ！ 絶対玄野より俺が持った方が役に立つッて！」

西が何か言っているが、彼は味方ごと潰しそうなので出来れば渡したくない。

それを抜きにしても玄野の方が実力は上だ。

なのでほむらは今後もライス用の武器は全て玄野に渡すつもりでいた。

「そういえば……暁美の武器はどうなんだ？ 前回2回も100点武器取ッてたろ」

加藤に言われ、ほむらは思い出したようにガンツの中を漁った。

するとそこには、今まで無かった新しい武器が見えたので手に取る。

一つはXガンとよく似たデザインの武器だが、銃身がすこし長めだ。

もう一つは大きな筒状の銃であり、バズーカ砲のように見える。

「私のは……何かしらね、これ。マシンガンと……バズーカ？」

見た感じではなかなか強力そうな武器だ。

一応二回クリアで得たパソコンがあるので使い方を覚える事は出来なくないが、流石に今からでは時間が足りない。

こういう所は本当にガンツは配慮がないというか、いい加減だ。とりあえず持つて行つて向こうで試せばいいだろう。

そう考え、ほむらはコート裏のホルスターにマシンガンを仕舞い込んだ。

それから引き出しを開けると、そこからベルトを取り出して手際よくバズーカを固定し、肩からかける。

今やほむらは、ちよつとした歩く武器庫だ。

足のホルスターにはXガンとYガン。コートで隠れているが腰付近にXショットガンを括りつけて固定しており、反対側にはガンツソードを差している。

その上で右手にZガンを装備し、左手には今回入手したマシンガン。

更に肩からはベルトで繋いだバズーカをぶら下げている。

実は両腕の袖にもXガンを隠し持つているのでまさに武装少女といった状態だ。

こう武器が多くなると、魔法少女時代のあの四次元シールドが恋しくなってしまう。

とりあえず武器置き場として今回はガンツバイクも持つていくとしよう。

「あ……誰か来たぞ」

「新規の参加者かしら」

加藤の声に皆が反応し、桜丘も興味深そうに顔をあげた。

ガンツからレーザーが照射され、見覚えのない誰かが再生されていく。

下は黒いスラックスで、上は黒いビジネススーツ。

黒い長髪と唇の厚いエキゾチックな顔立ち……。

そこまで見てほむらは、再生が終わる前にその新人の首を斬り飛ばした。

「あッ……こいつ、さっきの吸血鬼女じゃねえか!」

西の言う通り、危うくこの部屋に現れそうになっていたのは先程西が殺したばかりの女吸血鬼であった。

流石にこんなのは味方に必要ない。ほむらの判断は非情だが正しいと言えるだろう。

西は気持ち悪そうに女の顔を蹴り、部屋の隅に転がす。

「危ないわね……全く、ガンツももう少し連れて来る人間を選んで欲しいわ」

「おい……また来たぞ」

二度ある事は……というやつだろうか。

またしてもガンツが新人を連れて来るが、何と再び黒スーツだ。

ほむらはすぐにガンツソードを構えるが、慌てたように玄野が叫んだ。

「待ってくれ暁美！ そいつ……もしかしてツ！」

すぐにでも斬り殺そうと思ったのだが、玄野は再生される人物に気が付いたのか待ったをかけた。

確証があるわけではない。

まだ顔も出ていない。

だがそれは、兄弟だからこそその勘なのだろうか……玄野には、彼が誰か分かったのだ。

そしてその予想は正しく、現れたのは端正な顔立ちの美青年であった。

「アキ、ラ……」

「……兄、貴？」

こうして新たな参加者を加え、今日も長い夜が幕を開ける。

## 第28話 何やねん、お前等

玄野アキラの他には新規で何も知らない一般人が三人ほど転送されて来た。

彼等にもいつも通りに加藤がスーツの着用を勧めるが、誰も従おうとはしない。

ほむらとしても、一々戦力外など気にかけてられないので着たくないというなら、説明してまで着せようとは思わない。

というより、そういうのが苦手だから加藤に任せているのだ。

なので加藤で説得出来なければ、どのみち自分で出来ると思わない。

事態を把握できない者から死んでいく……残酷だが、ここはそういう場所だ。

「兄貴……俺、何でこんな所にいるんだ？ いや、ツてーか襲撃は大丈夫だったのか？」

「ああ、それはもう終わった。アキラ……信じられないだろうが、お前は死んだんだ。

時間がないから簡潔に言うが、ここは死んだ奴が集められる部屋だ。俺達はこれから戦争をする事になる」

「戦争ツて……それに死んだんなら、ここにいる俺は何なんだよ……」  
「今はとりあえず、このスーツを着てくれ。ダセエと思うなら上から服を着てもいいからさ。」

説明はその後だ。頼む……今は従ってくれ！」

「わ、わかったよ……」

アキラの方は兄からの説得という事もあって、一応スーツを着用してくれるようだ。

彼は吸血鬼の一味の中でも幹部クラスを除けばかなり強い方だったので、スーツを着ればかなりの実力になるだろう。

少なくとも、単純な身体能力ならばこの中でもほむらに次ぐ2位になるのは間違いない。

服を着替えに廊下へ向かったアキラを見ながら、西がからかうよう

に言う。

「ふーん、玄野の弟ねえ……あっちの方が年上に見えツけどな」

「……あいつ、お前と同じで中学生だぞ。今は確か……14か15だったかな」

「はア!? あの図体でか!? ウツソだろ」

玄野の言葉に西が驚きを見せるが、これにはほむらも驚いた。

どう見ても身長180を超えているので弟といっても、玄野とそんなに変わらないと思っていたのだ。

まさか同じ年だとは思わなかった。

となるとつまり、今ここには15歳の中学生が三人いる事になるわけか。

ほむらはあまり自分の誕生日など気にした事はなかったが、そういえば誕生日を過ぎていたので今は15になっているはずだ。

今頃はまどか達も三年生になり、マミは高校生になっている頃か。

「着てきたぞ。これでいいか、兄貴」

廊下で着替えを済ませたアキラは再び部屋に戻って来るが、やはりデザインをダサイと思っっているらしく上からはしつかりと黒コートを羽織っていた。

玄野はそんな弟にこの部屋の事やこれから起こる事を大雑把に説明しているが、流石に現実離れしすぎているせいで中々受け入れられないようだ。

とはいえ、アキラ自身も吸血鬼という特異性の持ち主であり、ガンツチームと敵対する組織の一員だったので一般人よりは受け入れる土壌が整っている。

「いいか、アキラ。ここに来ちまツた以上、100点を取らないと自由にはなれない。」

絶対に、俺達から離れるんじゃねーぞ」

「あ、ああ……わかツたよ」

とりあえず一人でもスーツ着用を受け入れてくれた事を喜ぶべきだろう。

吸血鬼の彼ならばスーツなしでもそこらの星人相手ならば互角以

上に戦えるだろうが、それでもやはり生存率が違う。

他の新規三人は……あちらはもう駄目だ。加藤がいくら説得してもまるで聞く姿勢を見せない。

非情な話だが、ほむら、和泉、西、東郷の四人は新規組を既に死んだものと考えていた。

「見ろ。今からこの玉にターゲットが表示される。

俺達はそいつと戦争をするんだ」

玄野が弟に説明すると同時に、ガンツにターゲットが表示された。だがほむらはその画像を見て目を細める。

それは、今回のターゲットが今までの法則から外れていたからであつた。

てめえ達は今からこの方をヤツつけに行つて下ちい。

特徴 つおい。頭がいい。わるい。

好きなもの タバコ お茶。

口ぐせ ぬらーりひょーん ぬらーりひょーん。

「……星人が付いてないわね」

「ああ……変だな」

ほむらの言葉に同意するように玄野が言う。

今までの星人は少なくとも、全員『星人』と付いていた。

だが今回は何故かそれがない。ぬらりひょん星人ではなく、ただのぬらりひょんだ。

これはどういう事なのか……アドバイスを求めるように西を見るが、西にも分からないようでそっぽを向いていた。

「こいつと戦うのか……？ 何か、弱そーだけど……」

「見た目で判断するな。今までもそう言ッて何人も死んだ」

アキラが気を抜きそうになるが、玄野がそれを窘める。

それにしてもこの二人が並ぶと、身長差もあってどちらが兄でどちらが弟か分からない。

まあ兄弟というのは昔から、不思議と弟の方が発育がよくなる傾向

があるらしいのでそれほどおかしな事ではないのかもしれない。

国民的に有名な配管工だって緑の弟の方が大きいのだ。

「それにしても……最近の中学生って暁美ちゃんといい、大人びてるのねえ。」

年齢相応なのは西クンくらいじゃない?」

「はあ? 俺が他のガキ共と同じだって?」

桜丘の言葉に西は露骨に不機嫌になるが、桜丘に悪気はない。

文句を言おうとした西だが、しかし自分の頭が消え始めている事に気付いて口を閉じた。

どうやら転送が始まったようだ。

◇

今回転送されたのは、駅前と思われる商店街であった。

玄野アキラを含むメンバー全員がまずはちゃんという事を確認し、ほむらはリーダーを見る。

星人の反応は……かなり多い。

今回は下手をすれば前回以上に厳しいミッションになるかもしれない。

いや、難易度の上昇は今回に限った話ではない。

前からずっと、初心者など知った事かとばかりに難易度は上がり続けている。

これはつまり、地球に残っている星人に強い者しか残っていないという事なのだろうか。

新規組三人は何か勝手にどこかに歩いて行ったが、もうどうでもいと割り切った。

とりあえず、まずは商店街を抜けるべきだ。ここでは狭くて戦いにくい。

全員が商店街の外を目指して歩き、その最中、アキラがほむらへ話しかけてきた。

どうでもいいが、ほむらだけはバイクである。

「ねえ、君、歳いくつ? 結構、この中だと若く見えるけど」

「15」



「あッ、そうなんだ。俺こー見えても15でさ……よかつた、同じくらいの歳の子もいて」

随分うすらでかい中学生だ……とは思ったが、口には出さなかった。

ほむらの知っている男子だと、確か上条恭介が175cmくらいだったはずだが、アキラと比べるとまるで作画が違うかのようにアキラの方が大きく見える。

恐らくは上条恭介の、女に八つ当たりするような卑小な気質と頼りなさが実際よりも彼を小さく見せているのだろう。

ほむらは以前よりも背が伸びて160cmくらいといったところで、これは西と同じ身長だ。

女子としては同年代の中ではそれなりに高い方なのだが、実は見滝原の魔法少女（候補含む）五人の中だとマミやさやかより若干劣る身長である。

といってもまどか以外の四人はほとんど差がなく、まどかだけが目に見えて小さいというのが実情だったわけだが……。

ちなみにまどかの身長は152くらいである。今頃はもう少し大きくなっているだろうか。

「あ……何か向こうに……」

アキラが言い終える前に、ほむらは既に武器を構えていた。

商店街の出口付近には星人……と思われる奇妙な女がいて、こちらに向かっていたからだ。

確か妖怪にあんなのがいただろうか。お齒黒べつたり……だったか。

どちらにせよ一般人のコスプレではあるまい。

ほむらは、早速入手したばかりのマシンガンの引き金を引いた。するとお齒黒べつたりりの身体の至る箇所が抉れ、肉が弾け飛ぶ。

どうやらこの武器は、Xガンをマシンガンに改良した武器のようだ。

使えるが、Xガンより大きいので取り回しが難しく、連射出来るが一発一発の威力はXガンに大きく劣る。

これならば威力を重視するならZガン、取り回しを重視するならXガンを使った方がいいだろう。

何とも半端な100点武器だ。

「すツげ……躊躇なくいつた」

「ここで躊躇なんてすれば死ぬ事になるわ。覚えておきなさい」

感心しているアキラへ忠告し、ほむらは更にバイクを走らせる。と  
いっても玄野達に合わせているのでトロトロと進めているという方が正しいだろうか。

まずは商店街を抜け、そして視界に飛び込んできたのは『道頓堀』の文字だ。

道頓堀といえ、何かあるたびに恒例行事のように人が飛び込む場所だったか。

「東京じゃない……」

「大阪……?」

加藤と玄野が茫然としながら辺りを見る。

今まで、ミツシヨンで東京から出た事はなかった。

場所は毎回変わっていたが、それでも東京のどこかというのは共通していたはずなのだ。

明らかに今までと違う……その空気を感じ取ったのだろう。

皆が緊張して固まる中、更に異常事態は続く。

「何やこいつら笑えるわー」

「コスプレ?」

「あははははははは」

「見てみいホラ!」

「あいつら何やねん?」

「なんやこれパンダ!? ウツソ!」

前回のミツシヨン後半同様に、一般人から完全に見えてしまっている。

関西弁で話す通行人達はガンツチームのスーツを笑い、和泉に抱き着いているホイホイを見て驚いていた。

アキラはスーツの上に服を着て隠しているので、特に何も言われて

いない。

そして西は先程、ステルス機能で消えたので今頃はどこかで単独行動をしている事だろう。

「うわッ、なんかあの子すッごい武装してる」

「マシンガンにバズーカッて……ほんまもんやないよな？」

「玩具やろ」

「てかアレ、何や？ 動いとるけど……バイク？」

ほむらもスーツを下に隠しているが、奇抜さで言えば今回はトップだ。

何せ今回のほむらは完全武装状態である。

ある意味では一番目立つだろう。

「前回から戻ッてないようだな……」

「どーする？ これ」

東郷と桜丘が意見を求めるようにほむらを見た。

だから何故こちらを見るのか。

リーダーは加藤なのだから、そちらに聞けばいいのに。

そう思いながら、仕方なくほむらは指示を出す。

「気にしても仕方ないわ。行くわよ」

一般人の目などいちいち気にかけていられない。

どうせ前回のミッションで大勢に見られてしまったし、日本中が知ってしまった後だ。

勿論、出来れば名前バレや自分の生存がまどか達に伝わるような事にはなって欲しくないが、こうなった以上周囲の目など気にしては戦えないだろう。

星人の反応を頼りに更に進むほむら達だったが、その先にいたのはこれまで以上に驚かされるものであった。

「……あ？ 何やねん、お前等……」

進んだ先で遭遇したのは……こちらと同じく、ガンツのスーツを着た一団だった。

手にはXガンやXショットガン、更にZガンを持ち、後ろにはガンツバイクもある。

「何やねん、こいつら」

「何でスーツ着とんねん」

向こうも若干困惑しているようで、すぐに武器を構えるような事はしていない。

両陣営は互いにどうしていいか分からず、睨み合っただけだ。

その中でほむらはすぐに事態を察し、バイクから降りて声をかけた。

「貴方達は、大阪のガンツチームかしら」

「ガンツ？ 何や、それ」

「黒い大玉の事よ。私達はガンツと呼んでいるわ……誰が最初にそう呼んだかは知らないけどね。」

「そっちでは違うの？」

「ああ、黒アメちゃんの事か。お前達は……何で東京弁の奴がここにおるんや」

ほむらは仲間達を手で制し、武器を構えないように促す。

それから、相手を刺激しないように話を進めた。

「私達は普段は東京で活動しているチームよ。ほら、最近テレビで話題になってる渋谷のあの騒動。あれ、私達がやったやつ」

「ああー、あれかあ。アレお前等やったんかい」

「ええ。普段は東京圏内から出ないはずなのだけれど……何故か今回はここに飛ばされてね。」

「こんな事は初めてで正直困惑してるのよ。そっちでは、こういう事あるのかしら？」

「いや……ないな。俺等にとっても初めてのケースや」

ほむらは少しばかり考え、それから情報を纏める。

「ここは大阪で、今日の前にいるのは大阪のガンツチーム。」

「ならばこの場所は彼等のテリトリーだ。」

自分達はそこに踏み込んでしまったイレギュラーといったところか。

「悪いわね、貴方達のテリトリーに踏み込んでしまつて。」

「これは憶測なのだけど……多分もう、東京に星人がいないって事な

んだと思うわ。

実は前回の後半辺りからミッションの法則が変わり始めていてね……貴方達も気付いてると思うけど、もう一般人に私達の姿が見えてるし、制限時間もない。

きっと次回からも、同じように他エリアのチームが来たり、逆に貴方達が他のエリアに行く事があると思うわ」

「マジか……いや、言われてみれば納得出来る話や。

そら星人も無限にいるわけないわな」

「それでまず交渉したいのだけど……ええと……そっちのリーダーは誰かしら」

「俺や。そっちは……嬢ちゃんか？　子供なのに随分落ち着いとるなあ」

大阪チームのリーダーを呼ぶと、先程から話していた坊主頭の男が一步前に踏み出した。

ほむらは彼を見上げ、なるほどと思う。

確かに、それなりに修羅場を潜ってそうな凄味があった。

「いえ、リーダーは後ろのヤンキーみたいな人よ。けどここは、貴方達の狩場。」

なら今回は貴方の意見を聞いておくべきだわ。それが筋というものでしょう？」

「はッ……分かつとるやないかい。ガキのくせに肝が据わツとる。

それにいくつか、100点クリアの武器も持ツとるな。

ええで、お前気に入ツたわ……で、俺に何が聞きたいんや？」

「今回、私達はどうすればいいかしら？　敵を狩ってもいいならば貴方達とは別の場所で星人を狩るけど」

「お、おいッ曉美！　何でこいつ等の許可なんて……」

交渉を始めるほむらに、加藤が慌てたように声をかけた。

そんな彼を一睨みし、それから仕方なく説明をする。

「今回、狩場に侵入してしまったのは私達の方よ。

彼等だって余所者に獲物を取られてはいい気はしないでしよう。

こういうのは最初に決めておかないと、獲物の取り合いから最悪、

味方同士の殺し合いにまで発展するわ」

「そういう事や。嬢ちゃんの方が断然分かツとるやないかい」

テリトリーというのは、加藤が思うよりも遥かに重要なものだ。

獲物をいくら狩るかが生存に直結するならば、尚の事ハッキリと決めなければならぬ。

魔法少女の時と同じだ。不用意に相手の狩場に踏み込めば殺し合いにだってなり得る。

そして今回、踏み込んでしまったのはこちらなのだ。

ならば相手側の譲歩を引き出し、味方同士での衝突は未然に防いでおかなければならない。

それを怠れば、後で痛い目を見るだろう。

「そやな……嬢ちゃんはかなり出来そうや。」

なら、俺等はこツちからこツち……北と西をやるから、嬢ちゃんは東と南をやッてええ。

ただ、俺等がそツちに行ツたら……」

「分かつてるわ。その時は貴方達に獲物を譲る」

「そんならええ」

交渉により、とりあえずエリアの半分を分けてもらう事が出来た。

それでもレーダーに表示されている星人の数は北、西の方が圧倒的に多いが文句は言うまい。

むしろ半分もエリアを分けてくれる辺り、荒くれ者のような外見に反してかなり寛大で話の通じる男だ。

ほむらはすぐにガンツバイクに乗り、玄野達へ声をかけた。

「話は決まったわ。私達は向こうをやる……行くわよ」

こういうのは変に馴れ合うより、互いの区分を決めて後は不干渉を貫くのが一番いいのだ。

そのほむらの判断に、加藤だけが不服そうな顔をしていた。

## 第29話 今回は1000点の奴がいる

大阪のチームは、まともとは到底呼べぬ人間の集まりであった。

これから戦いだというのに、メンバーの何人かは麻薬を吸い、注射器で薬を自らの腕に注入している。

音楽を聴いている男もおり、これから殺し合いにいくような雰囲気ではない。

まるで本当にゲームでもやっているような空気だ。

人種的には、西に近いだろうか。

しかし案外、こういう少しネジの外れた連中の方が真人間よりもこの非日常には馴染みやすいのかもしれない。

実際、何人かはZガンを持っていて、1000点クリアを何度も達成しているというのが見て分かる。

そして、既に星人が街に出て一般人を殺し始めているにも関わらず、大阪のチームはまだ動いていなかった。

「一般人が殺されてるぞオツ！ お前等何やってんだッ！

早く行けッ、人がッ、人が死んでるッ！ ホラッ！」

「なんやねんお前。おかしーんか、どツか」

一般人がどんどん死んでいる現状に耐えられずに加藤が叫ぶが、大阪チームは取り合おうとしない。

続けて加藤はほむらを見るが、こちらも顔色一つ変えてはいなかった。

「皆、私達は南東の方に行くわよ。私はこのままバイクで現場に向かうから、皆は後から走って来て」

「待ってくれ、暁美！ 一般人がッ襲われてるんだッ！ 何とか助けてやれないのかッ！」

「一般人の人が襲われているのは、これから行く場所も多分同じよ。

だったらこんな所で言い争うより、向こうでそうすれば……ちっ！」

加藤をなだめようとしていたほむらだが、何かに気付いたのか近くにいたアキラを掴むとすぐにバイクを発進させた。

直後にアキラのいた場所に妖怪のような星人が刀を突き立てた。それをすかさず大阪チームの坊主頭がXガンで射殺する。

「ボサつとしないぞ。死にたいの？」

「あッ、ああ……ごめん、助かった……」

アキラを抱えたまま走り、ほむらは後ろを一度見る。

他のメンバーは……大丈夫だ。

玄野が指示を出して、素早く後からついてきている。

流星にこういう時の切り替えは早い。

ほむらはしばらく走って指定されたエリアへと入ると、アキラへ声をかけた。

「貴方、バイクの運転は出来る？」

「え、まあ……出来るけど」

「そう。じゃあ折角だし運転よろしく」

「えッ、ちょッ！」

流れでアキラを持って来てしまったが、今のままだと初心者の彼は邪魔になるだけだ。

なので彼に運転を押し付け、ほむらはバイクの後部座席の上に立った。

右手にマシンガン、左手にバズーカを構え、風で黒髪がなびく。

「早く走らせなさい！」

「あッ、ああ！」

ボサつとしていたアキラにバイクを発進させる。

そうしてからまずは素早く視線を走らせて周囲を見渡し、星人の数と距離を確認した。

そして近くの星人にマシンガンを撃ちつつ、バズーカの引き金を引く。

すると光が集束し、二秒ほどのタイムラグを経て解き放たれた。

まるで散弾銃のように光が弾け、それに触れた星人を抹消していく。

こちらはかなり、威力だけは使える武器のようだ。

「ギーッ！」



鬼のような星人が飛び掛かって来たのでバズーカから手を放し、ガンツソードで斬る。

バズーカはベルトを通して肩に提げているので手を離しても落ちたりはしない。

そのままマシンガンを乱射して星人を次々と仕留めながら、またバズーカを発射して星人を一気に蹴散らす。

それにしても今回は今まで以上に星人の姿に統一性というものがない。

恐らく日本妖怪の姿なのだろうが、その姿は多種多様だ。

(右に七体……接触までにチャージが終わる。

左の四体は……マシンガンで撃てばこちらに届く前に仕留められるわね)

だがどんな姿だろうがやる事は変わらない。

ほむらはバズーカとマシンガンを駆使して次々と星人を駆逐し、肉片へと変えていく。

更にバズーカから手を放して、今度はXガン。

マシンガンで牽制しながら素早く、視界内にいる全ての敵をXガンでマルチロックオンした。

——発射。

星人を一齐に吹き飛ばし、これに耐えた頑丈な星人を間髪を容れずにバズーカで撃ち抜いた。

だが今度はバイクの前に巨大な壁……何かのアニメで見た事がある。確かぬりかべという名前の妖怪だったか……それが出現し、アキラは咄嗟に進路を変えてこれを避けた。

だが急激な車体の傾きによってほむらが振り落とされてしまう。

「……………」

宙に放り出されたほむらへ、空を飛ぶ星人が一齐に襲い掛かった。その姿はキジムナーや一反木綿、轆轤首といった日本妖怪のもので、微妙に星人らしくない。

ほむらは咄嗟にXガンをYガンへ持ち替え、そして遠くの何も無い場所目掛けて発射した。

それと同時にYガンから射出された三つのアンカーのうちの一つを掴み、引つ張られるように空へ飛ぶ。

通常はこんな事は出来ない。何故ならYガンから出たアンカーは炎を吹かしながら飛んでいる為、掴んだりすれば手を火傷してしまう。

しかし今のほむらはスーツを着ている。少しくらいのダメージならばスーツが肩代わりしてくれるので、こういう無理も出来るのだ。妖怪達の包囲を抜けてからほむらは、今度は高層ビルに付いている看板へYガンを発射し、アンカーを掴んで飛んだ。

飛びながらマシンガンを連射して星人を蹴散らし、距離を空ける。アンカーが看板に巻き付こうと回転し、それと同時に手を離れた。すると遠心力でほむらが飛び、バイクのある方向へと戻る。

そこに星人が殺到するも、ほむらの動きに恐怖はない。マシンガンで蹴散らし、近付いてきた星人の爪を避けて逆に零距离でマシンガンを撃ち込む。

横から飛び掛かってきた一反木綿を踏み台にし、跳躍して軽々と包囲網から脱出した。

そしてバイクへ向けて、肩に乗っていたキュウベえを掴んで放り投げられる。

「わけがわからないよおおお!?!」

飛んでいくキュウベえに向けて情け容赦なくYガンを発射。

またもアンカーを掴み、変則的な空中移動をした。

そしてYガンがキュウベえに追いつくと同時に手を放して更へ飛び、キュウベえもヒラリと身をかわしてYガンを避けてほむらの肩にしがみついた。

心底気に入らないが、キュウベえの回避能力は侮れない。

過去の時間軸ではまだかへの接触を避けようとキュウベえを攻撃したのに仕留めきれなかった事もあった。

なのでYガンが当たるとは思わなかったし、仮に当たってもキュウベえならば別にいい。むしろ当たれ。

そうして空を移動したほむらは丁度いい位置に来ていたガンツバ

イクの後部座席に着地し、何事もなかったかのようにXガンを連射した。

「すツげえな、アンタ……本当に俺と同じ年かよ……」

「貴方には言われたくないわね……そろそろバイクを停めて」

付近の敵をあらかた掃討し、ほむらはバイクを停めるように指示を出した。

雑魚は大体片付けたので、ここからは徒歩だ。

バイクに置きっぱなしにしていたZガンを取り、それからアキラを見る。

「とりあえず、これでも持ってどこかに隠れてなさい。ないよりはマシよ」

アキラにZガンを押し付け、それからほむらはバイクを降りた。

Zガンならば初心者が使っても、よほどの大物以外は撃退出来るだろう。

しかしアキラはほむらに「待ッてくれ」と呼びかけた。

「俺も行くよ……女の子に守ッてもらッちゃ恰好つかない」

「……戦えるの?」

「ああ。実は俺、普通の人間とちよツと違ってさ」

普通の人間と違う、というのは恐らく吸血鬼の事だろう。

クラブをカメラで監視していたほむらにとっては既知の情報だが、アキラがそんな事を知るはずがない。

彼は掌から日本刀のようなものを生やすと、それを手に取った。

吸血鬼はどういう原理かは知らないが、身体の組織を変化させて銃や刀を出す事が出来る。

アキラもまた、同様の能力を得ているという事だろう。

「凄いわね。それ、どうなってるの?」

「実はよく分からない。ナノマシンがどうこう言ッてた気はするけど……」

「ふう、ん」

とりあえず、一応最低限の自衛能力は持っているという事か。

そこらの初心者に比べれば遙かに有望と置いていいだろう。自前で刀を出せるならばガンツソードは必要ないだろうか。

「いいわ、付いて来なさい。ただし邪魔したら承知しないわよ」

「ああ、分かッた」

とりあえず、玄野アキラは邪魔にはならないだろう。

ほむらはそう判断し、彼を連れて大阪の街を歩き始めた。

◇

大阪チームは歴戦の猛者揃いである。

ほとんどの者が100点を達成できずに死んでいく中で、何度も100点クリアをしたような者達でメンバーが構成されていた。

リーダーの室谷信雄は4回クリアを達成した実力者であり、島木譲二は3回クリアだ。

セックス依存症の桑原和男も同じく3回クリアを果たしており、ヤク中の花紀京は2回クリアしている。

そこから一步劣るが、仲間内からは『ドSの三人』と呼ばれ常に三人組で行動している平参平と原哲男、木村進も一度100点クリアを達成していた。

性格はともかく、100点クリアを果たしたその実力は本物だ。

その上、大阪チームには彼等すら上回る『7回クリアの男』岡八郎が控えていた。

大阪チームも決して無傷ではない。ここまでで既に何人かは死んでしまっている。

だが100点達成者達は誰もそれを気にしていなかった。

雑魚が何人減ろうと、自分達さえいれば勝てるという確信が彼等にはある。

それだけの実力を持ち、多くの戦いを潜り抜けてきたのだ。

しかし東京チームも決して彼等に負けてはいない。

いつも通りに適当な狙撃地点に陣取った東郷はXショットガンの狙撃で淡々と星人を処理し、人間離れた強さを持つ和泉はガンツソードと前回100点クリアした事で入手したZガンを巧みに操って次々と星人を蹴散らしていた。

玄野は桜丘と共に一般人を救いながら星人を駆逐し、人々の声援を受けている。

ライスはほむらの匂いを辿りながら、道中にいる星人を手あたり次第に噛み殺す。

前回蘇生させられた西は相変わらずステルスして星人を倒して回っており、ほむらは言わずもがなだ。

こちらにもまた精鋭揃い……何度もミツシヨンを潜り抜け、弱いメンバーが死んでいく中で自然と強い者が残ってきた。

「おいッ、加藤がいないぞー！」

「そういえば一般人の事を気にしてたけど……まさかあっちの方に残ってるの？」

そんな中で加藤不在に気付いた玄野が皆に呼びかけながら加藤を探す。

桜丘もZガンを撃ちながら加藤の姿を探すも、どこにもいない。

「放っておけよ。別にいいだろ……あんな奴いなくても」

和泉は相変わらずシビアなもので、加藤がいようがいなかろうが気にしないようだ。

付き合ってられるか、という感じで星人の反応が多い方へと歩いて行き、その後をパンダのホイホイが続く。

ホイホイもこれで隠れた実力者だ。

たまに星人に絡まれているが、虫でも払う様に叩き潰してしまっている。

ジャイアントパンダとは、笹を食べる熊である。

分類学的にもクマ科に分類される、立派な熊の仲間だ。

その力は人間など軽く超え、一撃で殺す事だって不可能ではない。

そんなパンダがガンツスーツを着ているというのは、熊にガンツスーツを着せて徘徊させているに等しい行為だ。

これで弱いはずがなく、和泉とホイホイが歩いた後は星人の死骸が無造作に転がっていた。

和泉とホイホイがしばらく歩くと、その行く手を遮るように二体の星人が姿を現した。

一体は般若のような顔をした着物姿の侍。

もう一体はおかめのような顔の、これまた着物姿の侍。

どちらもお面ではなく、これが素顔のようだ。

「うふふふふふ……クサイクサイ……バカバカバカ」

「ふふふ……貴殿らクサイぞ。切りとーてしよーがないわ」

星人にとってガンツの戦士……向こうは確かハンターと呼んでいたか。

それはどうも不快に感じる存在らしい。

恐らくは脳から出ている信号がそう感じさせるのだろう。

とはいえ向こうの好みなど和泉にとってはどうでもいい事だ。

彼は無言でガンツソードを構え、ホイホイを下がらせた。

「ふふふ……ほう、我等と斬り合う気か。面白い」

「うふふふ、バカバカ……」

般若が面白そうに刀を抜き、おかめは和泉を囲むように反対側へ回り込む。

二対一……だが和泉に動揺はない。

「まずは指一本!」

般若がそう宣言し、二体が同時に刀を振るった。

和泉は冷静にそれを避け、刀の軌道を観察する。

速く、鋭い。紛れもない強敵だ。

……だが、あの吸血鬼<sup>＊</sup>ほどではない。

「指!」

「それ指ツ!」

「それツ! それそれツ!」

般若とおかめの刀が更に速くなるが、和泉はそれを全てギリギリで避けていた。

その最中、退避させておいたはずのホイホイがおかめに後ろから近づき、無造作にパンチを叩き込んだ。

するとボキボキという音が響き、真つ二つになったおかめが吹き飛んでいく。

近くの店のシャッターを突き破り、そのままおかめは動かなくなっ

た。

スーツを着たパンダのパワーを舐めてはいけない。

「きえ、イーあー！」

味方が死んだことで焦ったのか、般若が叫び声をあげながら斬りかかって来た。

しかし和泉には当たらず、続く横薙ぎの刀も易々と避けられてしまう。

そして和泉が振るったガンツソードが股に当たり、そのまま股から頭にかけて真つ二つに切り裂かれてしまった。

「田を返せーッ！」

「わっけッ、わかんねッつの！」

和泉とは別の場所で玄野は、巨大な星人を相手に戦っていた。

星人は中型のビル一つ分ほどの巨体を持ち、左目が潰れて右目が飛び出している。

田を返せという台詞といい、日本の妖怪である泥田坊を思わせる星人だ。

「田を返せえーッ！」

泥田坊が拳を振り下ろし、玄野が咄嗟に後ろに跳んだ。

それからすぐにZガンを連射して泥田坊を叩き潰す。

流星に100点武器といったところか。泥田坊は抵抗も出来ずに血と臓物と肉片の池と化し、辺りに嫌な臭いが充満した。

「流星ね、玄野クン」

「……………」

桜丘が彼氏の活躍を褒めるが、玄野はどこか浮かない顔だ。

その横顔は何かを憂いているようであり、そして隠し切れない不安が滲んでいる。

「なあ聖……………今回、何か違う気がしねーか？」

「え？ ええ……………そうね。東京以外に飛ばされるのも、他のチームと遭遇するのも初めてだし」

「アイツ等……………結構な数が100点武器持ッてた……………」

ふざけた連中だツたけど、多分相当強い……そんな奴らのテリトリーを侵してまで俺等が呼ばれた意味ツてなんだ？」

玄野は空を見上げ、そして確信を抱いたような声で言う。

「……今回は100点の奴がいる……そんな気がする……」



### 第30話 こいつが今回のボスカ

「この辺りの星人はこれで全滅のようね」

数多くの星人の屍が山を築き、血の河を作り、その中を暁美ほむらが悠々と歩く。

大阪チームとの取り決めで南東の方角を譲ってもらえたが、もうこちらに星人はいない。

リーダーを見るとまだ北西には少し残っているが、それは彼等の獲物だ。

出しゃばって奪うわけにはいかない。

ならば後は、向こうが片付くまで待機でいいだろう。

……ただし、大阪チームが負けなければ……の話だが。

「なあ……これからどうするんだ？」

「大阪チームが終わらせるまで待機するわ。獲物の横取りは好ましくないもの」

アキラの問いに答え、髪をかきあげる。

こちらは向こうに比べて獲物が少なかったが、それは仕方のない事だ。

ここは本来彼等のテリトリーなのだから、半分分けてくれただけで太っ腹と思っただ方がいい。

そこを履き違えて欲張れば、しなくてもいい戦いをする羽目になる。

その事をほむらは、魔法少女時代の経験から学んでいた。

「それにしても……君、凄いな。」

俺の同年代にこんな凄い子がいるなんて思わなかったよ」

「貴方も初めてにしてはいい線いってたわ」

「はは……そうだといいな」

アキラはほむらに感心しているが、ほむらもアキラの事をそれなりに見直していた。

吸血鬼としての身体能力もあるのだろうが、彼はこれが初回とは思えない程に活躍した。

Zガンで敵を潰し、自らの体内から生成した刀で星人を斬る。その戦いぶりは、生き延びれば十分にこれからエースになれるだろうと思わせるものだった。

それにしても気になるのは、自分達がわざわざ大阪に呼び出された意味だ。

ハッキリ言つて、ここまでにはむらが倒してきた星人にそこまで脅威を感じさせる者はいなかった。

この程度ならば大阪チームだけでも十分殲滅出来るだろう、と思わされるものばかりだ。

……となると、向こうにいるのだろうか？

もつと高得点で危険な敵が。あるいは1000点の強敵が……。

「……ちよつとここで待つてて」

「えっ？」

アキラを残し、ほむらはガンツバイクの中に置いていたノートパソコンを手にしてからスーツの力でジャンプした。

元々ビルからビルへと跳び移るだけの跳躍力を持っていたほむらだが、今の彼女はそこにスーツの力が上乗せされている。

そしてどうでもいいが、ほむらが跳んでいる最中、肩に掴まっていたキユウベえは風圧で顔が凄い事になっていた。

一跳びで高層ビルの屋上まで到達し、ほむらは大阪の街を見下ろす。

残る敵は……やはり北西の方向に凄いのがいる。

蜘蛛のような下半身を持つ巨大な牛が見えない何かと格闘戦をしており、他にも色々な所で大阪チームが奮闘していた。

そしてやはりとすべきか、加藤の姿もそこにあつた。何をしているんだ、あの男は……。

「あの見えない何かは、1000点クリアの武器かしら」

「恐らくそうだろう。人類の科学力も侮れないね」

「得点は……」

ほむらはコートのポケットからデジカメを取り出し、先程持ってきたパソコンに繋ぐ。

更にデジカメをXガンと接続し、上のトリガーを引いた。

2回クリアの時に得たパソコンは今までロクに使ってこなかったが、折角なので敵の点数を計っておくことにしよう、と考えたのだ。まず牛鬼を計り、表示された点数にほむらは驚きを感じた。

(70点……かなりの大物ね)

続けて、大阪チームのエースと思われる坊主頭の男と黒い男、それから半裸の男が三人がかりで挑んでいる小柄な星人。

こちらは一見弱そうだが、しかしガンツに最初に表示されたターゲットと同じ姿をしている。

ぬらりひよんとは恐らくあいつの事だろう。

そして点数を計り、ほむらは目を細める。

「……100点……か」

見た目で雑魚と侮ると痛い目を見るタイプらしい。

ほむらは大阪チームとその小柄な星人……ぬらりひよんの戦いを観察する事にした。

向こうのエリアにいる敵は大阪チームの獲物だ。なので横取りする気はない。

しかしそれはあくまで、大阪チームが生きている間の話である。

もしも彼等が全滅してしまえば、次は自分達が戦う事になる。

ならばその時の為に、今からぬらりひよんを観察しておけば必ず後でプラスに働くだらう。

◇

「……想像……以上ね」

高層ビルの屋上でほむらは息を吞んでいた。

あれから大阪チームの戦いを観戦していたのだが……正直に言って、今回はかなりやばい。

ぬらりひよんはあれから、二度の形態変化を行っていた。

一度目に変身したのは、何十人……あるいは百人以上の女性の裸体が集合して出来た巨人だ。

これに大阪チームのリーダー格と思われる坊主頭と、ハゲ頭の二人が取り込まれて殺された。

更に最後の一人も取り込まれたが、彼は余程の女好きだったのか、逆に女巨人の顔まで這い上がると、女巨人の口に己の一物を突っ込んで謎の白い液体を出していたから驚きだ。

ほむらは、あいつは死んでもいいと心の底から思った。

しかしそんな男を加藤が助けてしまい、今度は彼が捕まった。

そこを狙ってステルスしていた西がZガンを拾い、ぬらりひよんを不意打ちで押し潰し……終わつたと誰もが思った。

ほむらすら、これで終わりだと思つてしまった。

しかしぬらりひよんはそこで二度目の形態変化を行い、今度は悪魔とでも形容すべき姿となった。

頭部は牛の骨のようであり、身体は恐竜を思わせる。

腕からは触手が生え、全長は4メートルか5メートルほどあるだろう。

今度は西のステルスも効果がなく、不可視の攻撃によって彼の片腕が吹き飛ばされてしまった。

今までの星人とはまるで違う。恐ろしい敵だ、と素直に認める他ない。

凄まじい再生能力に形態変化。攻撃手段も形態ごとに変わり、まるで底が見えない。

しかし突破口は西のおかげで見えた気がする。

ほむらはそれを確認すべく、Xショットガンでぬらりひよんの頭を狙撃した。

するとぬらりひよんは倒れ、しばらく動かなくなる。

(……やはり、意識外からの攻撃……不意打ちが有効……けど……)

先程の西の攻撃の時だけ復帰が遅かった事から不意打ちに弱いと読んだが、これが当たりだった。

しかし不意打ちだけでは駄目だ。

腕一本から再生した事からも分かるように、不意打ちで一気に全身を破壊しなければアイツは死なない。

既に今も、ダメージなど無かったかのように再生してしまっている。

Xショットガンだけでは威力と、何より攻撃範囲不足だ。

あれを仕留めるには不意打ちしつつ、もつと広範囲を破壊出来る武器を叩き込まなければ。

「やるのかい？」

「ええ。大阪チームもほぼ全滅みたいだし……それに、こつちに向かって来てるわ」

復活したぬらりひよんはほむらの位置を把握していないだろうが、しかし何となく撃ってきた方向くらいは分かるのだろう。

こちらに向けて移動し始めていた。

こうなればぬらりひよんとの戦いは避けられない。

「ほむらー！ 来るよー！」

「——ッ！」

しかしそう簡単にラスボスには挑ませてくれないらしい。

上空から二体の影が接近し、ほむらは咄嗟に跳躍してその場を離れた。

直後に天狗のような姿の星人と犬神のような姿の星人が着地し、ほむらを睨む。

「ゴアアアアアッ!!」

天狗が吠え、ほむらへ腕を振り下ろした。

それを紙一重で避け、Xマシンガンを向ける。

だが背後から犬神が腕を薙ぎ、咄嗟に跳躍して回避した。

そのまま後方宙返りで犬神の頭上を飛び越えつつ、マシンガンを発射する。

だが犬神と天狗は構わず突っ切り、身体に至る箇所が破裂しながらもほむらへ肉薄した。

怒涛の勢いで二体が攻撃を繰り返し、ほむらは汗を流しながら避ける。

その動きはいつもよりも速い——だが、速いが故にキレがなかった。

スーツのせいだ。自らの感覚と予測よりも速く身体が動いてしま

そのズレのせいでいつもの見切りが出来ない。

「くっ……い」

大振りな犬神の拳を跳びつつ避けて横回転——横面に蹴りを一発叩き込んだ。

更に犬神の顔を踏み台にして跳び、ビルから身投げするように急降下した。

それを追って空を飛べる天狗が接近してくるが、待つてましたばかりにレーザー砲を発射した。

光が散弾銃のように拡散し、天狗の身体を穴だらけにしていく。それでも血まみれの天狗がほむらに近付き、捕まえようと腕を振り回す。

右腕を避け、左腕を上体を逸らして避ける。

そのまま更に身体を逸らしてサマーソルトキックのように天狗の腕を蹴り、反動で落下速度を上げた。

地面が迫り、ほむらは上に向かってYガンを発射した。

射出されるアンカーに掴まって高度を上げ、アンカーが天狗に絡みつくと同時に天狗の頭を蹴って上へ跳躍。

遅れて追って来ていた犬神へ急接近しつつマシンガンを撃ち、身体を破壊していく。

犬神が咄嗟に繰り出した爪を体操選手のように身体を捻る事で避けて犬神の頭を蹴り、跳躍。

離れた場所へ適当にYガンを発射して再び空中移動をした。

だからそれ、そういう武器じゃないって。

「ゴアアアアッ！」

「グルルルル……ッ」

ほむらの後を追ってワイヤーから脱出した天狗が飛翔し、犬神がビルの壁を蹴って反対側のビルの壁へ跳び移り、またそれを蹴って別のビルの壁へ着地する事でほむらを追う。

大阪のビルとビルの間をほむらが翔け抜け、それを両側から挟むように天狗と犬神が接近して拳を突き出した。

挟み撃ち——！　しかしほむらは身体を捻る事で二体の腕の間に

身体を通す。

天狗の腕がほむらの背中スレスレを通り、犬神の腕がほむらの胸の前スレスレを通過する。

巨乳のマミでは絶対出来ない貧乳回避だ。

天狗と犬神は互いの拳を顔で受ける事となり、その隙にほむらは天狗の顎を蹴って下降し、挟み撃ちから脱する。

そしてビルを蹴り、ビルからビルへ。大阪の夜空を少女が翔ける。

その後を二体が追い、ほむらは距離を空けながらXマシンガンで牽制する。

すると天狗と犬神は互いの足の裏を合わせるように蹴り、左右へと散った。

二体の姿が左右に聳え立つビルに隠れて見えなくなり、直後にビルの窓をブチ破って突撃してきた。

「……っ！」

間一髪で身体を丸めて空中で前転して突撃を避ける。

そのまま犬神の頭に手を置いて逆立ちし、倒立回転。

最後に犬神の後頭部を踏み台にして跳び、すぐに身体の向きを変えてマシンガンを撃った。

天狗が異常な耐久力でそれを耐えながら飛び、距離を詰める。

重力に引かれて再び地面が近付くが、今度は道路に出てしまった。

ほむらは走行中のトラックの上に乗る、天狗はすぐ後ろを走るバスの上に着地した。

「ゴアッ！」

天狗がほむらの乗るトラックの上に移動し、景色が高速で後ろへ流れる車の上で戦闘が始まった。

拳を避けてマシンガンで腹を撃ち、天狗の内臓が零れ落ちる。

それでもまるで動きが衰えずに天狗が拳を振り下ろし、ほむらは跳躍して別の車の上へ避難した。

しかし今度は犬神が車から車へ跳び移りながら接近してくる。

足場の揺れる場所での二対一を嫌ったほむらが再びYガンで飛び、その後をすぐに二体が追った。

もうそういう武器でいいや。

今度向かった先は建物が密集した繁華街だ。

ほむらはアンカーから手を放してビルの壁を踏み台に跳び、人々の頭上を越える。

直後に天狗と犬神が通過し、その非現実的な追いかけっこに人々は何事かと騒いだ。

追いついてきた犬神の顔を踏んで高く跳び、すかさずYガンを発射した。

狙いは……案の定飛んで追って来た天狗だ。

天狗にワイヤーが絡み付き、動きを封じる。よかった、やっぱりそういう武器だ。

アンカーが上に向けて火を吹き、天狗を地面へ落とそうとする。

これを天狗も力づくで振りほどこうとするが、その上にほむらが乗った。

「いくらしぶとくても……これならどう？」

そして零距离で天狗の頭にXマシンガンを連射した。

その間もアンカーは地面へ急接近し、遂に天狗を大地へ縫い付けた。

更にほむらは追い打ちとばかりに天狗の頭を思い切り踏みつける事で天狗の頭をクツシヨンにして着地した。

地面が砕け、天狗の顔から血が溢れた。

しかし何と呆れた生命力か。天狗はそれでもほむらに一矢報いようと手を伸ばす。

だがもうほむらはそこにいない。再び跳躍し、空から天狗へレーザ砲を向けていた。

これでチェックメイトだ。光が溢れ、天狗の身体を消し去っていった。

「……………ッ」

今度こそ天狗は絶命し、その巨体が血の海に沈んだ。

これで一体。

しかし遅れてやってきた犬神が地面を砕いて着地し、ほむらを食べ



殺さんと牙を剥く。

ガチン、と牙が噛み合う音が響くがほむらは既に退避した後だ。猛る犬神を無表情で見上げ、挑発するように手を動かす。

先程までは二対一だったのが、これで一対一だ。この差は大きい。

「来なさい」

ほむらの誘いに乗ったように犬神が再び攻勢に出た。

その一撃一撃をほむらは余裕をもって避ける。

反撃はしない。まずは敵に攻撃だけをやらせる。

やがて犬神の攻撃は徐々にほむらに掠るようになり、危うい場面が目立つようになってきた。

「や、ヤツと追いついた……おいッ援護しようかー」

「それには及ばないわ」

ほむらの空中戦に対応し切れず、今更になってようやく追いついてきたアキラからの援護を断り、更にほむらは避け続ける。

より近く、よりギリギリで、紙一重で……。

時には髪に僅かに触れさせ、犬神の腕を足場にし、噛み付こうとしてきた鼻先を撫でる。

ただ無意味に避けているわけではない。

ほむらは犬神を相手に、スーツと認識との間で起こる誤差を高速で修正しているのだ。

やはり命がけの戦いの方が感覚が研ぎ澄まされるのだろうか。

ほむらの動きからは次第に無駄が削ぎ落とされ、犬神の攻撃が突き抜けていると錯覚するほどに当たらなくなっていった。

右腕の突きを、少し身体を捻るだけで背中スレスレで通過させる。

振り下ろされた爪を、半歩引くだけで避ける。

噛み付こうと近付いてきた鼻先を撫で、牙が届かないギリギリの位置に下がって回避する。

「フーツ……フーツ……」

やがて犬神も勝ち目が無い事を悟ったのだろう。

怯えるようにほむらから後ずさり、そしてジャンプして離脱を計った。

だがそれと同時に跳躍していたほむらが上からXマシンガンを撃ち、犬神の頭を四散させた。

念のために着地と同時に更にYガンを天狗と犬神に撃ち、死体を転送して消し去る。

それからほむらは、レーダーを確認してぬらりひよんの位置を確認した。

そろそろこちらに来てもおかしくないはずだが……妙だ。ある位置で立ち止まっている。

その理由にすぐ思い当たり、ほむらはバイクへと走った。

「ど、どうしたんだ!？」

「早く乗りなさい! 説明している暇はないわ!」

何故ぬらりひよんが止まっているのか。

その理由は簡単だ。

……ほむらが犬神と天狗に手こずっている間に、東京チームの誰かがぬらりひよんと遭遇したのだ。

それしか考えられない。

だからほむらは、急いでバイクを発進させた。

◇

ほむらの予想は当たっていた。

ぬらりひよんと遭遇してしまったのは、玄野達だ。

駅へと続く歩道橋の上で、彼等は過去最大の敵と向き合っていた。

今ここにいるのは玄野、桜丘、ライス、和泉、ホイホイの三人と二匹だ。

玄野と和泉はすぐにガンツソードを構え、桜丘もフットワークを踏む。

「こいつが今回のボスか……」

「よし……やるぞッ!」

さしもの和泉も敵の威圧感に吞まれかけているが、玄野がまず最初に斬りかかった。

遅れて和泉が飛び込み、二人の剣がぬらりひよんへ近づく。

だがその瞬間、二人は何か衝撃を受けている事を感じた。

まるで身体が激しく揺さぶられているような、妙な感覚だ。咄嗟に玄野と和泉は左右へ跳び、不可視の攻撃から逃れた。だがスーツから液体が漏れ、剣が重くなる。

「スーツが……スーツがオシヤカになったッ！」

「馬鹿なッ！」

ほんの少しの間でスーツが破壊されてしまった。

もしもあのまま突っ込んでいれば今頃、二人の手足は引き千切られていた事だろう。

しかし助かったわけではない。ぬらりひよんが二人へ視線を向ければ、今度こそ終わりだろう。

だが背後に回り込んでいたライスが脇腹の肉を噛み千切る事で一瞬動きが止まり、その一瞬で桜丘が行動を起こした。

「——ふッ！」

桜丘が突撃し、ぬらりひよんの足へ蹴りを叩き込んだ。

ぬらりひよんの巨体が僅かに揺れ、更に続けて跳躍。三日月蹴りを脇腹へ炸裂させた。

着地と同時に地面が抉れるほどの力で踏み込んで回転し、回し蹴り。重い打撃音が響いてぬらりひよんがよろめく。

しかしぬらりひよんは桜丘へ視線を移すと、またしても不可視の攻撃を放とうとした。

それを察知して素早く顎を蹴り上げて照準をズラし、飛び上がったぬらりひよんの顔にスーパーマンパンチを打ち込む事で牛の骨のような頭部を破壊する。

あの不可視の攻撃がどこから放たれているかは分からないが、後ろに回ったライスが被害を受けなかった事から前にしか撃てないと桜丘は考えた。

ならば恐らく攻撃の出所は——視線！

視界内に入る事でしかあの攻撃を受ける事はないと桜丘は推測していた。

だから顔さえ破壊してしまえば恐れる相手ではないはずだ。

「ふーッ、ふーッ……」

軽く呼吸し、リズムカルにステップを踏む。

いける……桜丘は確かな手応えを感じていた。

ここまで培ってきた経験は決して無駄ではない。間違いなく自分を成長させてくれている。

この恐ろしい相手にだつて今の自分ならば勝てると彼女は信じた。

JJがいなくなった今、敵に近付いて殴り合いが出来る者は少ない。

だからこそ、敵の前に出て仲間を……何より玄野を守るのは自分の役目だと彼女は考えていた。

だが次の瞬間、桜丘は信じられないものを目にする事になる。

「うふ……うふふふふふ……」

——ぬらりひよんが、何事もなかったかのように再生した。

砕けた顔が復元され、不気味な笑い声をあげる。

かつて絶望感を味わわれたあの千手観音以来の再生能力持ちだ。

ぬらりひよんの背後に千手観音の幻影が、恐怖と共に浮かび上がる。

だがぬらりひよんを千手観音と同格と考えるのは大きな間違いである。

千手には再生出来るギミックがあつた。手にしていた時計がなければ再生出来なかつた。

ぬらりひよんはそうではない。

この怪物は……そんなものがなくとも、再生し続ける。

「そん……な……」

絶望感に動きを止めてしまった桜丘を、ぬらりひよんの視線が捉えた。

直後にスーツが不可視の攻撃を受けて瞬く間に機能を停止してしまふ。

「あああ、ッ！ ああうああ、あ、あ、あ、ッ!!」

スーツの防御など意味がない。そう告げるかのように桜丘の四肢が捻じれる。

そして嫌な破裂音が響き、彼女の手足が千切れ飛んだ。

その光景に玄野の怒りが臨界に達し、Zガンを向ける。

「野郎オオオオ！」

重圧がぬらりひよんを押し潰し、血の池を作り上げた。

それを確認もせずに玄野は桜丘へ駆け寄り、傷口をきつく縛る。

しかし桜丘の出血が酷過ぎる……このままでは長くは持たないだろう。

「くそッ、転送はまだか！ ガンッ！」

玄野が叫ぶが、転送される気配はない。

それもそのはずで、転送は敵が全滅しなければされないのだ。

血の池の中からまたしてもぬらりひよんが現れる。

確かに潰したはずなのに、まるで何事もなかったかのように。

しかもただ再生しただけではなく、先程よりも一回り大きくなっている。

「お……終わら……ない……」。

「こんな奴……どうすれば……」

Zガンで叩き潰したのに死なない。

効かないならまだ分かるが、効いたのに平気で復活してくる。

そんな奴をどうしろというのか。

絶望しかける東京チームだが、しかしぬらりひよんは彼等を無視して後ろへ振り向いた。

それはまるで、目の前の東京チームよりも大きな脅威を感じ取ったかのようだ。

「何だ……っ？」

「何かが、こっちに近づいて来ている……」

ズシン、ズシン……と。

重い足音を立てて何かかぬらりひよんへと近づいて来ていた。

そしてぬらりひよんはこの足音の主を玄野達よりも優先して対処すべき相手であると感じ取っている。

やがてぬらりひよんの視界の先には、奇妙なスーツを纏った男が……。

——七回クリアの男、岡八郎が姿を現した。

### 第31話 興味深い

「ちっー！」

ぬらりひよんが岡八郎に気を取られた隙に、玄野は桜丘を抱えて歩道橋から離脱した。

遅れて和泉、ライス、ホイホイも退避して歩道橋の上には岡八郎とぬらりひよんだけが残される。

彼等を感じ取ったのだ。これから、自分達が見た事もない凄まじい戦いが始まるのだという事を。

だから巻き添えにならぬようにその場から離れ、地面に重傷の桜丘を寝かせる。

「計ちゃんー！」

「加藤ー！」

逃げた先には先客がおり、加藤が座っていた。

彼はどうやら無傷のようだが、西が片腕を失って倒れている。

他には……恐らくは大阪チームと思われるショートカットの女性と眼鏡の男の姿もあった。

「岡と……ぬらりか」

「加藤、アレはこちらの味方なのか？」

岡の事を知っていきそうな加藤に、何の前情報もない玄野が質問した。

玄野にとってはどちらにも突然出てきた者達だ。

しかも岡八郎は通常とは異なるスーツ——100点クリアの報酬であるハードスーツを着ており、一見すると星人にも見えてしまう。

「ああ、大阪のチームの男だ。七回クリアの男……岡八郎」

「岡やツたら……岡ならきツと……」

加藤が男の名を呼び、大阪チームの女性——山咲杏が期待するように言う。

大阪チームにとって岡八郎とは、東京チームにとっての暁美ほむら……いや、それ以上の存在だ。

負ける姿というのが想像出来ない。

何があっても最後に立って勝利する……そんな男だ。

岡は物怖じせずにならりひよんの前へ歩いて行き、両雄が向かい立つ。

「今の俺に隙があつたらな……」

右腕を突き出し、岡が低い声で言う。

この声は適度な緊張感を維持しながらも、どこか自然体だ。

それだけで、この男が相当に修羅場慣れしている事が分かる。

「どツからでもかかッて……——こんかい！」

そう宣言し、岡が構えを取る。

岡が早く決めてくれれば、まだ西と桜丘も助かるかもしれない。

そう期待を込め、玄野達は岡八郎とぬらりひよんの戦いを見守った。

岡八郎とぬらりひよんの戦いはまさしく別次元の戦闘であった。

岡の着ているハードスーツは様々な武器や機能を内蔵した、100点クリア武器の集大成のような高性能スーツだ。

まず特筆すべきは、通常のスーツならばすぐに壊されてしまうような攻撃にも耐える圧倒的な防御力だろう。

左右の腕は巨大すぎて一見バランスが悪く見えるが、しかし見た目相応の破壊力を有していて巨大な牛鬼の頭部すら粉碎するパワーを持つ。

殴る際には肘からジェット噴射のように炎が吹く事で拳の速度を上げ、重さと威力を更に上げる機能もあつた。

更に肘にはもう一つ、ガンツソード以上の切れ味を誇るソードまで備わっている。

顔を覆うマスクはXガンのレントゲン機能と同じく敵をスキャンする機能が備わっており、掌からはほむらが使っているレーザー砲と同性能のレーザーを発射出来る。

しかし岡八郎は決してスーツに頼り切りというわけではなく、本人もまた高い戦闘センスを持つ男だ。

本人曰く学生時代にやっていたという卓球ピンポンと通信教育の空手……

は何の役に立っているか正直分からないが、しかし的確な攻撃でぬらりひよんを砕いていく。

並の星人ならば……いや、あのオニ星人のボスや千手ですら岡にはきつと太刀打ち出来なかつただろう。

しかしぬらりひよんは普通ではなかつた。

いくら砕かれ、斬られようと当たり前のように再生しては強化されていく。

戦いの中で彼は岡の戦い方を『興味深い』と評し、ハードスーツを真似て腕を太くし、肘に刃を生やして逆襲に出た。

次第に岡が押され始め、何度もぬらりひよんの攻撃が当たるようになってきた。

顔のマスクが吹き飛び、手数もぬらりひよんの方が多くなつていく。

それでも岡はぬらりひよんの不死身ぶりに弱点がある事を見抜き、ハードスーツを匣にしての背後からの奇襲でぬらりひよんを切り裂いて見せた。

倒れ、再生しないぬらりひよんを見下ろしながら岡は言う。

「そうか……やッぱり意識の外からの攻撃か……」

弱点は分かつた。

だがもう決め手がない。

岡はここまでの戦いで、意識の外からの攻撃がぬらりひよんに有効な事を突き止めた。

だが有効なだけだ。これではぬらりひよんは倒せない。

意識の外からの攻撃で、再生出来ないほどに完膚なきまでに破壊し尽す。

そうしなければぬらりひよんは仕留められないのだ。

だから岡は、一度ここを離れる事にした。

「終わったのか……!? 死んだのか？ アイツは」

立ち去ろうとする岡に加藤が声をかける。

それでも無視して歩く岡に加藤はたまらず「おい！」と声を荒げた。そんな加藤の事を鬱陶しそうに一瞥し、岡は面倒くさそうに言う。



彼の顔は『そんな事も分からんくせに何でこいつこんな偉そうなんや』と言いたげだ。

「終わッたらんわ……。」

俺はもうええ……リスクがでかすぎる」

「ちよッ待て！ 待ッてくれ！ 最後まで！ 今なら止めを刺せるだろ！」

「そんならお前がやればええやろ」

岡は加藤に見切りをつけ、そのまま歩く。

今なら止めが刺せるなどと……それが可能なら、もうやっている。出来ないから退却を選んだのだ。

ぬらりひよんを仕留めるならば、不意打ちから一気に身体の一部も残す事なく破壊し尽さなければ駄目だ。

もしも腕の一本も残してしまえば、そこからでも奴は再生する。つまり、止めなど刺せない。それが岡の出した結論であった。

やるならもう一度意識外からの攻撃を加えた上で一気呵成にZガンで叩き潰す他ないが……ハードスーツを捨ててようやく出来た事を、ノーマルのスーツでやるのはあまりにリスクが大きすぎる。

だから岡はここを離れる事にしたのだ。

何をするにせよ、一度ぬらりひよんの意識の外に出なくては話にならない。

「おい!! 待てよ!! おい!! おいッ……くそッ！」

加藤の声を無視して岡はそのまま立ち去ってしまう。

遠ざかっていく岡の背中を見送り、加藤は諦めたように悪態をついてガンツソードを抜いた。

このまま放っておく選択肢はない。

今回は制限時間がなく、こいつを倒すまで絶対に帰れないのだ。

「くそッ！」

再度悪態をつきながら加藤が刀を振り上げる。

だがそれと同時にぬらりひよんの腹を突き破って何かが飛び出した。

それはまるでパチンコ玉を集めて球体にしたかのような奇妙な物

体だ。

加藤は思わず動きを止めてしまい、玄野は嫌な予感を感じてその場から後ずさった。

「やッべえー！ 逃げろー！」

玄野がそう叫ぶと同時に、球体が破裂した。

パチンコ玉のような玉が全方位に散らばり、その場の全員を襲う。

幸いだっただのは、これがスーツの防御力を無視するほどの攻撃ではなかった事か。

攻撃が終わった時、加藤達はかろうじて全員が無事……とはいえずとも、とりあえず死者は出ていなかった。

ただし加藤と山咲のスーツから耐久限界を示すように液体が漏れ、既にスーツが壊れていた玄野は片腕を押さえていた。

「くッそ！ 痛ッてええええ！」

「計ちゃん!? 大丈夫か!？」

「ぐ……左腕をやられた……」

玄野の左腕はパチンコ玉に貫通されてしまい、血が溢れている。千切れてはいないが、動かす事は出来ないだろう。

しかし彼はまだマシンな方だ。

破裂寸前に咄嗟に後ろに下がっていたのが功を奏した。

被害が大きいのは和泉の方である。

「畜生……俺とした……事がッ……」

和泉は片腕片足を貫かれ、更に脇腹までやられていた。

意識はまだあるが、もう戦えないほどの重傷である。

次々と味方が減っていく中、それでもぬらりひよんは倒せない。

またしても姿を変えた彼は、今度は女性の姿になって復活していた。

辺りをキョロキョロと見渡し、東京チームなど眼中にないかのよう  
に言う。

「ヤツスキの奴はどこにいった？ 面白い奴だったのに……」

加藤と山咲、玄野はぬらりひよんを威嚇するように武器を構える  
が、相手にすらされていない。

ライスも唸るばかりで近付く事さえ出来ず、明らかに怯えを見せていた。

東京チームは今まで多くの戦いを潜り抜け、強くなってきた。だがそんな彼等から見ても、今回の相手はあまりに強すぎる。

しかしそんな中でホイホイだけは和泉を心配するように鼻先を彼に近付け、それからノソノソとぬらりひよんの前へと歩いて行った。

「お、おい、パンダ？ やめろッ！ お前の勝てる相手じゃない！」  
玄野の制止も聞かずにホイホイが立ち上がり、ぬらりひよんと相対する。

その雄姿を見て、大阪チームの山咲は困惑していた。

何で東京チームにはパンダがいるのだろうか……などと、今思ふべきでないのは分かっているが、それでも思わずにはいられない。

しかもよく見れば犬もいる。何だこのチーム。

「ほッ、なんだお前？」

ぬらりひよんの問いにホイホイは答えない。

当たり前だ。パンダは言葉など話さない。

だから彼は返事の代わりに、無造作に爪を薙いでぬらりひよんの上半身を一撃で吹き飛ばした。

「うオ!？」

「ウツソオ!？」

まさかの攻撃力に加藤と山咲が驚く。

パンダは動物園の人気者で、普段はコロコロとしている姿ばかりがイメージに残る。

実際パンダは猛獣の中では温厚で人懐こい部類である事は間違いない。

飼育員が丸腰でパンダのいる部屋に入り、時にはパンダがじやれる姿も見られるだろう。

しかしそれでも、パンダは猛獣なのだ。そのパワーは人間の比ではない。

「ほッ？ ほほほほッー」

上半身が吹き飛んだぬらりひよんは、千切れた場所から新たな頭部

をいくつも生やし、異形化していく。

そればかりか分裂まで始め、複数の女性体がホイホイを取り囲んだ。

しかしホイホイは構わずに攻撃を続け、手あたり次第にぬらりひよんを吹き飛ばしていく。

一撃でぬらりひよんの女性体数体が空を舞い、次の一撃で女性体の肉片があちこちに散らばった。

今まで見せなかったホイホイの凶暴性と強さに玄野達が驚くが、やはり基本的には獣だ。

ただがむしやらに攻撃しているだけで、これではぬらりひよんは仕留められない。

「ほほほほほッ！ ふほほほほほッ！」

どんどんぬらりひよんが増殖し、ホイホイを翻弄する。

ここから打開するだけの技術は残念ながらホイホイにはなかった。

もしもここにいるのが、極限まで鍛え抜かれた人間の格闘家ならばこの大群すらも吹き飛ばしてみせたかもしれない。

だがホイホイは獣だ。ただ力任せに暴れる以外の攻撃方法がない。

しかし彼女の奮闘は決して無駄ではなかった。

ホイホイが戦った僅かな時間は、新たな救援者が到着するまでの間を稼いでいたのだ。

「なんだッ？ 何か突ッ込んでくるぞオッ！」

加藤が叫び、それに反応してぬらりひよんも振り返った。

その視線の先にあったのは、一台の車であった。

轟音を立てながらブレーキを踏む気配もなく、むしろますます速度を上げて迫るそれを見て加藤達は青褪める。

それはガソリンを始めとする危険物を運搬する役目を持つ大型自動車——『タンクローリー』だッ！

「ヤバイッ！ 伏せろオッ！」

加藤達が慌てて伏せ、ホイホイは走って離脱する。それと同時にタンクローリーの運転席のドアが蹴り開けられた。

そこからほむらが跳び出し、宙で翻りながらXマシンガンを連射す

る。

すると増殖していたぬらりひよんが次々と弾け飛び、そこにタンクローリーが突っ込んだ。

ほむらは着地するまでの間に更に連射を続け、タンクローリーを攻撃——爆発させた。

巻き上がる爆炎の前にほむらが降り立ち、一時の静寂が訪れた。しかしほむらは油断する事なく武器を構え、ぬらりひよんの復活を待つ。

「あ、暁美ッ！ 来てくれたか！ 気を付けろ、そいつは手強いぞ！」  
「知ってるわ。悪いけど、全員下がってて……こいつは私が倒すわ」

援軍の到着に僅かな光明を見出す玄野へ、ほむらは辛辣とも思える言葉を返した。

決して仲間を案じての言葉ではない。

単純に、これから先の戦いに邪魔だから引っ込んでいろと……彼女はそう言っているのだ。

そのあんまりな態度に山咲が不機嫌になる。

「なんやア、このお嬢ちゃん。えッらそうやな」

「いや、暁美の言う通りだ。俺達は邪魔になる。早くこっちに」

山咲の腕を加藤が引き、拉致するように橋から降りて行く。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよー待ちイ！ あんな子一人残して逃げるんか!？」

「暁美は確かに俺達より若いが……実力は一番上だ。ああ見えて4回クリアしている」

「4回で……確かに凄いけど、7回クリアした岡ですら手に負えなかったの見てたやろ!？」

「わかッてる！ だが俺達があそこにおいても邪魔なだけだ！ 戦うにしても離れて援護した方がいい！」

何やらもめているが、ほむらはそれを気にせずぬらりひよんの再生を見守る。

腰に括りつけていたXショットガンを遠くに投げ捨て、続いてレーザー砲も捨てて身軽になる。

更にコートに手をかけ、これも邪魔だと言わんばかりに脱ぎ捨てた。

キユウベえも彼女の肩から降り、安全な場所へと退避する。

これから戦う相手は余計な重りを背負ったまま戦える相手ではない。ほむらをして、そう判断するほどにぬらりひよんは脅威的であった。

やがてぬらりひよんは再生を終え、その全貌をほむらの前に現した。

身長は2 m半に届き、その姿はまるで再生途中で止まったかのような不完全でおぞましさを感じさせるものだ。

骨の上に血管と薄皮だけを張ったようなその姿は、しかし今まで以上の凄味に満ちている。

ぬらりひよんはほむらを一瞥し、敵と認識して一步前へ踏み出した。

ほむらもそれと同時にXマシンガンを発射し、ぬらりひよんの身体を破壊する。

だが正面からの破壊は無駄だ。ぬらりひよんは身体を再生しながらほむらへ殴りかかり——だがほむらはそれを紙一重で避けて顎にXガンを押し付けて発射。

頭部を砕きながらターンをするように背後へ回り込み、今度は背中を乱れ撃った。

「フーツ……フーツ……なるほど……お前も……興味深い……」

背中が破裂しながらもぬらりひよんはほむらを評価し、振り返る。

彼の中でほむらは『どうでもいい敵』から『興味深い敵』に上方修正されたらしい。

そんなぬらりひよんへ、ほむらは無言で銃口を向けた。

### 第32話 この一瞬が必要だった

ぬらりひよんの目からレーザーが放たれ、ほむらは顔色一つ変えずに舞うように避ける。

しかし決して余裕があるわけではない。

ぬらりひよんのレーザーは道路を斬り、遠くのビルすらも貫いて切り裂き、近くを通る度に背筋が冷える。

命中してしまえばスーツの防御力など無視して一撃で終わる……そう確信させられるほどの破壊力を持つレーザーが二発、絶え間なく連射されている。

それに加えて敵は不死身。意識外からの不意打ちでない限り、どれほど碎いても再生するときはきた。

真つすぐに飛んできたレーザーをサイドステップで避け、続く二発目をバックステップで回避する。

道路を割りながら追って来た二本のレーザーの隙間に身体を割り込ませてXマシンガンで頭部を破壊——するも、すぐに再生してレーザー照射が再開される。

身を屈めてレーザーのすぐ下を通ってぬらりひよんへ肉薄し、胸にXガンを一発。

ほむらの方を向こうとした顔をXガンで顎を打ち上げる事で無理矢理上を向かせて更に一発。

ぬらりひよんの肩を足場に跳躍し、彼の頭の上に手を置いて逆立ちしつつ今度は頭に一発。

すぐに降りて背後を取りつつ背中にも一発。

次々とぬらりひよんの身体が弾け、血飛沫が舞う。それでも致命傷にならない。

すぐに再生してしまう。

(ワルプルギスの夜……ほどとまではいかななくても、過去に戦った魔女と比べてもかなり厄介ね……)

難敵だ……と思った。

過去に幾度も繰り返した時間逆行。その中で繰り返してきた数多

の戦い。

それと比較しても、今回の敵は間違いなく上位に食い込むほどに強い。

流石にワルプルギスの夜ほどではないが、紛れもなく最強クラスの敵であった。

美樹さやかではまず勝てないだろうし、油断をすればバママミや佐倉杏子でも返り討ちになりかねないほどの相手だ。

そして無論、自分も例外ではない。気を抜けば一瞬で死体に変えられてしまうだろう。

ぬらりひよんが振り返る前に細かい瓦礫を拾い、ぬらりひよんの顔へ投げつけた。

だがそんなものは目くらましにすらならない。

ぬらりひよんの目が光り、レーザーを発射してほむらは横へ跳んで回避した。

そうして避けながらまだ手の中に残っていた小石をXガンの二つのトリガーのうちの一つに挟み、ぬらりひよんをロックオンした状態で固定した。

「……」

避ける最中、手が滑ったのかXガンがほむらの手を離れて地面に落ちた。

しかしそれを拾う暇もなく、ほむらはぬらりひよんに背を向けて走る。

その後ろに次々とレーザーが着弾し、道路が爆ぜた。

「うん、そうか……そうか……なるほど、興味深いぞ」

ぬらりひよんがほむらの動きに感心しながらレーザーを放つ。

二つの目から放たれたレーザーはまるで地面を斬るようにして地面を走りながらほむらへ迫った。

斬られた地面は後から遅れて断続的に爆発し、爆炎をあげる。

それを背を向けたまま後方宙返りして避け、爆風に乗ってまるで空で二段ジャンプをするように再度後方宙返りし、ぬらりひよんの頭に手を置いて後頭部を蹴り、バックフリップ。



彼の反対側へと回り込む。

そしてすぐにXマシンガン撃つも、やはり意味がない。

何度破壊しても即再生されてしまう。

その血飛沫に紛れてほむらは小石を拾い、今度はXマシンガンのトリガーに挟み込んでロックオン状態で待機させる。

「うん……なるほど、なるほど……」

ぬらりひよんが振り向こうとするが、それを止めるようにほむらが背後から飛び付いた。

太ももでぬらりひよんの頭を挟み込んで前を向き続ける事を強要し、最大の武器を封じる。

その体勢から大きく身を逸らし、ぬらりひよんを太ももで挟んだまま跳躍。

空中で弧を描いてからリバーシフランケンシユタイナーを決め、ぬらりひよんの顔面を地面に叩き付けた。

そこから間髪を容れずに立ち上がり、ぬらりひよんの後頭部を踏みつけてレーザー攻撃を封じつつXマシンガンを連射。

だがこれでも駄目だ。どれだけダメージを与えてもまるで効果がない。

ぬらりひよんが関節の駆動を無視するような軌道で腕を薙ぎ、咄嗟に後ろへと跳んで回避した。

戦況は何も変わらない。どれだけほむらが技巧を駆使して優位に立ち回ろうと、ぬらりひよんの再生能力の前に追い詰められてしまう。

「……………」

しかしほむらの目に諦めの色はない。

まるで何かを待っているかのように、紫の瞳は静かに敵を見据えていた。

「す、すごい、あの子……何であんな動き出来るの？」

ほむらの戦いを離れた場所で見っていた山咲は信じられないかのようだった。

先程からずっと、ほむらはあの死の間合いの中でぬらりひよんとやり合っている。

立て続けに放たれるレーザーを全て避け、隙を見付けてはぬらりひよんに攻撃を加えている。

ここにいる誰がああ位置にいても、ああは戦えないだろう。きつとすぐに死んでしまう。

ハードスーツの堅牢な防御力にも見劣りしない、見事な動きだ。

むしろあれだけの動きが出来るならば、動きを阻害するハードスーツは邪魔にしかない。

「だがあのままじゃジリ貧だ……不味いぞ、暁美は意識外の攻撃の事を知らないんだッ！」

何とかして伝えないとッ」

ほむらとぬらりひよんの戦いは千日手となっている。

攻撃の効かないぬらりひよんと、攻撃の当たらないほむらではいくら戦っても決着が着かない。

終わるとすればどちらかの体力切れを待つのみだが……それではどう考えてもほむらが不利だろう。

ほむらは珍しく汗を流し、軽く息切れも起こしている。

これまでの戦いで、彼女が疲れる姿など玄野達は見た事がない。

つまり、それだけ追いつめられているのだ。

そして避ける最中、レーザーで破壊された道路の瓦礫に当たってXマシンガンが手から落ちてしまった。

このままでは駄目だ……そう思った加藤が飛び出そうとするのを、玄野が腕を掴んで止めた。

「計ちゃん!」

「待て加藤……もう少し様子を見よう。」

俺には……あの暁美が、何も考えずに戦っているとは思えない……」

玄野は鋭い目つきでほむらとぬらりひよんの戦いを……いや、ほむらの目を見る。

「アイツ……何か……狙ってる……。」

闇雲に攻撃してるわけじゃない……何か策があるんだ……」

Xガンを一丁とXマシンガンを落としてしまい、ほむらはホルスターから予備のXガンとYガンを出す。

そしてレーザーを避けながらXガンでぬらりひよんの足を吹き飛ばして体勢を崩し、間髪を容れずにYガンで動きを拘束した。

Yガンはぬらりひよん相手でもかなり効果的と思われる武器だ。いくら攻撃しても再生するならば、上に転送してしまえばいい。

しかしYガンで拘束された箇所がまるで切れるように離れ、Yガンのアンカーが素通りしてしまう。

いくらでも身体を変化させられるぬらりひよんならではの回避と  
言えるだろう。

だがその一瞬の間を突いてほむらは近くで死んでいる自衛官の側まで跳び、Yガンを捨てて死体の横に転がっていたマシンガンを拾った。

今回のミッションは一般人にも見えており、自衛隊も出撃していた。

結局自衛隊でも星人には勝てずに死体の山が出来ただけだったが……しかし、この武器こそほむらが欲しかったものだ。

放たれるレーザーを横に跳んで避けながら、ほむらは自衛官のマシンガンを乱射し、更にXガンをホルスターに戻して以前ヤクザから拝借した拳銃も撃つ。

弾丸が次々とぬらりひよんに当たるが、勿論ダメージは浅い。

「ふーッ……ふーッ……そんな武器が……効くわけ……」

ぬらりひよんは呆れたように話す。

いや、話そうとした。

だが、その次の瞬間に彼の背中が突然爆ぜる事で言葉は中断される。

——それは、意識外の攻撃であった。

後ろから攻撃されるなどと思っていなかった。

何故ならほむらは前にいて、他の連中も後ろではなく橋の下なのだ

から。

ならば何が撃つたのか？

その正体は、離れた場所で見っていた玄野達だけが理解していた。意識の外から攻撃したものの正体。それは、先程ほむらが落としたXガンとXマシンガンだ。

「この一瞬が必要だった」

ほむらはミスをして落としたのではない。

わざとあの位置に落とし、避けながらぬらりひよんの位置を誘導していたのだ。

落としたXガンとXマシンガンの銃口が彼の位置に来るように。

ぬらりひよんが、落とした二つの銃に背を向けるように。

戦いながら全てを計算して、位置を調整していたのだ。

「この一瞬が、お前から不死の再生能力を奪い去る」

そしてほむらはあの時、自衛官のマシンガンを撃ち、その中に紛れて拳銃を撃っていた。

放たれた弾丸は瓦礫に跳ね返り、跳弾となってXガンとXマシンガンの引き金に当たり——誰も持っていない二つの銃が背後から奇襲するという、意識外の攻撃を成し遂げたのだ。

Xガンは二つの引き金を引かねば発射される事はない。

だがほむらは戦いの中で引き金の間に小石を挟む事で、一つ目の引き金が常に押された状態にしていた。

そして矢は、この一発だけではない。

「——最後までチャンスを待つのが………本当のプロだ」

「おっ!?」

ぬらりひよんの胴体がまたしても意識外の攻撃で弾け飛んだ。

その攻撃は遠くの高層ビルの窓………少しだけ開かれたそこから銃身だけを出した東郷によるものだ。

東郷はずっと、この機会を狙っていた。

ほむらが戦うのを見てから、彼はすぐに狙撃しなかった。

何故なら彼はほむらから『仕事』を受けたからだ。

その仕事とは、ぬらりひよんを仕留める確実なチャンスが来た時に、最高のタイミングで攻撃をくれてやる事だ。

勿論ほむらは、そんな仕事を口に出して伝えていないし、東郷もそんな依頼を耳にしていない。

だが狼は同じ犬科であっても、犬の群れの中にいる仲間を感じる事が出来る。

それと同じで、この異常な殺し合いの世界の中でほむらと東郷は互いの存在を感じ合っていた。

だから東郷への仕事に余計な装飾や言葉は必要ない。ただ……伝えればいい。

故に東郷はほむらの狙いを理解し、そして待った。

必ず機会が訪れるはずと信じて待ち、そして今ぬらりひよんを撃つたのだ。

「うオツ!?!」

更に続けて、今度は先程ほむらが捨てたレーザー砲が突然発射され、ぬらりひよんを穴だらけにした。

この大阪で無念に散っていった自衛官同胞の狙撃銃を拾っていた東郷が、遥か1km先からの狙撃でほむらが捨てたレーザー砲のトリガーを撃ち、ぬらりひよんに当てたのだ。

「がッ!?!」

更に今度は腹から刀が生えた。

バチバチと音が鳴り、ステルスを解除した大阪最強の男——岡八郎が姿を現す。

「どうや……う……」

岡八郎は逃げてなどいなかった。

ぬらりひよんの弱点を看破した彼は敵前逃亡したように見せかけ、好機を狙っていたのだ。

タイムオーバーがない以上は倒すしかない。

しかし正面突破は不可能。

そう考えた彼は逃げた振りをして、ぬらりひよんの意識外へ出てい

たのだ。

そしてほむらと東郷の攻撃を見て、今こそが好機と判断して背後から接近し、渾身の一撃を叩き込む事に成功していた。

……もつとも、もしほむらがいなければ『面白い奴』とぬらりひよんに評価されていた彼は意識の外に出られず、追跡されて死んでいただろうが……。

「おおおおおおオオオオオツ!!」

気合の声と共に刀を振り上げ、ぬらりひよんを腹から頭にかけて二つに裂いた。

そしてほむらが止めを刺すべく銃を向ける……が、ぬらりひよんはほむらを視界にすっかりと入れている。

他の誰を意識の外に追い出そうと、最大の脅威であるほむらだけは意識の外に出さない。

ほむらの攻撃では絶対に止めにならない。

故に――。

「……今よー」

――止めを刺すのはほむらではない。

ほむらの呼びかけに応じ、誰かが引き金を引いた。

それと同時に岡が跳び退き、ぬらりひよんを重圧が押し潰して血の池を作る。

やったのは、ステルスしながら炎上するタンクローリーの中に隠れていた玄野アキラだ。

ほむらは、ぬらりひよんの特性を理解した時から自分では止めを刺せないと考えていた。

故にZガンを玄野アキラに預け、隠れさせていたのだ。

そう……最初に突撃したタンクローリーの中に、ずっとアキラは潜んでいたのだ。

(そうかッ……最初のタンクローリーの突撃は、ダメージを与えるのが目的じゃなかつた……ッ！)

アキラがZガンの射程内まで近付く為に……隠れる場所を作ったんだ！)

玄野はここにきて、ようやく最初のほむらの無意味な攻撃の意味を悟った。

ぬらりひよんに正面から大型車をぶつけた所で、それは何の意味もない。

だがそもそも、アレは攻撃が目的ではなかった……アキラの為の隠れ蓑を用意する為だけのものだったのだ。

普通に考えれば爆発炎上するタンクローリーの中に潜む事など絶対に出来ない。

どう考えても焼け死ぬか、運がよくて重症になる。

だがその荒業もガンツスーツを着ていれば、スーツが壊れるまでの間ならば可能になる。

加えてアキラは吸血鬼だ。元々の耐久力が人間とは違う。

「おおオオオオッ!!」

アキラがステルスしたまま更にZガンを連射する。

次々とぬらりひよんの残骸を重圧が押し潰し、破片一つに至るまで原型なく破壊していく。

連射に次ぐ連射、破壊に次ぐ破壊。

それが終わった時、ぬらりひよんは完全にただの血の池と化していた。

「……………」

まだ復活するかもしれない。

そう思い、警戒を解かずにはむらはぬらりひよんの残骸……いや、残骸とすら言えない赤い池を睨み続ける。

だが不意に、視界が突然ガンツの部屋へと切り替わった事で自分が転送され始めていると気付いた。

どうやら、今度こそ本当に終わったようだ。

今回は、流石に疲れた。

しかし何とか生き残れたようだ……その安堵に、ほむらはようやく緊張を解いた。

◇

ぬらりひよんとの戦いが終わり、ほむら達はいつもの部屋へと戻さ

れていた。

いつものメンバーが部屋に集結し……だがその中にいるはずの一人がいない。

玄野、ほむら、加藤、和泉……東郷、アキラ、ライス、ホイホイ、西……後ついでにキュウベえ。

しかし桜丘だけがどこにもいなかった。

玄野はその現実を認められないように何度も部屋を見回し、今にも泣き出しそうな顔で震える。

「う……嘘だ……ッ。」

い、嫌だ……嫌だ……聖……」

玄野の姿に加藤は目を伏せ、ほむらも視線を逸らす。

この世界は残酷で、どれだけ生き延びたくても死ぬときはあつさり死んでしまう。

今までの参加者達もそうだったし、岸本だってそうだった。

誰もがドラマチックに活躍できるわけではない。生き続けられるわけではない。

そんな残酷で当たり前の現実を、改めて再認識させられる。

「おーいガンツ。採点」

西だけが空気を読まずにいつも通りの声で、早く採点をしろとガンツを急かした。

もし採点が始まったら確定だ。もう桜丘は帰って来れない。

玄野は涙を流し、祈るように叫ぶ。

「ふうう……ッ、神様……神様……どうかッ……。」

帰ってきてくれ……帰ってきてくれ！ 聖ッ！」

「……アレ？ アタシ最後……？」

祈りが通じたように、桜丘が頭から転送されてきた。

全身が戻ってくる的同时に玄野は桜丘を抱きしめ、もう離れたくないかのようにな力を込める。

「ちよッ、玄野クーン！ 皆が見てる前で！」



「よかつた……本当に……戻ッてきてくれて……よかつた……」  
う……ううウウウ。ウ……よ……がッだあ。あアア……」

玄野は皆が見ている事も気にせず、涙と鼻水を流しながら泣いた。ほむらも思わず笑みを浮かべ、らしくないと思つてすぐに無表情に戻る。

この世界は残酷で、祈りなんてものは何の役にも立たない。

むしろ害悪な宇宙生命体に利用されて絶望の末路を迎えてしまう。

それでも、と思う。こんな人生だったのだ……一度くらい、幸せな夢を見てみたい。

そんな気持ちの方が自分にもまだ残っていた事に気付き、ほむらは内心で自嘲した。

今回もかろうじて犠牲者はいない。

あえて言うならばアキラ以外の新人が戻ってきていないが、恐らくは帰ろうとして勝手に爆死したのだろう。

もつとも、その事はもう加藤すらそこまで気にしていない。

勿論悔いているし、助けたかつたとも思っている。

だが以前のように涙を流して悔いるような姿は見せていなかった。

本人も知らぬ間に、この異常な世界に慣れて心が冷えてきているのだろうか。

「何とか……全員、戻ッて来れたな」

玄野が涙を拭い、ほつとしたように言いながら仲間達を見る。

どうやら彼の中でも新人は『全員』に含まれないらしい。

遅しくなつたと思うべきか、冷たくなつたと思うべきか……。

どちらにせよ、この世界に順応しているのは間違いないだろう。

残酷な話だが、こちらの話を聞かずにスーツすら着ない素人を気にかけてられる段階ではなくなつたのだ。

以前までならば、まだその余裕もあつた。

しかし……もうそんな余裕はないと全員が悟っている。

前のオニ星人の時から難易度が一気に上がり、最早自分達が生き残るだけで精一杯になっているのだ。

その後はいつも通りの採点が始まつた。

東郷は50点獲得で、前回と合わせてトータル104点。

和泉は48点。前回までの分と合わせてもトータル95点で100点に届かなかった。

玄野は49点。トータル102点でまたしても100点到達だ。

桜丘は35点。前回までと合わせても58点だが、上手く行けば次は100点に届くかもしれない。

ライスは28点だ。トータル29点で100点への道は遠い。

ホイホイは驚きの58点。案外このパンダは強いかもしれない。

西は75点。ステルスしつつ大阪メンバーの獲物まで横取りして稼いでいたようだ。

ほむらは274点でトータル294点。天狗と犬神の点数が高かった上に、星人をかなり倒していたので当然と言えば当然の高得点だろう。

これで100点獲得は東郷、玄野、ほむらの三人だ。

この三人が選んだのはやはり、強い武器だった。  
今更逃げるつもりなどない。

星人が表の世界にまで浸食してきた今、戦う為の力を手放すのは悪手だ。

もしも星人がミッション外で現れたとしても、大事なものを守れない。  
い。

ならば命の危険があらうと力を選ぶ。

これにより玄野はZガンを、そして東郷はパソコンを手に入れたが……こんなものが複数あっても意味はない。

残念ながら今回の東郷の100点クリア武器は、完全に外れだ。

一方ほむらはガンツバイクを飛行可能にしたような飛行ユニットと、大阪の岡八郎が着ていたハードスーツを入手していた。

しかし飛行ユニットはともかく、ハードスーツは回避主体のほむらとの相性が致命的に悪い。

確かに攻撃力と防御力は段違いに上がるが、ほむらはこんなものを着ない方が強いのだ。

しかもスーツは他の武器と違って一人一人の体格に合わせた専用

のものなので他人に貸す事も出来ない。

残念ながらこの最強スーツを使う事はないだろう。

……いや、罠や盾くらいにならないか？

そして初参加の玄野アキラはぬらりひよん撃破により100点。

これで、解放される条件が整った。

「アキラ……1番だ。お前は、こんな世界にいちやいけない……。」

親父とお袋も、お前に期待してるんだ」

玄野はアキラの肩に手を置き、このゲームから離れる事を勧めた。

自分達はもう腰までどっぷりと浸かっている。今更抜ける事は出来ない。

だがアキラはまだ引き返せる。

こんな、次のミッシヨンで死ぬかもしれない世界にいらなくてもいいのだ。

しかしアキラは一度玄野を見て、次にほむらを見詰め……口を開いた。

「2番だ。強い武器をくれ」

「おいッアキラ！」

迷いなく答えたアキラに、玄野が掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る。

その顔には疑問と怒りが浮かんでいた。

折角平和な世界に戻るのに何故……!? そんな兄の怒りを受け止めながらアキラは答える。

「兄貴……俺はもう……人間じゃない……。」

知らないうちに、吸血鬼とかいう化け物になっっていた」

「だッ、だからなんだよ！」

「分からないのか？ 俺はもう、あの星人とかいう連中と同じって事なんだぜ……。」

もしここから解放されれば……次にこのガンツとかいうのが標的にするのは俺かもしれない」

「そ、そんな事は……。」

あり得ない……とは言い切れなかった。

このガンツは星人を殺す事を玄野達に今まで強いてきた。ならば吸血鬼を標的にする事は十分にあり得る話だ。

ほむらはおもむろにパソコンを開き、過去に討伐対象になった星人のデータを探す。

2回クリアで得たこのパソコンは見た目はそこらのノートパソコンだが、その中には過去に討伐対象にされた星人のデータも記されていた。

「玄野アキラの言葉は正しいかもしれないわ。これを見て」

ほむらが皆に画面を見せる。

それは過去にガンツの標的になった事のある星人が記されたページだが……そこに、吸血鬼がいた。

そのミッションは結局時間切れで吸血鬼を殲滅し切れずに終わって失敗してしまつたらしい。

「今や彼は吸血鬼の最後の生き残り……ここで解放されれば、次にガンツが狙うのは彼かもしれない。

ならいつそ、今はこのままこちら側にいた方が安全かもしれないわ」

ほむらはアキラの判断を正しいものだと考えている。

今、アキラがガンツの標的にされていないのは彼がガンツに囚われているからだ。

もしそうでなければ、きっとガンツの標的に選ばれてしまうだろう。

「そういうわけだ……兄貴、俺もこの部屋に残るよ」

「……わかつた。だが無理はするなよ」

こうしてアキラの残留が決まり、玄野兄弟が揃ってこの住人となった。

続いてキュウベエの得点が記されるが、こちらはやはり0点。クソの役にも立たない。

所詮キュウベエなどこんなものだ。

そして加藤——10点。

前回までと合わせて103点で100点に届いた。

「……………お、俺は……………」

「加藤！ 1番だ！」

悩む加藤へ、玄野が送り出すように言う。

加藤はアキラと違う。玄野とも違う。

彼はこの部屋に守りたい者など残していないし、むしろ外の世界にこそ守るべき者がいる。

加藤には弟がいて、彼を守らなければならないのだ。

だからいつだって死ぬのを恐れていた。弟を一人にしてしまう事を心底恐怖していた。

「お疲れ様よ、リーダー」

「だ、だがッ、ここで止めたら……………俺は仲間を置いて逃げる臆病者だ……………ッ」

「……………加藤勝。あんたは虎タイガーのように勇敢な男だ。

他人を案じ、常に危険に飛び込んでいく……………」

だが虎タイガーのような男は、その勇猛さのおかげで、早死にすることになりかねない……………臆病を恥じる事はない……………」

「けど……………俺だけッて……………」

桜丘と東郷も加藤の背中を押す。

しかし戦友を残して一人だけ平和な世界に帰る事に加藤は抵抗があつた。

それに、元々玄野を巻き込んでこの部屋に来てしまったという負い目もある。

しかし……………それでも、どうしても、弟の顔がチラついてしまう。

それに今回のミツシヨンは本当に危なかつた。

次も生き残れるとは、どうしても思えない。

だから彼は、絞り出すように一番と言おうとし……………。

「はッ……………おめででー奴等だな。解放されたくらいで無関係になれるとか本気で思ッてんの？」

もうすぐ、『始まる』ッていうのによ……………」

西丈一郎が、それを嘲るように笑った。

### 第33話 人間は立ち向かうことができるはずだ

加藤は結局一番の解放を選ばなかった。

西の言葉を信じたわけではないが、彼の語る言葉を嘘と切り捨てる事も出来なかったのだ。

あと一週間で始まる……そう西は語り、ガンツに表示された数字をほむら達に見せた。

数字は凡そ60万と少し。そしてそれは一秒ごとに減っており、秒数を示している事は明らかであった。

つまりガンツに示された残り時間は僅か一週間程度という事になる。

このカウントが0になった時に何が起こるのかは具体的には西も把握していないらしい。

だが彼は核戦争が有力な説、と言っていた。

恐らくは世界各地に自分達と同じような黒い玉の部屋に集められた人間がおり、その中の何人かはインターネット上で情報のやり取りをしているのだろう。

核戦争というのはその中で出た推測の一つに過ぎないだろうが、ガンツに秒数が表示されている以上は何かあるのは間違いない。

そうした不安が、加藤に部屋を立ち去る選択をさせなかった。

もう解放されても無関係ではいられない……吸血鬼が襲撃してきたのと同じように、オニ星人やぬらりひよん達が一般人を巻き込んだのと同じように……これからは、一般人も部屋の住人も無関係に全員が何かに巻き込まれる。

そんな確信と不安だけがあった。

変わり始めているミツシヨン。

今までになかった戦場の変更。

そしてガンツに示された謎の残り時間。

それらが重なり、部屋の空気は重々しいまま解散となった。

玄野達が帰った後、ほむらは通販で買っておいた普通のパソコンで

ガンツについて調べ始めた。

ほむらの読みでは、西同様にガンツの事をインターネット上に上げている者というのは他にもいるはずだ。

頭の爆弾がどういう条件で作動するのかがイマイチ不明瞭だが、西のサイトを見るにネット上に書き込む分にはかなり緩くなる事は分かっている。

いかに小説形式を取っているとはいえ実名まで出し、起こった事を事細かに書き、サイトを閲覧しているうちの何人かはこれが現実に起こっている事だと確信する所まで至っているのに西の爆弾が作動する気配がない。

ここまで来れば、事情を知る者同士ならばネット上で話しても問題ないと思う者は今までにいただろうし、そう思ったならば自分達以外の部屋の住民とコンタクトを取りたいと考えたはずだ。

そうした者達が集まり、サイトを作っていたとしたら……そこには、多くの状況が共有されている。

西の情報の出所もきつと、そういつたサイトからだ。

ほむらはそう読み、部屋の住民が集まるサイトを探していた。

「キュウベえ。貴方は西丈一郎の言っていたカタストロフィについてどう思う?」

「現時点ではハッキリとした事は言えないよ。情報が足りないからね」

「貴方が掴んでいる限りの情報から導き出される、最も可能性の高い憶測でいいわ。」

「どうせ私よりは多くの事を掴んでいるんでしょう?」  
「……確定ではないが、異星人からの大規模な侵略が起こる可能性が高い。」

あの秒数は、それが起こるまでの推定予測時間だろう」  
キュウベえの返答はほむらの予測通りのものであった。

星人達は一つの目的……即ち『地球への移住』を目指している宇宙からの漂流者達だ。

それらは今まで少しずつ地球へ入り込んでいたが、いよいよ本隊が

来るという事なのだろう。

ガンツのミッションとは、先遣隊を潰す為の小競り合い……前哨戦でしかなく、あの示された時間がゼロになってからが本当のミッションなのだ。

「つまり鹿目まどかも、もう無関係ではいられない。間違いない。巻き込まれる事になる」

「……………」

ほむらは無言で唇を噛んだ。

やっと終わったはずだったのに。終わらせたはずだったのに。

なのに運命はまたしてもまどかを巻き込もうとしている。

何度も繰り返し、最後には命まで捨てて……ようやく迷宮を抜けたら、そこはまた新しい迷宮だった。

これでは魔女との戦いで死んだオリジナルの暁美ほむらが浮かばれない。

だがまだ可能性はある。

暁美ほむらは死んだが、そのコピーである自分がここにいる。

いや、今となつてはむしろ自分がガンツに呼び出されて複製されたのはこの為だったとすら思える。

「……………いいわ。なら、私が全ての星人を始末する」

まどかにまた危険が迫るといふのなら、何度でもそれを倒そう。

星人も魔女も関係ない。鹿目まどかが幸せに生きる明日の為ならば、いくらでも戦いに身を投じよう。

その果てにこの身が砕けようと、後悔なんてあるわけない。

元よりこの身は死者。とうに死んだはずの人間の複製に過ぎない。

ならば今更命など惜しむものか。

「恐らくミッションは次が最後だろう。大阪以上の戦いが予想されるよ。」

まどかを守る為には、まずはそれを生き延びないとね」

前のミッションでは東京から大阪へと舞台が移った。

恐らくは各地でも同じように、星人のいなくなったエリアから他のエリアへ移動させられていたのだろう。



ならばきつと、残るミッションは多くない。

残り時間一週間という事を考えれば高確率で次がラストミッションとなる。

そして次はきつと、大阪以上の戦いが待っているのだろう。

だがほむらに恐れはなかった。

どんな星人だろうと来るならば来るといい。

何だろうが纏めて葬るだけだ。

その決意を固め、最後のミッションを待ち続けた。

◇

その日、ガンツの部屋は唐突に電気が点かなくなった。

最初は停電かと思い、次にブレーカーでも落ちたかと思ったがどちらも違っていた。

ほむらが拠点としているガンツの部屋だけが突然にライフラインを絶たれたのだ。

しかしこの事にほむらは動揺しなかった。

ただ、この部屋が役割を終えたという事だけを薄々理解しただけだ。

「次が最後のミッションのようね」

「そのようだね。もうこの部屋を使うのも最後だから電気と水を止められたんだろう」

ほむらは短い時間で着替えと武装を終えて玄野達が来るのを待つ。

しばらくしてから順に姿を現し、全員が部屋に集まった。

今の所は欠員はいないが、次にこの部屋に集まった時に全員が揃っているかは分からない。

「おい曉美……何で部屋の電気消してんだ」

「少し前から点かないのよ」

玄野の問いに答え、それから全員を見る。

何人かは露骨に緊張しており、いつもと違う雰囲気気圧されているようだ。

「俺、曉美、和泉、東郷さん、桜丘、計ちゃん……と、弟さん。後、変なのと西と犬とパンダ」

加藤が全員いる事を確認し、しつかりと顔を見る。彼も何となく予感があるのだろう。

このミツシヨンで何人かと今生の別れになるかもしれないという、そんな不安がきつと全員にある。

「西か……テレビでえらい事になッてたな」

「ふん……別に……」

玄野が心配そうに言うが、西はどうでもよさそうにそっぽを向いた。

どうやら西はテレビで報道されるような事をやらかしたらしい。

一体何をやったのやら……と思うも、ほむらにとつてはいつでもいい事なので特に口を挟みはしなかった。

「これ……最後のミツシヨンなのか？ 西？」

「さアね」

「お前、テレビで死んだッて言われてたぞ」

「あー、そう」

加藤の問いにはぶつきらぼうに答えるが、彼だつてそんな事は分からないのだから答えようがない。

あくまで西は玄野達よりも多くの情報を持っている参加者に過ぎないのだ。

玄野もそれが分かったのか、またテレビの事に話を戻すも西の答えは適当なものだ。

「帰ッても居場所ねーんじゃねーの？ これから警察に追われる身だろ」

「どーせ終わる世界だッて……警察もクソもあるか」

西はどうやら世界が終わるといふのを本気で信じているらしい。

いや、終わらないにしても現体制が崩壊するだろう事は間違いないと読んでいる。

実際、それは間違えていない。

星人の侵略が始まれば警察もいちいち西一人を追っている暇などないだろう。

「ハア……ハア……クソ、気分悪イ……」

俺達……生きて帰れんのかよ……」

「確かに……今回、生きて帰れる気がしないわ……」

まだ経験の浅いアキラが震えながら弱気を零し、それに触発されて桜丘が普段は口にしないような言葉を吐いた。

いかに気丈でも女性だ。ただでさえ恐ろしい殺し合いなのに、その空気が普段よりも重ければ不吉な予感を拭う事は出来ないのだろう。

「ハア……ハア……神様……どうか……神様……」

生きて帰りたいという気持ち強いほどに死への恐怖は大きくなる。

桜丘は神に縋るように手を組み合わせ、祈りを捧げていた。

そんな彼女を和泉が鼻で笑う。

「はッ……神なんているかよ……」

人間の命は重くなんかない……見て来ただろ。すぐボロクズみたいに壊れちまう。

誰もが何処かで神がいると思ッている。でも神なんていない。

むしろ俺としては悪魔の方が説得力があるね……

災厄は……悪い事は重なる……確率論なんか無視して重なッていく。

この世は悪魔に翻弄されるだけの場所なんだよ」

今日の和泉はいつになく雄弁で、そしてネガティブであった。

恐らくは彼も普段と異なるこの空気に何か違うものを感じているのだろう。

無意味に他人を怖がらせて冷静ぶろうとするのは一種の心理的逃避か、それとも平静を得る為か。

どちらにせよ、いつになく和泉は弱気だった。

「悪魔がいたとして……知ッたこッちゃないッて。

今まで生き残ッたのは知恵を使ッて持てる能力を駆使して生きのびようとした結果だ！

人間は！ 人間は！ 立ち向かうことができるはずだ!!」

玄野は恐怖を振り払うように、そして全員に言い聞かせるように叫んだ。

悪魔がいようと悪い事が重なるうと、それでも人間は立ち向かえる。

そう主張し、震える桜丘の肩を抱いた。

「不安を抱えたまま何もしないのは愚の骨頂だ。」

最後の最後まで知恵を絞って……協力し合うんだ。自分達だけが頼りだ」

加藤も玄野に同調し、弱気を吹き飛ばすように決意を口にした。今まで、楽な戦いなんて一度もなかった。

だが自分達は生き残ってきたのだ。

ならば最後まで諦めては駄目だ。最後まで戦うのだ。

そう彼は皆に伝える。

「……そうね。神も悪魔も私の知った事ではないけど、人は立ち向かう事が出来るわ。」

相手は何だろうと私は戦い続ける。今までも、そしてこれからも「ほむらも玄野や加藤の言葉に同意を示し、そして誰もスーツを着せていなかったパンダにスーツを着せてやった。」

ちなみにライスは既にスーツを着た状態だったので放っておいても問題はない。

というより最近彼はほむらが着せずとも自力でスーツを着られるようになっていた。

やがてラジオ体操の歌が流れるが、これもいつもと何か違う。

音が途切れ途切れで、雑音混ざりで気味が悪い。

しかもガンツに表示された文字は文字化けしていて、拳句にターゲットの写真すらなかった。

そして緊張感が支配する中、まずは西の頭が消え始めた。

「転送始まったぞッ！」

「玄野クン！ 必ずッ生きて帰るわよッ！」

「ああッ必ずだッ！」

「ハアッハアッ！ クッソ！ 死んでたまるか！」

加藤が叫び、桜丘が己を鼓舞するように玄野へ呼びかけた。

玄野もそれに頷き、決意を見せる。

アキラはやや緊張に押され気味か。少し不安だが吸血鬼なのでそう簡単には死なないだろう。

「……仕事を開始する！」

「涼子……遊園地に連れてくって約束……守るからな……」

東郷はいつもよりも若干強めの口調で自分を奮い立たせ、和泉は誰かの名前を呟いていた。彼女だろうか？

「一人も欠けるな！ 絶対！ 一緒に帰って来よう！」

最後に玄野がそう言うのを耳にし、ほむらの視界が切り替わった。視界に飛び込んで来た景色は少なくとも日本のものではない。

外国風の街並みを再現したテーマパークなどもあるので断定は出来ないが、恐らくは海外の何処かだ。

建物に書かれている文字などを見るにイタリアだろうか？ バマミならば喜びそうな場所だ。

……いや、さしものバマミもこんな状況では喜ばないか。

何せ周囲には、ガンツスーツを着たイタリア人らしき人々が無残な死体と化して転がっているのだから。

「ンだ……これ……」

「イタリアのチームの人……？」

玄野が声を震わせ、桜丘も恐怖を隠せていない。

それはそうだ。パツと見ただけでも自分達東京チーム以上の人数が死体になって転がっているのだから、それだけでこの戦場がどれだけ危険なのかが分かる。

しかもその中には、大阪の岡八郎が着ていたあのハードスーツまで転がっているのだ。

「岡……の、スーツ……」

加藤が声を震わせ、茫然と立ち尽くした。

このスーツがどれだけ強力なのかは実際に目にして知っている。

ぬらりひよんには後れを取ったが、それでも信じられない程高性能だった。

しかもこのスーツは5回クリアでようやく入手できる物で、これを持っていると言う事はそれだけで歴戦の強者である事の証明になる。

それが死んでいる……スーツごと引き千切られたように上半身だけが転がっている……。

更に少し進むと、まだ息のあるイタリア人を見付ける事が出来た。しかし彼も長くはないだろう。何せ下半身と生き別れ、臓物が道路に散乱してしまっている。

「Ormai è finita……Sono tutti morti」

男は玄野達を見上げ、最後の力で何かを伝えようと話していた。

「Come chiunque altro……Morirete anche voi」

Creperete tutti……

Ormai……non conta più, nulla……」

それだけを言い、男は力尽きて動かなくなった。

ほむらは死体を一瞥し、前回のクリアで入手した飛行ユニットのスイッチを入れて玄野達へ話す。

「どうやらイタリアチームは全滅したようね。

彼が言うにはこの先にいる星人はどんなものでも破壊するらしいわよ。玄野さん達も気を付けて」

「わ、分かるのか、曉美!？」

「私の先輩にイタリア語が好きの人がいてね。まあ少しくらいなら」

「な、何て言ッてたんだ？」

「簡単に言おうと……『自分達は全滅した。今頃他のチームも全滅しているだろう。この星人はどんなものでも破壊するから誰も敵わない。お前達も死ぬぞ。今頃は数えきれないほどの……』ってところかしら。」

言葉の途中で終わってしまったから、この後に何て言おうとしてたかは分からないけど、『今頃は数えきれないほどの犠牲が出ている』ってところだと思おうわ」

バمامィとの同居の中で少しだけイタリア語を学んでいた……:といふより無理矢理学ばされたほむらは、男の最後の言葉をかろうじて理解する事が出来ていた。テイロ・フィナーレも馬鹿にしたものではな

い。

その言葉によるとイタリアチームは既に全滅しており、それでも敵が残っていた事から他国からも次々とチームが呼ばれているのだろう。

しかしそこまですても尚ミッションが終わらず、死者は増える一方だ。

イタリアのチームが日本のように都道府県で分けられていると仮定した場合、その総数は凡そ百七と考えられる。

……つまり最低でもそれだけのチームが共闘した上で、それでも手に負えないからと他国から救援が呼ばれているという事だ。

どうやら今回の敵はよほど強いと見える。

「そのこのハードスーツを見る限り、どんな方法かは分からないけど防御力は無視されると考えた方がいいわ。」

なるべく接近戦を避けて遠距離戦を心がけて」

「暁美はどうする？」

「私は空から敵を減らすわ」

玄野達へ忠告し、ライスを抱えて飛行ユニットに乗せた。

残念ながら近接戦闘しか出来ないライスは今回のミッションでやる事はない。

ほむらはペダルを踏み込み、空へと上昇した。

### 第34話 もう来なくていいのか？

飛行ユニットに乗り込んだほむらは、まず素早く周囲の建物や地形を見た。

戦場となっているのは、建築美を感じさせるいくつもの建物が点在する広場で、観光で訪れればさぞ楽しめるだろうと思える。

広場には噴水があり、そこに飾られたイタリアの彫刻達は観光客の目を楽ませてきた事だろう。

だがそんな伝統ある彫刻も星人達に取って代わられていたようで、今は動く彫刻が敵だ。

裸の男女に天使、そして神を模した像が動き、歩き、死を振りまいている。

噴水前には各国から転送されてきたと思われる様々な人種からなるスーツの一団がいて、必死に彫刻達と戦っていたが、戦況は思わしくない。

中にはZガンを持つ者……つまりは1回以上クリアしている者も多くいるが、それが太刀打ち出来ずに死んでいく。

彫像に触れただけでガンツスーツの防御力が何ら意味を為さず、千切れていたのを見た時は何の冗談かと思つたほどだ。

(ぬらりひよんとは異なり、完全な攻撃特化の星人……何でも壊すというのはいさかい事……)

ここに来る前に瀕死のイタリア人男性から聞いたアドバイスを思い出し、ほむらはXマシンガンを構える。

そして飛行ユニットで飛びながら片手で狙いを付け、こちらに近づいて来る子供の天使像を躊躇なく破壊した。

(……攻撃力は凄いいけど、防御力はそれほどではないようね。ぬらりひよんや千手のような再生もない……か)

敵の特性を把握し、ほむらは武器をXショットガンへ切り替えた。

Xガン程度の攻撃力で即死させる事が出来るならば、この武器が最も効果的だ。

初期武器だけあって攻撃力はそれほど高くないXショットガンだ



が、この武器にはZガンやYガンにはないマルチロックオン機能がある。

命中率という点で言えば全ての武器の中で最も信頼出来るのがXショットガンだ。

更にステルス機能を起動させて姿を隠し、ほむらとライスの姿が景色に溶け込む。

また、飛行ユニットにも同じくステルス機能があるらしく、その姿を完全に消した。

そうして景色と同化してから敵をロックオンし、Xショットガンを連射する。

すると意外にもこれが有効だったのか、彫像達は反応すら出来ずに死んでいった。

どうやら攻撃力と速度、そして飛行能力はあるが、その反面防御力は並で、その上大半のダヴィデ星人はステルスを見破る手段もないらしい。

完全に攻撃に振り切っている分、ぬらりひよんや千手観音のようなオールラウンダーな怖さはないという事か。

何とも皮肉な話だ。

ハードスーツやZガンを装備した熟練の戦士が次々と倒れていくこの戦場で、最も有効なのが初期武装だなどと……。

だがステルスにも弱点がある。それは味方にも気付いてもらえないという事だ。

XガンやYガンで戦っているうちはこれは大した問題ではない。

だが主力武器がZガンになってしまうと、一気に弱点になってしまう。

何故なら下手にステルスをしていると味方の撃った広範囲攻撃……即ちZガンに巻き込まれて即死する可能性が高いからだ。

故に大阪チームを始め、熟練のチームほどステルスを使わない……いや、使えない。

味方の大半がZガンを撃っている中でステルスなどしては、敵ではなく味方に殺されてしまうからだ。

特にあれだけ一か所に密集してはステルスなど自殺行為だろう。

(熟練を集めたが故に、かえって選択肢を狭くしているわね……)

集団戦とは強い奴を沢山集めれば強くなるわけではない。

時には、互いが歴戦の戦士だからこそ足を引つ張り合つて一人の時より弱くなつてしまう事がある。

残念ながらあの状況では、Zガンを持った熟練の戦士を10人集めるより、ステルスした西丈一郎が一人いた方が強い。

この連携の難しさはほむら達魔法少女にも言える事で、互いの呼吸が合わないうちは佐倉杏子が邪魔で満身に射撃攻撃が出来ない事があつたし、逆に自分の射撃が邪魔で佐倉杏子が本気を出せない事もあつた。

『いきなり目の前で爆発とか勘弁して欲しいんだよね』と美樹さやかに言われた事もある。

これを完全に克服するには長い時間を要したものだ。

「ライス、あまり動かないでね」

状況を理解して大人しくしているライスを落ち着かせつつ、Xショットガンを連射し続ける。

なるべく敵の近くにいかない事で、味方からの誤射を避けつつ敵を減らしていく。

その戦闘の最中、地上でやけに頑張っているハードスーツを見かけた。

他とは動きが明らかに違い、腕のレーザーで彫像達を蹴散らしている。

恐らくアレは大阪の岡八郎だろう。

少し離れた位置にはロボットの残骸が転がっているが、まああの凶体では今回の敵相手には何の役にも立つまない。

他には同じく大阪のミッションで顔を合わせた山咲杏と眼鏡の青年も奮戦していた。

変態男は相変わらずスーツを半分脱いで余裕をかましている。

「うオツ、うおおおお！ クツソ！ 何なんだこいつ等！」

更に少し離れた位置では玄野アキラがXガンを滅茶苦茶に撃って敵を遠ざけようとしている。

思えば彼も不憫な男だ。

最初の戦場が大阪で、その次がこれとは。

ほむらはステルスを解除してからXショットガンのロックオン機能でアキラの周囲の彫像を纏めて破壊した。

そうしてからアキラの前に停まる。

「乗りなさい！」

「あ……ああ！ すまない、助かった！」

ほむらの呼びかけに応じ、アキラはすぐに飛行ユニットの後ろへ乗った。

座席は既にほむらとライスで埋まってしまっているので周囲のリングの上くらいしか乗る場所がない。

アキラの搭乗を確認してすぐに高度を上げてステルスを起動するも、天使像が何体が追ってきている。

「撃って！」

「わ、分かった！」

ほむらの指示でアキラが射撃を行い、天使像を蹴散らす。

これでほむらは今までより大分運転に専念出来るだろう。

しかしやはり最後のミッションだ。このまま楽には終わらせてくれない。

空を飛ぶ彫像が数体、ステルスしているはずのほむらを追ってきた。

先程まで蹴散らしていた子供の天使像ではない、大人の天使像だ。やはり全ての敵が見失ってくれるほど甘くはないらしい。

「飛ばすわよ！ 振り落とされないよう気を付けて！」

天使像を置き去りにすべく速度を上げ、イタリアの街中を駆け抜けた。

しかし曲がり角の先から新手が出現し、ほむらは咄嗟に機体を横にずらしてストレスを通過する。

だがまたしても先から天使像が現れた事で方向転換を余儀なくさ

れ……その先を見て顔をしかめた。

前進した先にあるのは建物と建物の間が密集した狭い路地だ。

だがこの飛行ユニットは周囲を鉄の輪に囲まれているような奇抜な造形をしており、とても狭い路地を抜けられるようになっていないのだ。

「おっおいいッ！　ぶつかるとッ！」

「……………」

ほむらはペダルを踏み、グリップを握って更に速度を上げた。

ハンドルを大きく右に切って強引に機体を横に倒し、狭い路地へと入り込む。

ガリガリと左右の建物を削りながら突き進み、ほむらはネクタイを取ってグリップに結び付けて固定した。

反対側をライスに噛ませてハンドルを今度は左に大きく切り、そして路地を抜けると同時に跳躍——空に躍り出て、追って来た天使像達へ落ちながらレーザー砲を向けた。

狭い路地を抜けて追って来た事で天使像は一列に並んでいる。

これならば一挙に片付ける事が可能だ。

ほむらの発射したレーザーが天使像を纏めて薙ぎ払い、そして大きく旋回して戻ってきた飛行ユニットの座席へ乗り込んで再び操縦を再開した。

「すっげー！　まるでアクション映画だ！」

「感心なんかしないで撃ちなさい！　敵はまだ残ってるわよ！」

「お、おう！」

あまりに現実離れしすぎて逆に一周回って変な落ち着き方をしてしまったのだろう。

感心するアキラを叱咤し、ほむらは戦場へと飛び込んでいった。

しばらく街中を飛び回り、倒して回っていたが気付けば敵の姿を見かけなくなっていた。

どうやら大体は倒せたようだ。

これはほむらだけではなく、各国のチームの奮戦のおかげだろう。

犠牲を出しながらも彼等もしつかり敵を倒していたようだ。  
だがまだ一番の大物が残っている。

向かい側の道から、各国のハンター達を踏み潰しながら巨大な彫像が歩いて来る。

見かけは巨大な天使像だが、左半身が欠けていて中の骨組みが剥き出しになっていた。

他の彫像と違って衝撃波を出す力があるらしく、それに触れただけでハンター達が肉塊に変えられている。

「……！」

彫像がこちらに気付き、衝撃波を出してきた。

それを察知すると同時にほむらは飛行ユニットに回避行動を取らせるが間に合わずに機体が削られてしまった。

スーツや武器が破損しても次に戻っているように、どうせミッションが終われば復活するだろうがこのミッション中はもう飛行を続ける事は出来ないだろう。

そう判断したほむらはライスを掴み、アキラへ声をかける。

「飛び降りなさい！」

「あ、ああッ！」

制御を失った飛行ユニットから二人が飛び降り、直後に無人になった飛行ユニットが彫像に突撃して爆炎をあげた。

落ちながらほむらはライスを手放し（スーツを着ているから落ちても平気だ）、Xマシンガンとレーザー砲を乱射する。

アキラもZガンを撃ち、彫像の両腕を削ぎ落した上で多大なダメージを与えた。

更に畳みかけるように着地と同時に跳び、建物の壁を蹴って別の建物の壁へ移動する。

それを繰り返して彫像へ接近……近付いたところで壁を蹴る事で跳び、背後へ回り込んだ。

そしてレーザー砲を発射。彫像の胸から上を消し飛ばした。

「I made it！」

「y a a a a a a a a a a !!」

「I can't believe!」

「J e l , a i f a i t ! ! 」

「Wow!!」

それを見た各国のハンター達から一斉に歓声が飛んだ。

だがほむらは油断せずに距離を取り、Xガンを発射して念入りに彫像を完全に破壊した。

するとあちこちから喜びの声があがり、耳を済ませれば英語で『帰れるぞ』や『終わったんだ』といった事を話しているのが分かった。

どうやら本当に今のがボスだったらしい。

ぬらりひよんに比べれば楽な相手だった、と思いながらほむらは部屋に戻されるのを待った。

◇

部屋に戻り、メンバーを確認する。

玄野、加藤、アキラ、東郷、桜丘、和泉、ライス、後、パンダと西。

……それから役立たずすぎて時々存在を忘れるが、一応キュウベえもいる。

どうやら無事に全員生還出来たようだ。キュウベえは死んでもよかったのに。

予感なんて案外当てにならないものである。

採点は近接メインの和泉が全く振るわず、逆に狙撃とステルスメイソンの東郷と西が100点を超えていた。

二人は当たり前のように強力な武器を頼み、これで一応全員がZガンを持てるようになったので戦力としてはかなりのプラスだろう。

東郷はこれで三回目のクリアなのでマシンガンを入手したが、正直これを使うくらいならZガンを撃っていた方が強いので微妙と言わざるを得ない。

そもそも東郷は狙撃で力を発揮するので、Xショットガン以外は使わない。

「ガンツの調子がおかしいな……」

玄野が不安そうに言うが、それも仕方のない事だろう。

ガンツは先程からずっと文字化けしていて、動作が安定しない。

それでも何とか得点の表示は出来るようだが、もういつ止まってもおかしくはないだろう。

「おわりッて書いてるぞ……」

「もう……来なくていいのか？」

だがそれ以上に気になるのは、採点時に表示される『おわり』の三文字であった。

こんなものは今まで一度としてなかったが、今回は全員にこの三文字が追加されている。

玄野達に今あるのは期待が半分、そして困惑が半分であった。

最初の頃はこんな地獄からは一日だって早く解放されたいと思っていた。

いや、加藤は今でもそう思っている。

だがこうも呆気なくおわりなどと言われて放り出されては、かえって困惑してしまう。

続いてほむらの点数が表示されたが、それもこんな具合だ。

『ほ らちや 211 ン。おわり』

これひどい。点数の高さでかろうじてほむらが211点獲得したと分かるが、そうでなければ誰の点数かも分からないレベルだ。

これでトータル305点で一気に3回クリアとなり、累計で9回クリア達成となった。

ほむらはいつも通りに2番と言おうとして一瞬、岸本の事を思い浮かべた。

もう『おわり』と表示されているし、これがラストミッションならば、このタイミングで岸本を再生すれば地獄に放り込む事なく生き返らせる事が出来るのではないか？ ……そう思ってしまったのだ。

馬鹿馬鹿しいと思う。ガンツでの再生は蘇生ではなくコピーに過ぎないというのは自分で言った事だろうに。

「……2番。強い武器を頼むわ。」

まあ、どうせ大阪の彼が使っていた巨大ロボットでしょうけど「迷いを振り切り、2番を選ぶ。」

しかし実の所、ほむらはこの2番にも大した価値を見出していない

かった。

手に入るものといえば、岡八郎も乗っていたあの巨大ロボットだろうがアレは見た目に反して弱い。

そもそも使うのにハードスーツ着用が必須なのだからほむらとの相性は最悪だ。

あんな愚鈍なスーツを着て戦う気などほむらには全くなかった。

二番を選択すると同時にガンツが開き、中からリモコンのような物が出て来た。

こんな物を何に使うのか……そう思っていると、玄野が騒ぎ始める。

「おい暁美！ 外ツ、外に！ ロボットが！」

玄野に言われてマンシヨンの外を見ると、何とでかでかと巨大ロボットが鎮座していた。

こんなのを目撃されてはご近所さんに噂されてしまう。

ほむらはとりあえずパソコンを開いてリモコンの使い方のページを読み、そして操作した。

するとロボットがステルスし、姿を消す。

どうやら七回クリアの武器がああロボットで、八回クリアで遠隔操作可能なりモコンが手に入るようだ。

これならばハードスーツなしでもロボットを動かせるので戦力に数えてもいいだろう。

そして九回クリアの武器だが……こちらは、何故か出てこない。

いや、出てこないどころかガンツが完全に沈黙して、何も表示されなくなってしまう。

「おい、ガンツ？ おいッ！ 強力な武器はツ！」

玄野がガンツをガンガン叩き、中の男の耳に指をグリグリと突っ込むがうんともすんとも言わない。

今回のミッシヨンは最初からガンツの様子がおかしかったが、それでもこれは異常だ。

ガンツが何の反応も示さないなど、今までになかった。

本来ならばここで九回クリアの何らかの武器が手に入ったのだら



うが……これではクリアした意味がなくなってしまふ。

しかしほむらはどうでもよきそうに、いつも通りの声で言う。

「もういいわよ、玄野さん。元々そんなに新しい武器なんて期待してなかったし。」

それより、今考えるべき事は……本当に終わりなのかどうかよ」

ほむらは元々、100点クリアの武器をそこまで欲していたわけはない。

勿論強い武器があればそれに越したことはないが、別に無ければ無いでそれでよかった。

それに、今気にするべき事は本当に終わったのか……そして今後どうするかだ。

ほむら達は手分けしてマンションのあちこちを調べ、今までは一度出れば開かなくなっていたマンションのドアも自由に出入り可能になっている事を確認した。

ガンツは動かない。部屋は自由に出入り出来る。

この明らかな異常の前に、本当に終わったのかと疑問を抱きながら玄野達はそれぞれの帰路へついた。

しかし部屋を出る直前、ほむらだけは立ち止まってもう一度ガンツを見る。

「……………」

しばらく玉を見ていたほむらだったが、やがて何か得心がいったのか再び歩き始めた。

それから数秒が経ち、やがて誰も居なくなってから玉が動く。

そして玉の中から裸の男が顔を出し……すぐにガンツの中へと戻った。

### 第35話 運命なんてものを、恐れる必要はない

——曉美ほむらが、姿を消した。

ラストミツシヨンが終わり、ほむらは玄野達に一言も告げずに東京からいなくなつた。

ガンツに呼ばれる事がなくなつた今、東京に留まる意味も、あの部屋に残る意味もない。

玄野達もそれをあえて探す事はせず、各々が残された時間を不安の中で過ごしていた。

皆、心のどこかで分かっているのだ。今が嵐の前の静けさでしかないという事を。

ガンツに呼ばれる事がなくなり、平和な日常に戻つたと楽観的に思えればどれだけ幸せだっただろう。

だが皆分かっているのだ。平和な日常に戻つたのではない……平和な日常、それ自体がもうじき無くなってしまう事を。

だから、誰が言い出したわけでもなく全員がスーツや武器を持ち帰っていた。

ガンツにはもう呼ばれない……だがきつと、これを使う時はすぐに来る。

だからほむらを探す必要はない。  
その時が来たならば、嫌でもまた戦場で会うだろう。

ならばせめて、残された平穏な時間をどう使うかくらい……どこで過ごすかくらいは本人の自由でいい。

そう玄野達は思い、そして彼等もまたそれぞれの生活の中へ戻つた。

◇

和泉紫音の心境に一つの変化が起きていた。

その切っ掛けはあの吸血鬼達の……いや、そのリーダー格だった金髪水の男川の死だ。

あの男と戦い、そして勝利した時に和泉は何故か妙な達成感を感じていた。

絶えず肩にのしかかっていた重荷が取れたような……心が何かから解放されたような奇妙な達成感だ。

少しして和泉はそれが、恐怖からの解放であった事に気が付いた。何故恐怖していたのか、何に恐怖していたのかも分からぬままに……そもそも恐怖しているという自覚すらなく、常に和泉は恐れ、そして怯えていた。

その理由は過去のミッションにあった。

和泉自身疑問に思っていた事がある……それは、何故かつての自分は一番を選んで部屋からの解放を選んでしまったのか、だ。

あそこ以上に自分が生きていける場所なんてないというのに。どんな手を使つても戻りたいと焦がれる程だったのに、何故やめた？ その理由を、吸血鬼との因縁が終わった事を切っ掛けとして思い出した。

和泉は一度死に、ガンツの部屋に送られた。

死因は盗んだ車で無茶な運転をしての事故死だ。何とも馬鹿馬鹿しい。

そこで彼はひょうほん星人という敵に出会い、未来を見せられたのだ。

その未来とは氷川との戦いの中で彼女である涼子を庇い死ぬ和泉自身の姿だった。そして大一番であるカラストロフィのその時に和泉は参戦すら出来ないという残酷な未来だった。

お前は主役ではない。最終戦に辿り着く事もなく死ぬだけのつまらない登場人物だ。

この先の未来を左右する『鍵』の足元にも及ばないゴミのような存在だ。

そう突き付けられて和泉の心は折れた。

そして……逃げたのだ。死の運命に恐怖し、ガンツから逃げ出した。

だが運命は変わった。いや、そもそもあの未来の映像に掠りすらしなかった。

その理由は分からない。

そもそもひょうほう星人に未来を見通す力なんてものがなかったのか、それともいくつかある可能性のうちの一つに過ぎなかったのか……あるいは運命を捻じ曲げてしまうような、本来の未来に存在しないイレギュラーでもいたのか……。

どちらにせよ和泉は恐怖から解放された。

そしてふと気付いたのだ。今までの自分がいかに恐怖に囚われていたのかを。

視野が狭く、いかにガントツの部屋で他の奴より優れた戦績を出すかしか考えていなかった。

『カタストロフィに生きて参加する』……この事に、和泉自身も知らぬうちに固執していた。

頭が記憶を覚えていなくても、心が恐怖を覚えていたという事なのだろう。

記憶がないままに、覚えてすらいないままに、それでも運命から脱却する事だけを考えていたのだ。

だから隣にいる彼女の顔すら見ていなかった。

しかし今は違う。何も見えていなかった和泉の目は開き、そして大阪でのミツシヨンが終わった後に彼は初めて涼子の顔を見た。

「へエ……こんな顔してたのか」

唐突にこんな事を言われた涼子はさぞ意味が分からなかっただろう。

まさか彼氏が今の今まで自分の顔すら知らなかったなどとは思わずがない。

困惑する彼女へ和泉は言った。

「お前今日誕生日だッけ？」

「え？ 違うよ」

「どツか一緒に行こう……そうだ、遊園地行こう……明日。約束だ」

そうして初めて彼女をデートに誘ったのがラストミツシヨン前の事だ。

和泉は自分でも不思議だった。

最初は流れから付き合う事になっただけの女で、告白にOKしたの

も断るのが面倒だったからだ。

だからずっと無関心だったし、どうでもよかった。

しかしあの映像を思い出し、そして思ったのだ。命がけで庇うくらいには俺はこの女の事が嫌いじゃないんだな……と。

そう自覚してしまえば、案外現金なもので執着心が沸いた。

妙に可愛らしく見えるし、誰にも渡したくないと思いはじめた。

そしてラストミッションを終えた今、和泉は二度目のデートに涼子を連れ出していた。

遊園地の夜を照らすパレードを見る涼子の横顔を眺めながら、和泉は優しく笑う。

「……？　和泉くん……パレード見ないの？」

「ああ……そんな面白いとも思えねーしな。そんなのより、お前の横顔を見ている方がいい」

「……何だか和泉くん、変わったよね」

「そうか？」

「うん……何だか、前より私の事を見てくれるようになった」

よく分かっている。

そう思いながら和泉は涼子の髪を撫でた。

「悪かったよ……これからはちゃんとお前を見る……」

和泉は、昔から大事なものというのを持たなかった。

努力しなくても何でも出来てしまうが故に執着心を持たず、何に対しても興味がなかった。

だがどうやら、意識しなくとも大事なものというのは案外いつの間にか出来ているものらしい。

知らないうちに涼子の存在は和泉の中で大きくなっていて、そして和泉は彼女に執着していた。

そうなれば和泉自身も知らなかった一面が顔を出し、和泉は初めて自分が独占欲の強い人間である事を知った。

「癪だが玄野の言う通りだ。悪魔がいたとしても人間はそれを乗り越えられるんだ……」

運命なんてものを、恐れる必要はない……よな」

世界がどうなろうと知った事ではない。  
だが自分と、そして涼子だけは何かあっても生き延びてやる。  
自分ならば出来る、守り切れる。  
そう和泉は信じていた。

◇

ラストミッションを終えると同時に東京から消えたほむらは今、見滝原市へと戻ってきていた。

勿論まどか達と顔を合わせて再会を喜ぶ為……ではない。  
今更どんな顔をして出て行けばいいか分からないし、第一ここに  
自分は暁美ほむらではなく、そのコピーに過ぎないのだ。  
ならば会ったところで皆を失望させるだけだ。

自分の存在など忘れられるのが一番いい。忘れて、過去の事にして  
くれるのがいい。

そうすれば悲しみと傷跡はきつと、時間が癒してくれるから。

それでも戻ってきたのは、この先に起こる『カタストロフィ』を警  
戒しての事だった。

この先……そう遠くない明日に地球全てを舞台にした異星人との  
最後の戦いが始まる。

『カタストロフィ』とは異星人からの大規模な侵略であり、そして最  
後の戦いに出る事をほむらは既に確信していた。

だから、いつでもまどか達の助けに入れるようになるべく近くに待  
機する必要があったのだ。

いざカタストロフィが始まった時に自分が東京にいて、折角絶望の  
迷路から救い出したまどか達が呆気なく死んでしまったら、それこそ  
今までの戦い全てが無駄になってしまう。

「来月から高校生かあ……大丈夫かなあ」

「大丈夫だって、まどか。ママさんだっているんだしよ」

公園の外れで野良猫に餌をやりながら話しているのは、遠目でも分  
かる桃色と青色の髪をした少女達だ。

その後ろ姿をステルス機能で姿を消して見守りながらほむらは、そ  
の元氣そうな姿に知らず微笑を浮かべていた。

そして思うのは、もうそんなに時間が経っていたのかと言う事だ。まあ無理もない。初めて会った時は15歳だった玄野が今では17歳なのだから、どう考えても一年以上は経過している事になる。それだけ経ったならば、もう自分の事も忘れてくれているだろう。そう思い、ほむらはその場を去ろうとした。

「……皆で一緒に、高校に行きたかった……ほむらちゃん……」  
「……そう、だね」

だが聞こえてきた声に思わず足を止めてしまう。

まどかの声は涙声になっており、いつもは騒がしい美樹さやかまでその声には元気がなかった。

早くこの場を去らなければならないのに。

未練が心を縛り付ける前に消えなければならないのに。

だというのに、足が動かない。

それどころか、どうしようもない事に……まどかがまだ自分の事を忘れずにいてくれた事を、嬉しいとすら思ってしまった。

「あつ、エイミー！」

ほむらが動けずにいると、何か足元に駆け寄ってきたのを感じた。

見下ろすと、そこにいたのは黒猫のエイミーだ。

エイミーはまどかが名前を付けた地域猫……つまりは野良猫だ。

ほむらが魔法少女になる前の最初の世界では交通事故で死にかけていたエイミーを助ける願いでまどかが魔法少女になっており、そしてまどかを魔法少女の運命から救うと約束して以降の世界ではまどかの魔法少女化を防ぐ為にほむらが救っている。

この世界でもほむらが先回りして事故から助けており、その為なのかまどかとほむらに懐いていた。

「どうしたのエイミー？　そこには何もないよ？」  
「猫って時々さあ、こうやって何も無い所をじーっと見る事あるよね。何なんだろうね」

不味い、と思った。

エイミーがこちらを凝視しているせいでまどかとさやかか近付い

てきてしまった。

こうなったら音を立てないように去るしかない。

ほむらはゆつくりとその場からの退避を試みるが、彼女の移動に合わせてエイミーの首も動く。

姿は消えているはずだが、動物の嗅覚は誤魔化せないのだろうか。

エイミーは完全にほむらの位置を特定してしまっていた。

「ニャア」

そしてほむらの足にしがみつき、あろう事が登り始めてしまった。するとまどかとさやかも流石に異常に気付く。

何せ彼女達から見れば、エイミーが浮いているようにしか見えないのだ。

「さ、さやかちゃん！ エイミーが飛んでる!?!」

「お、おおおう!?! どうなってんだこりゃ!」

ほむらはもう内心で汗ダラダラである。

その間にもエイミーは更に登り、とうとうほむらの胸の前まで到達してしまった。起伏がないので登りやすい。

ほむらは無表情で焦りながらも慣れた動作でエイミーを抱え、ゆつくりと地面に降ろす。

するとエイミーはほむらの手に頬を摺り寄せ、ゴロゴロと鳴いた。

「エ、エイミーが見えない何かに懐いてる……ま、まどか！ そこに何かいるわよ!」

「と、透明人間!?! まさか魔女!?!」

ほむらは手にしがみつこうとするエイミーを何とか引き剥がし、ゆつくりと立ち上がる。

大丈夫、まだ姿は見られていない。

このまま迅速に去ればまだ何とかなる。

そう思っていたものの、次の瞬間さやかがしがみついてきた事で更に身動きが取れなくなってしまった。

「うわ、やっぱりいる！ 何かここにいるわよまどか！ 思わず捕まえちゃったけどどうしよう!」

「さやかちゃん、思わずで捕まえちゃ駄目だよ!」



全くだと思つた。

自分がもし魔女やその使い魔だつたらどうする気だつたのだ、とほむらは呆れた。

そうでなくても星人だつたら今頃さやかは死んでいる。

とにかく、すぐにでもさやかを振り払って逃げなくてはならない。

ほむらはさやかの足を払い、一応怪我しないように倒れるさやかの頭を支える。

もし地面にぶつけてこれ以上馬鹿になつてしまつては流石に可愛そうだ。

だがその甘さがいけなかつた。

地面に倒れそうになつたさやかは咄嗟にほむらの腕を掴み、そして周波数変換装置を落としてしまつたのだ。

(……………しまつ——)

カラン、と音が響いて周波数変換装置が落ちた。

それと同時に周波数変換装置を手放してしまつたほむらのステルスが解除され、まどか達の前に姿を曝け出してしまふ。

「……………え……………嘘……………」

まどかが茫然と呟き、そして三人の時間が止まつた。

別にほむらが止めたわけではないし、そもそも既にその力はない。ただ時間でも止まつたかのように硬直し、動きが停止しただけだ。

(まづい……………見られ……………誤魔化す? 今から? どうやって?)

別人……………双子の姉妹……………否、不可能……………姉妹はいないと話した事がある……………。

二人をここで気絶させる? 夢落ち……………気のせい……………見間違ひ

……………どうやって納得させる?

詰み……………チエックメイト……………王手……………逃走不可……………。

まどか髪少し伸びた……………相変わらず小さい……………さやかは変わらず馬鹿っぽい……………胸が前より膨らんで……………妬ましい……………。

ここから他人のふり? どうやって? ステルスの説明……………無理、不可能。

何故私はこんなに近くまで接近した……………ビルの上からなら、こんな

事には……。

三択……この中から一つだけ答えを選びなさい……①佐倉杏子が来て助けてくれる……いや、来ちゃ駄目でしょ。ますます事態が悪化するわ)

ほむらの頭をグルグルと思考が駆け巡るも、どうしようもなかった。

やがて再起動したまどかが震える声で、涙を浮かべて確認するように言う。

「ほむら……ちゃん？」

「ほ、ほむら……だよな？」

まどかに続いてさやかも震える声で確認をしてきた。

そうしつつもガツシリとほむらの腕を掴んでおり、逃がさないという意思がひしひしと感じられる。

エイミーはこの空気を気にせずほむらの足にすり寄り、上機嫌に鳴いていた。

「……………」

……ち、違うわ……私は暁美ほむらではなく、他人の空似よ美樹さやか。

だからこの手を放してくれると嬉しいのだけど……」

「嘘をつくなあああ！」

苦し紛れの言い訳は勿論通じるはずもなく、さやかの突っ込みが響き渡った。

そして、それと同時にまどかがタツクルするように抱き着いた事でいよいよ逃走不可能となってしまった。

### 第36話 ここに、いて

迂闊にもまどかとさやかに発見されてしまったほむらは、そのまま引きずられるようにどこかへと連れて行かれた。

振り払おうと思えば簡単だ。今のほむらは魔法少女ではないが、ガンの適当な複製のせいで魔法で強化された魔法少女の身体能力と肉体強度をデフォルトで備えている。

加えて現在は服の下にガンのスーツを着用しており、肉体能力だけに限ればむしろ魔法少女時代より圧倒的に強い。

しかし問題は、腕にしがみつこうようにしてまどかとさやかにガツチリ拘束されてしまっている事だ。

これがさやかだけならば話は簡単だ。無理矢理振り払ってしまえばいい。

しかし健気にも腕にしっかりとしがみ付くまどかを振り払う事はほむらには出来なかった。

「まどか……その、離して欲しいのだけど」

「いや。離さない」

「ちよつとだけでいいのだけど」

「駄目。もうどこにも行かせない」

離してしまえばほむらがまた消えてしまうと恐れているのかもしれない。

まどかは震えており、その様子からほむらは自分の……いや、オリジナルの死が既にまどか達に伝わっている事を確信した。

いや、当然か。そもそも遺書が届くように手配したのは自分だ。

それにしても厄介な事になってしまった、と思う。

まどか達が自分を連れて行くこうとしているのは間違いなくバママミの暮らしているマンションだ。

そこまで行ってしまうと本当に逃げるのが困難になる。

何とかいまのうちに二人を振り払って逃げられないだろうか。

そう思うも、事態は更に悪化して曲がり角から佐倉杏子とバママミが出て来て目が合ってしまった。

「……………」

「……………」

杏子は目を丸くし、口にくわえていた棒付きの飴を地面に落としてしまった。

食べ物を粗末にする事を何より嫌う彼女にしては珍しい。

杏子はそのまま、幽霊でも見たような顔でほむらに近付き、確かめるようにほむらの頭や頬、腕を触る。

鬱陶しいので振り払いたいが、両腕をがちり塞がれてしまっているのも出来ない。

杏子はさやかに確認するように視線を向けると、さやかも肯定するように頷いた。

「どういう事だオイ……………こいつ、生きてるじゃねーか！」

久しぶりに会って言う言葉がそれか。

何と言うか相変わらずだなと思ひ、妙な呆れと安心を感じてしまった。

その直後、何かタツクルしてきて思い切り抱きしめられた。

視界には金髪が見えるので、巴ママに間違いないだろう。

「暁美……………さん……………暁美さん、暁美さん！」

本当に貴女なの……………信じられない、こんな事って……………。

会いたかった……………ずっと……………。

これ、夢じゃないわよね……………本当に貴女なのよね……………?」

頼もしい先輩に見えて実は寂しがり屋なママは、ほむらが去った後にかなり沈んだのだろう。

その事が分かるほどに強くほむらを抱きしめ、その腕は震えていた。

だが何よりもほむらが気になったのは胸に感じる圧迫感が前より増している事だ。

馬鹿な……………こいつ、まだ育っている……………!?

その後ほむらは全身をガツチリホールドされた状態で連行され、無理矢理ママの家に連れ込まれた。

家に入るとそこには百江なぎさと千歳ゆまがおり、ほむらを見て数秒硬直したものの状況を瞬時に判断して部屋中の窓を閉めてしまった。賢い子達である。

百江なぎさは過去のループでお菓子の魔女として何度かバマミを喰い殺してきた存在だが、今回の世界ではまだ魔女になっていなかったのほむらが保護する事で魔女化の運命を逃れる事が出来た。

時折こういう事があるのだ。ほむらが何も関与せずとも、ループ開始前から前提条件が変わっている事が。

過去のループでは何故か上条恭介がギターリストだった事もあった。千歳ゆまは低確率で佐倉杏子と行動を共にしている魔法少女であり、その出現条件は実はよく分かっている。

ほとんどのループでは佐倉杏子は一人で見滝原市に来るのだが、時折千歳ゆまを連れてくる事がある。

今回の世界は、その低確率を引き当てた世界であった。

その後更に呉キリカまで到着し、ここに見滝原の元魔法少女が勢揃いしてしまった。

この呉キリカもイレギュラーの一人で、放置すると時々美国織莉子とかいう頭にバケツを被った女と組んで魔法少女狩りをした挙句にまどかを殺しに来る厄介な相手だ。

しかしほむらは彼女達の動向を観察するうちに、キリカと織莉子の出会いには切っ掛けがある事を知った。

それはキリカが落とした小銭を織莉子が拾うという些細なものであり、その出来事からキリカは織莉子を気にするようになって最終的には織莉子の為に魔法少女になってしまう。一途とかいうレベルではない。

そこでほむらはキリカが小銭を落とした時に介入し、織莉子の代わりに小銭を拾ってやった。

するとどういふわけか、キリカの好意の対象がほむらになってしまい、気付けば魔法少女になってほむらに懐いていた。

……まあ戦力としては十分に価値があるので嬉しい誤算ではあった。

「……ねえ。重いからどいてくれないかしら」

「やだ」

「いや」

「駄目だよほむら。君が死んだと聞かされて私がどれだけ絶望したと思ってるのさ。」

もう絶対に離さないからね」

現在ほむらは右腕にまどか、左腕にマミ、そして背中からはキリカが抱き着いている状態だ。

ついでに膝の上にはエイミーが乗っている。

まさに四面楚歌。これでは逃げようにも逃げられない。

「それにしても、本当に驚いたよ。アタシ達はキュウベえから、あんたは死んだって聞かされてたんだ。」

キュウベえも嘘を吐くんだね」

「キュウベえは嘘吐きなのです！ 信じてはいけませんのです！」

杏子がポツキーを食べながら言い、なぎさは憤慨したように頬を膨らませた。

しかしキュウベえは決して嘘を吐いていない。

間違いないと曉美ほむらは死んだのだ。

ここに居るのはその死後にガンツによって複製された偽物に過ぎない。

その事を伝えたいが……それをやってしまえば頭の爆弾が起動するだろう。

故に人違いだと教える事も出来ない。まさに手詰まりだ。

しかし救世主は意外な所から現れた。

「心外だなあ。僕は嘘なんか吐かないよ」

突然聞こえてきた声に、少女達は一斉に嫌悪の視線を向けた。

声は窓の外から聞こえたものだ。

そこには、窓に張り付いたライスの背に乗ったキュウベえがいた。どうやらほむらの匂いが知らない人間に連れられて遠ざかっていた事を心配したライスが追って来てしまったようだ。

「な、何だあの犬……窓にしがみついているぞ」

「すごいのです！　こころ5階なのに！」

「嘘でしょ……まさか壁を登ってきたの？」

ライスの非常識さに杏子、なぎさ、さやかが驚きを見せるが無理もない。

ガンツスーツを着たライスは常識では測れない運動能力を持っているのだ。

ほむらは溜息を吐き、声を発した。

「入れてあげて。その子は私の飼い犬よ」

「あんたどういう犬飼ってるのよ……」

ほむらの言葉に呆れながら、さやかは窓を開けた。

するとライスはスルリと部屋に侵入し、キュウベえも着地する。

だがライスはともかく、キュウベえは歓迎されない客だ。

全員の敵意の籠った視線に晒されて何となく居心地が悪そうに見える。

「やあ皆、久しぶりだね」

「キュウベえ、てめえ……よくも騙しやがったな。ほむらが死んだなんて適当言いやがって」

呑気に再会の挨拶をするキュウベえに、杏子が軽蔑するような声を出した。

だがキュウベえもふてぶてしいもので、杏子の怒りを受け流している。

「なるほど、どうやら暁美ほむらは死んだと君達に伝えられたようだね。

けれどそれは嘘じゃない。事実、暁美ほむらは死んだんだ」

「それが嘘だつていうのよ！　実際ここに生きてるじゃない！」

「ああ、それはね……」

キュウベえにさやかが反発するように叫ぶ。

するとキュウベえはペラペラとほむらの素性を明かそうとし始めたが、流石にほむらもこれは見過ごさなかった。

何せ自分達の頭には今、爆弾が入っているのだ。

ガンツについて迂闊に話してしまえばその瞬間死んでしまう。

キュウベえが死ぬのは別にどうでもいいが、その巻き添えで殺されてはたまらない。

「待ちなさいキュウベえ！ それは……」

「ああ、頭の中の爆弾の事は心配しなくてもいいよほむら。実はそれは、とつくにクラッキングを仕掛けて外しているんだ。勿論君の分もね」

「な……！」

「まあ、それでなくてもラストミッション終了と同時に外されたみたいだけどね」

初耳であった。

今までずつと頭の爆弾を警戒していたのに、それが無駄だった事を教えられたのだ。

「何故……いや、貴方はそういう奴だったわね。」

私が聞かなかったから話さなかった、と」

「そうだよ。理解が早くて助かるね」

キュウベえに何故を問う事に意味はない。

彼等はいつだって、聞かれていない事は答えない。

そうして認識の差を利用して嘘を吐かずに相手を騙すのだ。

要するに彼らは手練れの詐欺師なのである。口論に意味などない。

「ちよ、ちよと待って！ ほむらちゃん……頭に爆弾入れられてるの!？」

「……正しくは入れられていた、ね。」

私が何故今ここに生きているか……その事を話そうとすると爆発して口封じする爆弾がここに入っていたのよ。

まあ……いつの間にか取れていたみたいだけど」

そう言いながら自分の頭を指で叩き、キュウベえを睨む。

どうにもこいつに踊らされているようで気に入らない。

だがこれで話しても問題はなくなった。

「また……何か妙な事になってるのか？」

「口封じで頭に爆弾って……そんな、SF映画じゃないんだから……！」



一体あんたに何が起こってるのよ!? 私達と別れてから、あんたに何があったの!？」

杏子ときやかは困惑したように、ほむらに何が起こっているのかを問い詰めた。

そして今ならばその問いに答える事は可能だ。

ほむらは若干の未練を感じながらも、これ以上まどか達をぬか喜びさせるのは残酷だと考えて口を開く。

「今から全て話すわ……何故私が今、生きてここにいるのか……。」

そして、これから世界が迎える未曾有の危機も……」

そしてほむらは、ガンツの部屋に招かれてから今日までの事を、包み隠さずに打ち明けた。

◇

「……そんな……そんな事って……。」

話が終わった時、まどか達は例外なく顔を青褪めさせていた。

無理もない事だと思う。

後、ほんの数日で平和が壊れるなどと言われてもすぐには信じられないだろう。

だがそれでも予備知識さえ与えておけば、彼女達ならば有事の際も迅速に動けるはずだ。

もう魔法少女ではないが、それでも多くの戦いを潜り抜けてきた経験は消えないのだから。

「死んだ人間を複製して無理矢理戦わせる……だと?」

何だ、そのふざけた部屋は! そんなのが許されていいのか!？」

「そんなの……酷過ぎるよ!」

ガンツのあまりに非人道的な行いに杏子が激昂し、まどかが涙を流した。

しかしほむらとしては、その非人道的な物体があったからここにいられるので内心複雑である。

それに誰かが戦わなければ、それこそ世界は星人達に裏から乗っ取られていただろう。

やり口は外道そのもので、加えて複製された人間は人権など無視し

たように扱われる。

そこは素直に気に入らないし、裏で自分達を戦わせている薄汚い連中は死んでもいいと思うが……それでも、星人と戦う存在は必要だ。そうしなければカタストロフィの日に備える事すら出来ないのだから。

だからほむらは、その辺りは既に割り切っていた。

「それじゃあ、ほむらお姉ちゃんは……本当に死んじゃったの？」

「……その通りよ。今ここにいる私は貴女達の知っている暁美ほむらではない。

ただの……暁美ほむらそっくりに作られた……紛い物に過ぎない」  
ゆまの問いに淡々と答え、ほむらは立ち上がった。

もうまどかもママもほむらを拘束していない。

語られた事実のあまりのショッキングさに茫然としてしまっている。

それを見て少しだけ寂しさを感じながらも、自分は偽物なのだからこれでいいとほむらは、自分を納得させた。

「……もう、私の事は忘れなさい。そして幸せな明日を生きて。

きつと、オリジナルもそれを望んでいるから」

必要とされなくていい。求められなくてもいい。

それでも自分が皆を守るという、たった一つの誓いさえ守れば忘れられても感謝されなくても構わない。

全ての脅威は自分一人で片づける。

そう決意し、出て行こうとドアの前まで歩いた。

「……ねえ暁美さん。私と貴女が初めてチームを結成した時にお祝いをした時の事、覚えてる？」

立ち去ろうとする背に、ママが問いかけた。

ほむらはそれに振り返る事もせずに、自分の中にある記憶を話す。

「……貴女はテレビでやっていた行列の出来る人気のスイーツ店に行きたがっていた。

けれど当日に貴女が寝坊してしまい、私達が店に着いた時には既に売り切れていたわ。

仕方ないから向かい側の和菓子店でお団子を食べたのだけど、それが美味しくて十本もお持ち帰りしたわね」

そこまで言うと、ほむらの背にマミがしがみついた。

ここにいるほむらは確かに本物ではないのかもしれない。

そつくり複製されただけの別人なのかもしれない。魂も違うかもしれない。

それでも二人で過ごした思い出が彼女の中で生きている。

だから……偽物だなんてとても、マミには思えなかった。

「暁美さんよ……」

貴女は、暁美さんだよ……。

お願い……もう、私を置いて行かないで……ここに、いて……」

ほむらは目を閉じ、そして諦めるように力を抜いた。

本当は、いつだって自分という存在が何なのか不安だった。

暁美ほむらではなく、ただの複製体……帰る場所も、自分を受け入れる人もいない。

本当はきつと認めて欲しかったのだ。

こうして、誰かにお前は暁美ほむらだ、と……そう言っただけで欲しかった。

閉じた目から、とうに枯れ果てたと思っていた涙が一筋零れた。

### 第37話 貴方にやって欲しい事があるわ

拠点を見滝原に戻してから、ほむらは資金に物を言わせて地下付きの空き家を購入していた。

元々はバレエか何かの教室だったらしく、一階部分は鏡張りですペースに余裕がある。

生活空間は地下室に押し込まれており、住むにはやや窮屈な場所だ。

駅からも遠く、その不便さもあって値段は割と安めで済んだ。

この場所を選んだのはスペースが広く、ガンツバイクや飛行ユニットなどを置いておけるからだ。

ロボットは流石に無理なので付近の山の近くにステルスさせているが、リモコンでいつでも呼び出す事が出来る。

自分とライスの分を合わせて全ての武器を持ってきたほむらだが、しかしライスの分の武器は犬である彼には使えない。

つまりXガン、Yガン、Xショットガン、Zガン、ガンツソードがそれぞれ一つずつ余っているわけだ。

以前までは100点を取っていない他のメンバーに使わせていたが、東京を出る際にほむらは全て持ち出した。

これについて文句を言われる筋合いはない。これは元々自分とライスの分の武器である。

ついでに、ほむら自身も全ての武器を使うわけではないのでいくつかの武器は確実に余ってしまう。

ならばそれらを、上手く使えそうな者に今の内に渡しておくのは悪い選択ではない。

そう考え、ほむらはここにまどか達を連れて来ていた。

「うお……本当にSF映画に出てきそうな武器と乗り物……」

「さやか、迂闊に触らないで。もし間違えて人に撃ったら……」

「う、撃ったらどうなるの?」

さやかが興味津々といった様子でXガンを見ていたので、忠告の意味も込めてほむらは床に転がっていたバランスボールにマジックで

さやかは似顔絵を描く。あたしって、ホントバランスボール。

そうして完成したさやかボールにXガンを発射した。

すると撃ってから少ししてさやかボールが弾け飛び、さやかは顔を青褪めさせた。

「こうなるわ」

「お、おう……」

さやかはそつとXガンを元の位置に戻し、距離を取った。

مامィ達も武器から距離を取るようになっているが、気持ちは分からないでもない。

だがمامィには慣れてもらう必要がある。

万一の時には、それで皆を守ってもらわねばならないのだから。

カラストロファイの時は勿論ほむらがまどか達全員を守るつもりだ。

だがそれでも、多少は彼女達も自衛出来た方が生存率も上がる。

だからほむらは、戦闘経験に長けたمامィと杏子には武器を渡しておくつもりであった。

「今こゝには私とライスの分の初期武器と、100点獲得で得た武器があるわ。」

けれど見ての通りライスはこれらの武器を使えないから一人分が丸々余っている事になる。

だから巴さんにはXガンかXショットガンの使い方を覚えてもらうわ」

「えっ？ わ、私？」

「この中で一番射撃に長けているのは貴女よ」

「でも私が使っていたマスケット銃は……」

ほむらの言葉にمامィが視線を泳がせた。

同じ射撃タイプであってもほむらとمامィは違う。

ほむらは魔法少女時代から本物の銃を使っており、銃の扱いは紛れもなく彼女自身の技術によるものだ。

故に武器が多少変わろうとその経験をそのまま流用出来る。

だがمامィの使っていたマスケット銃は魔法である。

反動はなく、重さもない。本物の銃と使い勝手がまるで異なるの

だ。

だが今まで多くの魔女や使い魔を討ち取ってきた正確な射撃はマミの腕によるものである。

ならば、彼女なら使えるとほむらは確信していた。

「大丈夫よ、貴女なら出来る。」

それと杏子は、この剣を使つて」

「剣か……槍はねーのか？」

「残念だけどないわ」

近接戦闘に長けた杏子にはライスの分のガンツソードを渡す。

本当はキリカにも剣を持たせたかったが、もう一振りにはほむら自身を使う物なので流石に渡せない。

なのでとりあえず、キリカにはライスの分のYガンンを渡しておいた。

飛行ユニットが手に入った今、Yガンンを使う事はもうほとんどあるまい。

武器を一通り見せた所で、今度は地下へ案内する。

地下は既にほむらによる改造が始まっており、入り口部分などは鋼鉄の扉に挿げ替えられている。

「地下には防災リュックが人数分と、缶詰と水、それから発電機があるわ。」

ここが絶対に安全っていうわけじゃないけど、地下室なら地上の建物よりは発見されにくいでしょう。

カタストロフィが始まったら、すぐに家族を連れてここに避難して」

「ね、ねえほむら……そのカタストロフ何とかっていうの、本当に起こるの？」

「カタストロフィ。何で最後の一字で諦めるのよ。」

……ほぼ確実に起こると思つていいわ。というより、起こらないならば私のような死人を復元して経験を積ませる意味がない」

さやか問いに呆れ混じりに答えながら、ほむらは自分を指さした。

今までの戦いは全てカタストロフィに備えた兵士の選別と育成だった、とほむらは考えている。

その割に非効率な部分もあるが、それは逃げ道を塞ぐ為だろう。100点を取って解放されるというのは一見すると本末転倒に見える。

100点獲得で解放されるという事はつまり、100点を取れるほどの優秀な素質を持つ者が戦線を離脱してしまう事を意味しているからだ。

しかしこの100点での解放にも意味はあるのだ。

仮に、こうして『頑張れば生きて帰れる』という餌を用意しなければ、ほとんどの参加者は生きる事を諦めて戦いそのものを放棄してしまうだろう。

どうせ死ぬのだからせめて楽に死にたい、と自殺する者だって現れるはずだ。

100点で解放されるというのは決して慈悲ではない。

そうして生き残る道を提示してやる事で、戦わざるを得ないようにしているだけだ。

加えて死者の再生……この救いを与える事で、100点を取った者でもそう簡単には逃げられないようにしているのが実に性格が悪い。

その上で解放されても、本当に優秀な者は和泉のように帰って来る可能性がある。

もう一つ、100点で解放される理由は……あまり考えたくはないが、賭けを盛り上げる為だろう。

あれからキュウベえに問い質してみたが、どうやら自分達の戦いはリアルタイムで賭けの対象にされていたらしい。

そして賭けになっているならば、当然ながら避けるべきはマンネリ化である。参加者を飽きさせてはいけない。

かつて東京チームでは西以外の参加者が毎回死んでいた事から分かるように、とにかく初心者は死にやすい。

ベテランが加藤のように初心者を助けようとするならともかく、西のようなタイプだと簡単に一強状態が出来上がってしまう。

これでは賭けが成立せず、マンネリが起こってしまう。

だから、そんな一強状態が続くくらいならば100点を取ってさっさといなくなってくれた方が、賭けは盛り上がるのだ。

そして、それらの条件を抜けて強い武器を選び続けて生き残るならば、カタストロフィにも通じる立派な兵士の完成だ。

「けど、どのニュースでもそんな事やってないよ。」

いつも通りに、普通の番組がやってるだけで……」

「私達の戦いだって表には出なかったでしょう？ それと同じ事よ。」

表向きがいくら平和に見えても、裏ではどんどん事態が悪化し続けている」

ほむらはそう言いながら人数分の時計を出して、皆に配った。

時計には時間がセットされており、残り日数は三日ほどとなっている。

「暁美さん、これは？」

「カタストロフィまでの残り時間よ」

「たったこれだけの時間……なの？」

たったの三日で日常が崩壊する。

そんな事を言われても普通は信じられないだろう。

しかし彼女達は魔法少女や魔女の事を知っている。

故に一般人よりはまだ、このとんでもない話を受け入れる土壌が整っていた。

「家族で来いっていうけどさ……どうやってお母さん達を説得しよう」

「……難しいっていうなら手があるわよ」

「え？ 本当？」

「ええ、手紙を出せばいいのよ」お前等の娘は預かった。警察に連絡せず」……」

「ストップ！ わかった、何とか説得するよ！ 友達を犯罪者にするわけにはいかないし！」

さやかが弱気な事を言っていたのでほむらは解決手段を提示したが、断られてしまった。



ちなみにこれは冗談でも何でもない。

自分が脅迫罪で捕まる程度で彼女達やその家族を守れるならば、ほむらは喜んで留置所に行くつもりである。

しかし今は、留置所よりも先に行くべき場所があった。

「スペアキーは巴さんに預けておくわ。いつでもここを使ってくれていいから」

「それは分かったけど……暁美さんは、ここにいないの？」

「……少し、ね」

マミの問いにほむらは背を向けたまま顔を向ける。

「カタストロフィ前にやっておかないといけない事があるのよ」

◇

ほむらがライスを連れて訪れたのは、東京にある黒い玉の部屋であつた。

電気が消え、もう誰も訪れる事のなくなったその場所には今もガンツが鎮座している。

何も表示されず沈黙している玉に向けて、ほむらは静かに声を発した。

「出てきなさい。もう貴方が起きている事は分かっているわ」

確信をもつて、断言するように言う。

するとガンツが開き、中から観念したように裸の男がのそりと顔を出した。

裸だというのに特に気にした様子はなく、何も考えていないような顔でほむらを見る。

「……凄いね……何で分かったの？」

「部屋を出る時に少し気配を感じてね。玄野さん達には言わなかったけど、あの時から貴方が起きていた事は気付いていたわ。

恐らく、ミッシヨンが終わった事で貴方も解放されたのでしょう」  
何でもない事のように言うが、実の所ほむら自身にもどういう原理で何故『気配』なんてものが感じられるのかは説明が出来ない。

一度興味を持って調べてみた事があるのだが、『準静電界』と呼ばれる電気の膜がどうだとか、『ロレンチ二瓶』というサメの器官と人間の

内耳が似ているだとか、そんな説明をされていた事だけはかろうじて覚えている。

まあ要するに今でも原理はよく分からないという事だ。

分からない……が、ともかく視覚や聴覚、嗅覚とは異なる感覚がほむらにはあった。

「それに気付いたのは私だけではないでしょう。ねえ？　西丈一郎」

ほむらはそう言い、部屋の隅を見た。

そこには何も無い。

だがバチバチと音が鳴り、顔をしかめた西丈一郎が姿を現した。

今や全国で指名手配をされている彼に安住の地はない。

警察の心配をせずに寝泊まり出来る場所など、ここくらいなものだろう。

「……お前……どういう目してんの？　何でステルスしてるのに分かるんだよ」

「見えてないわよ。ただ分かるだけ」

「意味わかんね……」

不満そうな西に、あえて不要な説明はしなかった。

説明したところですぐに分かるものでも、納得できるものでもないからだ。

それに西と話す為に東京まで戻ってきたわけではない。

今回来た理由は、足りない武器の調達と保険の確保の為である。

「ガンツ、貴方にやって欲しい事があるわ」

「うん……やるよ、何でも。何をして欲しい？」

「まず、私とライスが今後不用意に誰かに転送される事がないようにして」

ミッションは終わった。

だがこれで終わりだなどとほむらは一切考えていない。

こうして黒い玉の部屋で戦わされてきたのは、兵力の育成と確保の為だ。

ならカタストロフィの日には必ず、この黒い玉を各地に配置した大元の連中から呼び出しがかかるだろう。

それこそ100点を取って解放された者だろうが記憶を戻された上で爆弾を付けて戻される可能性がある。

しかしほむらにとって大事なのはまどか達を守る事だ。

肝心な時にわけの分からない連中に転送されてまどか達を守れないなんて事になったら死んでも死にきれない。

だからまずは、そのリスクを排除する。

「うん……分かった……そうするよ」

「出来るのね？」

「大丈夫……西君もやツた事だから」

やはり西は既に、強制的な転送への対策を講じていたようだ。

流石と言うべきか、それとも玄野達に教えないのを薄情と思うべきか。

まあ薄情さに関してはほむらも同類だ。西を責める事は出来ない。

「……うん、これでもう大丈夫。後は何をすればいい？」

「転送は自由に出来るのかしら。それと転送された場所からここに戻る事も」

「大丈夫……出来るよ……。戻る時も言ってくれば戻せる」

「なら私とライセンスを見滝原市に移動させて。転送が必要な時はまた言うわ」

自由に移動出来るならばそれは武器になる。

こうして移動手段を確保し、ほむらは見滝原へと帰還した。

これで万一見滝原が手詰まりになっても脱出出来るし、当日にはいざとなればまどかやさやかやかの家族を全員問答無用で地下室へ転送してしまえるわけだ。

### 第38話 また、いなくなったりしないよね

対岸の火事という言葉がある。

向こう岸で起こっている火事は自分に関係なく、災いにならないという意味の言葉だ。

日本人はある意味、ほぼ全員がこれに近い心理を持っている。

自分に害が及ばない限り、そこに現実感を抱けない。

どんな悲惨な事が起こっていてもそれはテレビの中の出来事で自分だけはいつも通りの日常が続くと心のどこかで呑気に構えてしまっている。

たとえ対岸から一直線に油が引かれてこちらに届いていたとしても……きつと、自分が煙に包まれるまで、本気の危機感を抱けないだろう。

ほむらはニュースを見ながら、そんな事を考えていた。

——アメリカ合衆国が、壊滅した。

世界一の大国で軍事国家のアメリカが滅ぶという未曾有の事態を前に、人々は呆れるほどにいつも通りであった。

統制が取れているわけではない。冷静なわけでもない。

ただ危機感が麻痺し切っているだけだ。

インターネット上では『アメリカ壊滅ってマ?』とか『映画の宣伝やろ』とか『世界の終わりキター!』とか、そんないつも通りのやり取りが行われている。

会社も学校も休まず、人々はいつも通りに出勤して通学している。

空は血のように赤に染まり、明らかに普通ではないのに……それすら、人々は『終末感あるねー』程度の感想しか抱いていない。

「ほむらちゃん! 来たよ!」

家の外から声が聞こえたのでドアを開ける。

するとそこには、まどか達全員……そして、その家族も揃っていた。どうやら無事に家族を説得出来たようだ。

まどかの母である鹿目詢子辺りは流石に判断力もあり、世界を包んでいる不穏な雰囲気気付いているようで表情が険しい。

背には急いで買い漁ったと思われる防犯グッズや非常食を詰め込んだ大きなリュックを背負っていた。

この分だと会社も休んだのだろう。実に正しい判断である。

他には何故かまどか達の担任の早乙女和子までいるが……まあ、一人くらい増えてもいいだろう。

「あ、暁美さん……鹿目さんから聞いた時は半信半疑だったけど、生きていたのね」

「その話は後です。急いで地下へ入って。日本が巻き込まれるまで、もうそんなに時間がない」

何か言いたそうな和子を無理矢理地下室へ押し込み、そして皆にも入るように促す。

しかしまどかにはなかなか動こうとせず、ほむらを心配そうに見ていた。

「ほむらちゃんはどうするの?」

「私は外で迎え撃つわ」

マミ達には自衛用に武器を渡しているが、それでも今はただの少女だ。必要に迫られない限り戦わせるべきではない。

だからここから先は自分だけで戦うというのがほむらの考えであつた。

「そんな! ほむらちゃんも一緒に……」

「……………」

まどかは、きつと納得しない限りここから動いてくれないだろう。

たとえ自らの身が危険だと分かっているとしても、ほむらが一緒に地下に入るまで頑固に残り続けるだろう。

そんな事は分かっていた。

だからこそほむらは無言でまどかを抱き上げ、そして下にいた鹿目詢子に呼びかける。

「詢子さん! 受け止めて下さい」

「えっ? ええっ!?!」

動かないならば動かしてしまえばいい。

ほむらはまどかを地下へ放り投げ、そして鹿目詢子はこれを慌てて

受け止めた。

それを見届けて地下の扉を閉め始める。

「ほむらちゃん！ 大丈夫だよね!! また、いなくなったりしないよね!？」

「……」

まどかの問いに答える事は出来なかった。

そもそもほむら自身が、自分の命をそこまで大事に思っていない。死んでもまどか達を守る事……ただそれだけを使命としており、その後の事など一切考えていないのだ。

地下からはまどかの他にも皆の、早く地下に来いという声が聞こえるがほむらは全てを無視した。

「ほむらちゃん！ ほむらちゃん！」

悲鳴のようなまどかの声を無視して完全に扉を閉め、これで外にいるのはほむらとライスと、ついでにキュウベえだけとなった。

地下室の扉の上から使い道のないハードスーツを置いて重石代わりにし、まどか達が出て来るのを封じる。

このハードスーツは頑丈なので、少しならば盾にもなるだろう。

そうしてまどか達を避難させたほむらは家の外に出て、赤い空を見上げる。

「間に合ったわね」

そう呟くほむらの視界の先にあったのは、空を埋め尽くす巨大な鉄の塊であった。

いや、本当は鉄なのかどうかすら分からないのだが鉄に見えるので、とりあえずそう呼んでおく。

宇宙船……だろうか？ 初めて見るそれは、少なくとも長年想像されていたUFOのような形状はしていない。

どちらかといえばシルエットは蜘蛛に似ており、複数の脚で今にも地面に降り立ちそうだ。

宇宙船からは次々と堅牢なアーマードスーツを纏った人のようなものが降下し、我が物顔で地球の地を踏んでいるが……そのサイズは人類とは比べ物にならない。

大きさにして10mくらいはあるだろうか？ 一人の例外なく、全てが巨人だ。

更に人ほどの大きさを持つ虫のような気持ち悪い生物が次々と降下して手あたり次第に人々に襲い掛かっていた。

アレは宇宙人が使役するペットのようなものだろうか？

他にもビルより巨大なロボットがあちこちに降下しては無差別に建物を破壊して回っている。

世界は一瞬で地獄へ変わり、あちこちから人々の叫びが聞こえて来た。

今この瞬間に、日本は宇宙人と戦う戦場へと変わってしまったのだ。

「ガンツ！ 巨大ロボットの転送して！」

ほむらが叫び、それと同時にロボットが彼女の背後へ姿を現した。

リモコンをキュウベえへ投げ渡して操作を任せ、ほむら自身はZガンとXガンを持つ。

その隣にライスが並び、牙を剥きだしにして唸った。

「行くわよー！」

「ウオウー！」

同時に駆け出し、まずはステルス。

近くにいる虫をXガンでロックオンしながら巨人をZガンの照準に捉えて躊躇なく連続で発射した。

重圧が巨人を押し潰し、血肉が池を作る。

だが躊躇はない。戦火を切ったのは向こうで、これは戦争だ。

ならば敵を全て殺さない限り平和はない。

Xガンの引き金を引いて目につく範囲にいる限りの虫を全滅させ、更にほむらは跳ぶ。

ライスは迅雷の如く駆け回って次々と虫を噛み殺し、キュウベえが操縦するロボットが巨人を踏み潰しながら近付いて来る巨人側のロボットを殴っていた。

「ガンツ、バイクを転送して！」

ほむらが指示を出し、すぐにバイクが転送された。

その上に飛び乗り、市街地を一気に駆ける。

走りながら虫をXガンでロックオンしては射殺し、敵が集まっている場所へ急行した。

そしてバイクから跳躍して乗り捨ててる事で巨人の足へぶつけ、ほむら自身は空を舞いながらZガンで巨人を次々と血の海へ沈めていく。

「ガンツ、飛行ユニット！」

巨人の拳が迫る。

だがほむらは身を捻って拳の上に乗れ、Zガンで巨人の頭を潰した。

それから転送されてきた飛行ユニットに乗って飛翔。

間一髪で、接近してきた別の巨人の拳を回避した。

Zガンで更に巨人を圧殺しながら飛び、空高く飛び上がる。

そして飛行ユニットのグリップにネクタイを巻き付けてから飛び降り、次の武器を指定した。

「Xショットガン二つ！」

ZガンとXガンを投げ捨ててXショットガンへ武器を換装。

上空から敵を視認し、狙撃する。

一度ではない。何度も何度も、遠くにいる敵を撃ち殺して数を減らしていく。

そこに旋回してきた飛行ユニットが迫り、乗り込んで再び飛行した。

「Zガン！」

Xショットガンを捨てて、先程捨てたZガンが手元に戻る。

飛行しながらそれを連射して巨人を更に潰し、肉片へと変える。

そうして進むと、今度は檻のようなものが見えた。

どうやらあれで地球人を捕獲しているらしい。

ほむらはそこに移動を開始し、その先にいた巨人が慌てて銃のようなものを構えた。

「剣二つ！」

今度は武器をガンツソードへ換え、ZガンとXガンを前方の空へ放り投げつつ飛行ユニットから跳躍した。



そのまま巨人の銃へ刃をめり込ませ、更に回転。銃を斬り裂き、巨人の腕を足場に疾走して巨人の両目へ剣を突き刺す。

剣を引き抜きつつ顔を踏み台にして後方宙返りし、遅れて飛んできた飛行ユニットを蹴って再度突進。

跳びながら回転し、巨人の頸動脈を叩き斬った。

それどころか勢いを殺さずに、檻の入口まで切り裂いて人々を解放する。

「下にバイクー！」

剣を腰に戻して、落ちてきたZガンとXガンを回収しつつ落下する。

更に先程巨人の足にぶつけたバイクをガンツの転送で落下先に戻し、バイクの上に着地すると同時にすぐに乗り込んで疾走した。

ほむらに乗せたバイクは高速で走り、捕まえようとした巨人の足元を通過する。

それと同時にガンツソードを伸ばして巨人の足を切断し、倒れた直後にZガンで顔を粉碎した。

一方で乗り捨てられた飛行ユニットは近くのビルの屋上を削りつつ、無事に不時着していた。

「ひいひいっ、い、嫌だああああ！」

「な、なな中沢！ た、助けて！」

「助けて欲しいのは俺だよ！」

そのまま次の敵を探すほむらの耳に、妙に懐かしく情けない声が聞こえてきた。

視線を向ければ、かつてクラスメイトだった中沢と上条恭介が虫に追われている。

上条恭介はかつての世界で、間接的とはいえまどかの契約の遠因になっていた男なのでほむらとしては実はあまりいい印象を抱いていない。

正確には彼のせいでさやかが契約し、更に彼が志筑仁美と付き合う事でさやかが魔女化し、そのさやかの為にまどかが……という感じで

彼に罪はないのだが、それでもどちらかといえば嫌いだった。

とはいえ、見殺しにするのは目覚めが悪い。

仕方なくバイクで突進して虫を轢き殺し、一度停車して声をかけた。

「あつちの方向に逃げなさい。向こうはまだ敵の数が少ないわ」

「え？ き、君は……暁美さん!？」

「え!?! し、死んだはずじゃ……」

死んだはずの人間が現れるという事態に混乱する男二人を無視し、そのままほむらはバイクを発進させた。

とにかくまずは、この付近の敵を全て始末する。

休んでいる暇など無い。

ワルプルギスの夜から皆が命をかけて守った見滝原を、宇宙人の好きになどさせない。

「~~~~~!」

巨人が何か叫びながら走ってきた。

ほむらはそれを始末するべく武器を構え……次の瞬間、巨人が勝手に潰れて死んだ。

いや、勝手に潰れたのではない。誰かがZガンで倒したのだ。

攻撃を行ったと思われるスーツの一団が走ってきたので、ほむらは一度バイクを停めて様子を見る。

「き、君ッ、君すごいね！ さっきから見てただけど、どんどん敵をやっつけて！」

今まで見た事ないけど、別のチームの人？

あッ、その、僕はこの付近を担当してるチームの内木ッていうんだ  
「私は黒名蚩。それで……」

「今は自己紹介なんかしている場合ではないでしょう。用がそれだけならもう行くわよ」

「あッ、ま、待ッて！」

どうやらこの一団は見滝原周辺を拠点とするチームのようだ。

それは別にどうでもいいが、用がそれだけならば時間の無駄である。

ほむらは不愛想に返し、さつさとバイクを出そうとするがそこに黒名童と名乗った少女が慌てて待ったをかけた。

年齢は高校生で、マミと同年くらいだろうか。

スタイルのいい茶髪の、キリツとした顔立ちの美少女だ。

立ち位置的に彼女がリーダーだろう。

「私達、こんな事になっちゃって、もう駄目かと思つて諦めかけてた。けど貴女の戦いを見て、まだまだ諦めるのは早いッて思えたんだ。何か、手伝えることはないかな？ 私達も一緒に戦わせて欲しいの」

「……なら、一般人をなるべく多く助けてもらえるかしら。

そうしてもらえれば、私も敵を倒すのに集中出来るわ」

「わッ、わかッた！ 任せて！」

ほむらはそれだけ指示し、バイクを走らせた。

実力は分からないが、まあ嬉しい援軍と一応思っておこう。

乙ガンで巨人を始末しながら、ほむらはまどか達を隠した辺りを見る。

そこではまだ巨大ロボが頑張つて敵を倒しているようで、敵が近付けていない。

ならばこのまま、付近の敵を掃討するだけだ。

ほむらはまどか達の脅威となる敵を殺すべく、何度目かも分からない引き金を引いた。

◇

夕暮れにさしかかった。

数多の巨人と虫で出来た屍は文字通りに山を築き、その上でほむらは夕日を背に立っていた。

敵はもういない。

いや、まだまだいくらでもいるのだろうか、少なくともここに送り込まれた戦力は全て片付けた。

ついでにあのガンツチームもどこかに消えてしまったが、恐らくは強制転送がかかったのだろう。

とりあえず、まず第一陣は凌いだ。

次に襲撃があるとしても、これだけの被害を出した以上は時間がかるだろうし、まずは調査に乗り出すだろう。

一度まどか達の様子を見ようとほむらは家があった位置まで戻り、地下室の扉を開けた。

「暁美さん！ 無事だったのね！」

まず真つ先にママが気付き、嬉しそうに顔を綻ばせた。

だがそれも一瞬の事で、何か慌てているように声を荒らげる。

「暁美さん、どうしよう……鹿目さんが……」

「まどかに何かあったの？」

ママの言葉に一瞬緊張するも、まどかがここから出られるはずはないし、ここに敵が入り込んだ形跡もない。

ならばまどかが敵に襲われたという事はまずあり得ないだろう。

なら精々、慣れない環境で体調を崩したとか、そんなところか。

そう思う事でほむらは冷静さを取り戻そうとしたが、しかし次の言葉で硬直してしまった。

「鹿目さんが、魔女に攫われたの！」

### 第39話 今すぐ殺してあげるわ

それは、いつか見た夢の続き。

複製された暁美ほむらが知らない真実の過去。

「ここまでだね、暁美ほむら。君の最後の戦いはどうやら、敗北で終わらしい」

「ふぎ、け……ないで……！　こんな、事で……」

「無理だよ。もう君に魔力は残っていない、身体も動かない。傷を治す事も出来ない。」

君に出来るのは、ここで魔女に殺されるか……絶望して魔女になるかのどちらかだ」

キユウベえに事実を告げられ、ほむらの視界が歪んだ。

これで最後なのに。

やっとここまで来たのに。

なのに、この最後の最後で負けるのか。

魔女という不安要素を残してしまうのか。

もう少しで約束に手が届くはずだった。迷路をやっと抜けられるはずだった。

なのに……結局また駄目なのか？　また届かないのか？

「……まど、か……」

今まで繰り返してきた時間のまどかの顔を思い出す。

本当はいつだって助けたかった。見殺しにしていままどかなんて、見捨てていい時間軸なんて一つもなかった。

それらを踏み越えてようやくここまで来たのに、諦める事なんて出来ない。

たとえこの身がどうなろうと……まどかの幸せな明日だけは、守って見せる。

その決意に呼応してソウルジェムが最後の輝きを放ち、紫の光でほむらを照らした。

「これは……なるほど、最後に魔力を暴走させて自爆するつもりか。

恐れ入ったよ暁美ほむら、凄まじい執念だ。」

……けど——。

——もう君には、自爆するだけの魔力すら残ってないみたいだね」  
ほむらのソウルジエムは、もう限界であった。

本当に、いつ砕け散ってもおかしくない状態だったのだ。

そんなソウルジエムを自爆させようと力を込めた瞬間、紫の輝きと共にほむらのソウルジエムは砕け散った。

故に複製の暁美ほむらはこの先の出来事を知らない。

彼女は、オリジナルが自爆して魔女を道連れに死んだと思っ  
てる。

だが真実はそうではなかった。

穢れを限界まで溜め込み、浄化すらしてこなかった……出来なかつたソウルジエムはここに限界を超え、最も忌まわしいモノへと生まれ変わる。

砕け散った魂は変質して歪み、希望を齎す魔法少女は絶望を齎す存在へと——即ち、魔女へと変わってしまう。

人としての死を迎えたほむらは薄れゆく意識の中でその呪われた事実を認識し、血の涙を流した。

「あ……ア、アア……アアアアアアアアアア!!」

魔法少女の服が消え、代わりにほむらの身を包んだのはワンピースのような墨染めの衣だ。

常に迷路の出口を探し求めていた瞳からは輝きが消え、血の涙が網目状に顔を走る。

まどかを救う……たった一つの約束の為に何度も過去を繰り返してきた彼女は、その願いが巨大化するにつれて、背負う呪いの量も増えていた。

故に暁美ほむらの魔女は、並の魔女を遥かに凌駕する。

抱いた希望が大きいほどに呪いは強くなる。

世界を呪った。人を呪った。時間を呪った。運命を、魔女を、インキュベーターを。

そして何よりも、約束を果たせなかった自分自身を。

敵対していた魔女を余波だけで消し飛ばしながら新たに結界を構

築し、結界内に耳をつんざくようなおぞましい叫びが木霊した。

その叫びは世の中のあらゆるものを呪い、怨嗟し、憎悪するかのようであり……どこか、幼い少女が号泣する泣き声のようでもあった。

「おめでとう、暁美ほむら。君は君の願い通りに全ての魔女を駆逐した。」

そして君はこの星の最後の魔女となった。

宇宙の為に死んでくれて、ありがとう！」

キユウベえはそれだけを言い残し、ほむらの放つ呪いに吞まれて消滅した。

ほむらの呪いに包まれた結界の中では、まどかと出会う前のほむらを模した兵隊が歩き、齒のような使い魔が湧いて出る。

ほむらの背後が泥のように盛り上がり、形を形成していく。

それは黒い三角帽子を被り、黒いマントを羽織ったおぞましい影だ。

髪に見える部分は三つ編みで、背中からは黒い翼を生やしていた。

もう何も見えない。何も聞こえない。

迷路の出口は閉ざされ、未来は暗闇に包まれた。

何と言う皮肉か。まどかの為ならば出口のない永遠の迷路に閉じ込められても構わないと願った少女はその願いの通りに、出口のない迷路に閉じ込められてしまったのだ。

それでも——それでもほむらは、覚えていた。忘れなかった。

まどかと交わしたたった一つの約束を忘れず、血の涙を流しながらも彷徨うように自分の結界の中を歩き始める。

その後が続くように魂が変質した魔女の影が移動し、更に後ろには使い魔が整列して行進した。

もう辿り着くゴールはない。目指すべき未来もない。

それでもただ、まどかを求めて……。

魔女と化した暁美ほむらは魂のない肉体をたった一つの感情愛のみで動かして、背後に自身の魂が変質した魔女と使い魔を従えて、終わりのない旅を開始した。

◇

まどかが魔女に誘拐されたと聞いて、ほむらはすぐに魔女の捜索に乗り出していた。

もう魔法少女ではないほむらでは魔女の場所を特定する事は出来ない。

だが、それでも……何故かは分からないが、向かうべき場所が不思議と分かった。

バイクで走るほむらの肩にキュウベえが飛び乗り、いつも通りに腹の立つ落ち着いた声で話す。

「いつの間にか、この見滝原まで移動していたようだね。恐るべき執念というべきか。」

君にはいつも驚かされるよ、 暁美ほむら」

「……私は、魔女の討伐に失敗していたのね」

ほむらは己の不甲斐なさを悔いるように言った。

彼女の記憶は、魔女に敗れそうになって自爆しようとした瞬間で途切れている。

自分のソウルジェムが砕けたのが、ほむらの中にある最後の記憶だ。

だからあの後に自爆して魔女を倒したのだろうと、ずっとそう思っていた。

……いや、思いたかったのだ。

だが魔女がまだいるという事はあの時の魔女を倒し損ねていたという事なのだろう。

そう考えたほむらに、キュウベえは間違いを訂正する。

「それは違うよ暁美ほむら。君はあの時の魔女を間違いなく倒している」

「そんなはずはないでしょう。だったら魔女が現れるわけが……」

途中で話し、ほむらの声が止まった。

顔は僅かに青褪め、汗を流している。

ここに至り、ほむらも気が付いたのだ。

今まどかを攫っている魔女の正体を。一体誰が魔女になった存在なのかを。



「まさか……そんな………私？　私が魔女になって、まどかを攫ったというの!？」

「その通りさ暁美ほむら。君はあの時、魔女になったんだ。

そしてまどかを求めて見滝原まで移動し、誘拐した」

思わず唇を噛む。

自分自身の情けなさに涙が出そうだった。

何をしているのだ、私は。

最後の最後でゴールに手が届かず、それどころか一番大事なものに手をかけるなんて。

それでも暁美ほむらかと叫びたかった。

「知ってたのね」

「そうだよ。けど聞かれなかったからね」

「そうね、聞かなかったわ」

キュウベエのいつも通りの言葉を冷たく流し、ほむらは焦る心を押さえてバイクを走らせる。

その横顔を見ながらキュウベエは感心したように話を続ける。

「前から思っていたけれど、君はオリジナルの暁美ほむらに比べて冷静だね。

精神的にはオリジナルよりも安定しているよ。感情エネルギーという点では劣るけどね」

「そう」

似ていてもやはり別人だという事なのだろう。

今ここにいる暁美ほむらは、本当の暁美ほむらと比べて感情の起伏が小さかった。

本来の暁美ほむらは冷静に振舞っているが、それは仮面だ。

本当は弱気で自分に自信がない少女でしかない。

その弱さを捨て去り、まどか達が知る今のほむらになった。

しかしそれでも、心の底の本当の自分は覆い隠せるものではなく、時折本来の弱さや感情的になる面が出てしまうのがほむらだった。

だが複製されたほむらは、冷静で弱さを捨てた暁美ほむらをコピーした存在だ。

即ち弱かった時期が存在しない。生まれた瞬間から冷静な曉美ほむらだった。

その差こそが本物と複製の差なのだろう、とほむらは思う。ならば私がまどかを守ろう。オリジナルが持てなかつたこの冷たさで、冷酷さで。オリジナルの願いを守ろう。

そう決意し、やがて今までよりも強く気配を感じた。

「この先にいるわね」

「勝算はあるのかい？ 君は魔法少女ではないんだよ」

「ガンツの武器は宇宙人を倒す為のものよ。だったら同じ宇宙人由来の存在である魔女にだって効いてもいいでしょう」

効くという保証などどこにもない。

だが行かなくてはならない。

何故ならこの先にはまどかと、オリジナルの自分がいて……引導を渡すのはきつと、自分の役目なのだから。

◇

まどかが目を覚ますと、そこは奇妙な空間だった。

いくつもの映像が浮かんで消えるその場所に映し出される映像は全て、自分やママ、さやかや杏子……見知った皆の映像だった。

だが見知らぬ映像だった。

自分が魔法少女の姿で弓を引いている光景など知らないし、ママが杏子のソウルジェムを撃ち抜く光景なんて見た事もない。あるはずがない。

「ここは……」

少し考え、そして思い出す。

自分はほむらの用意した地下室で、ほむらの無事を祈って待ち続けていた。

そんな時にほむらの声が……泣き声が聞こえた気がして、答えたのだ。

すると一瞬で影に飲み込まれて、目が覚めたらここにいた。

ここで……誰かに膝枕されて、頭を撫でられている？

「え？」

まどかはここで初めて、自分が誰かの膝に頭を乗せている事に気が付いた。

思わず跳び退いて立ち上がれば、そこにいたのは黒いワンピースを着た——ほむらだ。

宇宙人と現在戦っているはずのほむらが何故かワンピースに着替え、おかしな空間で自分を膝枕しているという状況に混乱したが、それ以上にまどかを困惑させたのはほむらの様子が明らかにおかしい事であった。

目からは赤い涙を流し続けているし、後ろには明らかに魔女としか思えない何かを従えている。

周囲を使い魔が徘徊し……どう見てもここは魔女の結界であった。

「ほむらちゃん……？　ほむらちゃん……なんだよね？」

まどかの問いにはほむらは答えない。

ただゆっくりと立ち上がってまどかを、優しく抱きしめた。

一体何が何だか分からない……しかしまどかは、直感的に彼女は間違いなくほむら本人だと確信していた。

甘えるように頬を摺り寄せて来るほむらに困惑しながらも、落ち着いて周囲を観察する。

上映され続ける映像は相変わらず覚えのないもので、しかし見続けるとやがて一つの共通性がある事に気が付いた。

これは恐らくほむらから見た彼女の視点だ。

更に観察を続けると、やがてそれが一つの繋がった物語になっている事が分かった。

病弱で勉強もスポーツも苦手で自分に自信のないほむらが、魔法少女の自分とママに救われた。

二人に憧れ、幸せな日々を過ごし……しかし二人は死んでしまった。

その歴史を変えたくてほむらは願う。『鹿目さんとの出会いをやり直したい。彼女に守られる私じゃなくて守れる私になりたい』。

そして二度目、三度目と同じ一月を過ごし……そのたびに仲間を失い、傷付き。

それでも諦めずに繰り返した。友との約束を果たす為に。  
『キユウベえに騙される前の私を助けて』という自分との約束だけを支えに……。

「あ……あ、あああ……」

知らず、まどかの目から涙が零れていた。  
全て理解してしまった。

何故ほむらがここまで自分に拘っていたかを。何故ワルプルギスの夜を知っていたのかも。

全て自分との約束を果たす為だったのだ。

そうして頑張って頑張って、頑張って……目指し続けた迷路の出口を目前にしながら、最後の最後で、魔女になってしまった。

それが暁美ほむらの物語だった。

「ほむら、ちゃ……ごめん……ごめんね……」

抜け殻となったほむらを抱きしめ、涙を流しながら謝る。

ほむらはもう笑ってくれない。

ただ、優しい手つきでまどかの頭を撫でるだけだ。

きつとほむらはもう、まどかが何故悲しんでいるかも理解出来ていない。

ただまどかが泣いているから反射的に慰めているだけなのだ。

「……ま……か……」

泣いているまどかの耳に、ほむらの声が聞こえた。

抜け殻となってしまった目の前のほむらとは違う、在りし日の姿を復元された方のほむらの声だ。

きつと、自分の事を必死で探してくれているのだろう。

何度も傷付いて、倒れて、泣いて……魔女になって……それでもまだ、暁美ほむらは戦っている。

望まぬ複製をされ、今でもまだ自分の為に迷路を彷徨っている。

それが悲しくて、どうすればいいかも分からなくて……だからまどかは叫んだ。

「ほむらちゃあああん！」

「まどかああああー！」

互いを呼び合うように叫び、声が近付いてくる。

そしてバイクの音が響き、遂に閉ざされた世界を破ってほむらが飛び込んで来た。

一般人が魔女の結界に入り込む事は不可能だ。

それでも入って来られたのはほむら同士だからか、それとも魔女ほむらが招き入れたのか。

どちらにせよ、ほむらはまどかの下へ辿り着き、掻っ攫うように魔女になった自分からまどかを奪い返した。

「まどか！ 怪我はない!?!」

「うん……大丈夫。けど、ほむらちゃんが……ほむらちゃんが……!」泣き崩れるまどかの頭を撫で、それからほむらは自分自身の魔女が生み出した結界を見た。

何度もリピートするように過去の映像が流れる空間の中で、まどかと出会う前の自分に似た使い魔が歩き、巨大な魔女が揺れる。

そして黒いワンピースを着たオリジナルの自分が、感情のない瞳でこちらを見ていた。

「……まどか、下がってて」

まどかの肩を軽く叩き、前へ踏み出す。

右手にはZガン、左手にはXガン。

ガンツの武器がどこまで魔女に通じるかは分からないし、以前のよう武器に魔力を通す事は出来ない。

それでもやらなくてはならないだろう。

自分の後始末は自分自身でつけなくてはいけない。

「ほむらちゃん!?! 止めて、何をやる気なの!?!」

「終わらせるのよ……そうしなければ、ならない」

更に踏み出し、人としての暁美ほむらピーと魔女の暁美ほむらオリジナルが正面から相対した。

何と皮肉な話だろう。

本物は魔女となり、暁美ほむらではない何かになってしまった。

今や複製の方が本当の暁美ほむらに近いのだ。

「貴女わたしだって耐えられないわよね……まどかを救う願いの果てにそん

な姿になって、呪いを振りまきながらまどかを害する存在になるなんて、死んでも我慢ならない。

だから貴女は私を呼び出した。そうでしょう?」

「……………」

「いいわ。引導を渡してあげる」

強い意志を秘めた紫の瞳と、何も映していない紫の瞳が向かい合う。

本物は死を望み、複製はそれを受け入れた。

ならばこれから始まるのは……戦いという名の、ただの自殺である。

「最初に抱いた願いを果たせず、自らが呪いを振りまく存在になるくらいならば」

Xガンを持ち上げ、その銃口を自分へと向ける。

そして殺意を言葉に乗せ、言い聞かせるように宣言した。

「——今すぐ殺してあげるわ! 暁美ほむら!」

「やめてええええええ!!」

まどかの叫びも空しく、ほむらは引き金を引き、魔女はそれを迎え撃つ。

そして自分同士の、この上なく空しい戦いが幕を開けた。

## 第40話 私達は戦い続ける

曉美ほむら同士の間闘が始まった。

ほむらが放ったXガンの一撃を、魔女となったオリジナルの背後に控えていた影が防いだ。

いや、黒いワンピースを着ているオリジナルは所詮生前の肉体を無理矢理動かしているだけの人形に過ぎず、本体はこちらの影の方だ。ならばこの影こそ魔女と呼ぶに相応しいのかもしれない。

此岸の魔女Homulily。それがこの魔女の名前である事を、ほむらは誰に説明される事もなく理解した。

まどかに対しては一切の敵意を見せていなかったが、ほむらに対しては刺すような殺意を叩き付けている。

それも当然か、とほむらは納得した。

何故なら曉美ほむらがこの世で最も嫌悪しているものは、いつだって弱い自分自身なのだから。

言うならばこれは自己嫌悪。故にこの魔女はほむらに対してだけは、並外れた攻撃性を発揮する。

「……来なさい！」

ほむらがリモコンを操作すると、その背後に轟音を立てて巨大ロボットが降り立った。

巨大ロボットとHomulilyが正面から組み合い、ほむらとオリジナルも同時に駆け出す。

ほむらがXガンを構え、オリジナルは魔力で創った黒い銃を構えた。

二人はそのまま銃同士を衝突させ、左足を相手の右脚の外側に置く。

そのまま左足を軸にターンを決め、相手の背後へ回り込もうとした。

だが両者が同時にそれをやってしまえば、ただの息の合った同時ターンだ。

まるで示し合ったように二人で円を描き、視線が交差する。

そのまま全く同じ動作で銃を出し、ぶつけ、衝突させる事で相手の照準を外す。

続けてもう片方の手で相手の隙を狙うも、こちらもやはり同じ動きとタイミングでぶつかってしまった。

敵の攻撃を予測し、安全地帯に身を置いて必殺の一撃を叩き込む。洗練されたほむらのその動きは、二人が同時に行う事である種のダンスのような様相となっていた。

銃を向けて弾かれ、弾き、同時にステップを踏んで一定の間合いを保ち続ける。

同時に放った蹴りが交差して二人の身体を弾き、着地と同時に発砲しながら横に跳んだ。

戦いは全くの互角だ。

故にこの戦いの勝敗を分けるのは両者が持つ戦力の差である。

ほむらとオリジナルが拮抗し、ロボットと魔女が均衡を保っている。

だが魔女にはまだ使い魔がおり、数の上では魔女が圧倒的に有利であった。

だがほむらには、ガンツより齎された地球外の超兵器がある。

Zガンを連射する事で次々と使い魔が潰れ、数の有利をひっくり返した。

「邪魔よー！」

使い魔を蹴散らしながら、ガンツロボットを蹴ってその側面を駆け上がった。

まずは空から一気に邪魔な使い魔を狙い撃ちにして全滅させようと考えたのだが、そのすぐ隣をオリジナルが追う。

流星に自分だ。考える事はバレバレイしい。

そのままほむらとオリジナルは重力を無視したように壁を走りながら銃を撃ち合った。

巨大ロボットの僅かな窪みや出っ張りを足場として壁の上で戦い、一定の距離を保ちながら駆け上がる。

ロボットの側面を蹴って今度はHomulillyの身体に着地



し、そこを足場にしてまた跳ぶ。

二人のほむらが三角跳びを繰り返して空を舞い、断続的に発砲音とXガンの発射音が響き渡った。

ロボットの壁を蹴ってオリジナルが身投げするように落下し、落ちながら新たに創造したサブマシンガンを連射する。

ほむらはそれを追うようにロボットの身体を蹴って急降下し、Zガンを捨てて即座に腰のホルスターから抜いたXマシンガンで弾丸を相殺しながらオリジナルへ接近した。

空中で二人の距離が縮まり、零距离に限りなく近い射程で戦闘が続く。

相手を照準に入れつつ自らは照準から外れるように動き、時に格闘を織り交ぜながら優位を奪おうとする。

身体の位置が目まぐるしく変わり、銃を手にした腕が交差し、同時に引き金を引き——オリジナルの右腕が僅かに弾けた。

それと同時にほむらの右腕からも血が溢れ、二人は血を撒き散らしながら着地と同時に一度距離を空ける。

「……………」

「……………」

ほむらもオリジナルも流石に痛みには慣れており、悲鳴の一つもあげずにすぐに次の行動へと移る。

いや、そもそもオリジナルは痛みすら感じていないのだろう。

その動きには淀みがなく、ほむらに全く後れを取っていない。

再び互角の攻防が始まり、両者が最善手を打つが故の膠着に入る。

射線の取り合い——相手の銃の軌道を逸らしながら自らの射線に敵を入れようとする。

だが敵も同じように銃を弾くので、共に有効打に繋がらない。

互いに動きの読み合いだ。何度も銃をぶつけ、銃を撃ち、先の先を読み合う。

だが両方が曉美ほむらでは決着が着かない。

銃が額に当たって血が流れ、その美貌を鮮血で染めながらもどちらも止まる気配がない。

ほむらの腕をオリジナルの蹴りが跳ね上げ、無防備な彼女へ照準を合わせた。

だがほむらは蹴られた勢いのまま後方回転してサマーソルトキック。オリジナルの腕を蹴り上げつつ体勢を戻し、しゃがんで水面蹴りへ移行する。

オリジナルは軽く跳躍して避け、銃を向ける……だがほむらも予測していたように素早く銃を向けた。

銃同士が衝突して狙いを外し、ほむらの髪を僅かに巻き込みながら銃弾が通過して、オリジナルの髪が僅かに不可視の弾丸によつて千切れる。

それを気にする事なく両者が同時に前に出て相手の間合いを潰した。

唇が触れ合いそうなほど接近し、すぐに離れて再び互角の戦いが再開される。

「やめて……もう、やめてえ……」

まどかは、この戦いをもう見ていられなかった。

大事な友達が、自分同士で殺しあっている。自殺しようとしている。

それをただ見ている事しか出来ない自分がただ、情けなかった。悲しかった。

二人のほむらの攻防は既に数百手以上に上っているだろうか。

しかし戦いの天秤は傾きつつあるとキュウベえは考えていた。

「この戦い、魔女の方が勝つね。やはりコピーではオリジナルには及ばない」

キュウベえがそう断言した理由は体力の差にあった。

ほむらが次第に疲れを見せ始めているのに対し、魔女は一切疲れのないのだ。

それはそうだ。所詮これは動く死体、ただの人形でしかない。

疲れなど最初から存在しない。

故に、この戦いの勝敗は最初から決まっていた。

両者が最善の動きを続ける以上……先に動きが鈍った方が負ける。

それだけだ。

その予想を肯定するようにほむらの銃が弾き飛ばされ、魔女の銃がほむらへ突き付けられた。

これにて勝負あり——キュウベえはそう確信し、まどかは思わず目を瞑った。

「……………」

ほむらも目を見開き、死を覚悟した。

この銃撃はまだ回避する事が出来る。

だが一手の遅れがこの本人同士の戦いでは命とりだ。

回避してもその次の攻撃で更に追い詰められる未来が先に分かっ  
てしまう。

ここから数手先の絶対的な敗北を、読みに優れているからこそ確信  
出来てしまう。

将棋やチェスと同じだ。優れた打ち手同士の対局において、勝敗が  
決するのは王手チェッをかけた瞬間ではない。

それよりずっと前……何手も前から既に勝敗は決している。

現状から打てるだろう幾通りもの可能性。それに対する敵の手を  
予測し、更にその先を予測し……そうして予測し続けた先に、どう足  
掻いても勝ち目がない事を哀しくも悟ってしまふ事がある。

だからレベルの高い打ち手は、素人が見れば『まだやれるんじゃない  
か?』と思えるような場面でも投了するのだ。

ほむらもそれと同じだ。この銃撃を避けた先の可能性を予測し、そ  
の次の敵の行動を予測し……それを繰り返した果てにある、己の『詰  
み』を悟ってしまった。

結局——運命は変わらないのだろうか。

悪い事の後にはいい事が待っているなんて事はなく、悪い事の後には  
また悪い事が待っている。

悪い事は重なっていく。確率論なんか無視して、悪魔に翻弄される  
ように積み重なる。

魔女化するという悲劇の後には、複製が殺されてめでたくなし、め  
でたくなしで終わるのか。

そう諦めかけたほむらの脳裏に、いつかの言葉が蘇った。

『悪魔がいたとして……知ったこっちゃないッて。』

今まで生き残ったのは知恵を使って持てる能力を駆使して生きのびようとした結果だ！

人間は！ 人間は！ 立ち向かうことができるはずだ!!』

「——まだよー！」

ほむらの瞳に生気が戻り、オリジナルが放った銃弾を回避した。

その回避を予測していたようにオリジナルが動き、回避で崩れた体勢を更に崩すように足を蹴り払った。

ほむらは地面に手をつけて、片手の力だけで回転。蹴りを放つ。

それをオリジナルがバックステップで避けると同時に空いている方の手でXマシンガンを連射した。

オリジナルも即座にマシンガンで迎撃し、ほむらの側面へと移動する。

すぐに体勢を立て直すも、その無駄な動きの分だけほむらの方が遅い。

オリジナルの放った銃弾が足元を掠め、更に肩を撃ち抜く。

鮮血で服が染まり、更に戦況は不利になってしまった。

……いや、不利どころではない。もう詰んでいる。

ほむら自身、そんな事は分かっているのだ。ここからでは相手がミスをしないうり絶対勝ちはなく、そしてこの魔女は決してミスなどしないだろう。

だからこれは無駄な足掻きだ。負けると分かっているのに、無意味に死までの時間を引き延ばしているに過ぎない。

(私は何をしているのかしらね……)

実の所、ほむらにも自分のやっている事の意味はよく分かっている。い。

もう頭では分かっているのだ。足掻くだけ無意味だという事くらい。

ここからの逆転はあり得ない。所詮自分は暁美ほむらの偽物で、本物には勝てなかった……それだけだ。

それでも、頭では認めていても……心のどこかが否定している。

このまま死ぬことをよしと思わない自分が存在している。

そこまで考え、ほむらが思い出したのは……あの部屋で出会った仲間達の顔だった。

オリジナルの暁美ほむらではなく、今ここにいる自分だけが経験したあの部屋での戦いの日々だった。

……決して諦めずに生きようと足掻いていた、『人間』の姿だった。(それと比べて……我ながら情けない顔をしてるわね)

ほむらは、自分と戦っているオリジナルを見て情けない気持ちにならなかった。

血の涙を流しながら、何もかもを諦めたような眼をして戦っている。

きつと自分もそうなのだろう、と思うと尚更情けなくなっていくそ笑えてきた。

『あんた、何もかも諦めた目をしてる。いつも空っぽの言葉を喋ってる』

これはいつかの時間軸で美樹さやかに言われた言葉だ。

なるほど、確かに彼女の言う通りだろう。

こんな顔をしていては、ああ言われても仕方ない。

玄野達と比べて、何と空っぽな事か。

そう思うと何だか腹が立ってきた。

『私』はこんな所で一体何をしているのかと思った。

インキュベーターの思い通りに呪いを振りまく存在になって、こんな結界の中で泣き続けているなど余りに悔しいではないか。余りに惨めではないか。

一体いつまで……いつまで、逃げ続ける気なのか。

魔女になって、それでもまだ自分だけの世界に逃げ込むのか。

そう思うと……自分で自分を殴ってやりたい気持ちが入み上げて来て、仕方ない。

敗北を積み重ねた果てにようやくまどか達全員が生き残ったこの世界で……このまま負けて逃げるなんて、文字通りに自分で自分が許せない。

このまま諦めるなんて、認めてやらない。

「ッあああああ!!」

ほむららしからぬ叫びをあげ、銃弾で脇腹を撃たれながら突撃し、オリジナルの額に思い切り頭突きを叩き込んだ。

読みも何もあったものではない。ダメージ覚悟で突撃してそれで得られるのが頭突き一発分のダメージなどどう考えても割に合わない。

そのがむしやらさは今までのほむらにはなかったもので、どちらかといえば玄野計や加藤勝が持つものに近い。

ほむらの目から諦めが消え、代わりに玄野のような力強い輝きが宿った。

ここにいるほむらは確かに複製で、しかしオリジナルが知らない世界を体験してきた。

オリジナルが知らない者達と共に戦って来た。失ってきた。そして勝利してきたのだ。

そうだ、と思う。

諦めるにはまだ早い。悪い事がいくら重なろうが、知恵と持てる能力を駆使して立ち向かえばいい。

絶対に報われる保証はないし、時には無残に死んでしまうかもしれない。

その残酷な現実をほむらは何度も見てきた。

だがそれでも……人間は立ち向かえる。悪魔とだって戦える。

そして立ち向かうべき相手は、オリジナルなどではない。

まだカラストロフィは始まったばかりなのだ。

……こんなところで、戦わずに自殺している場合じゃない!

「……悲しみと憎しみばかりを繰り返す、救いようのない世界だけだ」

今度はガンツソード。

オリジナルの暁美ほむらが過去、ほとんど使用しなかった近接用の武器を用いた攻撃は、オリジナルの予測の範囲外にある。

振るわれた刃がマシンガンを切り落とし、続けて薙ぎ払う事でオリジナルを後退させた。

「それでも人間は立ち向かう事が出来る。

知恵と能力を駆使して生き延びる事が出来る。

だから私は……いえ、私達は戦い続ける……この世界を守るために！」

玄野達はきつと今、それぞれの大切なものを守る為に戦っているのだろう。

大阪チームの岡八郎や山咲杏も。各国のチームも。

この地球を守る為に、きつと戦っている。

この地球は決して美しいばかりの理想郷ではないが、それでも守る為に命をかけている。

ならば自分もこんな所でいつまでも不毛な自己完結自殺をしている場合ではない。

戦うべき戦場は、こんな所ではないはずだ。

「だから——」

決意が固まり、そして銃を捨てた。

もう自殺なんてしない。

背負った罪を恐れて死を望んだりしない。

最後の最後まで戦って、戦って、そして生き残って見せる。絶対に守り抜いて見せる。

死なんて、楽で甘い道にはもう逃げようとしない。

玄野達はいつだって生きようと必死だった。必死に戦っていた。

その姿は、知らずほむらの内にも変化を与えていたのだ。

ほむらはオリジナルの胸倉を掴み、そして額を突き合わせる。

「貴女も、いつまでも自分の世界に逃げていないで戦いなさい！」

何度も繰り返して来たのは、こんな所で魔女になって朽ちる為？

まどかを泣かせる為？

インキュベーターの思い通りになる為？

違うでしょう。私達が繰り返して来たのは……あの子を守れる私になる為だった！

魔女になったって関係ない……私達の願いはその程度で消えるものじゃない！」

何度も繰り返して来た。

その全てがまどかの為だった。

今日まで何度も繰り返して、傷つき苦しんできたすべてが、まどかを思つての事だった。

ならばこそ分かるはずだ。ソウルジエムを濁らせたのは、もはや呪いでさえなかったという事が。

「ア、アアア、ア……」

「思い出しなさい。まどかだけじゃない……マミも、杏子も、キリカやなぎさ、ゆま……後ついでにさやか。

皆が私の帰りを待っていてくれる。

だったらこんな所で死んでいる場合じゃないはずよ。

戦いなさいよ……帰るべき場所を守る為に。

私達の戦場は、ここじゃない！ この先にあるのよ！」

ほむらとは思えない熱い叫びに、まどかはただ茫然としていた。

しかし彼女の心にあるのがかつてと違う、前向きな物である事を感じて思わず微笑んだ。

思えば初めて会った時からずっと、ほむらはどこか自分を粗末にしていた。

価値がないものであるかのように思っている部分があった。

その彼女がどうしてこうまで変わったのかは分からない。

だがきつと、考えを変えてくれる……氷の心を溶かしてくれるような、素晴らしい人達と出会えたのだろうと思えた。

「だから、いつまでも……」

オリジナルの胸倉を掴んだまま跳んだ。

そしてHomulilyの中へと飛び込み、そこにあったグリーンフシードを掴み取る。

「……泣いてるんじゃないわよー」



『貴女は、本当に私なのかしら?』

気付けばほむらは、暗い空間で自分と向き合っていた。

目の前にいる暁美ほむらはどこか疲れたような雰囲気を持っていて、目の下には隈が出来ている。

ほむらはそんな彼女に向けて微笑んで見せた。

「さあ、どうかしらね。私自身、玄野さん達の影響で変わっている事は自覚しているわ。」

「でもそんなのは些細な問題でしょう?」

ほむらの言葉に、魔女はクスリと笑った。

そして涙を浮かべてほむらへ手を伸ばす。

『そうね。オリジナルも魔女も複製も関係ない。』

私にとって大事なのは、いつだってたった一つのこの感情のみ。

こんなところで立ち止まっている場合じゃない……わね』

ほむらも手を伸ばし、魔女の手を掴んだ。

すると手の中のグリーンフシードが光り、変質を開始する。

「行くわよ。私達の戦場へ」

『ええ。迷路の出口へあの子を連れ出すまでは、私達の戦いは終わらない。』

ようやく、その事を思い出せたわ』

Homulilyが消滅した。

それと同時にオリジナルとほむらのシルエットが重なり、紫の光が溢れる。

再構成——オリジナルと複製が完全に融合し、たった一人の暁美ほむらへと生まれ変わっているのだ。

更に手の中のグリーンフシードは完全に変わり、ソウルジェムでもグリーンフシードでもない、キュウベえすら知らない未知の物体<sup>ダークオーブ</sup>へと変わっていた。

まだ変化は終わらずにほむらの服が見慣れた魔法少女の衣装へと戻っていく。

紫の光が集まって黒い靴となり、続けて脚はダイヤモンドが連なったタイツに包まれた。

白いフリルが付いた淡い紫色のスカートに続けて黒いインナーシャツが上半身を覆い、その上から学生服に似た白い衣装が装着される。

襟元は淡い紫色に包まれ、そして首には紫色のリボンが結ばれた。腰にも同じく紫のリボンが結ばれ、二本の尾が風になびく。

左腕には彼女の象徴である時計の盾が戻り、今ここに魔法少女暁美ほむらが完全復活を遂げた。

しかし今までと異なり、背中からは魔女のような黒い翼が生え、胸元には逆さにした時計の針のような刻印が刻まれていた。

また、瞳の色も今までは青に近い紫だったものが紅に近い紫へと変色している。

完全復活とは言ったものの、もう彼女は魔法少女ではない。魔女でもない。

その存在にキュウベえが明らかな驚きを見せ、声を震わせる。

「暁美ほむら……その姿は……いや、君は一体……」

「理解できないのも当然よ。ええ、誰に分かるはずもない。」

この想いは、私だけのもの。私達だけのもの。

思い出したのよ。今日まで何度も繰り返して、傷つき苦しんできた全てが、まどかを思っていたことだった。

私のソウルジェムを濁らせたのは、もはや呪いでさえなかった」

ほむらが手を掲げる。

すると結界が晴れ、夕暮れの空が彼女達を照らした。

「貴方には理解できるはずもないわね、キュウベえ。」

これこそが、人間の感情の極み。希望よりも熱く、絶望よりも深いもの……」

——愛よ。

ほむらがそう言うと、まどかの頬が紅に染まった。

え？ これってそういう意味？ そう受け取った方がいいの？

思春期の初心な少女はほむらの真意も分からず、ただオロオロして

いる。

ちなみに、勿論そういう意味ではない。

「では今の君は……君は一体、何者なんだ？」

魔法少女でも魔女でもなく、いったい、どこにたどり着こうとしてるんだ？」

「私が何者かですって？ そんなの決まっているじゃない」

そんな簡単な答えも分からないのか、と思いはむらは笑った。

そして自信と力強さに溢れた声で宣言する。

「——勿論、人間よ」

そう断言し、不敵に微笑んだ。

## 第41話 とにかく一人でも多く救うんだ

巨人の襲撃から一夜が明けた。

自分との戦いを終えたほむらは、レーダーで付近に敵が残っていない事を確認してから魔法少女へと変身し、黒翼を展開する。

その姿を見たまどか達の反応は様々だ。

まどかやなぎさ、ゆま、キリカは素直に恰好いいとはしゃぎ、杏子は若干呆れ気味だ。

「いや、まさか……魔女化してから人間に戻るとかそんなんアリか？

しかも魔女の力すら使い放題って、そりやもう反則だろ」

「魔女の力を使いこなす魔法少女……さしずめ《闇を抱きし紫炎》と  
いったところかしら」

「おまえはなにをいってるんだ」

ドヤ顔でおかしな事を口走り始めたマミに若干引きつつ、杏子は朗らかに笑みを見せる。

「しかし大したもんだよ。魔女になってから戻ってきた魔法少女なんてきつと、アンタだけだ」

「でしようね」

余談だが大人達はまだ地下室で寝ている。

地球がこんな事になってしまった今別に隠しておく必要はないのだが、少女が巨人達と戦っているなどと言ったら責任感から「自分も戦う」などと言いつい出しかねない。

それに魔法少女だの魔女だのと言った事は説明するのが面倒だ。

「ほむらちゃん……行くんだね？」

「ええ。まだ戦い続けているだろう知り合いがいるからね。

私も休んではいられないわ」

まどかの心配そうな声に、ほむらはあの部屋の仲間達の顔を思い出しながら答えた。

襲撃から一日が経ったが、玄野や加藤はまだ生きているだろうか？

東郷や桜丘は無事だろうか？

彼等の事だからきつと、今頃は攫われた人々でも救い出そうとして

いるのだろう。

巨人との戦いはまだ終わっておらず、世界では今も誰かが殺されている。

だからこそ、ほむらもいつまでもここに残るわけにはいかなかった。

「大丈夫よまどか。この見滝原は既に私の結界の中にある」

心配そうなまどかを安心させるように言い、右手で髪を掻き上げる。

それと同時に黒い羽根がどこからともなく舞い散り、カフェテラスのテーブルの上に置かれていた葡萄ジュースがあり得ない程に溢れて地面を濡らした。

そのまま紫の液体は河へ流れ込み、その不可思議な光景になぎさとゆまがはしやいで河の上で走り回る。

往來をほむらの使い魔である着せ替え人形のような子供達が歩き、そのうちの一体がほむらの後頭部目掛けてトマトを投げつけた。

ほむらはそれをヒョイとかわし、さやかの顔にトマトが炸裂する。

さやかは倒れた。

「さやかああ!?!」

「私、これだけは絶対忘れない……アンタが悪魔だって事……」

トマトで倒れたさやかは地面に『あくま』と書いている。

そんな彼女を放置してほむらは断言するように言った。

「いざとなれば使い魔達が貴女達を守ってくれるわ」

「ちよつと！ 守るところか今！ トマトぶつけられたんだけど!?!」

ほむらの言葉に反発するようにさやかが立ち上がり、真っ赤になった自分の顔を指さす。

しかし使い魔がさやかを攻撃したというのは間違いだ。

正確にはほむらの使い魔は、魔女でなくなった主に不満を持ってほむらにトマトを投げたのである。さやかに当たってしまったのはただの流れ弾だ。

しかし逆に言えば使い魔がやる悪戯はその程度のものであり、基本的にはほむらの言う事に従うし外から侵入者があれば全力でそちら

を叩いてくれる。

加えて悪戯の対象はほむらなので、ほむらが結界内から去れば後は職務に忠実になるだろう。

とはいえ、主に何かを投げるのも出来れば止めて欲しいものである。

そんな事を考えながらほむらは、投げつけられた柘榴をヒョイと避けて、その先にいたさやかに柘榴が直撃した。

さやかは倒れた。

「こんな身体でキスしてなんて言えない……だって今、私、柘榴まみれだもん」

「食い物を粗末にすんじゃねえ、殺すぞ」

杏子がほむらの使い魔の首を掴んで脅すと、使い魔達は一斉に逃げ出す。

自分の使い魔ながら何とも根性のない子達だ、とほむらは思った。

「けど、それだとほむらちゃんも魔法の力を使えないんでしょ？」

ほむら自身は戦場へ向かうが、まどか達を無防備にするわけにはいかない。

なのでほむらは、既にこの見滝原市全体を自分の結界に閉じ込めていた。

しかしそれは、戦場でほむらが魔法の力を使えないという事を意味している。

結界の中でなければ Homulily や使い魔を出す事は出来ない。

ここに結界を出している限り新たに結界を出す事が出来ず、この先の戦いでは魔法の力を使えない事を意味していた。

「問題ないわ。魔法少女の力は戻っているし、そんなものがなくても戦ってみせるわよ」

だがほむらは魔法の力が使えない事を気にはいなかった。

今までずっと、そんなものなしで戦ってきたのだ。

むしろ魔法少女の力が戻っている分、魔法の力を引いてもまだパワーアップの方が大きい。

腕を振るうと盾の中から使い魔に回収させた飛行ユニットが出現し、座席に乗り込む。

これも明確にパワーアップした部分の一つで、昔は盾に入れる事が出来るのはある程度のサイズの物までだったのだが、今ではサイズに無理があっても空間を操作して収縮させる事で収納可能になった。

「ほむらちゃんー！」

まどかが慌てて駆け寄り、そして髪を結んでいたリボンを解いてほむらに差し出した。

「絶対に……絶対に帰ってきて！　もう私達を置いて行かないで……！」

「……ええ」

ほむらは微笑んでリボンを受け取り、カチューシャを外して代わりにリボンを結んだ。

それから、今まで身に付けていたカチューシャをまどかへ渡し、力強く言う。

「約束する。必ず帰って来るわ……貴方達の所へ」

まどかと視線を交差させ、それから皆を見る。

もう皆から逃げたりはしない。

死んで楽になろうとは考えない。

必ず生きて、そして帰って来る。この愛すべき皆の所へ。

今は使わない翼を消してコートを羽織り、飛行ユニットのエンジンを入れる。

「ライス！　まどか達を頼んだわよ！」

「ウォウ！」

ライスはここに残す事にした。

彼がまどか達の近くに来てくれた方が後ろを気にせず思い切り戦えるからだ。

ほむらがペダルを踏むと飛行ユニットが浮上した。

そこに慌ててキュウベえが飛び込み、ほむらの肩に乗る。

一瞬叩き落してやろうかとも思ったが、まあいれば投擲用の武器く

らいにはなるだろう。

そう考えてほむらはあえてキュウベエの同乗に何も言わなかった。飛行ユニットを全速力で飛ばし、自身の結界を抜けて東京を目指す。

その道すがら、目についた巨人を手あたり次第にZガンで押し潰した。

彼等はきつと、地球人を現地の虫程度にしか考えていないのだろう。

ならばこちらと同じ事。我が物顔で地球を歩く巨大な害虫としか思わない。

次々と害虫を駆除し、やがてほむらに乗せた飛行ユニットは東京のあのマンシヨンへ到着した。

飛行ユニットを盾に戻してベランダに飛び降り、中を見る。すると中には、驚いたような顔をした玄野達が立っていた。

いるのは玄野兄弟と加藤、桜丘と東郷、パンダ、西……更には解放されたはずのJJまでが何故かそこにいた。

いないのは和泉だけだ。まあ元々協調性のない性格なので別に不思議はない。

他には見覚えのない男が数人いたが、他のチームの人間だろうか？ ベランダの窓を開けて中へ入ると、玄野が駆け寄って来る。

「曉美！ 今まで何処にいたんだ!？」

「ちよつと見滝原市の方にね。ところでこれは何の集まりかしら」

ほむらが尋ねると、玄野は思い出したように表情を引き締めた。

「どうやらこれから、何か大きな戦いをする前だったらしい。」

「俺達はこれから、敵に捕まった人達を助けに行く。」

「ここにいる奴等は皆、俺達の呼びかけに応えてくれた人達だ。」

「曉美……お前も来てくれ！ お前が居てくれれば百人力だ!」

「おいおい……そんなお嬢さんで大丈夫なのか？ 言ッちや悪いがこの先の戦いに付いて来れるようには見えないぜ」

ほむら連れて行くこうとする玄野へ、心配そうに新顔の中年男が不満を口にした。



決してほむらを馬鹿にした口調ではない。

ただ純粹に心配している、大人としての反応だ。

そんな彼に加藤が口を挟んだ。

「見た目で判断しない方がいい……暁美は俺達の中では一番の実力者だ。」

ミツシヨンも、もう9回も100点を獲得している」

「きゆう……!? そりやすげえ……」

加藤がクリア回数を口にした事で、全員が絶句した。

それはそうだ。9回クリアなど正気の沙汰ではない。

それはつまり9回も、解放されるチャンスを投げ捨てているという事でもある。

凡そまともな思考で行き着ける境地ではないのだ。

「いいわよ。どのみち奴等の拠点には乗り込むつもりだったし……しばらくは玄野さん達と一緒に行くわ」

「ありがとう……助かるー!」

その後ほむらは、東京チーム以外のメンバーと軽い自己紹介を済ませた。

玄野の呼びかけに応じて来てくれた他のチームの戦士は8人だ。

まずは大阪チームから来た岡八郎と眼鏡の高校生。そして山咲杏。

金髪の強面は広島チームから駆け付けた前嶋龍二。

ブロンドの日本人に見えない美女はメアリー・マクレーン。見た目と名前に反して日本語以外は話せない。

関根誠人は京都チームから応援にやってきた眼鏡の男で、英語も堪能だ。

吉川海司は群馬チームから来たらしく、短髪で精悍な顔立ちをしている。

先程ほむらの実力を疑問視した中年男は矢沢年男というらしい。特に語る事のない容貌で、この中では真っ先に死にそうだ。

「ところで何でJJさんがいるの?」

「ガンツの玉を管理してるツという連中に無理矢理呼び出されたんだ。記憶まで戻されてな」

ほむらの質問に、玄野が憤りを見せながら答えた。

やはり予想通り、100点で解放されても結局はこうなるらしい。まあ100点を取るほどの優秀な戦士ならば遊ばせておきたくないだろう。

残念ながらこれは予想出来た事だ。

「ノープロブレム、アケミ！ マタ、一緒ニガンバロー！」

「そうね。ところでもうカタコトでキャラを作る必要はないんじゃない？」

「……それもそうだな。」

まあ、あれだ……戻ってきちゃったが、俺はむしろ好都合だと思ってるよ。

こうしてまた皆と一緒に戦えるんだからな」

ほむらにJJが話しかけるが、本当は普通に日本語がペラペラな事は皆知っている。

なのでそれを指摘すると、あっさりと普通の話し方に戻ってしまった。

部屋にいる時も最初からこうして話してくれていればもつと意思疎通出来たのに、と思わないでもない。

「暁美。これから俺達は敵の宇宙船に乗り込んで一人でも多く助ける」

「それは構わないけど、その前に一つやる事があるわ」

玄野達は既にやる気に満ちているようだが、肝心な事を見落としている。

敵の宇宙船に乗り込むのは間違いなくガンツの転移によるものだろう。

だが、転移して乗り込めば敵だってそういう手段がこちらにあると察してしまう。

あるいはもうとつくに気付かれています対策されている可能性がある。

故に、こちらの生命線であるガンツは可能な限り守らなくてはならない。

「ガンツ、敵は恐らく貴方にハッキングを仕掛けてくるはずよ。対策は可能？」

「ハッキング……うん、分かッた。何とかしてみるよ……」

技術力では敵の方が圧倒的に上だ。

地球人のプロテクトなど簡単に突破してガンツを乗っ取るだろう。

一応ガンツに忠告はしたが、これもどこまでもつかは怪しい。

残念ながら、少しだけ乗っ取られるまでの時間を稼ぐ程度にしかないだろうとほむらは考えていた。

「ハッキング……マジか……」

暁美、そんなことありえるのか？」

「可能性は高いと見ているわ。多分、転移出来る回数もそう多くはないでしょう。」

恐らく転移で乗り込んだ瞬間からガンツの位置はバレると思ってるわ。

もしかしたら帰る事すら出来ないかもしれない……それでもやる？」

ほむらの問いに玄野だけではなく全員が怯んだ。

ガンツは、ある意味では彼等の中で絶対の存在だったのだ。

無理矢理自分達を戦わせる嫌な物だが、その決定は覆せないし抵抗も出来ない。

星人ですらどうしようもない、そんな存在だと思っていた。

だがそうではない。技術は高度な異星人のものでも、それを管理しているのは所詮人間だ。

ガンツの絶対性など、もはや無いに等しい。

だがそれでも玄野は逃げなかった。

「……勿論だ！ 転送出来ないなら、その時に考える！ とにかく一人でも多く救うんだ！」

「行き当たりばったりね」

玄野の出した答えに若干呆れつつ、しかしほむらは笑った。

先の見えない挑戦にも恐れず突き進む勇氣。それが玄野にはある。それが今は眩しく思えた。

「いいわ。ならそれでいきましよう」

どのみち、何が正しいのかなど今は分からないのだ。

やってみなければ答えは分からない。人生はいつだってそうだ。ならば今はただ、暗闇の道突き進むしかない。

その先に行き止まりがあったらならば、行き止まりごと破壊してしまえばいい。

「よし・ガンツ、俺達を捕らわれた人達の所へ送ッてくれ！」

◇ 玄野達が一斉に、巨人の宇宙船へと転移した。

巨人の襲撃により廃墟と化した町の中で、和泉は茫然と立ち尽くしていた。

その視線の先にいるのは、物言わぬ死体となってしまった恋人……涼子の遺体だ。

何故こんな事になってしまったのか……それは巨人の襲撃から一夜が明けた後に財閥チームによって強制的に転移させられてしまったからだ。

戦いを終えて何とか帰って来てみれば、全ては手遅れだった。

ただの少女に過ぎない涼子が一人で生き残れるはずもなく、和泉は守ると誓った少女を守る為に戦う事すら出来ずに失ってしまった。

「あ、ああア……ああアああアああ……嫌だアア……！」

涼……子……目を、開けてくれよ……また遊園地……行くッて約束したろ……」

愛した少女はもう何も言わない。

これからだっただのに。

ずっと素っ気なく扱ってしまって、辛い思いをさせてしまった。

その償いをこれからしなくてはならなかったのに。

だというのに、もう出来ない。もう償えない。

愛していると伝える事も出来ない。

「……殺してやる」

フラリと立ち上がり、剣を手取る。

何もかもが憎くて仕方がなかった。

巨人も、財閥チームも……涼子を死なせた全てが憎らしい。

頭に爆弾だとか、そんなものはもうどうでもいい。

奴等を殺さなければ気が済まない。

奴等が生きている事が我慢ならない。

和泉は幽鬼のようにおぼつかない足取りで、どこかを目指して歩き始めた。

## 第42話 こっちもそーとーなバケモン揃いだよ

巨人の宇宙船に連れて行かれた人々は、文明人としては一切扱われない。

まず最初に衣服を溶かされて生まれたままの姿にされ、男女の区分けすらなく雑に洗浄機へ放り込まれる。

流れるプールのような水流を抜けた先では観賞用の個体と食用の個体に分けられ、食用の個体は血抜きをされてラインに乗せられる。

その後は巨人の酒のツマミになるかペットの餌にされるか……まあ、どちらも大して変わらないだろう。

運よく生き残り組に入っても身の安全が保障されるわけではない。生き残った個体は巨人のコロニーの中へ運ばれ、そこで観賞用としてガラスケースの中へ閉じ込められ、あるいは裕福層のペットにされる。

どちらにせよ、文明を持つと認めた相手に対する仕打ちではない。それもそのはずで巨人達は地球人を文明人などと考えていないのだ。

ただの現地の虫……自分達が移住しようとした星に、先に住み着いて巢をあちこちに築いていた害虫という認識でしかない。

何とも横暴なものだが、例えば人間が空き地に家を建てようとしたとして、そこにネズミやゴキブリ、シロアリが大繁殖していたらまずは駆除するだろう。

巨人にとつては地球人とは、その程度の存在でしかないのだ。

だがその油断こそ人類が反撃を行う隙となる。

ほむら達はガンツの転送によって宇宙船内に侵入し、水流の前に立っていた。

水に流されて人々が次の区画へ運ばれていくが、その先に何があるのかは全員が理解しているらしく必死に抵抗している。

玄野達は人々の姿を見付けるや一斉に行動し、人々を水から拾い上げ始めた。

すると見張りらしきスーツを着た巨人が何か喚きながら姿を現す。

だがそれと同時にほむらが左腕を薙いだ。

すると彼女の持つ盾からガンツソードの刃だけが飛び出して伸び、巨人の首をノータイムで斬り落とす。

役目を終えた刃は再び元の長さに戻り、盾の中へと消えて行つた。続けてほむらはZガンを構え、巨人に追い打ちをかけて死体を押し潰す。

「お、おい曉美……その盾、どーなッてんだ？」

「手品よ」

玄野の質問に適当に答え、続けてZガンで水流の先の通路を破壊する。

すると瓦礫が落ちて進路を塞ぎ、これ以上誰かが次の区画へ流される事がなくなった。

それからしばらくは捕まっている人々を引き上げる作業だ。

やがてそれが終わった所でほむらは玄野に声をかけた。

「玄野さん、私はここから別行動を取るわ」

「別行動ッて……どうしてだ？」

「見て」

ほむらの単独行動宣言に玄野が訝しむが、ほむらは視線で区画の隅を示した。

そこには人くらいならば通れそうなダストシユートに似た穴があった。

人が通るには少し位置が高いが、何とかよじ登れないほどでもない。

「あそこ、人間くらいなら通れそうだね。」

何人かはそれに気付いてあの穴からの脱出を試みたとしても不思議はない」

「そ、そうか。あの先にまだ生き残った人がいるかもしれない！

だッたら俺達も一緒に……」

「いえ、まだあそこが何処かに繋がっているという保証はない。

最悪、あの先は罨や焼却炉とかの可能性だってある。

もしそうだった時は、私一人の方がまだ動きやすい」

玄野が同行を申し出るも、ほむらはそれを却下した。

あの先に何があるか分からない以上は一人の方が動きやすい。

ほむら一人だけならば罠があったとしても自力で切り抜ける事が出来る。

それに魔法少女の力を使うにも人目がない方がやりやすかった。

ここまで来れば別に魔法少女の事を秘密にしておく理由もないのだが……説明が何となく面倒だ。

玄野は魔法少女の事は知らないが、しかしほむらの実力は知っている。

そして彼女の言う通りにもし罠だった場合はむしろ自分達は足を引つ張るだろうという事も分かっていた。

「わかった……死ぬなよ、曉美」

「玄野さんもね。また後で会いましょう」

玄野が差し出した手を軽く叩き、ハイタッチを交わしてほむらは走り出した。

跳躍してダストシユートへ入り、バイクを出して搭乗……狭い通路を駆ける。

この通路はサイズから見ても巨人が通る為のものではない。

恐らくは排水路か何かなのだろう。

少し進むと進行方向に得体の知れない人間大の虫を視認し、盾からレーザー砲を出して先制攻撃で消滅させた。

人間は……いるにはいた。

ただし全て、物言わぬ死体だ。

彼等はこちらから逃げようとして、途中であの虫に襲われて死んでしまった人達だろう。

気になるのは死体は共通して身体の一部が異常に腫れたように変質している事だ。

あの虫の持つ毒か何かにはやられたのだろうか。やはりあの虫には近付かない方がよさそうだ。

(……出口！)

進んだ先に光が見えてきた。



念のために一度バイクを停めて物陰に身を隠す。

それから小声でガンツへと指示を出した。

「ガンツ、私の姿を見えなくして」

ガンツに指示を出せる今ならばスーツの有無に関係なくステルスする事が可能だ。

ねぎ星人の時などもスーツを着ていない人間達が見えなくなっていたのと同じように、ガンツならば自在に周波数を変える事が出来る。

ほむらの姿が背景に溶け込み、その状態で出口の先を覗き込んだ。

出口の先にあったのは、未来的な街並みだ。

まるでSF映画や、あるいは未来を描いた漫画に出てきそうな高度な技術力で創られた街並みが広がっており、ここが宇宙船の中だとはとても思えない。

建造物は全てが巨人サイズであり、まるで自分が小人になったような気分させられる。

恐らく巨人は本質的には地球人とそう大きな差はないのだろう。

外見とサイズにさえ目を瞑れば彼等の生活はまるで地球人のようで、町のベンチには孫らしき子供を連れた老婆の姿も見える。

ほむらはそこに、かつて同じ部屋にいた老婆のカヨと亮太の姿を思い出していた。

他にもジョギングをしている老人やペットを連れた若者の姿もあり、種族は違えど平和な日常だと思わされた。

……ただしそれも、ペットの巨大犬が貪っている餌が攫われた人々の残骸でなかったら。

そして道行く人々が街頭テレビで地球人の必死の抵抗を嘲笑しながら観戦していなければの話だ。

(……玄野さん達は連れて来なくて正解ね)

巨人達の所業に嫌悪感を覚え、今すぐに撃ち殺してしまいたい衝動に駆られるがそれは冷静な行動ではない。

ここで無暗に殺しても騒ぎを起こすだけで、巨人側の軍人が出て来てしまうだろう。

銃の引き金を引きたい気持ちを抑えて再びバイクに跨り、まずは生き残りの人間を探す事にした。

「……こっちなね」

手の中でダークオーブが光り、人の反応をキャッチする。

すぐに舵を切って人間の生命反応を指してバイクを走らせた。

そうして辿り着いたのはどこかの建物の中だ。

中央には巨大なガラスケースがあり、展示用なのか大勢の人間が一糸まとわぬ姿で捕まっていた。

ほむらはまずXガンのマルチロックオンで建物内にいる全ての巨人の脳を照準に入れた。

彼等を生かしたまま人々を解放すれば騒がれるだろうし、邪魔されるかもしれない。

故に抹殺は必須だ。

引き金を引くと巨人達がバタバタと倒れ、驚く人々の前でステルスを解除した。

そしてXガンでガラスを破壊して皆に呼びかける。

「ここから脱出したい人は付いてきて！」

ほむらがそう言うと、裸の人間達は次々とガラスケースから走り出した。

男女関係なく全裸なので少し目のやり場に困るが、今はそんな事を言っている場合ではないだろう。

「助かったのか……？」

「女の子？」

「何で服着てるんだ……？」

「軍の人？」

何か口々に騒いでいるが、一々話をしていて暇など無い。

ほむらはバイクを収納して歩き出し、その後を人々が続いた。

建物から出ると当然のように目立つが、ほむらは進路上にいた巨人をZガンで圧殺しながら進んでいく。

すると周囲の巨人は怯んだように距離を取り、歩きやすくなった。

「はははッー…ぎまッー！」

死んでやがンの！ このでけークソ共が！

おらおらッ！ 何とか言ッてみろよ！ よえーよえーッ！」

「ちよッと亮ちゃん！ やめなッて！」

後ろの方で捕まっていたうちの一人が巨人の死体を蹴って騒ぎ始めた。

有無を言わさず捕まって鬱憤が溜まっていたのだろうが随分と判断力の足りていない男のようだ。

彼女らしき女性が止めているが、それでも蹴りをやめない。

だが次の瞬間、亮ちゃんと呼ばれていた男が別の巨人に踏み潰された。

重そうなスーツを着こんだ巨人は恐らく軍人だろう。

ほむらはすぐにそちらにZガンを向けて連射し、巨人を圧殺した。

「余計な事をしてないでちゃんとついてきて！ 私から離れた人まで助けられるほど手は空いてないわよ！」

一人死んでしまったが、これで皆も危機感を抱いてくれたようだ。

まだ助かつてなどいない。安心するには早すぎる。

そんな当たり前の事すら一人死ぬまで自覚出来ない平和ボケぶりには、流星に少しばかり呆れるしかない。

ほむらはそのまま巨人達を牽制しながら来た道を戻り、排水路を逆走して流れるプールまで戻った。

（実際はプールなんて生易しいものではないが、とりあえずそう呼ぶ事にする）

しかし問題はここからだ。

どうやって空を飛ぶこの宇宙船から、この大勢の人間を逃がせばいいのか……。

飛行ユニットで一人一人運ぶのは論外として、せめて大勢乗せられる入れ物でもあればいいのだが。

そこまで考えた所で、ほむらは水流を更に逆走する事を決めた。

壁をレーザー砲で破壊して無理矢理戻り、その先にあった檻に目を付ける。

人々は元々、あの檻に閉じ込められてここまで運ばれて来た。

ならば逆走すれば必ずアレがあると思ったのだ。

「皆、この中に入って」

「ええ……？」

「またそれに入るの？」

「どうして……」

「早くしなさい。嫌なら置いていくわ」

どよめきが起こるが、ほむらは有無を言わずに人々を指示に従わせた。

ほとんど無理矢理詰め込んでしつかりと檻を閉め、それから飛行ユニットとYガンをも盾から出して、檻に向けてYガンを発射した。

すると当然のようにYガンから発射されたアンカーが檻に絡みつき、光のワイヤーで縛ってしまふ。

更にアンカーは地面に刺さり……ほむらは、魔力で強化された腕力で地面から無理矢理アンカーを引き抜き、飛行ユニットへしつかり結び付けた。

念の為一つだけ持って来ていたが、やはりYガンは優秀なサポート武器だ。

色々な用途で役に立つ。

そしてほむらは、飛行ユニットを発進させて空を飛んだ。

◇

人々を救助しても戦いは終わりではない。

宇宙船の中から無事に（一人死んだが……）人々を救助したほむらは、再び宇宙船へと戻っていた。

しかし町の様子が先程とは明らかに違う。

あちこちで悲鳴があがっているし、巨人が山ほど死んでいる。

（……他に誰がいる？）

ほむらは目を細めて巨人と戦っている者を見る。

ガンツソードが伸びては巨人を叩き斬り、またすぐに別の巨人を血祭りにあげる。

どうやら町を襲撃しているのはかなりの手練れようだ。

更に注視すると、それはほむらもよく知る黒いロングヘアの美男子

……和泉紫音だった。

姿を見かけなかったが、どうやら彼は既に宇宙船に乗り込んでいたらしい。

しかし妙だ、と思う。

和泉にしては冷静さが足りない。目につくもの全てを剣で叩き斬るその姿にはスマートさがなく、後先をまるで考えていないように見えた。

こんな街中で目立つような戦いをしては、すぐに息切れしてやられてしまうだろうに、一体何を考えているのか。

軍人でもない巨人などいくら虐殺しても勝敗の天秤は大して傾きやしない。

案の定、すぐに巨人側の軍人が出て来て和泉は苦戦を強いられていた。

「……仕方ないわね」

Xガンで軍人達の脳をマルチロツクオンし、一斉に破壊する。

すると軍人が一斉に倒れ、辺りが悲鳴に包まれた。

ほむらはすぐに飛行ユニットを出して乗り込み、和泉の前まで走らせてから停止する。

「乗りなさい！」

「……！ 曉美ほむら……！」

ほむらの指示に対し、和泉は一瞬驚きを見せるもののすぐに飛行ユニットの輪の上に乗り込んだ。

流石に判断力は大したもので、動きは速い。

ほむらはすぐに飛行ユニットを浮上させ、巨人の町を飛ぶ。

驚く巨人、騒ぐ巨人、手を伸ばして来る巨人……その中から邪魔になりそうな巨人を素早くZガンで圧殺し、更に高く飛翔してガンツ男にステルスを起動させるべく声を発した。

「ガンツ！ もう一度ステルス！」

しかし、何の変化もない。

妙だ、と思いつながらほむらは舌打ちを噛み殺した。

恐らくだが、ガンツの方に何かトラブルが発生したと見ていいだろう

う。

敵によるハッキングか、あるいは場所を特定されて攻撃を受けたか……。

ともかく、ここから先はガンツに頼った戦い方は出来ないと考えた方がよさそうだ。

思考を切り替え、和泉へ声をかける。

「貴方らしくない戦いだっただわね、和泉紫音。

あれではすぐに息切れして死んでいたわよ」

「……それでも構わない」

和泉の無謀な戦いを咎めるほむらだったが、しかし和泉の返答はどこか捨て鉢であった。

今の彼からは生きようという意思も、以前までの自信も感じられない。

まるで自棄になった時の美樹さやかのような、すぐにでも死んでしまいうような気配がある。

「何かあったの？」

「……涼子……死んだんだ……俺の彼女……」

「……そう」

「最初は成り行きで付き合ってたけど……いつの間にか、本気で好きになっちゃった……」

和泉の無謀な戦いの理由は恋人が巨人のせいだからだった。少しいやめだ、とほむらは思う。

和泉はどちらかといえば自分以外の命など何とも思っていないタイプであるように思っていた。

恋人や親兄弟が死んでも自分さえよければ顔色一つ変えない冷血漢であるようなイメージを抱いていたのだ。

実際それは間違いではない。

和泉は自分さえよければ、それこそ罪のない人間を大量虐殺するよきな事だっって平気で出来てしまう人間で、良心のタガが先天的に外れている。

善悪の区別も知識としては知っているし、普段は紳士的で魅力的な人物を演ずることも難しくない。

だが本当の意味で他人と共感する事はなく、彼の中では本質的には善も悪もないのだ。

しかしどうやら、そんな彼でも一部の気に入った者に対しては愛情や執着を示すらしい。

故にこそ、それが奪われた時の衝動は計り知れない。

今の彼には最早計画性など欠片もなく、自らが破滅するまで激情に身を任せる事しか出来ないのだ。

「奴等を殺す……殺してやる……一匹残らず」

ほむらは何も言わなかった。

元々和泉紫音は誰かに説得されて行動を変えるタイプではない。

ましてや今の彼は自滅に向かって突き進む、導火線に火のついた爆弾だ。

他人に何かを言われても止まりはしないだろう。

「なら、尚更あんな所で暴れている場合じゃないでしょう。」

この居住区にいるのは非戦闘員よ。

いくら倒しても敵の戦力が減るわけじゃない」

「非戦闘員などいない……仕掛けてきた時点で、全員が殺すべき敵だ」  
「それには同意しないでもないけど、やり方があるって言ってるのよ。」

今はまず敵の戦力を減らす事が重要でしょ」

ほむらと和泉を乗せた飛行ユニットは居住区を過ぎ、高速道路のような道が交差しているエリアへ入った。

ここが巨人の町というのもあるが、本当に広い。

あちこちを車らしき乗り物が走り、巨人達が行き来している。

この全てと一々戦うなど馬鹿げている。どう考えてもこちらが息切れするだけだ。

とにかく、この宇宙船の司令部か何かを見付けて頭を叩かなければ、いかに今のほむらが過去最強の力を得ているといっても人類に勝ち目はないだろう。

そう考えてグリップを握り、飛行ユニットの速度を上げて街頭テレ

ビの前を通過して行った。

ほむらが通り過ぎた街頭テレビの中では、巨人の兵士と戦う地球人達の決死の反抗が映し出されていた。

その映像の中で戦っているのは玄野達だ。

まるでCGで作られたような歪な化け物を相手に黒スーツの戦士達が必死に戦っているが、その戦況は決していいものではない。

玄野達より先に人々を救いに来たチームはほぼ全滅し、玄野達の仲間である大阪の眼鏡も片足を失って倒れている。

それを発見した北海道チームの矢沢年男が足をきつく縛って止血しているが眼鏡はもう戦闘不能だろう。

「また……転送して……もらえますかね……」

「転送か……なんか……ちよつと今……難しい、みたいだな」

部屋に戻れば怪我も治る。

その事を期待して眼鏡が問いかけるが、矢沢の答えはあまりいいものではなかった。

そもそも、彼等がここにいること自体が既におかしいのだ。

ほむらと別れた一行は一度、地上に戻すようにガンツに呼びかけたのだが何を間違えたのかこんな、敵だらけの場所に送られてしまった。

残念ながらもう、ガンツは正常に機能していないと考えていいだろう。

「もう……みんな……死ぬんですかね……?」

「……そう、かもな……」

でも……捨てたもんじゃないかもだぜ。

あつちはバケモンだけど……こつちもそーとーなバケモン揃いだよ」

矢沢がそう言うと同時に、彼の言葉を証明するようにメンバーの一人であるメアリー・マクレーンが蹴りで怪物を砕いた。

更にそれと同時に東京チームのJJが正拳で怪物を殴り飛ばし、後ろから襲い掛かってきた怪物を振り向き様の一撃で打ち砕いた。



そうしてから彼はメアリーへ親指を立てて、フレンドリーに話しかける。

「Well done! Let's do our best in this way!」

「ねえッ英語喋れないッつつたよねッ!? 何? 嫌がらせッ!」

アンタが日本語喋れる事もうみんな知ってるンだけど!」

戦闘の最中なのに、妙に余裕のあるやりとりだ。

そんな彼等から離れた位置では玄野と加藤がソードで敵を次々と蹴散らし、東郷の射撃が僅かな狂いもなく怪物を仕留めていく。

桜丘の蹴りが東郷に近付こうとした敵を粉碎し、ホイホイの剛腕が纏めて敵を枯れ木のように薙ぎ倒し、空へ吹き飛ばした。

アキラは吸血鬼の力で生成したマシンガンを両手で連射して敵を寄せ付けず、兄と背中合わせになって互いの隙を補っている。

「殺せる! 大丈夫だ! 俺達ならやれる!」

まだいけるなア! アキラッ!」

「ああッ! 兄貴こそハマスンじゃねーぞッ!」

長年仲違いしていたが、それでもやはり兄弟だからなのだろうか。

玄野とアキラの息はピッタリであり、確かな絆を感じさせた。

「こう見えても俺は……銀行員ヤツとるンヤッ!」

そして誰よりも多く敵を蹴散らしているのが大阪チーム最強の七回クリア改め、八回クリアの男、岡八郎だ。

ハードスーツの愚鈍そうな外見とは裏腹に俊敏に動き、肘の刃で次々と敵を斬り裂き、掌から発射されるレーザーで纏めて怪物を消し飛ばす。

「銀行に強盗が入った時はなア……ピストルの弾丸を目で受け止めたンヤッ!」

嘘か本当かよく分からない事を言いながら、一際巨大な怪物へ殴りかかった。

肘から炎を発して拳を加速して一撃で叩き割り、そして跳躍。

天井に張り付いていた最も不気味で、危険そうな敵を躊躇なく殴り飛ばす。

怪物はこれに対し、吹き飛びながらも不可視の念力で岡を攻撃した。

だがハードスーツの防御力を突破するには至らず、岡の立っている地面が抉れたただけだ。

そのまま岡は正面から念力を受けつつ前進し、怪物の足を殴って破壊した。

怪物が体勢を崩して倒れ込むと、それに合わせて逆立ちして怪物の腹を蹴り上げる。

そして足で投げ飛ばして距離を空け、掌にエネルギーをチャージ……ビーム砲を連射した。

「なんなんだよアイツら……ほんつとに……よく、こんな奴等が集まってきたな……」

矢沢が呆れたように、それでいて感心するように言う。

それと同時に岡八郎が怪物を完全に消滅させ、この場での脅威は消えてなくなった。

## 第43話 地球人の反撃が始まったようだね

空から見ると、この町の圧倒的な広さに改めて驚かされる。

広い……本当に広い……いや、広すぎる空間だ。

人間がミニチュアに見える程に大きい巨人の町なのだからでかいのは当然だが、明らかに外から見た時の宇宙船の大きさと内部のサイズが合っていない。

いくら広いと言っても限度というものがある。

町と言ってもここは宇宙船の中だ。ならば壁があるはずである。

だということにいくら目を凝らしてもこの宇宙船の限界が見えない。

それどころか海と見紛う程の巨大な河まで存在しており、しかも河を挟んだ向かい側にはまた別の町があるのだから意味が分からなかった。

外から見ても宇宙船は確かに十分に大きかった。

数キロ……いや、もしかしたら十キロは超えていたかもしれない。

だが、それでもここまで巨大な空間を内包出来るとは考え辛い。

その摩訶不思議な現象に顔をしかめるほむらだったが、答えは肩に乗っているキュウベえから与えられた。

「どうやらあそこにある塔は空間を圧縮して、宇宙船の中に広大な空間を形成しているようだね。」

あの塔を破壊する事が出来れば宇宙船は内部から自壊するだろう」  
キュウベえが喋ったことに輪の上の和泉がぎよつとしたが、ほむらはあえて説明しなかった。

そんな事より、今はキュウベえの口にした情報の方が重要だった。  
キュウベえに言われて河の方を見れば、確かに塔のような施設が見える。

それは天井まで届く巨大さで、一際存在感を放っていた。

「とんでもない技術力ね」

「本来なら君達地球人では逆立ちしても戦える相手じゃない。」

彼等の技術は子供用の玩具ですら人類の最先端科学の遙か先を行っている」

「妙に詳しいのね」

「巨人は君達地球人ほどではないけど感情エネルギーを持つ種族だからね。」

「以前から僕らも彼等には目を付けていたのさ」

「キウウベえが目を付けていたというのはつまり、魔法少女候補としてだろう。」

「巨人は地球人と姿が多少違うが男と女がいて、感情を持っている。」

「その感情はインキュベーターにとっては宇宙の熱的死を延ばす貴重なものだ。」

「だから彼等はずっと、巨人を気にしていたのだろう。」

「ただ、目を付けているという言い方が少し引っかけた。」

「契約はまだ誰ともしていないの？」

「そうだね。彼等は地球人よりも文明が発達しているから、僕らの事に気付かれれば逆に攻め込んできかねない。その分接触は慎重になきゃならなかったんだ。」

「それに彼等から搾取出来る感情エネルギーは、地球人と比べてしまえば小さなものでね……巨人百人と契約するより地球人一人と契約した方が大きなエネルギーを得る事が出来るんだ。」

「つまり資源として、あまり大きな価値はないのさ」

「どうやら巨人側にはまだ魔法少女も魔女もいないらしい。」

「ほむらは巨大なバママを想像し、そんなのとは戦いたくないなど失礼な事を考えた。」

「しかし問題はあの塔をどうするかだ。」

「破壊すればいいとは言われても、巨大すぎて大抵の攻撃は効果がないだろう。」

「ほむらと塔のサイズ差は鼠から見た高層ビルに等しい。」

「これではXガンを当てても、高層ビルに画鋲を刺した程度の傷にしかならない。」

「Zガンも同様で、高層ビルの天井が五円玉くらいの範囲へこむ程度のダメージしか与えられない。」

「それでも続けられ壊せない事はないだろう。」

塵も積もれば山になるように、山を崩し続ければいずれは積もった塵になる。

家の壁だって画鋲で休まず穴を空け続ければ崩壊するだろう。しかしそうやって崩すには時間がかかるのは言うまでもなく、そんな悠長な事などしてられない。

そう考えていると、塔から少し離れた位置にガンツロボットが何体も転送されてきた。

「どうやら地球人の反撃が始まったようだね」

キユウベえが他人事のように言うのを聞きながら、ロボットの巨大さにほむらは若干驚きを感じていた。

同じガンツのロボットでも、ほむらや岡が使っていた物とはサイズが違う。

ほむらが乗っていたものは精々20mが関の山だったが、あのロボットはその十倍……いや、百倍はありそうだ。

何せ巨人の町から見ても尚、怪獣映画の怪獣並みの大きさなのだ。あれならば確かに塔を破壊するのも不可能ではない。

巨大ロボットが一斉に進撃し、それに対して巨人側も飛行物体を出して対抗し始めた。

恐らくは巨人側の戦闘機のようなものだろうが、まるで太刀打ち出来ていない。

戦闘機の砲撃が当たってもまるで気にせず、逆に殴り返して撃墜していた。

牛鬼に呆気なくやられてしまった岡のロボットとはえらい違いである。

このままでは勝てないと思ったのか、今度は巨人側もロボットを出して応戦した。

右腕が砲身になっているそれはガンツロボットへ向けて砲撃を開始し、ガンツロボットは直撃を浴びながらも怯まず前進を続けた。

ほむらは巨大ロボット同士の規模が違う戦いを少し観戦していたが、やがて飛行ユニットを発進させる。

残念ながらここにおいても出来る事がない。

今やるべきは、巻き込まれないように退散してこの宇宙船の司令部を探す事だ。

しかしこうも広いと流石にどこに行けばいいのか分からない。なのでほむらは飛行ユニットに魔力を込めて遠隔操作しつつ、自らは飛行ユニットから飛び降りて巨人の肩へと着地した。

いい具合に物陰にいてくれたので、他の巨人にも見られていない。そのまま巨人の側頭部に魔力を流す。すると巨人の首に砂時計と彼岸花を組み合わせたような刻印が刻まれた。

ほむらはまどかに、結界を見滝原に維持している限りは魔女の能力は使えないと説明した。

だが実は一つだけ、このままでも使える魔女の能力がある。

それこそが『魔女の口付け』だ。

魔女に操られた人間が結界の外に出ても操られたままなのと同じように、この力だけは結界の有無に関係なく使用出来る事が出る。

ちなみに口付けとは言うが、別に接吻をする必要はない。

ほむらによって刻印を刻まれた巨人は目から生気が失われ、彼女の意のままに動く操り人形へと変わってしまった。

「さあ、案内しなさい。この船で一番偉い巨人は何処にいるのかしら？」

「……………アー」

「そう、いい子ね」

巨人と人間は言語が違う。

だが刻印を刻んだ今、この巨人はほむらの眷属であり下僕だ。

言葉を介さずとも、テレパシーでその意思は伝わる。

巨人から情報を抜き出せるだけ抜き出し、そしてほむらは彼の頬を優しく撫でてから飛び降りた。

すると刻印を刻まれた巨人は奇声をあげながら走り出し、他の巨人へと襲い掛かる。

そうして哀れな巨人を使い捨てたほむらは背中から魔力の翼を出して飛翔……飛行ユニットへ戻り、巨人から抜き出した情報を頼りに移動を開始した。

今のほむらならば飛行ユニットなしでも自力で飛び続ける事が出来るが、しかしだからといって無闇に消耗していいわけではない。

魔女と融合した今、魔力を使いすぎて魔女化する事はなくなつたし、むしろ溜め込んだ呪いはそのまま魔女の力として再利用出来る。

そして呪いを吐き出せば今度は魔法少女がグリーンフィールドで魔力を回復するのと同じように、魔法少女の力が回復する永久機関だ。

だが決して疲労しないわけではない。

自転車より速く走れる陸上競技者が疲れを避ける為に普段は自転車に乗って移動する事もあるように、ほむらも普段の移動はなるべく飛行ユニットやバイクで済ますつもりだ。

この間、何が起こったのか全く分からない和泉は完全に状況に置いていかれてしまっている。

「しつかり掴まってなさい。飛ばすわよ」

この塔はいかに魔女と魔法少女の力を併せ持つほむらでも簡単に壊せそうにない。

ならばこの戦場はロボット達に任せるべきだ。

ほむらはそう判断して、司令部を目指した。

この船のトップを始末するなり操るなりしてしまえば、壊せずとも戦いを終わらせる事は容易いはずだ。

◇

無駄に広い宇宙船を翔け抜け、ほむらと和泉は遂に宇宙船の最上部へと辿り着いた。

最上部は今までとは異なり、いかにも宇宙船の中といった景観だ。窓の向こうには宇宙空間が広がっており、ほむらはここで初めての宇宙船がいつの間にか地球から離れ始めていた事を知った。

少し離れた場所では地球人の女性がマイクを握って何かを話している。

「地球の皆さん、戦いは終わつたのです！

私は今彼等の船にいます！ 感激です！

彼等はとても紳士的で……」

女性の前にはカメラらしきものがあり、ほむらは凡その事情を何と

なく理解した。

恐らくアレは情報操作だ。

あの女性の言葉を地球の報道に乗せ、あたかも巨人の侵略が終わって和平が成立したように見せかけているのだろう。

そうする事で黒玉のメンバーを『和平が成立したのに巨人を殺している悪人』に仕立て上げるつもりか。

あの女性が何故協力しているのかは……まあ、後ろにいる巨人達が怖いからだろう。従わなければ殺されてしまうのだ。

ほむらは無言でZガンを発射してカメラを構えている巨人を殺害し、飛行ユニットを割り込ませてマイクを持った女性を攫った。

それから離れた位置に着地し、女性へ声をかける。

「もう大丈夫よ。辛かったわね」

「……あッ……あ……うううウウ……あアああ……ッ」

助けられた、と自覚したのだろう。

気丈にリポーターとしての笑顔の仮面を被っていた女性は堰を切ったように号泣しはじめた。

さぞ辛かっただろう、と思う。

侵略者に攫われた拳句に味方を罵倒させられ、敵に利用されたのだから。

「和泉紫音、その人をお願い」

和泉に女性リポーターを預け、飛行ユニットを降りる。

それに同時に、慌ただしく足音が響いて巨人の兵士が湧き出て来た。

一方こちら側はほむらと和泉のみ。

他のガンツチームの姿は見えず、まだ誰もここに来ていないようだ。

「どうやら私達が一番乗りのようね」

髪をかきあげ、いつも通りの涼し気な声で言う。

兵士の数はざっと百人ほど。

いずれも纏う空気からして、この宇宙船の中でもトップレベルの猛者なのだろう。



だが問題ない。少なくとも巨大ロボに比べれば全然何とかなる相手だ。

ほむらが挑発するように指を動かすと、憤慨した巨人達が順番争いを始めた。

「どうやら行儀よく一人ずつ戦うつもりらしい。」

彼等なりの誇りか何かなのだろうが、そんな事をされては面倒で仕方ないだけだ。

なのでほむらは巨人が集まっている個所に適当にZガンを撃ち、問答無用の先制攻撃で二人ほど屍へ変えた。

「生憎だけどそちらに合わせる気はないわ。来ないなら好きにやらせてもらうだけよ」

どうせ通じていないだろうが一方的に宣言し、そして跳躍した。

まずは巨人達の中央へ行き、ガンツソードを伸ばして横回転。

回避が遅れた巨人の首が宙を舞う。

仲間をやられた事に激昂した巨人が右ストレートを放つが、それに合わせて今度は縦に回転。

廻る刃と化したほむらが巨人の腕を斬り裂きながら顔へ接近し、そのまま首を斬り裂いた。

「~~~~~！」

何かを喚きながら巨人が剣を薙ぐ。

剣……とは言ってもその形状は独特で、トンファアの昆の部分の刃にしたような形をしている。

空中で身動きが取れないはずのほむらは、しかし身体を捻る事で剣を回避して刃の上へ乗った。

更にステップ。回転しながら跳躍して、着地すると同時にまた跳ぶ。

まるで体操選手のように舞い、剣を薙いだ巨人の頭へ跳び乗った。

それを見て別の巨人達が一齐に武器の持ち方を変え、刃の向きを前へ向ける。

そして同時に刃を突き出し、ほむらに乗せた不幸な巨人は四方から串刺しにされてしまった。

だが肝心のほむらは既にいなくなっており、また別の剣の上を渡っている。

まるで散歩でもするかのようにゆっくり歩き、そしてほむらは自身を囲む巨人達へ向けて悪魔染みた嘲笑を向けた。

「~~~~~!」

「!! !? つ!!」

「つつ!!」

巨人達が何かを言い、そしてほむらに乗せた剣の持ち主以外が彼女を囲むように円陣を組む。

そして逃げ場なしの同時攻撃を放つが……何せのが小さい。

ほむらは僅かな動きだけで剣と剣の間に身を潜らせ、易々と回避してしまふ。

続けて繰り出された剣を、上体を逸らして胸の前スレスレを通過させつつ両手を後ろへ向けて、いつの間にか武器換装していたXガンを発砲。

足を狙って放たれた剣は軽くステップを踏んで避けながら左右へ発砲。

胸狙いの剣の上にフワリと着地し、後方宙返り。

弧を描きながら銃を撃ち、着地と同時に更に撃つ。

すると時間差で次々と巨人が顔の穴という穴から血を流して倒れ、最後にはほむらに乗せた剣ごとその持ち主が仰向けに崩れた。

トン、と軽やかに地面に着地したほむらに巨人達はすぐには飛び掛からない。

今の攻防で、ほむらが恐るべき敵であると認識したのだ。

「■■■■■■……!」

巨人のうちの一人が何かを呟きながら手元の何かを操作した。

そして拳を放つと、拳が空間を飛び越えてほむらの背後から迫った。

だがほむらはこれを初見で軽々と避け、髪をかきあげる。

この仕草に舐められていると考えた巨人は連続して拳を放ち、ほむらを四方八方から拳が襲った。

だが当たらない。悠々と髪をかきあげるほむらに掠らない。避けていないのではない。避ける動作が最小限すぎて、避けていないように見えるだけだ。

そのまま拳を避けつつゆっくりと巨人へ歩み寄り、Zガンを向ける。

その間も巨人は拳を出し続けているが、やがてほむらが発射したZガンによって頭を潰されてしまった。

「次は……あら？ 来ないの？」

ここまでにはほむらによって屠られた巨人の数は二十人ほど。

まだ八割近くが残っている。

だが逆に言えばたった一人の小人に、精鋭が二割もやられたのだ。

巨人達にしてみればこの脅威は無視出来ないものであり、誰もがほむらを警戒して攻め込めなくなっていた。

唯一恐れを見せていないのは奥で腕組みをしている金髪の巨人くらいか。

あれだけは別格の空気を纏っている。

「Come here！」

「Arrived！」

「hurry up!!！」

ほむらと巨人達が睨み合っていると後ろの通路から英語が聞こえてきた。

それと同時に足音が響き、十数人のガンツスーツを着たアメリカ人が雪崩れ込んでくる。

アメリカは滅亡したと聞いていたが、やはりそう簡単になくなるような国ではなかったらしい。

今にして思えばあれも地球側の戦意を失わせる為の偽情報だったのだろうか。

「曉美さん！」

「あら、菊池さん」

英語に混じって日本語が聞こえてきたので視線を向ければ、そこには以前知り合いになったフリージャーナリストの菊地誠一がいた。

もう死んでいるかと思ったが、お互いしぶといものだと思ってしまう。

「どうして菊池さんがここに？」

「アメリカのチームに接触して、一緒に連れて来て貰ったんだ。」

「今宇宙船から発信されている嘘の報道をどうにかしたくてね」

「何というか……遅いわね」

ほむらは菊池と話しながらも巨人の出方を伺う。

わざと視線を外して隙を見せても攻め込んでこないとは、随分警戒されたものだ。

「……あの巨人達は？」

「この船を守る精鋭達ってところかしら。多分ね」

実の所、この巨人達が精鋭かどうかはほむらにも分からない。

雰囲気や守っている場所的にそうだと思うのだが、何せ相手から直接日本語で『僕らは精鋭です』と教えられたわけではないのだ。

だから所詮は憶測に過ぎないわけだが……まあ、倒してしまえばそれも分かるだろう。

「Hey girl!」

アメリカチームのうちの一人がほむらの肩を掴み、歯を見せて笑顔を浮かべた。

そして何かを話し始めたが、それは日本語に訳すならば『ここからは俺達に任せろ』、『もう大丈夫だ』、『俺達が守ってやる』、『くにへかえるんだな。おまえにもかぞくがいるだろう……』といった内容だった。

その提案は素直に嬉しいが、生憎守られるのは性に合わない。

まどかを守る私になりたいと願ったあの日から、どうにも誰かに守られるのは苦手なのだ。

だからほむらは肩に乗せられた手をやんわりとどけ、不敵に微笑んで見せた。

「それには及ばないわ」

そして再び巨人達との闘争へ身を投じた。

## 第44話 勝者に従おう

かつて、とある惑星系が消滅の危機を迎えた。

そこに住んでいた宇宙人達は宇宙の放浪者となり、移民先の惑星を探してそこに侵略を仕掛けたが撃退され、次の移民先として地球を選んだ。

これに対し、最初の移民先に選ばれた星の星人達は地球に敵を撃退出来るだけの最低限の技術を与えた。それがガンツ——いや、黒い玉の正体だ。

しかしそれは決して地球人の事を想つてのものでもなければ地球を想つてのものでもない。

彼等は進んだ科学力を持っていたが、インキュベーターと同様に感情がなかった。

地球を残す選択をしたのも特に深い理由はなく、彼等にとって地球人は塵や埃と何も違いはない。

違いがあるとすればより高度か、そうでないかというだけだ。

その技術を受け取ったのがドイツの企業マイエルバッハの会長、ハインツ・ベルンシュタインの娘であった。

彼女は生まれつき脳に障害があつた為に言葉を発せず、それ故にレコーダーとして最適だったのだろう。

最初は娘の発する謎の数式が何を意味しているのか分からなかった。ハインツだったが、学者や暗号解読のプロフェッショナルに解読させたところ、それが1つの言語であることが判明した。

ハインツはこれこそ傾いた会社を立て直す手段だと思い、娘が示した数式を元に科学者達に地球外の技術の結晶……即ちブラックホールを造らせた。

このブラックホールは各地で呼び名が異なり、ガンツだの黒アメちゃんだのと呼ばれているがその大元こそがマイエルバッハなのである。

そしてハインツはこの未知の超技術を各国へ売り渡し、死者を使つた賭け事を開催した。

それこそ毎晩行われていたあの殺し合いの真相であり、あの戦いは全てリアルタイムで配信されて賭けの対象にされていたのだ。

◇  
全てが終わりへと集束しつつあった。

巨人達の町ではハッキングによって巨大ロボットの操縦者として自ら参戦した西丈一郎が怒涛の勢いで塔を攻撃し、最早破壊は時間の問題だ。

巨人による情報操作も解かれ、そして各国のチームが次々と母船へ乗り込んでいた。

更に遅れて玄野達も宇宙船へ乗り込み、そこで彼等は最後の戦場である巨人の母船……その司令部へと突入した。

そしてそこで見えたものは――。

「あら、遅かったわね」

――無数の巨人の屍の上で、いつも通りに涼し気な顔をして佇む暁美ほむらの姿であった。

倒れている巨人の数はざっと100は超えているだろうか。

人間の死者は一人もおらず、先に駆け付けていたアメリカチームはただ茫然としている。

「オウ……」

「ク、クレイジーガール……」

「ホーリーシット……」

「オーマイゴッド……」

その反応だけで、ここで何があったのかを玄野達は察した。  
きつと、いつも通りだ。

いつも通りに、あの少女が敵を蹴散らした……きつと、それだけなのだろう。

巨人側にはまだ巨人の英雄であるイヴァ・グーンドが控えているが、彼も冷や汗を流してほむらを凝視していた。

「さあどうするの？ まだ続ける？」

「……………」

ほむらの問いに、イヴァ・グーンドは手元の機械を操作した。

そしてほむらを真つすぐに見つめて口を開く。

「一人の戦士として……お前に挑みたい……小さき戦士よ」

それは日本語であった。

彼等の高い技術力によってこちらの言葉を解析して話せるようになったのだろうが、それをここで使うというのはほむらに対する敬意の表れだ。

もう小さな現地の虫とは思わない。

恐るべき……そして尊敬すべき高みの戦士として全霊をもって挑みたい。

そうイヴァ・グーンドは考えていた。

「これほどの高みを、この星で見える事が出来るとは思わなかった……」

お前のその強さ……最早敬意しかない……」

イヴァはそう言い、剣を構える。

そこには油断も慢心もない。

挑戦者は自分で、迎え撃つのは相手だと理解している。

「大層な評価は結構だけど……戦況は分かっているのかしら」

「……ああ。我らの負けだ」

「そこまで分かっているなら他にやる事があるんじゃない？」

……。  
和平交渉とか、この宇宙船に暮らしている人々の助命嘆願とか

地球とそれほど常識が違わないという前提で話すけど、市民の命を守るのが貴方の使命であって義務ではないの？」

「……その通りだ」

ほむらの二つの瞳とイヴァの四つの瞳の視線がぶつかり合う。

現状、圧倒的に優位なのはほむらだ。

仮にほむらが負けても人類が詰む事はない。

だがイヴァが負けてしまえば英雄イヴァ・グーンドという精神的支柱を失った巨人はいよいよ進退窮まり、破滅するしか道がなくなるだろう。

イヴァもその事は自覚しているはずだ。

「……その責任を捨ててまで、こんな小娘の首一つが欲しいのかしら

？」

「欲しい。全てを投げうってでも、その首を獲りたい……戦う者として、高みに挑みたい」

イヴァは英雄であり、そしてそれ以上に戦士であった。

自分に課せられた義務は分かっている。

既に巨人側の敗北が決まった以上、ここは自分というカードをちらつかせながら地球人との交渉のテーブルに付いて少しでもいい条件を引き出すべきだ。

同じ降伏にしてもイヴァ・グロンドがいるのといないのではまるで違う。

イヴァ・グロンドがいれば、『降伏はしたがその気になれば我々はまだ英雄イヴァ・グロンドを旗頭にして戦える』と言い張れる。

だがイヴァが死んでしまえばそれすら出来ないのだ。

イヴァもそれは分かっている。自分という存在の重さも、この命が自分一人の物ではない事も分かっているのだ。

だがそれでも挑まずにはいられない。

この高みを見てしまった以上、戦わずに済ます事は出来ない。

それは彼の、使命よりも優先される戦士としての本能であった。

(あれは……クロノ・ケイか……)

彼は横目で玄野の姿を確認する。

玄野が知るはずもない事だが、地球に侵攻した巨人達の中にはイヴァの弟が混ざっていた。

そして玄野はそれが英雄の弟である事など知らぬままに倒しており、今やかかれは巨人達の間で指名手配をされていたのだ。

だがイヴァは愛する弟の仇を目の前にしても、ほむらに挑む以外の事を考える事は出来なかった。

酷い兄だとは自覚している。弟を愛していなかったわけではないし、仇を討ちたい気持ちはある。

だがそれ以上に、どうしようもないほどに彼は『戦士』だった。

「それにどのみち……もう手遅れだ……」

このコロニーを支えている塔は、じきにお前達の兵器によって破壊



される。

そしてコロニーは墜落し、地球を滅ぼすだろう……」

「……っ!？」

イヴァが続けて口にした言葉にほむらのみならず、全員が驚愕した。

日本の財閥チームはこのコロニーを破壊すべく巨大ロボットの軍団を送り込んだ。そこまではいい。

しかしその時点では地球の地表に取りついていたコロニーが、今は宇宙に上がっている。

こうなると意味は変わってしまう。

コロニーを破壊する事で地球に甚大な被害が出るという点は変わらない。地表に取りついていていた時点でも破壊してしまえば自壊の余波で半径数キロに渡って破壊し尽されていた事だろう。

だが宇宙で壊してしまえば、その残骸が成層圏の外から加速して落下し、地球に降り注ぐ。

その破壊力は壊滅的で、人類を滅ぼすだけのダメージを地球に与えてしまうだろう。

財閥チームもその程度の事が分からないほど馬鹿ではない。

故にもし気付けば、すぐにでも巨大ロボットに攻撃禁止命令を出しただろう……気付ければ。

だが財閥チームは既に崩壊していた。

巨人側に黒玉をハッキングされて虫を送り込まれ、呆気なく全員死んでしまったのだ。

結果残されたのは、今宇宙船を破壊すれば未曾有の大惨事になる事を知らず、塔を攻撃し続ける西丈一郎だけだ。

彼は今も自分の行動が敵を倒す最善手と信じて疑わずに塔を攻撃し続けている。

「……玄野さん!」

「わかッてる!」

ほむらは咄嗟に玄野の名を呼び、玄野もすぐに応えた。

彼はすぐに近くの黒玉へ駆け出し、西の位置へと転送され始めた。

これで向こうは大丈夫のはずだ。玄野ならきつと巨大ロボットを止めてくれる。

そう信じ、ほむらはイヴァへ視線を戻した。

「その挑戦受けて立つわ。」

ただし私が勝ったら、その時は貴方の命は私のものよ。

私の許可なく勝手に自殺したり、ましてや宇宙船を巻き込んだの自爆は許さない。

この条件を受けるならば、相手になってあげる」

「……わかった。敗れたその時はお前に従おう。生殺与奪権もお前に委ねる。」

ただし私が勝ったら、その時はやはりコロニーを自爆させる」

イヴァの言葉に、慌てたように巨人の最高司令官と思われる男が詰め寄った。

当然の反応だ。何せイヴァの言葉通りにすれば、巨人は勝っても負けても全滅してしまう。

勝てばイヴァがコロニーを巻き込んで自爆。負ければ地球人に生殺与奪権が渡るが、地球人が自分達を生かすとは思えない。

なので最高司令官はイヴァに思い留まるよう説得するが、イヴァはそんな彼の首を無情にも斬り飛ばした。

そしてイヴァは腰を落として剣を構え、それに応じてほむらもXガンを二丁手にし、イヴァと向き合った。

「……行くぞー」

イヴァが律儀に宣言し、剣を薙いだ。

その速度は他の巨人とは比較にもならず、速く鋭い。

だがほむらはギリギリ紙一重の間合いを見切って後ろに下がり、イヴァの攻撃に合わせてXガンを連射した。

イヴァはこれを残像を残すほどの速度で避けてほむらの横へ回り込む。

小さい者と大きい者が戦った時、その有利は問答無用で大きくて重い方に傾く。

細かく階級分けされたボクシングではほんの1キロ程度の差で階

級が変わり、その差はミニマム級とクルーザー級でも倍にすら達しない。

アフリカゾウはその圧倒的な巨体と重量で、百獣の王ライオンを差し置いて地上最強の名を欲しいままにしている。

大きさが違えば攻撃の重さが違う。歩幅も違う。

では人と巨人の差はどれほどだ？

少なくとも、とても尋常の戦いが成立するレベルの差ではないだろう。

人が必死に走って十秒で100mを走ったとしても、巨人の歩幅ならば歩いて10秒は過ぎない。

それだけの差がある。それだけの違いがある。

サイズ差の絶対的アドバンテージ……それを活かしてイヴァはほむらへ果敢に攻撃を繰り出した。

だが——当たらない！

ほむらはイヴァの攻撃を見切った上で最小限の動きで攻撃を避けてしまっている。

そればかりかXガンを撃ち——それを避けたイヴァの次の移動先を予測して第二射を撃ち、イヴァの片腕の肉が抉れた。

「ぬウツあッー！」

イヴァが痛みにも怯まず怒涛の剣撃を連続で放った。

一撃目の突き——半歩横に移動しただけで回避される。

二撃目——掠りそうなほどに近くににいるのに、掠りもしない。

三撃目——四撃目——五、六、七……十……二十……。

残像が残るほどの剣速なのに、ほむらはその悉くを避けて見せる。背中スレスレを通過したところで素早く薙ぎに切り替えるも、これすら後方宙返りで避け、悠々と着地した。

「……ッー！」

攻撃の最中に指に熱さを感じ、イヴァは思わず視線を向ける。すると彼は、自分の指が減っている事に気が付いた。

イヴァの攻撃の合間にほむらが発射したXガンが彼の指を破壊したのだ。

怯んだその瞬間にほむらがイヴァの顔の前まで跳躍して剣を構える。

すると刀身が伸び、イヴァの顔を貫かんと一直線に迫った。

イヴァは顔を横に動かす事でこれをかろうじて避けるも、ほむらは予測していたように刀身を下へ振り下ろした。

すると刃がイヴァの肩から脇腹にかけて浅く斬りつつ、地面に突き刺さる。

その状態で尚も伸ばし続ける事でほむらの身体を高所へと運び、刀をしならせて、まるで棒高跳びのようにジャンプ。

天井に足を付け、蹴る事で一気に加速してイヴァの背中を通過しながらXガンを発射した。

遅れてイヴァの背中と足の肉が弾け、痛みに膝を突きかける。

それでも必死に踏み留まり、振り返って踏みつけを行なった。

イヴァの足がほむらのいた位置を踏み砕き、地響きを立てる……が、手応えはない。

ほむらはイヴァの踏みつけを避けて後ろに下がっており、何を考えたのかXガンを宙へ高く放り投げた。

捨てられたXガンはイヴァの顔の前まで飛び——そこに、ヤクザから奪った拳銃を素早く二連射する。

放たれた銃弾はXガンの二つの引き金を同時に撃ち、Xガンがイヴァの顔へ発射された。

咄嗟に避けるも間に合わずにイヴァの片目が破裂し、その間にほむらは彼の股の間を走り抜けて背後へ移動……更に跳躍して先程地面に刺した剣の柄を取って、剣を縮める。

すると当然のように落下するが、イヴァの膝付近まで落ちた所で再び刀身を伸ばして回転し、イヴァの膝から下を切断した。

「ぬああアア！」

四肢を破壊された巨人の英雄が地面に倒れ、呻いた。

しかし念には念を。

ほむらはZガンを出し、比較的傷の浅い腕と、残っている足を潰した。

イヴァの悲鳴が響き、菊池達が歓声をあげる。

だがほむらはあくまで氷の冷静さを保ったまま、イヴァへ問いかけた。

「勝負ありね。何か言う事はある？」

「……………いや、ない。完敗だ……………小さき戦士よ」

こうまで見事にやられてはグウの音も出ないのだろう。

イヴァはコテンパンにやられたというのに、妙に清々しいような表情をしていた。

ほむらもそんな彼の健闘を称えて僅かに笑みを見せる。

「貴方も強かったわ。前までの私だったらもう少し苦戦したかもしれないわね」

「約束……………だったな。このコロニーの運命はお前に委ねよう……………」

受け取れ……………このコロニーの自爆スイッチだ。

パスワードの入力はもう終えているから、いつでも起爆させる事が出来る……………」

イヴァは敗北を認め、ほむらの前に自爆スイッチを出す。

スイッチ……………とは言いが、古典的なボタンという形状ではなく、どちらかといえば携帯電話の画面だけを持ち歩けるようにしたような……………つまりはスマートフォンに近い外観だ。

画面の上には立体映像が浮かんでおり、丁寧にも日本語で自爆を認証するかを問いかけている。

恐らくここで認証を押してしまえばそのまま自爆してしまうのだろうが……………一兵士がいつでも自分の意思一つでコロニーを自爆させられるシステムはどうなのだろう、と思わないでもない。

勿論ほむらはこんなものを使う気はないので渡されても困るだけだが、使われるのはもつと困る。

なのでとりあえず預かっておくことにした。

……………もつとも預かるにしても人間から見るとこの自爆スイッチはテールブルくらいの大きさがあるのでどう預かったものか少し困るが。

「後は玄野さんが間に合ってくれていれば、このコロニーは壊れずに済むわ。」

地球を明け渡す事は出来ないけれど、これだけの科学力があるなら地球じゃなくても生きていく事は出来るでしょうし、今後はどこか無人の惑星でも探しなさい」

「ふ……勝者に従おう……」

どうやらイヴァは前言通りに本当にほむらに服従するらしい。

何と言うか、やはり律儀な男である。

そんなやり取りを見ながら、和泉だけは自爆スイッチをギラついた眼で見続けていた。

## 第45話 感謝する必要はない

戦いは終わった。

巨人側は軍神イヴァ・グーンドが敗北を認めた事で地球に全面降伏し、後は地球に帰るだけとなった。

降伏した巨人をどうするかは政治家に委ねられるが、巨人はいざとなれば母船で宇宙に逃げてしまえるので、それほど一方的な展開にはならないだろうとほむらは思っている。

それに無茶な要求……例えば『巨人はこれから人類の奴隷な』なんて事を下手に言えば巨人が怒り狂って再び戦争になる恐れもあるし、流星にそんな事も分からない無能な政治家は……多分いはいはずだ。

「暁美！ 戻ったぞ！」

「くッそ……マジか……くッそ」

少しすると玄野が転送され、無事に西を止める事が出来たと報告をしてくれた。

その後ろには西もおり、悔しそうに爪を噛んでいる。

流星の彼も、塔を壊せば地球が壊れると言われては引き下がるしかなかったようだ。

しかしそれは、西にとって苦難の始まりを意味している。

彼はこのカタストロフィで巨人を滅ぼし、その功績で英雄として上り詰め、いずれは世界の頂点に立とうと夢想していた。

そんな事が実際可能かどうかはともかく、少なくとも巨人を滅亡させればその功績で過去の罪に口出し出来る者はいなくなっただろう。

しかしその道は断たれてしまい、そうなると西はただの指名手配犯だ。

これから先の事を考え、憂鬱になっても仕方がないと言える。

「皆さん！ 人類は勝ちました！」

今、歴史的瞬間を迎えたのです！

世界を救った英雄達がこれから地球へ帰還します！ 英雄の凱旋

ですッ！」

菊池はカメラに向けて演説しているが、よく考えたら彼が来てから

先の戦いはずっとリアルタイムで地球に放映されていたのだろうか。そう考え、ほむらは流石に少し憂鬱になった。

それはつまり、巨人達を次々と倒す姿もばっちり映されていたという事で、どう考えてもこの先平穩に暮らせる気がしない。

テレビ局の取材やら何やらでも煩わされそうだ。

「暁美さん、こっち来て！ カメラの前！ 皆に何か一言！」

「……やめてよ、そういうの」

菊池が何か喚いているが、ほむらは移動しなかった。

カメラの前で話すなど柄ではない。

昔に比べれば多少マシにはったが、ほむらは元々重度のコミュ障である。

過去の時間軸では初対面のまどかに電波全開な発言をしてドン引きされた事もあった。

そんな自分がカメラの前で何を言えというのだろう。

しかも今の恰好は復活した魔法少女衣装である。

玄野達の全身ピッチリ黒スーツに比べればコスプレ感は薄いけど、それでもコスプレ染みている。

人前にあまり出たい恰好ではない。

「はははッ、帰ったら大英雄だな暁美は。見た目はいいからキツと大人気になるぞ」

「やめてっば……」

玄野にからかわれ、ほむらは頬を膨らませて拗ねた。

すると普段クールな彼女のそんな姿が面白いのか、ますます玄野が調子に乗る。

何はともあれ、先の事が思いやられるもののひとまずハッピーエンドだ。

地球は救われ、巨人も降伏した。

この先の人類と巨人の交渉やら戦後の保証やら賠償やらはあるだろうし、巨人に対する怒りや不満も出るだろう。

だがそれはその時に考えればいい。

今はただ、平和を勝ち取った事だけを喜びたかった。



「……ん？」

全てが終わったと思った矢先……不意に、見える景色が切り替わった。

それは一面が真っ白な、何もない空間だ。

見渡せば各国のガンツチームがいて、何かに祈りを捧げている。

その対象は……部屋の中心にいる、巨大な何かであった。

巨人ではない。だが巨大な人間の姿をしている。

裸の人間体が二人、背中合わせて立っており、顔や胸の部分は空洞だ。

そして空洞の中には過去の偉人やいつか戦った星人、あるいは動物などの顔が生えていて気持ち悪い。

「暁美……ここは一体……？」

「私に分かるわけではないでしょう」

遅れてやって来た玄野がほむらに問いをぶつけるが、むしろそれはほむらが知りたい事だ。

更に続けて東郷や桜岡、加藤……この宇宙船まで乗り込んできた全員が転送され、一体何が起こったのかと周囲を見回している。

「なんやん………気味悪いな」

「アイツは……敵なんか？」

大阪チームの山咲と岡が警戒を露にしつつ、中央の巨大な異星人を見た。

すぐに飛び掛かるような真似はしないが、流石に歴戦の戦士だ。

いつ戦いになってもいいよう、既に身構えている。

そんな彼等に、他のガンツチームのメンバーが声をかける。

「ここは真理の部屋だよ………ここで彼等がどんな質問にも答えてくれるんだ」

そう言われ、改めて部屋を見る。

確かに他のガンツチームのメンバーは、それぞれの国の言葉で何かを異星人に聞いているようだ。

それに対し、同じくそれぞれの国の言語で返答している事から見

て、どんな言葉で質問してもいいのだろう。

「俺……俺、グラビアアイドルのレイカのめツちやファンなんやけど……レイカと○○○出来る日ッて来るかなア！」

「無理だ、諦めろ。」

この次元で関わりがあった者同士の関係は永遠に続いていく……。だがお前と、下平玲花がお前の望む関係になる事は未来永劫ない」異星人に即答され、意気消沈しているのはよく見れば大阪チームの桑原であった。

どうやら彼もここに来ていたらしいが、質問の内容が何とも馬鹿馬鹿しかった。

そんな間抜けを放置して玄野と加藤が前に踏み出し、声を発する。

「質問したい！」

今まで俺達は何で!! 何のために!!

何のために!! 俺らは闘わされてきたのか!!」

「その問いに答えよう」

玄野と加藤のその問いは、意外な事にこの場の誰もまだ聞いていない質問のようだった。

ガンツ……いや、ブラックボールによって再生された人間ならば誰もが気になる事だろうし、真っ先に聞こうと思うだろう問いだ。

だがそれを誰も聞いていないのは、恐らく答えが恐ろしいからだ。

世の中には知らない方が幸せな事がある。開けない方がいい。パンドラの箱がある。

この異星人に真実を聞く勇気が、誰にも持てなかったのだろう。

そして彼等は語った。

ある惑星系が消滅の危機を迎え、三十年以上前から地球が移住先に選ばれていた事を。

この異星人もまた、巨人を始めとする星人に移住先にされた惑星の住民であり、高度な科学力を持つ彼等は星人を撃退した。

その後彼等は地球に情報を送り……後はほむらも知る通りだ。

つまり、地球はこの異星人によって救われていた。

この異星人が技術を送ってくれなければ、地球は成す術なく巨人に

蹂躪されていたろう。

その事を理解した人々は異星人に感謝を述べる。

だが……。

「感謝する必要はない。」

私達は地球人に同情して情報を送ったのではない。私達にはきみ達特有の感情というものは無い。

傲慢な人間よ。君達は地球上で特別な存在だと思ッているが……うではない」

異星人は何でもないかのように話す。

地球人の命に価値などない。虫や塵と変わらない、と。

何百、何千単位で死んでも彼等から見れば些細な問題で、地球に情報を送ったのもほとんど気まぐれのようなものでしかなかった。

ただ、何となく地球を残す方を選んだ……それだけだったのだ。

あるいは本当は地球が残る事すらどうでもよくて、迷惑な巨人が再び自分達の方に来てても面倒だから地球を使って巨人を滅ぼそうとしただけなのかもしれない。

言ってしまうえばこれは、ただの害虫駆除なのである。

彼等にしてみれば巨人を始めとする星人は家に入って来る害虫で、地球人はどうでもいい虫だ。

どうでもいいが……しかし、絶滅されても何となく嫌だ。

困りはしないし、別にどうでもいいのだが、それでも残す事を選んだ。

人間だって絶滅危惧種の虫がいれば、仮にその虫をどうでもいいと思っでいて、絶滅しても生態系に何ら影響しないとしても、とりあえず保護するだろう。それと同じ事だ。

(スケールは違えど、それほど人間と違いはなさそうね)

ほむらは、この異星人の言葉に特に何の反発も抱かなかった。

向こうが地球人を無価値と思っでいるように、ほむらにとってこの異星人は無価値でどうでもいい相手だ。

だから、そんな相手に何を言われようと何とも思わない。

ああ、でかい虫が何か言っでいるなという感じだ。

「大事なのは自分達がどう思うかで、異星人の意見など最初から求めていないのである。

それにこの異星人の言葉は、そのままこの異星人自身にも適用される。

彼は地球人を『特別ではない』。自分達から見れば虫と同じようなもので『傲慢』と言いつつ切った。

しかしその反面、この異星人はどうかやら自分達を特別だと思ってるようだ。

我々から見ればと言つてちやつかり自分達をそれより上に置いてるのがいい証拠である。実に傲慢なものだ。

彼は地球人と虫の違いを『より複雑かそうでないかだけだ』と言つた。

しかし、それならば地球人よりも複雑だろうこの異星人はどうなのだろう。

彼等の言葉をそのまま肯定するならば、彼等自身もまた地球人より複雑なだけで何の価値もない存在という事になってしまう。

とはいえ、ほむらはそれを口にする気はなかった。

言い争うのも馬鹿馬鹿しいからだ。

だから玄野と加藤が余計な事を言おうとしたらすぐに抑えようと思つていた。

……だが、余計な事を言う馬鹿は、肩の上にごそいた。

「それは大きな間違いだ。

地球人……とりわけ第二次成長期の少女は、宇宙の寿命を延ばすほどのエネルギーを持っている。

彼女達は宇宙全体から見て、極めて有用な資源だ」

——キュウベえであった。

そうだ、忘れていた。地球外生命体はここにもいたのだ。

今の今まで無言を貫いていたインキュベーターに、ガンツを生み出した異星人も意識を向ける。

「お前は……」

「やあ、初めまして。

僕はインキュベーター。君達とは別の星系から来た存在さ。

もつとも、僕は正確にはそのコピーだけだね。

「どうやら君達はまだ、感情をエネルギーにする段階までは至っていないようだね」

キュウベえはそう言い、後ろ脚で耳をかいた。

いちいち仕草が小動物染みているのが、かえって憎たらしい。

「ほむらは今すぐにこのナマモノを叩き落してやりたい衝動に駆られた。」

「あッ、暁美！ それ！ そいつ……」

「ごめんなさい、玄野さん……驚く気持ちは分かるけど、今は静かにしていて」

玄野を始めとした東京チームは、驚きに目を剥いていた。

それはそうだ。今の今までただの役立たずの変なのと思っていたキュウベえが突然話し出したのだから驚かない方がどうかしている。こんなぜツたいおかしいよ。

ほむらはそんな彼らをなだめつつ、キュウベえが何を言う気なのかと神経を尖らせていた。

「君は人類の感情をただの電気信号と呼んだけど、それは間違いだ。

人類の感情はエントロピーを凌駕する素晴らしい資源になる。

無価値なんてとんでもない。価値のあるものさ」

ほむらは、キュウベえを撃ち殺してやろうかと本気で思った。

一見するとキュウベえは異星人と違って地球人に好意的で価値を認めているように聞こえるがとんでもない。

キュウベえが人類に見出している価値は、家畜としての価値だ。

搾取する対象としか見ていない。

これならばまだ、無価値と断じて突き放してくれる、ガンツを生み出した異星人の方が遥かにマシだろう。

「君達は理由もなく地球を救ったと言っているけど、そうではない。

確かに地球人の大半は君達にとって価値のない塵だろうけど……

その中に、君達も知らない未知のエネルギーを持つ個体があった。

だから君達は観察の為に残そうと考えたんだ。そうだろう？」

「……確かに……三十年前に巨人達が地球に目を付けた時に、我々は地球を調べた。」

そして地球人の中に、未知のエネルギーを持つ個体……ただの電気信号であるはずの感情を力に変換している者がいる事を知った。

魔法少女……そして魔女……感情をエネルギーに変換する希少な存在……それは我等の知らぬ未知だ」

そう言い、異星人の顔の空洞から覗く過去の偉人を模した顔がほむらを見た。

彼等から見て地球人類は虫のようなものである。

だが人類が特定の虫に高値を付けて価値を見出すのと同じように、あくまで人類視点での話になるが虫にも無価値なものと価値のあるものが存在している。

そして異星人から見て、その『価値ある虫』に該当するかもしれないのが魔法少女という未知の存在であった。

「ま、魔法少女……？　魔女？　なんだそれ……いきなり話がファンタジーになつてきたぞ……」

「実際はそんないいものじゃないわ。名前とは裏腹に、ただ搾取されて使い捨てられるだけの家畜みたいなものよ」

混乱する玄野に、ほむらが自嘲するように言う。

すると玄野達の視線がほむらに集中した。

「曉美……お前、もしかして……」

その恰好もただのコスプレと思つてたけど……。

つまり、その……あんまイメージと合わないんだけど……お前も魔法少女ツてやつなのか？」

「……正確には違うんだけど、まあ、そうね……そういうものと思つてくれて構わないわ」

面倒くさそうに言い、ほむらはキュウベえを掴んで頭を叩いた。

「ほら、説明しなさい」

「わけがわから……きゅべつ。わかった、わかったよ」

頭がへこむ勢いでベシベシと叩かれ、キュウベえは仕方なく玄野達へ説明を始めた。

自分が遠い宇宙からやってきたインキュベーター……の複製である事。

インキュベーターは宇宙の寿命を延ばす為に活動しており、感情をエネルギーに変換する仕組みを作った事。

ところが当のインキュベーターが感情を持たなかったために、地球人に目を付けて魔法少女にしていた事。

その魔法少女が呪いを溜め込むと、希望から絶望への相転移で莫大なエネルギーが生まれる事……。

その全てを聞き、玄野は無言でXガンをキュウベえへ向けた。

「曉美……そいつ、撃ち殺した方がいいんじゃないか？」

「こいつはインキュベーターですらない複製よ。殺しても意味がないわ」

そう言いながらほむらはキュウベえを雑巾のように絞り、手を離れた。

するとキュウベえはコマのように回転しつつ地面に落下する。

ようやく解放されたキュウベえはゆつくりと立ち上がり、「わ、わけがわからないよ」と愚痴を零していた。

「なるほど……お前達が作り出したものだったか……」

いくら地球を調べても、発生する理由が分からぬわけだ……」

「そうか……セバス、お前が日本の萌えアニメとかを調べていた理由は……魔法少女についての資料を探そうとしていたのか……」

どうやらこの異星人は魔法少女について調査するうちにかなり迷走していたらしい。

菊池が言う『セバス』という名前は分からないが、察するに地球人に化けるなりして調査していたという事か。

そしてその過程で、魔法少女を扱う萌えアニメに行き着いてしまったらしい。

本人的には至って真面目に調べていたのだろうが、この神の如き星人が3畳のアパートの一室でテレビに映った魔法少女アニメを見ている姿を想像すると、この上なくシニールであった。

「それに、他にも色々干渉していたようだね。」

僕等インキュベーターは三十年ほど前から、人類の中に不思議な力を使う者達が現れ始めている事を突き止めた。

人類はその力を『超能力』と呼んでいるけど……アレを人類に伝えたのは君達だろうか？」

これはほむらも初耳であった。

超能力というと、スプーンを曲げたりするアレだろうか？

大半はトリックありきだったり、そもそも本人がトリックである事を明言していたりで『本物』というものをほむらは見た事がないし、仮にいてもそれは魔法少女か、あるいは魔法少女の祈りによって生まれたい力だろうと思っていた。

「その通りだ。我々は技術の他に、我々が持つ力を地球人へ伝えた……。」

だがそれは移民を撃退するほどの力にはならず、地球人には使いこなせなかった……。

むしろ使えば使うほどに内臓を損傷させ、寿命を縮めるだけだった。

だが……稀に、感情の暴発によりその力を飛躍的に高める個体もいた……。」

「それが感情エネルギーさ。しかしその力を生身の身体のまま使わせるとは酷い事をするね。

生身の人間が耐えられるわけじゃないじゃないか。

ちゃんと魂を肉体と切り離してあげないと」

高度な文明を持つ宇宙人同士の会話はほむらや玄野にとっては雲の上の会話だ。

だがそれでも分かった事がある。

それは、こいつ等は本当に地球人の事などどうでもいいと思っただけで、実験動物程度にしか見ていないという事だ。

実験半分に、身に余る力を与える異星人。

善意のつもりで魂を抜き取ってゾンビに変えるインキュベーター。

どちらも、ロクなものではない。

ほむらはとりあえず、肩に登ってきたキュウベえを無造作に払い落



とした。

キユウベえは地面にぶつかり、起き上がりながら話を続ける。

「まあ、つまり地球人に価値がないというのは間違いだよ。」

むしろ僕等にとつては、無価値なのは君達のほうなんだけどなあ」  
「どういう事かな？」

「君達の文明は高度だ。しかし宇宙全体から見ればあつても無くても変わらない。」

君達の言葉を借りるならば、大きいか小さいか、より高度かそうでないか、それだけのものでしかない。君達が今すぐに滅んだとしても宇宙全体から見れば塵のような変化だ。物の位置が変わるだけだね。

まさに、塵と変わらない存在だ」

「……………」

「むしろ君達の文明は宇宙のエネルギーを著しく消費してしまつてゐる。」

エントロピーつて知ってるよね？ 簡単に言うと木を燃やして得られるエネルギーは育てるのに必要なエネルギーと釣り合わないつて話さ。

君達の文明は多くの木を燃やして大量のエネルギーを使つてしまつてゐる。

ブラックホールによる複製……これだつてタダじゃない。宇宙のエネルギーの無駄遣いだ。

困るんだよね。いくら僕等が宇宙の寿命を延ばそうとしても、君達のような木を燃やす事しか出来ない文明がそれよりも早くエネルギーを使つてしまう。全く理不尽だ」

煽る。煽る。

本人にそんなつもりは一切ないのだろうが、ナチュラルに相手の神経を逆撫でするのがインキュベーターだ。

「僕らは人類の有史以前からずっと、宇宙の寿命を延ばす為に行動していた。」

同時に宇宙の寿命を減らし続けている文明も調査していた。

けど、今回の件で判明したよ。宇宙の寿命を減らしていたのは君達

だったんだ。

君が地球に接触した事で、今頃は他のインキュベーターも気付いたことだろう」

「……気付いて、どうする?」

「決まってるじゃないか」

どうしてそんな当たり前のことを聞くんだい?

そんな風に言いたそうに、キュウベえは可愛らしく首をかしげた。ウザい。この上なくウザい。

「暁美ほむらのせいで、僕は地球人からエネルギーを搾取する事が出来なくなってしまった。

ならせめて、減らしている方に消えて貰わないと困るじゃないか。

今頃はきつと、他のインキュベーターが君達の星を宇宙から遮断する為の装置を造っている事だろう」

「……………分からん。何故そのような事をする。お前は何がしたいのだ」

「どうしてだい? 宇宙の為に役立てるなら、それはとても榮譽な事だと思っただけだなあ。

理解出来ないなんて、わけがわからないよ」

両者の間に流れる空気は、落ち着いているようできて険悪そのものであった。

互いに感情がない故に怒る事はない。叫ぶ事もない。

だが感情がないが故に互いに、互いを知ろうとする心がない。

インキュベーターにとってガンツを生み出した異星人は、ただ宇宙のエネルギーを減らし続けるだけの存在で、それ以外の何物でもない。い。

異星人にとつてのインキュベーターは、自分達を宇宙から排除しようとしているだけの存在で、やはりそれ以外の何物でもない。

故に相互理解は決してあり得なかった。

「二ついいかしら。コイツは地球とは何の関係もないナマモノよ。

貴方達が喧嘩するのは勝手だけど、やるなら地球以外でやりなさい」

「いいだろう。元より、地球にこれ以上干渉する気はない」

ほむらの言葉に異星人が同意し、そしてキュウベえと見詰め合う。

それは決して睨むような鋭いものではないし、互いに相手への悪意はない。

そもそもそんなものを持ちえない。

だが、そんな二種族だからこそ……出会った時点で、結末は決まっていた。

「——宇宙の為に、死んでくれ」

「——証明しよう。インキキューバー<sup>タ</sup>がただの“モノ”に過ぎない事を」

宣戦布告。

互いに相手を滅ぼす事を宣言し、そして異星人は姿を消した。

この後どうなるかは、ほむらには分からないし分かる必要もない。

ただ、地球には関与も出来ない遙か遠くの何処かで、高度な文明を持つ異星人同士が勝手に喧嘩をするだけだ。

(……どうせならインキキューバーの方が滅びてくれないかしらね)

とりあえずほむらは、ガンツを生み出した異星人の方を応援する事にした。

## 第46話 愛を教えてください君へ

真理の部屋での邂逅も終わり、ほむら達は再び巨人の宇宙船へ戻されていった。

思わぬところで高度な文明を持つ異星人同士の戦争の引き金がかれた気がしないでもないが、地球を巻き込まないならばほむらには関係ない。

奇しくも、あの異星人の言う通りだ。

彼等にとつて地球が滅びても些細な事で、物の位置が変わるだけなのと同じように……地球にとつてはあの異星人の星が滅びようが、どうでもいい事ではない。

ただほむら個人としてはインキュベーターはどうでもいいを通り越して完全にマイナスなので、どちらに残って欲しいかと言えばあの異星人の方だ。

恐らく彼等が地球に手を貸したのも似たような気持ちからだったのかもしれない。

だがそんな事より、ただ今はまどか達の所に帰れるのが嬉しかった。

こんな自分にも帰れる場所があるのが……幸せだった。

(まどか……もう少しで帰れるわ。貴方との約束を破ってばかりの私だったけど、今度はちゃんと約束、守るからね……)

静かに目を閉じ、まどかの笑顔を瞼の裏に思い浮かべる。

この先どうなるかは分からないが、今はまず、まどかの所へ帰ろう。ママや杏子、キリカになぎさ、ゆまもライスもさやかもいる。

帰ったら……やはり、またママの家にお世話になるのだろうか。

アパートは解約してしまっただし、それに葬式も済ませてしまったから、まずはそれをどうにかする事を考えなければならぬ。

まあ、死を偽装した際もスーパーセルで死体すら見付からなかったという事にして葬式をさせたので、実は生きてましたとかで何とかなるだろうか？ ……なればいいな、とほむらは思った。

ママの家に暮らす事になったら、しばらくは家事全般を引き受けて

あげようか。

なぎさやママの好物を沢山作ってあげて、ご機嫌を取る必要もあるだろう。

それ以外にも色々大変そうだが……だが、今ならその苦労すら愛らしい。

沢山心配させて泣かせてしまった分、沢山返してあげたいと思う。きっと、それはとても幸せで楽しくて……自分が心から欲していたものだから。

——あの日なくした未来を……今度こそ、見る事が出来る。そう思い、ほむらは静かに微笑んだ。

人というのは、あまりに愚か過ぎる行動は案外予測出来ないものだ。

何故なら予測というのは過去の経験や知識、出来事などから計算して起こりえるものを算出するからである。

故に通常では考えられない、いや、考えもしない患者の行動は意外なほどに死角となる。

例えば道を歩いていて偶然すれ違っただけの初対面の他人がその場で自らの腹を裂いて内臓を投げ付けて来るとは予想しないだろう。

コンビニの店員が突如持ち場を離れて堂々と売り物を貪り始めるとは思わないだろう。

大工が何の脈絡もなく自作の爆弾を持って来て建設中の家を破壊するなんて誰も考えないだろう。

ママミがティロフィナーレを推進力にして空を飛びながら登校して、学校の窓ガラスをブチ破って突入するなど誰も予測しないだろう。

どれも可能性としてはゼロではないと言えればゼロではない。予測不可能ではないと言えれば確かに不可能ではない。

だが限りなく困難だ。それはあまりに愚かで、通常では取らないだろう行動だからである。

故に——和泉紫音のその行動は、誰も予期していなかった。

ピツ、と……何かを押したような嫌な音が響いた。

それと同時に背筋が凍るような悪寒を感じ、ほむらが咄嗟に音の出所を見る。

結果論から言えば彼から目を離すべきではなかった。

結果論を語ればそもそも彼を助けるべきではなかった。

だがそれは未来を知っていればこそ成り立つ話で、もうループが出来ないほむらでは知り得ぬ情報でしかない。

ほむらは予想出来なかった。

まさか和泉紫音が——この母船の自爆スイッチを押すなんて、予想出来るはずがなかったのだ。

「和泉紫音……!?! 馬鹿な……あ、貴方、何を……!?!」

「……ふツふふふ……くくくくく……」

ほむらだけではなく玄野達も……そしてその場の誰もが予期できず、それ故に驚愕に満ちた目で和泉を見た。

イヴアは確かに運命を委ねると言って自爆スイッチを渡した。

巨人が気に入らなければいつでもそれを押して自分達を滅ぼせと言外に告げた。

だがだからといって、母船が地球の真上にあるこの状況でそれを本当に押す馬鹿はいない。

加えて言うなら、イヴアが運命を委ねた相手は自分を倒したほむらであって、断じて和泉ではなかった。

「全滅すればいい……巨大な害虫共なんか全員死ねばいい……」

ふ、ふふふ……やツてやツた！ 俺は！ 俺は！ 俺は鍵に届かないちツぽけなゴミなんかじゃない！ 俺がやツてやツた！ 俺が巨人を絶滅させてやツた！」

「い、和泉……お前……」

この和泉の豹変には西ですら唾然とするしかないのだろう。

鍵だの何だのはさっぱり意味が分からないが、和泉の何かが決定的に壊れてしまっている事だけは誰の目にも明らかであった。

いや、和泉紫音という男は元々壊れていたのだ。

西と和泉以外は知らない事だが、彼が最初にガンツの部屋に招かれ

た理由は盗んだ車で暴走しての事故死であり、二度目は部屋に戻りた  
いが為にカヨとその孫を殺しての自殺だ。

それすら実はまだマシで、ガソリンの部屋に戻る為ならばそれこそ彼  
は無関係の人間を数百人虐殺する事だつて平気でやってみせただろ  
う。

元々彼は、自分の目的の為ならば他の被害など一切気にかけないの  
だ。

西にすら一応は存在しているストッパーが、彼にはほとんどなかつ  
た。

「ふッぎッけんなッ!!」

咄嗟に動いたJJとメアリーが和泉の顔面へ拳を叩き込んだ。

和泉の鼻がへし折れて地面に倒れるが、それでも彼は笑いを止めな  
い。

壊れている……もうどうしようもないほどに、和泉紫音は壊れてし  
まっていた。

そんな男が唯一得る事が出来た外付けの良心こそが篠崎涼子だつ  
たのだろう。

その彼女を失ってしまった今、もう和泉に自制という言葉は存在し  
なかった。

「なッなんだ……地響き!?!」

母船がまるで地震のように激しく揺れる。

それは崩壊の前兆だ。自爆スイッチを押してしまった今、もう母船  
の自壊は止められない。

このまま砕け、そして地球へ降り注ぐだろう。

「やばいッ脱出するぞー!」

「けどッどこに!?! もう地球がなくなッちやうのに!」

「……滅びる……のか……? ここで俺達全員……!」

加藤がここから逃げる事を提案するも、桜丘が狂乱したように叫ん  
だ。

逃げ場などもない。

これから母船は壊れ、そして地球へ落ちる。

この絶望的な状況に東郷ですら絶望に声を震わせた。

「和泉ーッ！ 和泉ーッ！ 絶ッてーッ！ ぶッ殺す！ ぶッ殺す！！  
許せねエーッ！！ クソ野郎！！」

もうどうしようもないと悟ったのだろう。

「死の恐怖を前に西が錯乱し、泣き叫ぶ。」

だが泣きたいのは全員同じだ。最後の最後でたった一人の愚者に  
全てを台無しにされるなど、とても受け入れられるものではない。

「……無念……だ……まさかこんな事になろうとは……」

「……イヴァ」

「だがこれも因果なのだろうな……お前達地球人をただの虫と思  
い……知恵ある生物として尊重せず……大勢を殺した私達への……」

あの男を狂わせたのもキツと、私達の侵攻なのだろう……。だが  
……」

イヴァはそこまで語り、四つの瞳から涙を流した。

「……我等の滅びは因果として受け入れられるが……勝者すら消えて  
しまう……」

それが……無念だ……ッ」

軍神は絶望に満ちた声をあげ、そして運命を受け入れるように目を  
閉じた。

母船の崩壊は更に進み、落ちてきた瓦礫の一つが笑い続ける和泉に  
直撃して彼の上半身と下半身を分かつ。

ほむらは戦慄きながら、絶望感に狼狽えるしかなかった。

（そんな……これで……これで終わってしまうの!? 繰り返したルー  
プも、まどかとの約束も……）

まどかの笑顔が脳裏に浮かぶ。

仲間達の……そして今まで出会った全ての魔法少女の。そして黒  
服の戦士達の顔が浮かんで消える。

これでは本当に塵だ。何もかもが無駄になって消える埃と変わら  
ない。

嫌だ、と思った。

ここまで戦って来た皆と生と死をこんな形で無駄にしたくなかつ



た。

だからほむらは——最後の挑戦に出る事を決める。

「まだよー。まだ、終わらせない！」

見滝原に展開していた結界を解除した。

それと同時に魔女の力を発動し、背中から黒翼が展開される。

その姿に玄野達が驚く中、彼等を急かすように叫んだ。

「皆ー。今すぐ脱出してー！ この母船は私が何とかするー！」

「な、何とかして……出来るわけないだろー！」

「説明している時間はないわ！ 急いでー！」

この母船の大きさは凡そ10 km。

自爆して空間圧縮が解除された今、内部は急速に縮み、崩れている。

これが完全に崩壊してしまう前に次の一手を打つ必要があった。

ほむらは翼で空へ浮遊し、そして叫ぶ。

「……信じてー！」

ほむらと玄野の視線が交差する。

そして玄野は頷き、仲間達へ叫んだ。

「脱出するぞー！ 逃げー！ ガンツー！ 全員を地球へッ！」

脱出してどうなるものでもない。

だがそれ以外に道もない。

全員が困惑しながらもそれに従い、近くの黒玉で地球へ転送されて

いく。

「マ、ママ……ママ……。」

ママ……ママ……死にたくない……うううう……。

やだよ、ママアーツ……うううう。

ママーツ……ママーツ……。」

西は死の恐怖に怯え、蹲りながら転送されていった。

しかし誰も彼を笑う者はいない。

全員、気持ちは同じなのだ。

その絶望の中でほむらは諦めずに前を向き、その肩にキュウベえが

乗る。

「どうするんだい？」

「……この船の中心で私が全ての魔力を解放すれば……もしかしたら、ギリギリ……何とかなるかもしれない」

「確かに今の君の力なら可能かもしれないね。けどそれをやれば君は……」

「死なないわよ」

まどかから託されたりボンを強く握り、約束を思い出す。

絶対に死なない。

今度は帰ると約束した。

今度こそ……彼女との約束を守る。その為にもこんな所で死んでなどいられない。

だが運命は非情だ。

決意を固めたばかりのほむらに、瓦礫が降り注いだ。

しかしそこに、四肢を失って満足に動けないはずのイヴァが割り込んで背中では瓦礫を受け止める。

膝と肘から先が失われた四肢で四つん這いになるように身体を支え、ほむらの盾になったのだ。

「イヴァ……！」

「い、今のうちに行け、ホムラ……！」

瓦礫が更に落ち、イヴァの背中に突き刺さる。

鮮血が溢れ、だがイヴァはそれでもほむらを守り続けた。

「何をしようとしているかは分からないが……武運を祈る……！」

君は生きてくれ……勝者がいなくなつては……私達の戦いを覚える者すらいなくなる……！」

「……イヴァ」

「さらばだ……小さく、偉大な戦士よ……」

「ええ……さようなら……偉大な軍神、イヴァ・グーンド」

ほむらは迷いを振り切るように飛翔した。

イヴァはほむらの背に向けて優しく笑い、そして直後に瓦礫が彼を押し潰した。

偉大な軍神の命に後押しされ、紫の光となってほむらは飛んだ。その光を見ながら和泉は呟く。

「……は、ははッ……最後の最後まで……俺の事なんか見もしない……か……」

俺は結局……最後まであいつの眼中にすら入ッていなかった……取るに足らない小物にしかねなかつた……

運命が変わッても……俺は……鍵に届かない、ゴミみたいな存在にしかねない……

は、ははははははッ！ はははははは………」

全てを諦めたように和泉は血を吐きながら笑った。かつて最初にほむらを見た時、超えてやると思った。無視できない存在になってやると決めた。

だが気付けばほむらは遥か高みへ飛翔しており、終始手が届かないままであつた。

それどころか自分の存在など眼中にすらなくて……余りの惨めさに涙が止まらない。

だが、もう何もかもがどうでもよかつた。

世界が滅ぼうが残ろうが、自分には関係ない。

涼子がいなくなった時点で彼の世界は終わったのだ。

そんな彼の上に、何かのしかかる。

「……お前……なんで……」

のしかかつてきたのは……パンダのホイホイだった。

彼女は和泉を慰めるように頬に顔を摺り寄せる。

「何……やッてんだ馬鹿……さッさと逃げろッて……」

和泉が文句を言つてもホイホイは動かない。

そもそもここに残つていてという事は転送されずに、自分でここに残つたという事だ。

和泉はその事を悟り、ホイホイを馬鹿にするように言う。

「馬鹿じゃねーの……何で……俺なんか……」

口調はホイホイを嘲るものだ。

だがその目からは涙が溢れ、顔は哀しみに歪んでいる。

愛した人は守れず、超えると決めた相手にはまるで相手にされず……。

だがそんな無価値な自分に、こうして寄り添う存在がいる。それがたとえ人ではない獣だったとしても……少しだけ、救いにはなった。

「……本当……馬鹿……じゃねーの……」

その言葉を最後に和泉の目から光が消え、動かなくなった。

それでもホイホイは逃げず、和泉を優しく抱きしめる。

そして、ホイホイと和泉の上に瓦礫が降り注いだ。

◇

イヴァと別れたほむらは瞬く間に居住区へ戻り、そして空間ごと碎けようとしている町を見下ろしていた。

巨人達はあちこちで死に、まだ生きている者は嘆き悲しみながら自分達の世界の終わりを見届けようとしている。

塔が砕けていくごとに空間が狭まり、建物が次々と崩壊していた。

壊れていく世界……涙する人々。ほむらはそこに地球で待つ皆の姿を重ねた。

その様を見ながらキュウベえが言葉を発する。

「これで本当にお別れだね、暁美ほむら。」

これが最後かもしれないから、一応君にはお礼を言っておくよ」

キュウベえが淡々と言いながら尻尾を揺らした。

「地球での契約は出来なくなっただけど、君が見せた感情の底力……愛による魔女から魔法少女への相転移は予想を超えるエネルギーだった。」

僕らのこの星でのノルマはアレのおかげで概ね達成出来たと言っている。いい。

だから最後に、君にはお礼を言っておくべきだと思ったんだ。

巨大なエネルギーを持つ未知の感情……愛を教えてくれた君へ……ね」

本当に嫌な奴だ、とほむらは思った。

キュウベえ的には煽っているつもりはないのだろうが、愛という感情を理解するつもりもない奴に、こんな事を言われても嬉しいわけではない。

こいつはただ、望むだけのエネルギーを得る事が出来たから礼を言っているだけに過ぎないのだ。

「しかしこれでお別れだ。結局はあの時と同じだね。

これが運命というやつなんだろう」

この状況は確かにあの時と……ガンツの部屋に来る前と同じだ。

これから死地に向かおうとしている。

命と引き換えに大事なものを守ろうとしている。

だがほむらはあの時のように死ぬ気はなかった。

帰ると約束したのだから……もう一度会おうと、誓ったのだから。

ダークオーブを握り、祈るように手を組み合わせる。

「まどか……玄野さん……皆」

最初に玄野の顔が脳裏を過ぎる。

次にマミ、杏子、キリカ、さやか、なぎさ、ゆま……加藤、桜丘、東

郷、JJ、アキラ、ライスの顔が走馬灯のように流れた。

最後にまどかの笑顔をもう一度思い出し、絶対に守ると己に誓う。

その願いに呼応するように手の中から紫の光が溢れ、ほむらを包み

込んだ。

そればかりか巨人の町全てを照らし、更に母船を包み込む。

その光の中でほむらは目を閉じ、そして強く思う。

何度も絶望してきて、何度も諦めて、そして何度も逃げてきた。

だがもう逃げない、恐れない、諦めない。

だから――。

「――もう、絶望なんか……ない！」

――宇宙を紫の極光が照らした。

巨人の母船全てを飲み込んだそれは地球へ訪れるはずだった未曾有の被害を防ぎ、人々は奇跡だと称えた。

だがその命の最期とも思える輝きの意味を玄野とまどかは知っていた。

玄野は膝から崩れ落ち、まどかは涙を流して大事な友達の名前を叫ぶ。

そして、一人の英雄を失って巨人との戦いは本当の終わりを迎えた。

## 最終話 ただいま

巨人との戦いから一月が経った。

かろうじて勝利は出来たものの、世界の傷跡は深く帰ってこない者も多い。

今は全力で世界中が復興に励んでいるが、完全に元に戻るまで一体何年かかるのかは分からなかった。

あれから玄野達黒服のメンバーは地球を救った英雄として連日持て囃され、玄野は今まで疎遠だった両親と少しだけ関係がよくなった。

また、今まで玄野を馬鹿にしていた同級生や教師も掌を返し、今では玄野はどこに行ってもヒーローだ。

今日もまた、屋上に呼び出されて別のクラスの女子から告白を受けている。

「あの……玄野くん……私、玄野くんの事、好きです！」

「いや、あの……」

見た目は結構かわいい子だ。

割と好みだし、以前ならば一発でOKした事だろう。

しかし玄野は申し訳なさそうに少女の告白を断った。

「悪いけど俺……聖のモノだから……」

もう、付き合ってる人……いるんだ……結婚の約束もしてる……」

告白を断られて泣きながら走り去る少女に申し訳なさを感じながら、玄野は屋上を後にした。

学校を出ると、校門前には桜丘聖が車で迎えに来てくれており、自然と頬が緩んだ。

しかし後ろの座席によく見知った顔がいるのを見て不機嫌になる。

「アキラ……何でお前がインだよ……」

「や、そこで会って、ついでに送ってくれるって……」

「お前……」応言しておくけど、聖に手エ出したらタダじゃおかねーからなッ！」

助手席に乗り込み、シートベルトをつける。

それと同時に聖が車を出し、まだあちこちが壊れている道路を走った。

「手は出さないよ……」

「どーだかッ！ 親父から聞いたけど付き合ってた彼女とも別れたんだろ？」

何でだ？ 美人だったじゃねーか、勿体ねー」

「それは……」

アキラは、年上の美人の彼女と付き合っていた。

だがあの戦いの後に別れてしまい、今はフリーだ。

誰から告白されてもOKせずに、何故か一人身を貫いている。

その理由は、吸血鬼という怪物になってしまったからというのもあるだろうが……玄野には何となく分かった。

「暁美……か？」

「……うん」

「惚れて……たのか？ あいつに」

「……わかんない……けど、多分そうだと思う……」

あんな女……今まで見た事もなかった……」

惚れていたのか、それともただその存在に圧倒されていただけなのか。

それはアキラにももう分からない。

アキラがほむらと一緒にいた期間はあまりに短く、この想いが恋愛感情なのかただの憧れだったのかも分からないうちにほむらはいなくなってしまう。

だから今、ただ思うのはもう一度会いたいという……ただそれだけの気持ちだ。

「暁美ちゃん……死んじゃったのかな……？」

「……ハッ！」

桜丘が気落ちした声で言うが、それを玄野は鼻で笑い飛ばした。

それから彼女が消えた空を見上げ、言う。

「あいつが死ぬわけねーだろ……」

……そうさ、死ぬわけがない……死ぬわけがない……んだ……」



零れそうになる涙を堪え、ほむらの生存をただ信じる。  
あの殺しても死にそうにない暁美ほむらが死ぬものか。  
どんな絶望からでも、きつとあいつは戻って来る。  
そう信じる事しか、今の玄野には出来なかった。

◇

東郷十三はあの戦いの後は英雄として持ち上げられ、1佐へと異例の昇格を果たしていた。

多くの部下を与えられた彼は今日も部下を率いて町の復興作業へ向かおうとしている。

整列した自衛官達の前に立ち、東郷は静かに語り始めた。

「これから我々は町の復興作業へ向かう。

停電……断水……雨漏り……住民の不安は我等が仕事を完遂するまで続くと思え。

そして今日と言う日があり、今も地球が残っているのは大勢の英雄の死があればこそだ。

この星を守った偉大な者達の存在を……決して忘れるな」

部下達に、今日と言う平和の裏の犠牲を語る。

そうして出撃し、一日でも早くこの国が元の姿に戻れるように奮闘するのだ。

きつと元に戻して見せる、と東郷は心に強く誓う。

死んでいった仲間達の為に。

そして……いつの日か、あの少女が帰ってきてても恥ずかしくないように。

復興作業に励んでいるのは自衛隊だけではない。

民間でもあちこちで人々が活動に勤しみ、その中でJJは鍛え抜いた身体で瓦礫の撤去に専念していた。

隣では最近知り合った風大左衛門が瓦礫を持ち上げている。

この風大左衛門という男、あの戦いの時は何とスーツなしの素手で巨人を倒していたらしい。本当に人間だろうか？

もしも彼があ部の部屋に来ていればきつと、凄まじい活躍をしただろうとJJは思っている。

「オウ、カゼ！ グレイト！」

「ふッ……JJもな」

二人して瓦礫を次々と運び、片付けていく。

その姿に他の人々はただ茫然とするばかりだ。

どちらも人間とは思えない。

風の隣では彼の息子らしいタケシという名の少年が風の真似をしてせつせと瓦礫をどけている。

その作業の中、風は言う。

「俺と引き分けた奴はお前が初めてや……」

キツと、世界で一番強いのは俺達のうちのどツちかやろう」

風とJJが知り合った切っ掛けは、巨人を倒した英雄のうちの一人であるJJに風が喧嘩を仕掛けてきた事が原因であった。

誰よりも強さを求める風はJJに挑み、そして驚くべき強さでJJと互角に渡り合った。

JJもあの戦いを潜り抜けた事で強さを増していたから渡り合えたが、以前までのJJならば太刀打ち出来なかつただろう。

それほどに風大左衛門は人間離れして強かった。

だから風は、世界で一番強いのは自分かJJのどちらかだろう、と思っている。

だがJJは首を振ってそれを否定し、大空を見た。

「いや……もツと強い娘は他に……俺なんかよりもずツと……」

本当に……強い娘だツた……暁美ほむら……」

そう言い、遠い目をするJJに倣うように風もまた空を見上げた。

この先に自分達よりも強い奴がいるのだろうか。

そう思い、そしてJJの態度からもう二度とその少女と会えないだろうと察して目を閉じた。

「……………」

というか……お前……普通に日本語喋れるンか……」

◇

「ねエ加藤君……アタシら、そろそろ結婚しよーか？」

同棲生活を始めて一月が経ったある日、唐突に山咲杏が爆弾発言を

落としました。

加藤はこれに飲んでいたコーヒーを吹き、向かい側にいた弟の歩にかけてしまう。

「うッわー！ キツタネ！ 何すんだよ兄ちゃん！」

「ごほッ、ごほッ……す、すまん歩！」

気道に入ったのか咳き込み、落ち着いたところで加藤は雑巾でテーブルを拭いた。

それから杏を見るが……顔を赤らめており、どうやら冗談ではなさそう。

「そりゃ……いずれはそうしたいと思ってる……俺も君の事が好きだ。」

「けど……俺はまだ高校生だぞ……」

「ええやん、そんなの」

「いや、よくはないだろ……法律とか色々あるし……」

日本では男性が結婚を許されるのは18歳からだ。

しかし現在加藤は17歳であり、まだ結婚出来る年齢に達していない。

その事を説明すると杏は残念そうにし、そして更なる爆弾を落とした。

「そツか……じゃあしばらくは独身の二児のママになるンやね」

加藤コーヒーリバーズ再び。

落ち着いてコーヒーを飲み始めた加藤はまたしても吹き出し、向かい側にいた歩に直撃してしまった。

「うッわー！ キツタネ！ いい加減にしろよ兄ちゃん！」

「ごほッ、ごほッ……す、すまん歩！」

またしても咳き込み、それから律儀にテーブルを拭く。

それから杏を見るが……先程より顔を赤らめており、冗談ではなさそう。

「マ、マジか……？」

「うん……マジ」

「ひ、避妊……してたよな……？」

「してても出来る時は出来るもんや。ゴムもやツすいヤツやツたし」  
二人はしばらく見つめ合い、顔を赤くする。

それを見て歩は気を利かせて部屋を出て行った。

その直後に加藤は杏を抱きしめる。

「18だッ！ 俺が18になッたら結婚しよう！ 絶対幸せにするッ！」

「うん、楽しみにしてる」

まさか子供が出来るとは思っていなかった。

だが今までずっと弟の歩と二人だけの家族で生きてきた加藤にとって、家族が増えるのは何よりも嬉しい事だ。

杏はしばらく加藤の胸に顔をうずめていたが、やがて思い出したように言った。

「そうだ……名前、どうしよツか？」

「名前か……それなら、一つ案があるんだ」

そう言い、加藤は窓の外空を見上げた。

杏もそれで察したのか、優しく笑う。

「それでいいと思うよ」

「まだ何も言ッてない」

「分かるよ。あの子の名前やろ？」

「……ああ」

加藤は杏の肩を抱き、そして言う。

男の子なら『ほむら』、女の子だったら『あけみ』と名付けよう——と。

◇

見滝原市の一角はその日、美しいまでの夕日に照らされていた。

あれから一月が経ち、ライスは今もそこに座っていた。

ほむらが用意した地下室は、今はまだか達が使っている。

鹿目家はあの戦いで残念ながら壊れてしまったので、今はほむらが用意してくれた地下室で暮らしていた。

この地下室にほむらが備蓄していた食料や水は彼女達の助けになり、物資が届きにくい時もまだか達は体調を崩す事はなかった。

そしてその地下室の前で、ライスは今もまどか達を守っている。ほむらの頼みを今も忘れずに果たし続けていた。

「ライス、そろそろ寒くなるから中に戻ろう?」

「キュウン……」

まどかがライスの頭を撫でながら言う。

あれからまどかは、元氣というものを失っていた。

健気に前を向いて生きようとしているのだが、二度目の喪失はショックが大きかったのだろう。

ほむらに渡したりボンは今も戻らず、髪はほどけたままだ。

それでもまどかは、ライスと同じく待ち続けていた。

だって約束したのだ。

今度はちゃんと帰ってくると、そうほむらは言ってくれた。

だから最初の一週間は希望を持って待ち続けた。

次の一週間も、きっと何か理由があると思っただけで待った。

その次の一週間は不安と共に過ごし、そして次の一週間で……早くも挫折そうになっている自分に気が付いた。

ほむらは帰って来る……いや、そう信じたい。

だがまどかも本当は分かっているのだ。

あの時空で輝いたあの紫の光が何を意味しているのか。

壊れた宇宙船が何故地球に落ちず、今日も自分達が生きているのか。

世間では奇跡だの何だのといい、偉そうな学者達は適当な仮説を並べ立てている。

だがあれはほむらが起こした奇跡だと分かっていた。

だがあれだけの力を放出して無事で済むとは考えにくい。

そんな事はまどかにだって分かっていた。

それでも……それでも、もう一度彼女に会いたかった……。

「!」

ライスが突然顔を上げ、走り出した。

今まで誰が声をかけてもずっとそこにいたライスの突然の行動に面食らい、慌てて後を追う。

人と犬では速度が違い、どんどん引き離されてしまう。

ライスが曲がった角を曲がり……………そこで、まどかの足は止まった。

「やあー・僕だよー」

——キユウベえだった。

しかしその直後にタイツに包まれた脚がキユウベえを蹴り飛ばし、まどかの視界の外に追い出す。

キユウベえを蹴ったその人物はライスに飛び掛かられていて、満更でもなさそうだ。

「ちよつとー！　ライス、やめてったらー」

少女の制止を聞かずにライスは少女に前足を乗せ、顔を舐めまわしている。

そのたびに少女の黒髪が揺れ、その白い手はライスを優しく撫でていた。

それから彼女はまどかに気付き、顔をあげる。

「あ……………あ……………あ……………」

まどかの顔が喜びに染まり、涙が溢れた。

地面に水滴が落ち、視界が歪む。

それでも彼女の顔をしっかりと見ようと袖で拭い、だが涙が止まらない。

そんなまどかの前で彼女はまどかから借りていたりボンを解き、まどかの髪に結ぶ。

そして、優しく微笑んだ。

「ごめんなさい。帰りが遅れてしまったわ。

あの後、咄嗟に時間を止めて崩壊する宇宙船から飛行ユニットで脱出したんだけどね……………降りた場所が森の中のよく分からない部族の村で、なかなか帰れなくて……………魔力もほとんど使い果たしてしまっていた上に飛行ユニットは墜落の衝撃で壊れてしまったから、結局歩いて近くの空港まで行って、何とか戻ってこられたわ」

まどかを安心させるようにその髪を撫で、少女は「それでも」と続

ける。

「遅くなっちゃってしまっただけ……今度こそ貴女との約束、ちゃんと果たしたわよ」

「うん……うん！」

まどかは涙を拭いながら、何度も彼女の顔を見る。

間違いない、何度見ても彼女だ。

今度はちゃんと、帰ってきてくれた。

そこに、先程蹴り飛ばされたキュウベえがヨロヨロと戻ってきて言葉を発する。

「全く予想外の奇跡だったね……」。

君の元々の因果量では、命と引き換えにでもない限り宇宙船と地球の衝突を避ける事なんて出来ないはずだった。

けど、君は巨人を倒して人類を救った……そして、その事実は菊地誠一によって世界に発信され、君は救世主として認識された。

その為、君の因果量が増大して魔力が急激に上がったんだ。

だから余力をもって、宇宙船を破壊しつつ自らも生き残る事が出来た。大した悪運だよ」

キュウベえが何か、彼女が生き残れた理由を話しているが、まどかの耳には入っていないかった。

理由なんてどうでもいい。

ただ、彼女が帰ってきてくれた……その事実があるならば、奇跡でも必然でも何でもいい。

だからまどかは少女の薄い胸に抱き着き、少女——暁美ほむらはまどかを抱きしめた。

「——おかえりなさい……ほむらちゃん」

「——ただいま……まどか」